服部遺跡
藤治屋敷遺跡

第2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第119集

2004

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

正　誤　表

山形県埋蔵文化財センター調査報告書　第119集

服部遺跡・藤治屋敷遺跡第２次発掘調査報告書

頁	行ほか	誤	正
2	スケール	cm	m
25	11行	土師有台坏	土師器有台坏
26	24行	陶器には、	磁器には、
97	左上段遺物番号	62－２ Ｆ４下	62－１ Ｆ４下
150	115－１実測図	 115－１ Ｆ４下	
168	スケール	133－1，133－６	133－１～133－６

服部遺跡
藤治屋敷遺跡

第2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第119集

平成16年
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、服部遺跡・藤治屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

服部遺跡・藤治屋敷遺跡は、山形県の中央部東寄りに位置する山形市にあります。当地は、太平洋側から奥羽山脈を越えて山形盆地に入り、山形県の母なる川、最上川に向かう最短ルート上にあり、早くから、人々の動きの盛んな地域であったことが窺われます。

この度、東北中央自動車道相馬・尾花沢線(上山～東根間)の建設工事に伴い、工事に先だって服部遺跡・藤治屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代から現在までの各時代に、人々が当地とどのように関わっていたのかを確認することができました。古墳時代には、幅6mを超える河川が南から北に蛇行しながら流れており、河川から多量の木製品が出土しました。奈良・平安時代には、河川に囲まれた小高いところに建物が建てられました。中世には、調査区の東側に屋敷が営まれていたようです。江戸時代には、畑地や水田が耕作され、井戸や溝が作られました。そして、現在は東北中央自動車道と東北横断自動車道のジャンクションとして、東西・南北の高速道路網を支えています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　村　宰

本書は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）建設工事に係る「服部遺跡・藤治屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は日本道路公団東北支社の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物、記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	服部遺跡・藤治屋敷遺跡
遺跡番号	服部遺跡　156
	藤治屋敷遺跡　平成２年度新規登録
所在地	山形県山形市大字中野字服部・藤治屋敷
事業委託者	日本道路公団東北支社山形工事事務所
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
	理事長　木場清耕（平成11・12年度）
	理事長　木村　宰（平成13～15年度）
第２次調査	
受託期間	平成11年４月１日～平成12年３月31日
現地調査	平成11年５月10日～平成11年11月24日
調査担当者	調査第四課長　名和達朗（日本道路公団関連事業担当）
	調査研究員　渡部利之（服部遺跡調査主任）
	調査研究員　水戸弘美（藤治屋敷遺跡調査主任）
	調査員　藤野周助
	調査員　梅川沙織
	調査員　松浦征夫
平成12年度整理作業	
整理期間	平成12年４月１日～平成13年３月31日
整理担当者	調査第三課長　佐藤正俊
	主任調査研究員　齊藤主税
	調査研究員　高桑弘美
平成13年度整理作業	
整理期間	平成13年４月１日～平成14年３月31日
整理担当者	調査第三課長　佐藤正俊
	主任調査研究員　齊藤主税
	調査研究員　高桑弘美
平成14年度整理作業	
整理期間	平成14年４月１日～平成15年３月31日
整理担当者	調査第三課長　阿部明彦
	主任調査研究員　氏家信行
	調査研究員　高桑弘美
平成15年度整理作業	
整理期間	平成15年４月１日～平成16年３月31日
整理担当者	調査第三課長　阿部明彦
	主任調査研究員　齊藤主税
	調査研究員　高桑弘美
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県土木部高速道路整備推進室
	山形県山形建設事務所高速道路用地対策課
	東南村山教育事務所
	山形市教育委員会
	山形市都市開発部都市計画課
	最上川中流土地改良区

凡　例

1　本書の作成は、高桑弘美・渡部利之・藤野周助が当たり、本文執筆は高桑弘美が担当した。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（日本測地系）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＢ…掘立柱建物	ＳＥ…井戸	ＳＫ…土坑	ＳＰ…柱穴
ＳＤ…溝	ＳＧ…河川	ＳＸ…性格不明遺構	ＥＰ…遺構内ピット
Ｐ…土器	Ｓ…礫	Ｗ…木	ＲＰ…登録土器・土製品
ＲＷ…登録木製品	ＲＱ…登録石器・石製品	ＲＭ…登録金属製品	

4　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

5　遺物観察表寸法の（　）内数値は、図上復元による推定値、［　］内数値は残存値を示している。なお、必要に応じて表ごとに、別途凡例を示している。

6　遺物実測図・拓影図は、同じスケールで採録し、スケール及び縮尺値を示した。拓本は原則的に断面図の右側に内面、左側に外面を配置したが、摺鉢は例外である。

7　本分中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・図版とも共通のものとした。図版等の○－△は、図版第○図△番を指す。写真図版中、遺物番号の無いものは、出土地点を示す。

8　遺物実測図中、遺物番号の下位に遺構からの出土位置を明示した。Ｆは遺構覆土出土、Ｙは遺構底面出土を示す。本文・写真図版・遺物観察表中の出土位置についても同様である。別遺構と接合した場合は、接合した遺構・地点名を（　）で示している。墨書土器は、解読した文字を「　」で示している。

9　土層断面図・遺物観察表の色調の記載は、1987年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

10　発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

赤塚次郎氏・阿子島功氏・荒井格氏・川崎志乃氏・川崎利夫氏・北野博司氏・小林啓氏・竹田純子氏・田嶋明人氏・辻秀人氏・樋上昇氏・穂積裕昌氏・松井敏也氏・三上喜孝氏・村木志伸氏・山口格氏・山田昌久氏

11　委託業務は下記のとおりである。

基準点測量委託業務　株式会社菅野測量設計事務所
遺構写真測量委託業務　アジア航測株式会社
木製品保存処理委託業務　財団法人元興寺文化財研究所　株式会社吉田生物研究所
理化学分析委託業務　株式会社パリノ・サーヴェイ

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の概要……4
Ⅲ　検出された遺構……9
Ⅳ　出土した遺物……15
Ⅴ　まとめ……26
付編
山形市服部・藤治屋敷遺跡の立地している地形……1
樹種同定……7
服部・藤治屋敷遺跡の自然科学分析……27
服部・藤治屋敷遺跡の自然科学分析……38

報告書抄録……巻末

表

表1　掘立柱建物観察表……213
表2　井戸・土坑観察表……216
表3　溝観察表……217
表4　古墳時代木製品分類一覧……218
表5　古墳時代木製品出土点数表……218
表6　木製品観察表……219
表7　弥生時代・古墳時代土師器観察表……226
表8　奈良時代・平安時代・中世・近世遺物観察表……250
表9　中世～近現代遺物出土遺構一覧……262
表10　中世陶磁器集計表……262
表11　近世陶磁器集計表……262

図　版

第　1　図　第1次調査概要図……2
第　2　図　第2次調査概要図……3
第　3　図　地形分類図……5
第　4　図　遺跡位置図……7
第　5　図　調査区内等高線配置図……10

A地区遺構

第　6　図　A地区遺構配置図……34
第　7　図　遺構実測図ＳＢ168・ＳＡ551……35
第　8　図　遺構実測図ＳＢ169……36
第　9　図　遺構実測図ＳＢ169・542……37
第 10・11 図　遺構実測図ＳＡ166、ＳＢ540・541……38
第　12　図　遺構実測図ＳＤ２・10・19・20・53……40
第　13　図　遺構実測図
ＳＫ３・132・134・176・526、ＳＰ520……41
第 14・15 図　遺構実測図ＳＧ106……42
第　16　図　遺構実測図ＳＥ110……44

B・C地区遺構

第　17　図　B地区基本層序……45
第　18　図　B・C地区遺構配置図古墳時代……46
第　19　図　B・C地区遺構配置図
奈良・平安時代以降……47
第 20～22 図　遺構実測図ＳＧ213古墳時代……49
第　23　図　ＳＧ213遺物分布図制付図……52
第　24　図　ＳＧ213遺物分布図１－１（土器）……54
第　25　図　ＳＧ213遺物分布図１－２（木製品）……55
第　26　図　ＳＧ213遺物分布図２－１
（器台・高坏・鉢他）……56
第　27　図　ＳＧ213遺物分布図２－２（壺・甕・鉢）…57
第　28　図　ＳＧ213遺物分布図２－３（木製品）……58
第　29　図　ＳＧ213遺物分布図３－１
（器台・高坏・鉢・壺・甕）……60
第　30　図　ＳＧ213遺物分布図３－２（壺・甕）……61
第　31　図　ＳＧ213遺物分布図３－３（木製品）……62
第　32　図　ＳＧ213遺物分布図４－１（土器）……64
第　33　図　ＳＧ213遺物分布図４－２（木製品）……65
第　34　図　ＳＧ213遺物分布図５－１
（器台・高坏・鉢・壺・甕）……66
第　35　図　ＳＧ213遺物分布図５－２（壺・甕）……67
第　36　図　ＳＧ213遺物分布図５－３（木製品）……68
第　37　図　ＳＧ213遺物分布図６－１
（器台・高坏・鉢・壺・甕）……70
第　38　図　ＳＧ213遺物分布図６－２（壺・甕）……71
第　39　図　ＳＧ213遺物分布図６－３（木製品）……72
第 40・41 図　遺構実測図ＳＢ352・353・420……74
第　42　図　遺構実測図ＳＢ201……77
第　43　図　遺構実測図ＳＢ237・248……78
第　44　図　遺構実測図ＳＢ237・248・286……79
第　45　図　遺構実測図ＳＢ287……80
第　46　図　遺構実測図ＳＢ368、ＳＡ546・550……81
第　47　図　遺構実測図
ＳＫ249・281・290～293・548……82
第　48　図　遺構実測図ＳＫ337・344……83
第　49　図　遺構実測図
ＳＫ336・354・359・369・421・422……84
第　50　図　遺構実測図ＳＥ187・345、ＳＫ348……85
第　51　図　遺構実測図ＳＥ418・419・503……86
第　52　図　遺構実測図ＳＤ355……87
第　53　図　遺構実測図ＳＤ356……88
第　54　図　遺構実測図ＳＤ357・358……89
第　55　図　遺構実測図ＳＧ213（平安時代）……90
第　56　図　遺構実測図
ＳＧ213（平安時代）、ＳＤ356・509……91

弥生時代・古墳時代の遺物

第　57　図　遺物実測図弥生土器・石器・土師器……92
第　58　図　遺物実測図土師器器台……93
第 59・60 図　遺物実測図土師器高坏……94
第 61～65 図　遺物実測図土師器鉢……96
第　66　図　遺物実測図土師器鉢・鉢形土器・不明品…101
第 67～84 図　遺物実測図土師器壺……102
第 85～102 図　遺物実測図土師器甕……120
第　103　図　遺物実測図土師器小型土器……138
第　104　図　遺物実測図土師器小型土器・甕……139
第 105～116 図　遺物実測図木製品農具……140
第　117　図　遺物実測図木製品工具……152
第 118・119 図　遺物実測図木製品紡織具……153
第 120～122 図　遺物実測図木製品容器……155
第　123　図　遺物実測図木製品容器・家具……158
第　124　図　遺物実測図木製品容器・作業用具……159
第 125～128 図　遺物実測図木製品武器具……160
第　129　図　遺物実測図
木製品祭祀具・楽器・不明品……164
第　130　図　遺物実測図木製品不明品……165
第　131　図　遺物実測図木製品不明品・建築部材……166
第 132・133 図　遺物実測図木製品建築部材……167
第　134　図　遺物実測図木製品建築部材・杭材……169
第 135～137 図　遺物実測図木製品不明品……170

奈良時代・平安時代の遺物

第　138　図　遺物実測図ＳＫ445・ＳＧ106……173
第　139　図　遺物実測図ＳＧ106他……174
第　140　図　遺物実測図ＳＥ187……175
第　141　図　遺物実測図ＳＫ293・337……176
第　142　図　遺物実測図ＳＧ213……177
第 143・144 図　遺物実測図ＳＫ344……178
第　145　図　遺物実測図ＳＰ……180
第　146　図　遺物実測図ＳＥ503……181
第　147　図　遺物実測図ＳＥ503・ＳＤ355……182
第　148　図　遺物実測図ＳＤ355……183
第　149　図　遺物実測図ＳＤ356……184
第　150　図　遺物実測図ＳＤ285・グリッド……185

中世・近世の遺物

第 151・152 図　遺物実測図木製品笹塔婆・不明品……186
第　153　図　遺物実測図陶器・磁器……188
第 154～159 図　遺物実測図陶器……189
第　160　図　遺物実測図金属製品・石製品・土製品…195

全体関連図

第 161・162 図　古墳時代土師器分類図……196
第　163　図　古墳時代壺・甕類使用痕分類図……198
第　164　図　古墳時代土師器分布図……200
第 165・166 図　墨書土器集成図……201
第　167　図　墨書土器分布図……203

第168～170図　陶器・磁器分布図 ……205
第171・172図　遺構変遷図 ……208
第173・174図　服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺の字切図 …210
第　175　図　古墳時代の主な遺跡分布図 ……212

写真図版

写真図版１～３　遺跡・調査区全景
写真図版４・５　ＳＧ213断面
写真図版６　ＳＧ213断面・遺物出土状況
写真図版７・８　ＳＧ213遺物出土状況
写真図版９　古墳時代木製品120－１
写真図版10　赤彩土器
写真図版11　壺75－１
写真図版12・13　陶器・磁器
遺　構
写真図版14　Ａ地区
写真図版15　ＳＢ168・169
写真図版16　Ａ地区拡張部分・ＳＤ２
写真図版17　ＳＤ20・53、ＳＧ106
写真図版18　ＳＥ110・ＳＧ106・基本層序
写真図版19～23　ＳＧ213
写真図版24　ＳＢ352・353・420
写真図版25　ＳＢ210・368
写真図版26　Ｂ地区中央
写真図版27　ＳＢ248・287、ＳＰ267・268
写真図版28　ＳＥ187・359・418・419
写真図版29　ＳＥ503、ＳＫ344・354
写真図版30　ＳＫ293・337、ＳＤ355
写真図版31　ＳＧ213、ＳＤ357・358
写真図版32　ＳＤ212・285・356・507、畦畔
遺　物
写真図版33　弥生土器・石器・土師器
写真図版34　器台
写真図版35　器台・高坏
写真図版36～39　高坏
写真図版40　高坏・鉢
写真図版41～47　鉢
写真図版48　鉢・椀形土器・壺
写真図版49～57　壺
写真図版58　壺・甕
写真図版59・60　壺
写真図版61　壺・甕
写真図版62～72　甕
写真図版73　甕・小型土器
写真図版74・75　小型土器
写真図版76　甕・木製品農具
写真図版77～80　木製品農具
写真図版81　木製品農具・容器
写真図版82～84　木製品農具
写真図版85　木製品工具・紡織具
写真図版86　木製品農具・工具
写真図版87　木製品紡織具
写真図版88・89　木製品容器
写真図版90　木製品容器・家具・作業用具
写真図版91　木製品武器具
写真図版92　木製品武器具・祭祀具
写真図版93　木製品楽器・祭祀具・不明品
写真図版94　木製品不明品
写真図版95～97　木製品建築部材
写真図版98　木製品建築部材・杭材
写真図版99～101　木製品不明品
写真図版102　ＳＫ445・ＳＧ106出土遺物
写真図版103　ＳＧ106・予備調査・ＳＥ187出土遺物
写真図版104　ＳＫ293・337、ＳＧ213出土遺物
写真図版105　ＳＧ213・ＳＫ344出土遺物
写真図版106　ＳＫ344・ＳＰ出土遺物
写真図版107　ＳＰ・ＳＥ503出土遺物
写真図版108　ＳＥ503・ＳＤ355出土遺物
写真図版109　ＳＤ355出土遺物
写真図版110　ＳＤ355・356、グリッド出土遺物
写真図版111　グリッド出土遺物・内面使用痕
写真図版112　ＳＥ503出土遺物
写真図版113　木製品笹塔婆・不明品
写真図版114・115　陶器
写真図版116　陶器・土器
写真図版117～120　陶器
写真図版121　土製品・石製品・金属製品

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

服部遺跡は、山形県教育委員会が昭和49年に実施した埋蔵文化財包蔵地調査において、平安時代の遺跡として登録された（県教委1974）。平成２年には、上山・山形・天童・東根地区の基礎調査が行われ、遺跡周辺の表面踏査が実施された。須恵器・赤焼土器が採集され、その散布状況から、遺跡は当初の範囲より南東に広がると考えられた（県教委1991）。また、服部遺跡に隣接する北側の自然堤防上に、須恵器の散布が認められ、新たに藤治屋敷遺跡として登録された（県教委1991）。

昭和49年度発見

平成２年度発見

服部遺跡・藤治屋敷遺跡を含む山形市の西部に、東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設工事が策定され、それを受けて、平成10年度に県教育委員会が服部遺跡の分布調査を実施した。その結果、土坑・溝が検出され、土師器が出土した。服部遺跡の範囲は、東西146m、南北280mと考えられた（県教委2000）。その結果をもとに、県教育委員会と日本道路公団による協議を経て、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団から委託を受けて、平成10年度より調査が行われた。第１次調査（予備調査）では、服部遺跡と藤治屋敷遺跡にあわせて38ケ所の試掘坑を設定し調査を行った。調査面積は、服部遺跡954㎡、藤治屋敷遺跡555㎡である（山形埋文1999　第１図）。そのデータに基づき、第２次調査が計画され、平成11年度に実施された。

平成10年度調査開始

2　調査の概要

（1）　現地調査（第２図）

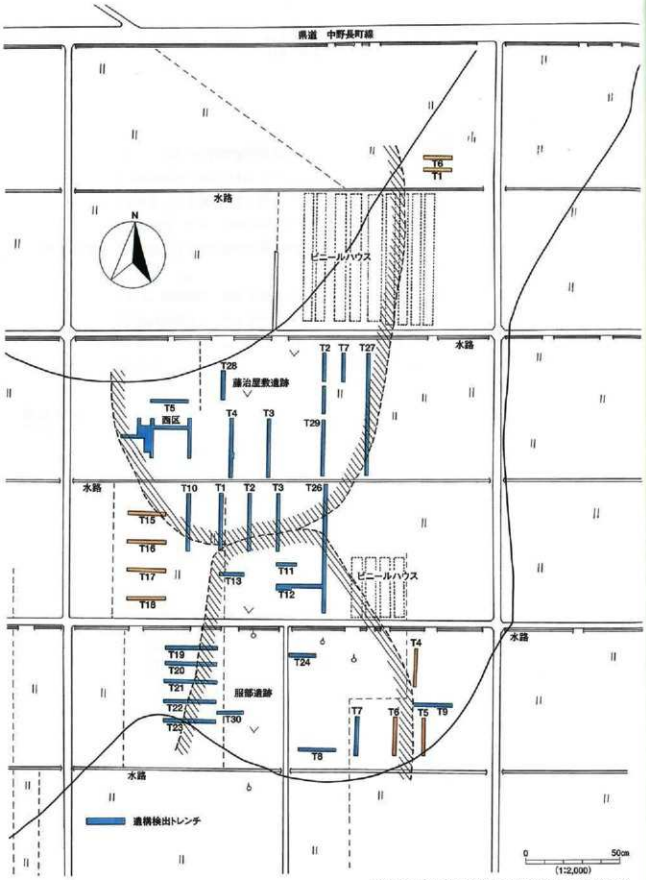
現地での調査は、平成10年度に第１次調査、平成11年度に第２次調査を行った。調査は、工事工程との調整を計りながら、服部遺跡と藤治屋敷遺跡を交互に実施した。

平成11年度２次調査開始

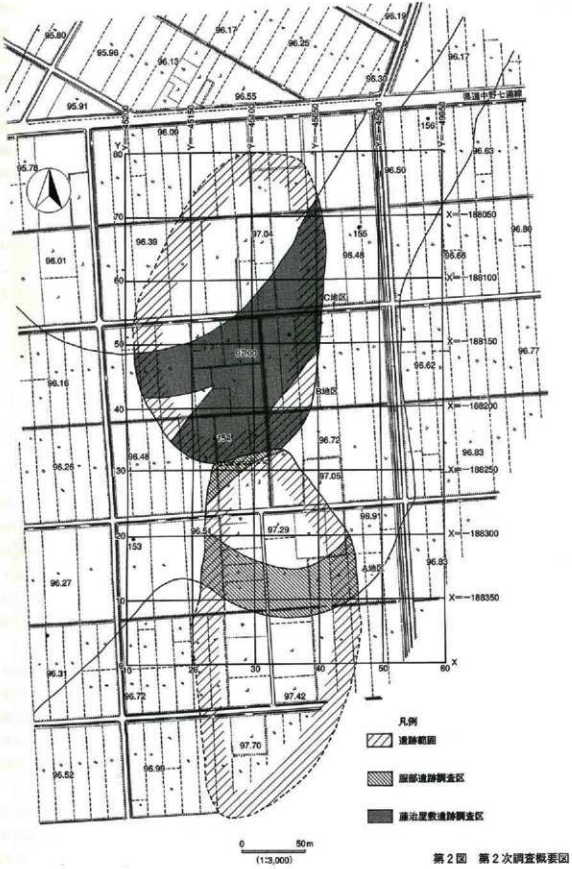
第２次調査の開始にあたり、服部遺跡と藤治屋敷遺跡に共通の調査用方眼（グリッド：Ｇ）を設定した。グリッドは、国土座標をもとに５×５ｍを単位とした。国土座標平面直角座標系第Ｘ系：Ｘ＝188,400.00、Ｙ＝－45,000.00を50－０Ｇとし、東西軸（Ｘ軸）は西から東へ、南北軸（Ｙ軸）は南から北に、アラビア数字による番号を割り当てた。調査区をＡ～Ｃ地区に分けて呼称し、Ｂ地区は①～④に細分した。服部遺跡はＡ地区・Ｂ地区④南半、藤治屋敷遺跡は、Ｂ地区①～③・④北半、Ｃ地区にあたる。遺構・遺物の登録は、服部遺跡・藤治屋敷遺跡共通に登録した。

第２次調査は、重機による表土除去・面整理・遺構精査・記録という工程で進めた。調査の成果がまとまった時点で、現地に於いて調査説明会を開催した。Ａ地区の調査が終了した平成11年６月30日に、関係機関を対象に説明会を開催し、他調査区に先行してＡ地区の引き渡しを行った。その後、Ｂ・Ｃ地区の調査がほぼ終了した平成11年11月11日に説明会を行った。地元の方々をはじめとして170名の参加を得た。

説明会170名参加



第1図 第1次調査概要図（山形埋文1999に加筆）



第2図 第2次調査概要図

（2）整理作業

平成11～15年度

整理作業は、平成11年度～平成15年度の間、遺物の整理と記録類の整理に分けて進めた。

遺物の整理は、洗浄・ネーミング・復元・遺物抽出・実測・トレース・写真撮影・出土点数集計・収納の順に行った。遺物ネーミングは、「ハットリ・トウジ　出土位置」で行い、出土位置は現場で付したものをそのまま採録している。遺物には、整理中に実測番号と報告書掲載番号を追加してネーミングした。報告書掲載遺物の抽出は、遺構ごとに行った。木製品・石製品は、加工が明瞭に確認できるものを抽出した。抽出した遺物について、実測および写真撮影を行った。容器類は原則として、1/2以上遺存するものは、完形実測を行い、1/2未満のものは、反転実測を行った。実測した遺物については、木製品の一部を除いて報告書に掲載している。報告書には、時代ごとに掲載した。遺物の収納は、報告書掲載遺物は図版ごとに、その他の遺物は遺構ごとに行った。

記録類の整理は、写真整理・図面登録・遺構の抽出・トレースの順に進めた。図面は、調査区ごとに登録し、遺物を中心に抽出した。現地で確認できた建物については、報告書にすべて掲載したが、再考の余地を残す。報告書には、A地区と面的に連続するB・C地区の2区画に分けて掲載した。

報告書版組作業と並行して、本文執筆を行った。

Ⅱ　遺跡の概要

1　遺跡の立地と環境

服部遺跡・藤治屋敷遺跡は、山形市の北西部、山形市大字中野地区に所在する。山形盆地の南部中央に位置し、東に奥羽山脈、西に出羽山地を臨む。服部遺跡・藤治屋敷遺跡の西1.5kmに須川、東1kmに馬見ヶ崎川下流の白川が流れている。山形盆地は、馬見ヶ崎川扇状地や立谷川扇状地などの大規模な扇状地が発達している。馬見ヶ崎川扇状地の外縁部には、連続する自然堤防や細切れの自然堤防が認められる。その中の1つである南北に伸びた自然堤防上に、服部遺跡・藤治屋敷遺跡は広がる（阿子島本書附編）。南に服部遺跡、北に藤治屋敷遺跡が位置し、両遺跡は接している。標高は97m前後を測り、地目は水田と畑地である。

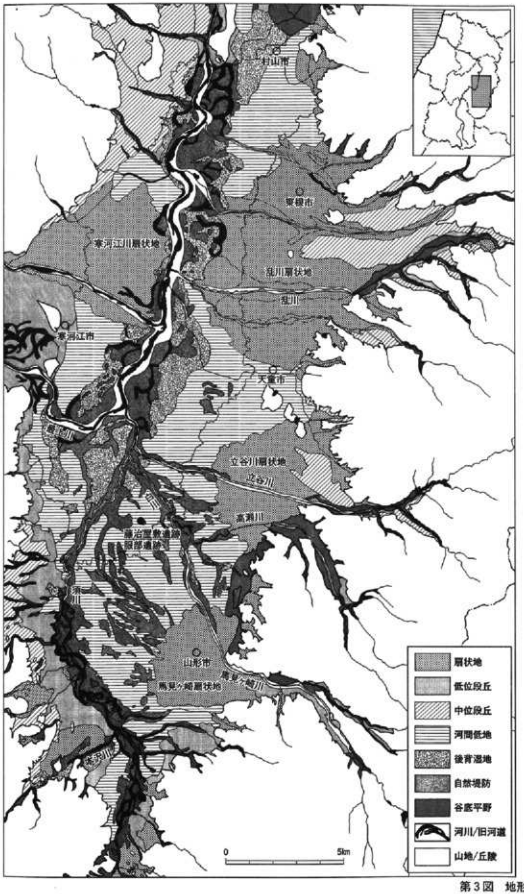
馬見ヶ崎川扇状地

縄文時代

山形盆地の縄文時代後・晩期の遺跡分布の分析から、大洞A式以降、山麓部の遺跡が小規模化するのに対し、扇状地先端・前縁の遺跡が盛行することが明らかにされ、主体が低地部に移行したことも予想されている（小林2001）。縄文時代晩期には、馬見ヶ崎川扇状地前縁部での人々の動きが確認される。服部遺跡・藤治屋敷遺跡の南東約15kmにある、境田C'遺跡から縄文時代晩期前葉大洞BC式土器、境田C遺跡から晩期中葉大洞C2式土器、境田D遺跡から晩期後葉大洞A式土器が各々出土している（県教委1984）。

弥生時代

山形県内の弥生時代の遺跡数は激減する。その中でも服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺は、弥生時代の遺跡の集中する地域であり、重要な遺跡が多い。北西2.5kmに位置する漆山遺跡は、中期桝形囲式併行「漆山式」が提唱された遺跡である。東2kmに位置する七浦遺跡は、桜井式併行



第3図　地形分類図

石　庖　丁

「七浦式」が提唱され、石庖丁３点が出土している。南７㎞に位置する江俣遺跡は、七浦式に後続する「江俣式」が提唱されている。江俣遺跡では、籾痕のある土器、石庖丁が出土しており、当地域の稲作の普及を示す資料と評価されている（柏倉1968）。近年の調査でも注目される資料が相次いで発見されている。遺跡の南方２㎞にある河原田遺跡では、弥生時代中期とみられる柱穴・墓坑６基などが検出された。柱穴は建物になる可能性がある。墓坑は、５基が木棺墓、１基が土器棺墓である（山形市教委2001）。遺跡の北西１㎞にある向河原遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物が検出されている（山形埋文2003）。

木　棺　墓

古　墳　時　代

古墳時代前期の遺跡としては、服部遺跡・藤治屋敷遺跡の南方1.5㎞に、特異な掘持柱建物２棟が検出された長表遺跡がある。建物は６本の柱から構成され、前期前葉の時期が考えられている（山形埋文2001）。さらに南方0.5㎞には、焼失家屋を含む多数の竪穴建物が検出された今塚遺跡がある。今塚遺跡では、古墳時代前期後半の当地域の基準資料となる遺物が出土している（山形埋文1994）。さらに南方１㎞には、国指定史跡嶋遺跡がある。嶋遺跡は、古墳時代後期の集落跡で、住居や倉庫とみられる建物跡が検出され、農具・容器・武具・紡織具・建築部材などの多様な木製品が出土した（柏倉1968）。一方、遺跡の北側0.5㎞には、破鏡（内行花文鏡）や四方転びの箱などの特殊な遺物が出土した馬洗場Ｂ遺跡がある。遺跡の時期は、服部遺跡・藤治屋敷遺跡に先行すると考えられる。（高橋2003）。遺跡の北東１㎞には、古墳時代中期を中心とした集落の渋江遺跡・向河原遺跡があり、近年大規模な調査が行われている（山形埋文2002ａ・ｂ、2003ほか）。

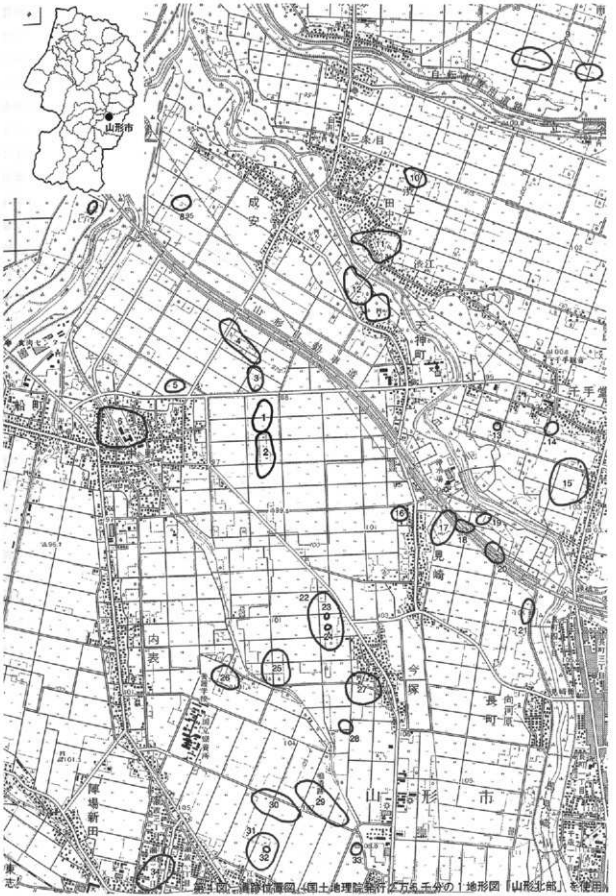
今　塚　遺　跡

嶋　遺　跡

古墳時代集落の立地自然堤防

服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺の細切れの自然堤防上には、馬洗場Ｂ遺跡や今塚遺跡、嶋遺跡などが分布しており、古墳時代の集落の立地と自然堤防は密接な関係があることが解る。古墳時代集落の立地については、先に発掘調査が行われた庄内平野南西端、鶴岡市街地西方の大泉地区においても、同様の様子が明らかにされている。大泉地区は、自然堤防と後背湿地の組み合わせからなる河間低地である。清水新田遺跡・矢馳遺跡をはじめとした古墳時代の集落は、低地を流れる河川の、流路変遷に伴い形成された微高地上に分布している（県教委1988）。古墳時代集落の選地は、生業との深い関わりのもと、地理的な規制が強く働いていたものと考えられる。また、服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺には、自然堤防が点在していることから、多くの古

No.	遺跡名	時　期	No.	遺跡名	時　期
1	服部	古墳～近世	18	境田C	縄文～平安
2	藤治屋敷	古墳～近世	19	境田Ｂ	奈良～平安
3	馬洗場Ａ	平安	20	境田Ｄ	弥生・平安・鎌倉
4	馬洗場Ｂ	古墳～中世	21	境田Ａ	奈良・平安
5	中野	古墳	22	長表	古墳～中世
6	中野城	中世～近世	23	長表熊野塚	中世～近世
7	遠慶寺	古墳～中世	24	長表大日塚	中世～近世
8	八幡田	奈良・平安	25	八ツ口	奈良・平安
9	影沢北	古墳・奈良	26	行才１	奈良・平安
10	三条ノ目	古墳	27	今塚	古墳～平安
11	渋江	古墳～近世	28	河原田	弥生～平安
12	向河原	弥生～中世	29	嶋	古墳・奈良
13	狐山２号墳	古墳	30	極野木前１	古墳・奈良・平安
14	南河原	弥生	31	極野木前２	古墳・奈良・平安
15	七浦	弥生・古墳	32	極野木塚	中世～近世
16	見崎	奈良・平安	33	田端稲荷塚	中世～近世
17	境田C	縄文～平安	34	陣場	古墳



第１図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図『山形北部』を使用）

墳時代の遺跡が埋没しているものと推定される。東北中央自動車道は、南半で山形盆地を縦貫して流れる須川と、北半で須川と合流する最上川とほぼ並行して縦走する。自動車道建設に伴い、山形盆地の発達した扇状地の先端および外縁部に、須川・最上川に並行して大きなトレンチを入れたような状態で大規模な調査が行なわれ、古墳時代の様相が明らかになってきている。

出羽国

『続日本紀』によれば、和銅元年（708）に出羽郡が建置され、和銅五年（712）に出羽国が成立している。和銅五年十月一日の条には「陸奥国最上置賜二郡を割きて出羽国に隷せしむ」とある。最上郡は、現在の村山地方と最上地方を合わせた地域と考えられる。『日本三大実録』によれば、仁和二年（886）に、最上郡は分郡され、その北半は村山郡とされた。服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺は、最上郡として残る。承平年間（931～938）に成立した『和名類聚抄』によれば、山形盆地南半分の最上郡には、郡（郡）可、山方、最上、芳賀、阿蘇、八木、山邊、福有（岡）の８郷があり、服部遺跡・藤治屋敷遺跡は、郡（郡）可に当たると考えられている（柏倉1982）。多説あるが、郡衙は中野から今塚にかけてとの考えも示されている（加藤1996）。先に上げた今塚遺跡からは、「仁寿三年」の年号の記された郡符木簡、「調所」の墨書土器などが出土しており（山形埋文1994）、役所的な機能を備えた官人層の集落（居宅）と考えられている（植松2003）。

最上郡

郡（郡）可

中世

先に記した長喜遺跡では、約150ｍ四方の方形居館の外郭が検出され、13～15世紀の遺物が出土している（山形埋文2001）。今塚館とみられる。遺跡の西方１㎞には、斯波最上家三代満直の子満基が初代城主とされる中野城がある。天正三年（1575）、中野義時が殺害され、中野城は山形城の直接支配下におかれたと考えられている。周辺には「侍町」・「七日市場」などの地名があり、郡市的空間が広がっていたと想像される（誉田1996）。また、遺跡の北東１㎞の須川対岸には、中野城の見張り所的な櫓といわれる同心屋敷、須川の水運に関わる機能を有したと考えられている渋江館がある。近年の調査で、渋江館東側部分から近世・近代の墓坑群が検出された。墓の構造や副葬品の変遷などが解明されている（山形埋文2002・押切他2003）。

近世

中野城

遺跡の北方約2.5㎞地点で、須川と白川は合流し、その0.5㎞北側で奥羽山脈を源とする立谷川が合流する。須川は、さらに1.5㎞北で山形県の母なる川最上川に合流する。また、近世に栄えた六十里越と須川の交差する地点でもある。今回の調査区は、東北横断自動車道酒田線と東北中央自動車道の山形ジャンクション部分に当たるが、遺跡周辺は、当時も今も交通網の交差する要衝である。これは、各時代の重要な遺跡が集中した一つの要因であろう。

山形ジャンクション

2　基本層序

Ａ地区の基本層序は、次の通りである（第15図）。

Ⅰ　10ＹＲ２/２黒褐色シルト

Ⅱ　10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルト（サラサラしている）

Ⅲ　10ＹＲ３/４暗褐色砂質シルト（サラサラしている）

Ⅲ'　10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルト

Ⅰ・Ⅱ層は耕作土、Ⅲ層は安定した堆積土である。Ⅲ'層は土色に違いが認められるが、Ⅲ層に対応すると判断しⅢ'層とした。奈良・平安時代の明確な包含層は認められない。奈良・平安時代の遺構検出は、Ⅲ層上面で行った。

Ｂ地区④の基本層序は、次の通りである（第16図）。

Ⅰ　10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルト

Ⅱ　10ＹＲ３/３暗褐色砂質シルト（Ⅰより黒味が強い）

Ⅲ　10ＹＲ２/２黒褐色粘土

Ⅲ'　10ＹＲ４/４黒褐色粘土（褐色粘土・暗褐色粘土混入）

Ⅳ　10ＹＲ３/３暗褐色粘土（褐色粘土混入）

Ⅴ　10ＹＲ４/３にぶい黄褐色シルト（にぶい赤褐色粘土・にぶい褐色粘土・明褐色粘土混入）

Ⅰ～Ⅲ層は耕作土であるが、Ⅱ・Ⅲ層の時期については不明である。Ⅳ層は奈良・平安時代の包含層、Ⅴ層は基盤層である。古墳・奈良・平安時代遺構の検出は、Ⅴ層上面で行った。Ｂ地区③（第16図）では、Ⅱ層に対応する層が認められず、遺構検出面（Ⅴ層上面）までの深さが15㎝と浅くなる。基盤層となるⅤ層は、粘性が強く安定した水平堆積を示す。Ⅴ層下位では、厚さ５～30㎝前後で土色の変化が認められ、旧河道の堆積層とみられる。

Ｃ地区においても基本的な層序はＢ地区④・③に対応する（第22図）。耕作土は、60㎝と厚く、一部に酸化鉄の付着があり、ＳＧ213河川部分は、後世まで水分を含む状況であったとみられる。基盤層は、北側では安定し、南側で複雑な様相を呈する。旧河道の中心はＣ地区南側の可能性が高い。Ｃ地区での、奈良・平安時代と古墳時代の遺構検出は、Ⅴ層上面で行った。

3　遺構の分布（第５図）

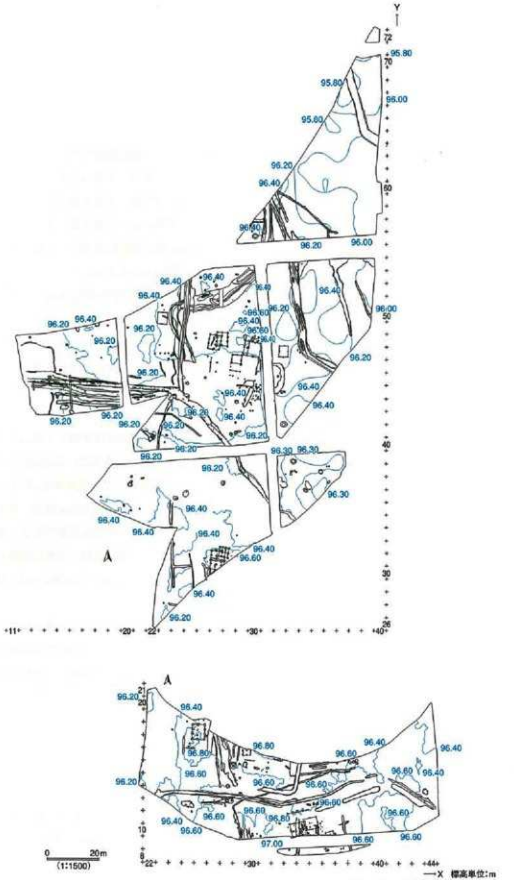
遺跡は、南北に伸びる自然堤防上で確認された。現地表は、標高97ｍ前後を測り、97ｍ以上の部分は畑地、97ｍ未満の部分は水田として利用される。遺構検出面の標高は、96.5ｍ前後で南から北に緩やかに傾斜している。遺構の分布は、安定した基盤層が広がる標高96.4ｍ以上の範囲で認められる。安定した基盤層は、東西幅約50ｍで、その緩辺部の標高96.4ｍ地点に各時代の井戸が分布する。また、奈良・平安時代の建物は、標高96.6ｍ以上の微高地に集中する。建物が集中する微高地は、Ａ地区南中央、Ａ地区西側、Ｂ地区中央、Ｂ地区南端、Ｃ地区南端の計５ケ所ある。微高地は、調査期間中の度重なる大雨にも、水没することは一度も無かった（写真図版24）。河川は、微高地間を縫うようにして検出された。

標高96.6ｍ以上

今回の調査では、単一面の検出面に止まり、立面での遺構の分布は不明である。基本層序の観察から、古墳時代の河川と奈良・平安時代遺構間の間層は確認できない。ＳＥ187井戸の断ち割り（第50図）では、確認面から深さ120㎝に泥炭層、160㎝に青色細砂（帯水層）の堆積がみられる。泥炭層には、多くの植物遺体が含まれるが遺物は出土していない。

Ⅲ　検出された遺構

検出された遺構は、掘立柱建物・井戸・溝・土坑・柱穴・河川などである。遺構の個別の記述は観察表に譲り、以下、調査区ごとに概要を述べる。記載は、Ａ地区と、面的に連続するＢ・Ｃ地区の２区画に分けて説明していく。



第5図 調査区内等高線配置図

1 A 地 区

調査区の中央、東西50mの微高地で、奈良・平安時代、中世、近・現代の遺構が検出された。

(1) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・河川がある。各遺構には、須恵器が多量に出土したＳＧ106覆土に類似する、黒色粘土が一定量入る。 黒色粘土

掘立柱建物（表1）

遺物の出土機会に恵まれることが少なく、時期の特定ができない遺構である。柱穴からは、小破片の須恵器・土師器が出土する。A地区の掘立柱建物は、5棟を数え、全棟奈良・平安時代とみられる。東柱を持つ総柱建物とこれを持たないものがある。

総柱建物は2棟（ＳＢ168・542）で、2棟ともに未調査部分がある。総柱建物は2×2間以上で、面積は4.5㎡以上を測る。柱間寸法は、1.3・1.5mがある。

東柱の無い建物は3棟（ＳＢ169・540・541）検出された。3×2間、2×2間がある。面積は、23.4～28.8㎡を測る。柱間寸法は、1.8・2.0・2.25・2.5・2.75mがある。

建物長軸の方位は、A・B・C群に分類することができる。真北から東に2度～西に4度傾くＳＢ168・169（A群）、東に76度傾くＳＢ540・541（B群）がある。ＳＢ542は、未検出部分があるため詳細は不明であるが、建物軸はＳＢ540・541とほぼ一致し、B群に含まれる。柱穴列は、建物長軸に共通するものと、異なるものがある。ＳＡ551はA群、ＳＢ540・541の北側にあるＳＡ166はB群に含まれる。ＳＢ168の南側に位置するＳＡ165は、西に82度傾く（C群）。 建物軸線

建物の重複は、ＳＢ540→541の最大で2回である。他の建物の重複は認められない。

土 坑（表2）

平面形は、楕円形・不整形が多い。深さは、20cm前後と浅い。土坑からの出土遺物は少なく、掘立柱建物同様に、ＳＧ106の覆土に類似する黒色粘土を一定量含む土坑を、奈良・平安時代とした。埋土は、人為堆積が多い。土坑の分布は、掘立柱建物の周辺に認められる。

溝（表3）

建物と関連するもの、区画施設となるものがある。

ＳＤ63・69は、ＳＢ169に隣接する。ＳＤ63は、ＳＢ169の南北軸、ＳＤ69は、ＳＢ169の東西軸と軸線が等しく、溝と建物は同時期に機能したと考えられる。

ＳＤ20は、建物長軸Ｂ群に軸線がほぼ等しい。断面は緩やかなU字形を呈し、深さは、10cm前後と浅い。覆土は、黒色シルトが主体を占める。調査区中央で東に70度傾き直線に走り、28－12Ｇで直角に折れ、南北に向きを変える。37・38－9～11ＧにあるＳＤ483は、断面形状や覆土、南北軸線にＳＤ20との共通性が認められる。ＳＤ20の東端は判然としないが、ＳＤ20を北辺・西辺、ＳＤ483を東辺とした溝による区画構造が想定される。区画の東西幅は40mで、その主体となる建物は、ＳＢ540・541である。 区 画

河 川（第14・15図）

ＳＢ168とＳＢ169の間を南から北に流れるＳＧ106が検出された。幅約4mで、検出面からの深さは30cm前後である。底面は安定せず、窪地状になる部分がある。ＳＧ106はＳＤ2・20と重複し、ＳＧ106が最も古い。覆土は、粘性のある黒～黒褐色土である。特に黒味の強い粘土層

から須恵器・土師器がまとまって出土した。高台内面に「新」の墨書があり、内面には墨が付着し摩滅した須恵器有台坏（138－8）が出土した。今回の調査では、古墳時代の流路の検出に至っていないがB・C地区のSG213の状況より、埋没している可能性は高い。SG106の東西にある溝状の土色変化は、掘り込みによるものとは認められず、河川による堆積土壌の質と考えられる。

（2） 中　世

井戸と溝が検出された。

井　戸（第16図）

調査区中央西寄りで、SE110が検出された。平面形は南北に長い楕円形で、北側に方形の施設が付く。断面はロート状で、下位の約70cmが人為堆積、細砂層を挟んで上位20cmが自然堆積を示す。泥炭化した最下層から笹塔婆5点（151－1、152－1～4）、板状木製品1点（151－2）が出土した。完掘後、30～40cmの帯水位が認められたため、井戸と判断した。

笹塔婆

溝（表3）

SD20覆土と明らかに異なる覆土で、近世以降の遺物が出土しない溝は中世の所産と判断できたが、断定できるものは少ない。

SD53は、調査区中央にある。底面が平坦で、断面は緩やかなU字形を呈する。深さは、20cm前後で、覆土は、粘性のある黒褐色シルトである。調査区中央で西に80度傾き直線に走り、30－13Gで直角に折れ、南北に向きを変える。27－16～18GにあるSD16は、断面形状や南北軸線にSD53との共通性が認められた。30－14G周辺は削平が著しくSD53の西端は判然としないが、SD53を東・南辺、SD16を西辺とした溝による区画構造が想定される。区画の東西幅は36mで、その中央に、軸線C群としたSA165と笹塔婆が出土したSE110がある。

区　画

SD494は、覆土や断面形状、規模がSD53と類似するが、南北軸はA類である。

（3） 近 現 代

土坑と溝がある。近現代の遺物に古代・中世・近世の遺物が混入して出土するものが多い。

SD2は、調査区を東西に横断する。古代～現代の遺物が多量に出土した。31・32－13GでSD53と、34・33－13GでSA166と並走することから、SD2はその構築がSD53もしくはSA166構築期まで遡る可能性がある。

2 B・C地区

調査区の中央、東西50mの微高地で、奈良・平安時代、中世、近・現代の遺構が検出された。微高地は、B地区中央、B地区南端、C地区南端の3ケ所に分かれる。その微高地を縫うようにして古墳時代～奈良・平安時代の河川が検出された。

（1） 古墳時代

B地区からC地区に亘り、南から北へ緩やかに蛇行する河川SG213が、190mの長さで検出された。幅は6～13m、確認面からの深さは、最も深いC地区で1.7mを測る。B－B'断面で確認した黒色を帯びた粘土～粘土質シルトが各断面および平面において識別が可能であったため、F4と呼称し、F4の上位に堆積する砂をF3、F4の下位に堆積する灰色を帯びた粘土質シルトまたは褐色～青色砂をF4下と呼称して遺物の取り上げを行った。古墳時代SG213

遺物取り上げF4

の覆土は、1m前後の厚さで堆積する褐色を帯びた砂（F3）、その下位に30cm前後の厚さで堆積する黒色を帯びた粘土～粘土質シルト（F4）、さらにその下位に灰色を帯びた粘土質シルトまたは褐色～青色砂（F4下）に大別される。F4中に、灰色～黄色粘土～粘土質シルトが堆積しており、テフラ分析を行った。微量の火山ガラスが確認されたが、その由来は不明である（パリノ・サーヴェイ株式会社本書附編）。

遺存状態の比較的良好な土器や木製品などの遺物は、F4およびF4下位層から出土し、F3では破片や摩滅したものが多い。しかし、各層間の遺物接合例は多数あり、各層間の時期差は認められない。遺物の平面分布としては、A－A'断面周辺、B－B'断面周辺、C－C'断面南面、D－D'断面周辺、C地区の5ケ所に集中地点が認められた（第24～39・164図）。なお、土器と木製品出土の在り方はほぼ一致している。

集中地点5ケ所

28－34Gでは、緩やかに立ち上がる河川南壁で、土師器・木製品が貼付くように多数出土した。各土層断面から、古墳時代の遺物を含む層が奈良・平安時代の遺構確認面まで立ち上がることが確認できる。したがって、古墳時代の遺構検出面は、奈良・平安時代と同一面と考えられる。また、B－B'断面西側やB地区中央微高地の断ち割りを実施したが、河川以外の遺構は検出されなかった。B－B'断面、C－C'断面、E－E'断面では、河川の基盤層が安定せず、河川中央に傾斜することが観察され、基盤層自体が古墳時代以前の河川覆土であることが考えられる。

（2） 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・井戸・河川がある。

掘立柱建物（表1）

B地区の掘立柱建物は、9棟を数え、全棟奈良・平安時代とみられる。C地区では検出されていない。東柱を持つ総柱建物とこれを持たないものがある。

総柱建物は2棟（SB353・352）で、SB353は未調査部分がある。総柱建物は2×2間（SB353）、3×2間（SB352）がある。面積は17～20.6㎡である。柱間寸法は、1.2・1.5・1.8・2・2.25mがある。

東柱の無い建物は6棟（SB201・237・248・286・287・368・420）検出された。3×2間と2×2間がある。2×2間には、西面に廂が付くもの（SB287・420）がある。SB286は、南面に塀（柱列SP318～320）が付設する。面積は、12.2～30.3（廂部分含む）㎡である。柱間寸法は、1.2・1.5・1.8・2.0・2.1・2.25・2.4・2.5・3.0mがある。

建物軸線

建物軸線の南北方位は、a・b・c群の3群に分類することができる。真北から東に2～3度傾くSB248・368（a群）、東に5～6度傾くSB201・286・352（b群）、東に10～11度傾くSB237・287・353・420（c群）がある。柱穴列は、東西軸を90度北に回転させて比較すると、SA550はc群、SA546はa群に近い。A地区と比較すると、a群はA地区A群に含まれ、b群・c群はC群に近似する。

建物の重複は、SB353→352→420の最大で3回である。SB353とSB420は南北軸がc群で近接するなど、問題点があり、SB352・353・420については、建物の構造に検討の余地を残す。他にSB287→SB286、直接の新旧は不明であるが、SB237とSB248の重複関係がある。

井 戸（表2）SE・SKは調査時の登録

SE187・503、SK344・290・291は、平面形が楕円形で、壁面が急な掘り込みを呈する。帯水層とみられる位置に平坦な底面を作り出していることから、井戸と考えられた。徴高地縁辺部の標高96.3m前後に分布する。

SE187は、長軸262cm・短軸223cmを測る大型である。深さは、216cmで、埋没した自然木を掘り抜いて帯水層に到達している。覆土は、人為的埋土堆積の後、上位に自然堆積を示す。自然堆積層中上位に火山灰とみられる黄橙色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は自然堆積層下位から出土した。

火山灰

SE503は、長軸241cm・短軸157cm・深さ87cmを測る。覆土は、人為的埋土堆積の後、上位に自然堆積を示す。人為的埋土直上に火山灰がレンズ状に堆積する。テフラ分析を行ったところ、火山灰は「A.D.915年に十和田カルデラより噴出したTo－a」と「朝鮮半島北部に位置する白頭山が給源のB－Tm」に由来するとの結果を得た（パリノ・サーヴェイ株式会社本書附編）。遺物は、火山灰下位の人為的埋土上位層から出土した。埋め戻しの際の一括廃棄とみられる。墨書土器4点、口縁部打ち欠きのある土師器坏、小型土器土師器鉢、砥石などがある。

SK344は、長軸175cm、短軸152cm、深さ114cmを測る。覆土は、下位に粘性の強い黒色粘土質シルトが堆積し、その上位に明らかな人為的埋土が堆積する。遺物は、下位の黒色粘土質シルトの上位部分に集中する。SE503同様に埋め戻しの際の一括廃棄の可能性が高い。墨書土器2点、内面黒色処理の黒色土器有台坏、被熱した痕跡のある礫などがある。

SK290と291は、2基が80cm離れて東西に隣接する。2基は、平面規模は等しく、深さはSK290が73cm、SK291が98cmである。覆土は、人為的埋土で土質が類似する。同時期に機能し廃絶した可能性が高い。他の井戸と異なり、遺物は小破片の土師器・須恵器のみである。

土 坑（表2）

建物周辺に分布する土坑は、平面形が楕円で、長軸は2m未満である。深さが30cm未満で浅く、壁の立ち上がりが緩やかで、底面が平坦なものと、深さが50cmを超えて、壁の立ち上がりが急で、断面形がロート状になるものがある。前者には、SK249・281・292・354などがある。後者には、SK293がある。覆土は、人為的埋土である。

建物から離れて位置し、古墳時代の河川SG213の堆土砂層を掘り込んだ土坑として、SK336・337がある。2基は、2m離れて東西に隣接する。SG213は埋没し、SK336・337が掘り込める状態であったことが解る。SK336・337は、平面形楕円で、壁面は緩やかに掘り込み、深さは30cm前後である。覆土は、砂やシルトを巻き込むように堆積しており、流水による埋没の可能性が高い。SK337は、自然木の根元に掘り込まれる。遺物は、未成品とみられる篦状木製品（144－4・5）が、篦先を自然木の根元に向けて、2点交差して出土した。他に、「田」が読み取れる墨書土器須恵器蓋、須恵器無台坏・甕・甕、土師器甕などが出土した。遺構の性格としては、木製都材の水漬け保管施設や未成品を用いた祭祀場などが想定される。

篦状木製品未成品

溝（表3）

建物に隣接する溝として、SD236・355・378・549がある。SD236・378・549は、幅40cm前後、深さが10cm前後で、直線である。SD355は、幅90～240cm、深さ14cmを測り、円を描くように東に膨らみ、緩やかに北から南に傾斜している。薄い堆積土から、須恵器無台坏・有台坏・蓋、土師器甕、黒色土器坏類など多数の遺物が出土した。中でも墨書土器5点が出土し、4点が「福」と解読できる。西側は水路のため不明である。

墨書土器「福」

建物から離れた溝として、西側低地のSD357がある。覆土が黒色粘土で、須恵器・土師器破片が出土したことから、奈良・平安時代の遺構と判断した。しかし、SD357は、B地区③で西に10度傾くが、B・C地区には西に傾く奈良・平安時代の建物は検出されていない。逆に、中世以降の時期と判断するSD356・358が、SD357にほぼ等しい軸線で並走しており、SD357はSD356・358と同時期の可能性が高い。

河 川（第55・56図）

奈良・平安時代の河川SG213は、B地区北半～C地区にかけて検出された。流路は古墳時代の流路上であるが、25－46Gで消滅している。幅は3～5mで、最深部は50cmを測る。覆土は、黒色～灰黄褐色の粘土質シルトで、A地区SG106のそれに類似する。河川は、建物のある徴高地間で、流れの少ない淀みのような状態であったと推測される。

徴高地間を流れる河川

遺物は、黒色粘土質シルトからの出土である。須恵器無台坏・有台坏・甕、土師器甕、砥石がある。墨書「成□」のある須恵器無台坏（142－2）のほか、古墳時代土師器も少量含まれる。

（3） 中世・近世

明らかに中世と判断できる遺構は無いが、中世の遺物がまとまって出土する遺構が限られることから、それら遺構の構築時期を中世まで遡ると推察する。SD212とSD356は、黒褐色砂質シルトの堆積がみられ、中世の陶磁器がまとまって出土することからも、その可能性が高いと考えられる。ただし、遺構の性格が溝であるため、その扱いはより慎重を要する。また、SD212は東に5度、SD356は西に10度の傾きがあり、その軸線は一致しない。近世の遺構についても中世と同様判然としない。

（4） 近 現 代

土坑、井戸、溝、畦畔がある。ここでは主な遺構を取り上げる。

井戸は、SE345・418・419、SK359・369がある。奈良・平安時代の井戸同様に標高96.3m前後に分布する。平面形は、SE418・SK359が楕円であるほかは、やや不整であるが円形を呈する。壁の立ち上がりは急傾で、底面は平坦である。覆土は、人為的埋土である。SE418は中央に、SE345は東壁に竹筒が垂直に固定されている。

SD285は、B地区①～②西半で東西に横断し、25－45Gで南東方向に45度向きを変え、B地区②東半～④・⑤を斜めに横断する。古代～現代の遺物が多量に出土した。B地区①～②西半部分では、板材を用いた水路構造が確認された。

B地区①で、畦畔を確認した。東西の畦畔間は9・6.5・14mを測り、軸線はSD285とその南側の溝に等しく、これらの溝と同時期と考えられる。

Ⅳ 出土した遺物

遺物は、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世・近現代の遺物が出土した。出土箱数は、整理箱160箱（服部遺跡13箱・藤治屋敷遺跡147箱）であり、整理作業終了時には 160 箱

205箱になっている。

遺物には、土器・陶器・磁器・木製品・金属製品・石器・石製品・自然遺物等がある。以下各時代ごとの概要を記し、各遺物についての詳細は観察表に譲る。

1　弥生時代

土器・石器が出土した。いずれもＢ地区で検出された河川ＳＧ213からの出土である。

（1）　土　　器（第57図）

弥生土器

土器は、甕が４点出土した。57－１は、内面はナデ・ケズリ、外面口縁ナデおよび横方向にＬ縄文が施文される。外面に煤の付着が認められる。57－２は、口縁部内面・外面に３本一単位細書きの沈線文が緩やかな波状に入る。57－３・４は竹管を用いた２本一単位の平行沈線文が施されている。これらの遺物は、南東約1.5kmにある塩田Ｄ遺跡出土資料に類例が認められる。

（2）　石　　器（第57図）

アメリカ式石鏃

身部上半を欠損しているアメリカ式石鏃（57－７）が１点出土した。石材は頁岩である。凹基無茎式石鏃の基部両側縁にノッチが施されている。アメリカ式石鏃は東北地方南部の弥生時代の所産といわれるものであり、本遺跡出土の弥生土器との関連も考えられる。

2　古墳時代

古墳時代の遺物には、土器・木製品がある。

（1）　土　　器（第58～104図）

ＳＧ213からの出土がほとんどである。古墳時代の土器が出土したＢ地区ＳＫ210は、ＳＧ213の古墳時代流路を検出する契機となった落ち込みである。出土した土器の総重量は、約250kgを測る（第166図）。土器は土師器で、主な器種は、器台・高坏・壺・甕・鉢・小型土器がある。以下、種別ごとに器種の分類を行い、出土した土器についてまとめる。

2 5 0 kg

①分類（第161・162図）

器　台（第58図）

小型器台である。受部が遺存しているものが少ない。脚部形態で器台Ａと器台Ｂに分かれる。

【器台Ａ】脚部が八の字状に開き、内湾する小型の受部を持つ。貫通孔のあるものをＡ１、ないものをＡ２とする。脚部と受部の接合部分が、Ａ１よりＡ２が細くなる。Ａ２には、貫通せずに、凹みが入るもの（58－８・９）がある。脚部の透孔は、入らないもの、２～４方向に入るものがある。坏部は、58－１が口縁部外側に面を明瞭に作り出しているのに対し、58－２は口縁部に横ナデが施されているのみである。

【器台Ｂ】脚部は、上部が円柱状となり、ラッパ状に開く。貫通孔および透孔はみられない。内湾する小型の受部を持つ。

高　坏（第59～60図）

【高坏Ａ】内湾ぎみにのびる大型の坏部と八の字状に開く脚部からなる。坏部と脚部の割合はおおよそ半々になる。

【高坏Ｂ】脚部は、上部約１/３が中実で、柱状中空となる下部から屈曲して外方向にのびる。脚部外面の屈曲が明瞭なものをＢ１、不明瞭なものをＢ２とする。坏部が遺存する59－７は、坏部が底部から緩やかに屈曲し、外上方にのびる。

【高坏Ｃ】脚部は、中実であるが下端に凹みを持ち、緩やかに屈曲して外方向にのびる。脚部外面の屈曲が明瞭なものをＣ１、不明瞭なものをＣ２とする。坏部は底部から屈曲し、外上方にのびる。脚部がＣ２に類似し、坏部は屈曲せず単純に内湾するものをＣ３とする。

【高坏Ｄ】脚部は、中実で屈曲して外方向にのびる。坏部は底部から屈曲し、外上方にのびる。内底面は平坦である。60－７は脚部に透孔がある。

【高坏Ｅ】小型品である。器高6.5cmを測る。

鉢（第61～66図）

【鉢Ａ】小型丸底鉢である。器高に対して口径が大きく、くびれが器高の半分以下の位置にあるものをＡ１、器高に対して口径がさほど大きくなく、くびれが器高ほぼ中心にあり、下半に膨らみをもつものをＡ２とする。底部に凹みがあるものが多い。調整はハケ・ナデ・ミガキが施される。くびれが器高のほぼ中心にあり、ハケ・ナデ調整主体で、調整が省略されたものをＡ３とする。Ａ１は、口縁部が内湾ぎみに直立するＡ１ａと外傾するＡ１ｂに分類できる。Ａ３は、Ａ２に比べ器高が低いつくりとなる。口縁部の外傾が大きなものをＡ３ａ、小さなものをＡ３ｂとする。　小型丸底鉢

【鉢Ｂ】扁平な体部と屈曲してのびる口縁部からなる。くびれが器高ほぼ中心にあるＢ１と、くびれが器高の上半にあり、体部がやや丸み持つＢ２に分類される。底部は、平底と浅い凹を持つものがある。Ｂ１はミガキが施されるのに対し、Ｂ２はハケ・ナデ調整が主体である。

【鉢Ｃ】器形の大略は鉢Ｂに類似するが、くびれと口縁部の間に段を持つ。口縁部が13cm前後のものをＣ１、口縁部21cmの大型のものをＢ２とする。全体に丁寧な作りである。

【鉢Ｄ】内湾する体部と屈曲する短い外反する口縁部からなる。底部は小さく突き出し浅く凹む。単純に外反する口縁部をＤ１、頸部が鉢Ｃに類似した段を持つものをＤ２とする。

【鉢Ｅ】平底で、浅鉢形である。口縁部が肥厚する。

【鉢Ｆ】底部に焼成前穿孔が一つある、有孔鉢である。Ｆ１～３に分類される。Ｆ１は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が折り返し状になる。Ｆ２は、内湾しながら立ち上がり口縁部端部が僅かに肥厚する。Ｆ３は、底部が突き出し体部下半が膨らみ、口縁部が肥厚し端部にヘラ木口による押圧文が施される。　有孔鉢

【鉢Ｇ】底部が突き出し、体部が内湾し、片口が付く。

【鉢Ｈ】器形は鉢Ｂ２に類似し、口径46cm、残存する器高は31cmと大型である。65－５は、くびれに指頭の押圧文が入る。

【鉢Ｉ】小型丸底鉢に脚が付く。脚が八の字になるＩ１と中実のＩ２がある。小型精製品である。

【鉢Ｊ】器形は鉢Ｄ・Ｈに似る。器高10cm未満である。

椀形土器（第66図）

底部が厚く高台状の作りで、体部は緩やかに内湾する。

壺（第67～84図）

【壺Ａ】平底で頸部が長く、体部が球形を呈する。頸部は僅かに内湾する。ミガキが多用される。寸法に大中小があり、小型をＡ１、中型をＡ２、大型Ａ３とする。Ａ１で、体部径が最大径となるものをＡ１ａ、口径が最大径となるものをＡ１ｂとする。

【壺B】壺Bに比べ、頸部が短く体部が最大径となる。器高はA1と類似する。

【壺C】有段口縁の大型壺である。C1はL字状に段が入り、C2は鈍角になる。C1とした70－1、C2とした71－1は、口縁部下端に形態は異なるが突き出しを持つ。

棒状浮文 【壺D】複合口縁で、口縁部外面に棒状浮文が付く大型壺である。棒状浮文は2本1対である。

【壺E】複合口縁で、比較的短い口縁が外反する。形態でE1・2に分類する。E1は、体部最大径が中位で器高より大きい。E2は、体部最大径が中位で器高より短く、底部が突き出す。

【壺F】頸部で屈曲し外反してのびる有段口縁である。体部の形態は不明である。

【壺G】単純口縁である。G1は、体部最大径が中位より下にあり下膨れになるもの、G2は、体部最大径が中位にあり、最大径より器高が大きいものである。G1よりG2の頸部が長い。

【壺H】体部最大径が上半にある。口縁部形態は不明である。

【壺I】体部が球形で、底部の突き出しがほとんど無い。口縁部形態は不明である。

甕（第85～102図）

【甕A】台付きの甕である。全体が解るものはない。86－1は、内底面および台内面に粘土の補充があり、指頭痕がみられる。東海系S字甕である（注1）。85－7は、口縁部は短く外傾し、体部は倒卵形を呈する。

東海系S字甕

【甕B】頸部で屈曲し、やや直立ぎみにのびて口縁部端部をつまみ上げ、狭い口縁帯を作る。能登形甕に類似する。

【甕C】く字状口縁壺である。頸部は湾曲して立ち上がり、端部は外反する。平底で体部は球状である。

【甕D】く字状口縁壺である。頸部は短く外傾し端部は丸くおさまる。底部周辺にケズリが施され、弱く突き出す。体部は球形を呈する。甕の主体を占める。

【甕E】く字状口縁壺である。頸部～口縁部の形態は甕Dに類似する。底部周辺にケズリが施されるものはあるが、突き出しは認められない。体部は球形を基調とするが、最大径の位置が不明瞭となる。頸部が短いものをE1、長く引き出すものをE2とする。

【甕F】く字状口縁壺である。長胴になるものを一括とし、底部および調整で細分する。F1は、丸底でハケ・ミガキが施される。F2は、底部が突き出し、ハケ・ナデが施される。F3は、底部が弱く突き出し、ハケ・ナデが施される。最大径は体部下半にある。

【甕G】く字状口縁壺である。頸部は短く外傾し端部は丸くおさまる。器高が10～20cmの中型である。形態からG1～3に細分する。G1は甕Dの中型で、G2は甕Eの中型、G3は頸部が直立ぎみに外傾、体部は膨らまない。

【甕H】器形は甕G3に似る。器高10cm未満である。

線描波状文 【甕I】甕に線描文が入る。57－5は、薄くて堅い甕肩部破片に線描波状文が入る。

小型土器（第103～104図）

器高10cm未満の小型品で鉢形・コップ形を呈し、器種の組形が不明のものである。手づくね成形である。

②土器の調整

調整の手法には、ケズリ・ハケメ・ナデ・ミガキが認められる。各調整の組み合わせは多様であるが、施される基本的な順序としては、ケズリ→ハケメ→ナデ→ミガキと理解される。

ケズリは、成形・調整として行われている。器面に1～2cm幅の粘土の平坦面と砂粒の動きが観察できる。ヘラケズリとも呼ばれるものである。内面の輪積み痕の接合、甕・壺類の体部下半の成形、底部の突き出しの成形にその痕跡が多く観察される。

ハケメは、浅く細い条痕として観察される。条痕は、ケズリ幅とほぼ同じ幅で単位を成す。右下斜めに施されることが多い。器面に残された痕跡が最も多い調整である。器の全体のイメージ、調子、印象を左右している。

ナデは、ヘラ・指・布・皮などで撫でたとみられる。口縁部・頸部・脚端部などには、指・布・皮による横ナデ、体部内面にはヘラによる斜め方向のナデが多用される。ヘラの幅は、ケズリ幅にほぼ等しい。ヘラを用いた手法は、成形がヘラケズリ、調整がヘラナデと考えることも可能である。

ミガキは、幅4mm前後の狭い工具痕が連続し、器面に光沢が出る。タテミガキが基本で、精緻な作りになるほどヨコミガキが多用される。甕には認められない。

③土器の装飾

刻文・貼付文・押圧文・彩文がある。刻文は、甕Ⅰ類の線描波状文がある（57－7）。貼付文は、壺D類の棒状浮文がある。押圧文は、鉢F3類のヘラ木口を口唇部に押しつけたもの、鉢H類の指頭を連続して押しつけたものがある。彩文は、赤色顔料で、器面を広く塗りつぶしたものがある。赤色が強調された土器を、赤彩土器と呼ぶ。内外面赤彩、外面のみ赤彩がある。器台・高坏・壺・鉢の赤彩土器がある（写真図版10）。口縁部下に段を持つ鉢C1・C2・D2類は、ミガキを多用した精緻な作りで、赤彩土器のセットになるとみられる。

④土器の使用痕

使用したことにより生じた、汚れや付着物を使用痕として扱った。使用痕には煤・黒色汚れ・煤以外の付着物などがある。煤付着の周辺に黒色汚れが認められることから、黒色汚れは、煤同様に被熱痕跡と理解される。付着物は吹きこぼれや内容物の残存とみられる。これらの付着物の一部について分析を試みているが、物質の特定には至っていない（パリノ・サーヴェイ株式会社本書附編）。煤・黒色汚れおよび付着物の状況を、内面・外面ごとに確認できる部位で分類する（第163図）。図化した263点中、92点に汚れや付着物が認められた。Aa8（A'a8）・Ah8（A'h8）類などは、火災などの煮炊以外の被熱痕跡の可能性があるが、その点数は限られている。外面の煤・黒色汚れと、内面の付着物がセットになり、煮炊による痕跡と判断されるのは23点ある。その殆どは甕類である。また、使用痕B・D・E類は、土器を据え付けて煮炊したことが考えられる。使用痕が多く認められるのは甕E・G類である。甕類以外に、鉢・壺にも使用痕が一定量あることは注目される。使用痕は、土器の用途解明や煮炊工程の復元、炉の構造解明などにつながるものと思われるが、細かい分析は今後の課題である。

75－1・76－1は、幅1.5cm前後の帯状の汚れが体部に斜めに入る、カゴメが認められる。カゴメを覆うように煤が付着している。籠状の容器に入った（吊るされた？）状態で被熱したものとみられる。

75－1・79－1は焼成後穿孔がある。その用途は不明である。

（2） 木製品（第105～137図）

SG213から多量の木製品が出土した。出土した木製品は、農具・工具・紡織具・容器・家具

作業用具・武器具・祭祀具・楽器・建築部材・杭材・不明品で分類する（表４）。分類に当たっては、主に『木器集成図録　近畿原始編（解説）』・『六大Ａ遺跡発掘調査報告書（木製品編）』を参考とした（注２）。木製品の個別の記載は観察表（表６）に譲り、樹種の詳細は付編に収録する。

農　具（第105～116図）

農具には、土地を耕す耕起具、作物の収穫や脱穀・製粉をする収穫具、その他農作業の際に使われる田下駄などの道具がある。

【耕起具】耕起具は、鍬と鋤に大別される。手前に土を引き寄せて耕すものを鍬、手足で押し込み土を反転させるものを鋤とする。

鍬には、真っ直ぐな柄の付く直柄鍬と曲がった柄の付く曲柄鍬がある。また、刃部の形態から平鍬と又鍬に分かれる。さらに、平鍬の身部幅から広鍬と狭鍬に分かれる。『木器集成図録　近畿原始編（解説）』に従い、身部幅15㎝ 以下を狭鍬として扱う。直柄鍬で、身部幅が全長より大きくなるものは横鍬と呼ぶ。

身部の確認できる鍬は、17点出土した。その内、直柄鍬は、未成品とみられる106－２を含め７点で、すべて平鍬である。105－１～３・106－２は広鍬、105－４は狭鍬である。広鍬は柄孔隆起が顕著であり、狭鍬は緩やかな隆起を示す。その形態には、半形を基調とするもの（105－１から）と三角形を呈するもの（106－２）がある。柄孔は円形で、表面から裏面で刃先に向い傾く。105－１・３には、刃部に段がある。105－３には穿孔が２つあり、泥除装着孔と思われる。当遺跡では、泥除の出土は確認されていないが、その使用は想定される。横鍬とした106－１は、柾目の横木取りである。

泥　除

曲柄鍬は、10点出土している。刃部形態から、曲柄平鍬（111－１）と曲柄又鍬（107－１、108－１、109－１、110－１・３・４）がある。111－１は、身部はやや下膨れとなり、身部と軸部の断面形はともに蒲鉾形を呈する。軸部後面側上端部に、Ｕ字状の溝を横方向に刻む。曲柄又鍬は、刃部最大幅が下端付近で下膨れとなる。中央の切り込みが方形になるもの（108－１）と、剣先形になるもの（107－１・109－１）に分かれる。両者ともに、刃部の前面に抉りが入る。軸部後面側上端部の作りは、曲柄平鍬と同じであるが、溝が浅く幅広に入る。110－１は、上端を段状に削り出した簡略な形態である。軸部断面形は、108－１が台形となる以外は、蒲鉾形を呈する。曲柄は、５点確認され、芯持ち材を加工している。握り部と台部の接点に段があるもの（113－５・114－１）、台部の頭部に一段加工されるもの（114－１・２）がある。114－２・３には緊縛痕が確認できる。113－６は工具（鉄斧柄）の可能性が残る。

鋤は、又鋤（112－２）が１点出土した。身部のみの出土であり、一木鋤か組み合わせ鋤になるのかは不明である。鋤柄は、把手部になるとみられる112－１が出土した。

【収穫具】臼・杵・横鍬が出土した。

臼

臼（115－１）は、高さ21.2㎝、推定の口径は23㎝、底径は22㎝ を測る。把手状の方形の凹みを持ち、口縁部は緩やかに外傾する。

杵は、竪杵（115－３）と横杵（115－２）が出土した。115－３は、搗部端部に最大幅を持ち、握部に向かって細くなる。搗部と握部の境は不明瞭である。搗部端部は、一端が丸く、一端は平坦であり、両端の形状が異なる。115－２は、柄孔を持つ組み合わせ式の横杵である。搗部は、平坦で内側に傾斜している。着柄角度は70度を測りやや急角度である。

横鍬は、身部が円筒状を呈し、先端は平坦で、なだらかな肩部を持つ。身部と柄部の境は明瞭で、柄部先端には、削り出されたグリップが付く。

【その他】田下駄が出土した。

足板・横木・枠材・枠木の部材を四角に組む方形枠付き田下駄とみられる。116－１～３には、方形孔がほぼ等間隔に認められる。方形孔は、横木を挿入するためのものと考えられ、116－１～３は横木を固定する枠木と考えられる。方形孔は長方形と正方形があり、116－１には、横木が遺存している。116－１・２は、断面形が丸みを帯びた台形であるのに対し、116－３は三角形を呈する。116－３は、全体の仕上げが丁寧な作りであり、棚部材など他の部材の可能性がある。

工　具（第117図）

工具としたものには、鉄斧柄と利器柄がある。両者とも推定の域を出ない。

117－１・２は、孔に板状鉄斧を装着する鉄斧柄と考えられる。装着孔は、長方形で斜めに掘り込まれている。装着孔部分は、幅広に作り出され、銚床のような形態を示す。117－１は、柄の装着孔側が欠損しているが、柄が全体的に細く、鉄斧柄の機能を果たすか疑問視される。

利器柄には小刀や鎌などが装着されたものとして、117－３・４がある。117－３は方形の凹み、117－４は長方形の孔が、装着孔と想定される。

紡織具（第118・119図）

糸を紡ぎ、糸を巻き取り、布を織る道具である。しかし、その識別は難しい。糸を巻き取り、保持する道具として糸巻き、布を織る道具として織機が出土した。糸を紡ぐ道具として出土例の多い紡錘車は、確認されていない。

【糸巻き】綛かけ（舞羽）と呼ばれる糸巻き具の部材が出土した。

118－１・２は、板目の杉材で３～６㎜ の穿孔がある。孔は、糸が巻き付く腕木を差し込むものとみられる。118－１・２は、綛かけの部材で、腕木を支える支え木と考えられる。同じく、支え木の一部とみられるものに112－３・４がある。また、部材名は判然としないが、その可能性があるものも多数出土している。

【織機】経（布）巻具・糸巻具・台などの部材が出土した。

118－５は、遺存する一端に有頭状の作り出しがあり、原始機の経（布）巻具の可能性がある。119－７は、端部がグリップ状に削り出されている。高機の糸巻が考えられる。横鍬などの柄に類似するが、杉材を丁寧に加工していることから、紡織具として扱った。119－８は、方形の差し込み孔がある。織機の基台部とみられる。

原始機

高　機

容　器（第120～124図）

出土した容器は、製作技法から、刳物・指物・曲物・挽物に分類される。

【刳物】材を刳り貫いて作られた容器である。槽が出土した。

側面が緩やかに立ち上がる容器を槽と呼称する。整の分離は行っていない。２脚付（120－１）、４脚付（120－２・121－１）、無脚（121－２～４）がある。120－１は、脚がアーム状に刳り貫かれ、器部側面が伸びやかなに立ち上がる。全体的に薄い作りで、洗練された印象を持つ。非日常的な場面での、使用が想定される遺物である。ここでは容器として扱ったが、家具案・台または祭祀具としての機能が考えられる。120－１、121－１・４には、再加工が認められる。

【指物】板を組み合わせて作られた容器である。組結合箱、四方転びの箱が出土した。

四方転びの箱

「四方転びの箱」は、指物技術上の用語として使われる。4枚の側板が四方に傾斜して組で結合し、四角錐台の形状をなすものである。箱と呼称しているが、底板の有無は不明である。122－1は、四方転びの箱の側板と考えられる。台形を呈し、短軸両端は、内面側に削ぎ落とされ、各3つの孔が並ぶ。内面側中央上寄りに、U字状の溝が1条入る。

組結合箱の側板として122－2・3、底板として122－4・5、123－1がある。しかし、いずれも部材のため平面形態などは不明である。122－3は、台形の板材で、長楕円形孔が3つある。端部に切り込みが入り、全体に緩い湾曲を持ち、他の部材の可能性が考えられる。

【曲物】薄い材を円～楕形に曲げ、底を取り付けた容器である。

漆

123－2は、15.7×12.5cmの隅丸方形で、厚さ1.1cmを測る。ほぼ中央に、幅8㎜のU字形溝が径8cmの円を描く。溝周辺には漆が厚く堆積する。123－2は、側板を溝に差し込み、漆を接着剤として用いた曲物の底板ではないかと考えられる。

先に指物底板としたもの（122－4・5、123－1）には、曲物の底板としてよいものが含まれる。

【挽物】ロクロで挽いて作った容器である。ロクロ挽きの痕跡が確認されるものに、不明品とした130－6がある。竪木取りで、瓶形の形状を呈するため、ここで取り上げる。

123－4は、精緻な作りである。差し込み式の容器把手と考えられる。124－3は、分割材を横木取りで利用している。筒形容器の脚と考えられる。123－4・124－3は、器部分は不明であるが、

青銅器模倣

青銅器模倣の容器の可能性がある（注3）。

家　具（第123図）

椅子・台がある。椅子は、人間が座るもの、台は物品を乗せるものとした。台には案や机も含める。123－3は、一木で作られた刳物の椅子で、全体に厚い作りである。座板は周縁部一角が遺存し、方形になるとみられる。中央が窪む。脚部は台形で、座板の長軸方向に平行に作り出される。123－5は、台の脚になる。先に記したが、120－1・121－1も台になる可能性がある。

作業用具（第124図）

何らかの作業に用いた道具を総称した。作業台がある。124－1は、高さ10.7cmで、重心が安定している。作業面とみられる上面には、窪んだ使用痕がある。鑢などの叩き台などが考えられる。124－2は、未成品で炭化した樹皮が残る。全体の形状や括れ、木取りの特徴が124－1に類似するため、作業台の未成品とした。

武 器 具（第125～128図）

武器関係遺物を総称する。弓が出土した。弩機の用途も考えられる。

弓弦形態

弓は、再加工されたものも含め18点出土したが、完形品は125－2の1点のみである。材はイヌガヤで、芯持ち材を削り出している。126－1・127－3は、樹皮が残る。127－1・7、128－5は一部炭化、127－7・123－1は漆が付着する。弓弦の形態は、丁寧に全面の面取りをして円形に近い形で作り出すもの（125－1・2）、一面のみ面取りせず平坦に残すもの（126－1・2）、全面の面取り後2面をさらに強調するもの（125－2・126－3～5）、2面のみ面取りし先端を凸状に作り出すもの（127－1～3）、加工はされているが不明瞭なもの（128－1・2）がある。その他の弓は、欠損や再加工されており弓弦の形態は不明である。125－2は、両端弓弦の形態が異なり、弓弦が時期差などを示していないことが解る。

祭 祀 具（第129図）

儀礼やまつりなど、非日常の行いに使われた道具である。形代とその他赤彩された板材などが出土した。

【形代】本物に似せて作った各種木製品である。武器形とそれ以外がある。

武器形は、槍形2点（129－1・2）がある。129－1は、柄端部がソケット凸状に作り出され、差し込み使用したことが解る。武器具とした弓は、祭祀具武器形の可能性が高い。

他に、舟形129－3、不明形代129－4などがある。

【その他】赤彩された板部材が2点（129－6・7）出土した。2点共に、厚さ5㎜と薄い。129－7は、1つ孔があり、端部が細く加工されている。矢羽根の可能性がある（注4）。　矢　羽　根

楽　器（第129図）

129－5は、琴の琴柱と考えられる。台形で、厚さ5㎜と薄い。琴身の可能性のある遺物として136－3があげられる。しかし、十分な根拠はない。

建築部材（第131～134図）

家屋や倉庫、門などの建物の部材である。梯子・構造材などがある。

【梯子】高い所へ寄せかけて登る道具である。3点出土した。

131－3・5は丸太材を、131－4は半割丸太材を加工した梯子である。131－5は、上面平坦な足掛部を削り込む簡略な作りである。131－3・4は、足掛部は上面を平坦にして残し、その他の平坦部は板状に加工する。足掛部は台形状を呈する。131－3は、2mを超える長さで遺存する。131－4は、寄せかけた上端部凸状の加工が遺存する。

【構造材】梯子以外の建築部材を総称する。主に垂直方向の建物軸構造材の柱や、水平方向の構造材の横架材などとみられる。芯持ち丸太材で先端を加工するものは杭材、板状の部材は不明品板状として別途記載した。

構造材には、断面形が方形を基調とするもの（132－1～7・133－1～3）と、円形を基調とするもの（133－4～6・134－1）がある。133－6が芯持ち削り出しである以外は、分割材である。端部の加工は、削ぎ落としているもの（132－5・6、133－1～4）、丸く加工した部材（133－6）などがある。破損しているもの、炭化した部材が目立つ。

杭　材（第134図）

打ち込むために、先端を加工した棒状品である。ここでは、芯持ち丸太材で先端が尖り、明らかに杭と識別できるもの（134－2～7）をあげる。杭材の直径は、4cmと6cm前後である。

不 明 品（第129～131・135～137図）

不明品は、用途を主眼とした上記の分類項目に、現段階で分類できないものである。形状から棒状・板状・その他に分ける。

【棒状】130－7・8、131－1・2がある。131－1は、針葉樹の分割材で、先端に切り込みが入る。祭祀具の可能性がある。131－2は、精良な作りで、断面形態が楕円～円にスムーズに変化する。112－4とともに掘り棒状木製品の可能性が指摘された（注5）

【板状】小型の129－8～11、大型の135－1～3、136－1～3、137－1～3がある。129－8・10は円形の貫通孔、135－2、137－2・3は方形の貫通孔、137－1は方形の凹みが付く。135－1、136－3、137－1～3は、建築部材の可能性が高い。

【その他】130－1～6がある。130－1は、方形孔が縦・横に貫通する。全体像は不明だが、容器の可能性がある(注6)。ロクロ挽き痕が明瞭な130－6は、矢先に付す鏑の形状に似る(注7)。

鏑

他に、加工痕を確認し登録した遺物は、170点を数える。

2　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺物には、土器・木製品・石製品がある。

(1)　土　　器（第138～150図）

奈良・平安時代の土器は、須恵器・土師器がある。土師器は製作技法により、ロクロを使うものと使わないものがある。さらに、土師器の中で、内面または内外面に黒色処理を施したものがある。黒色処理された土師器は、黒色土器と呼称し分類を行う。土器の器種には、坏類の食膳具（供膳具）、鉢・甕などの煮炊具、壺・甕などの貯蔵具がある。

食膳具・煮炊具・貯蔵具

①主な遺構の遺物　以下、出土状況にまとまりのみられた遺物について説明を行う。

ＳＧ106北側出土遺物（第14図）

ＳＧ106の北側と南側に遺物のまとまりがある。河川であるが浅く堆積層は1層であることから一括遺物として扱う。ＳＧ106北側では、底部切り離しがヘラ切りで、箱形になる須恵器無台坏が出土した。口径は14cm前後、底径6～7cm、器高は4～5cmを測る。共伴遺物は箱形で内底面が広い須恵器有台坏、有台坏とセットになる須恵器蓋、丸底で体部にケズリが施される土師器坏、底部に木葉痕が付き、体部が丸く短い頸部がくの字状に開く土師器鉢などがある。

ＳＧ106南側出土遺物（第15図）

須恵器有台坏、土師器無台坏、黒色土器有台坏が出土した。138－8は、器高が低く皿形となる。底部は回転糸切りで墨書「新」があり、内面は墨が付着し摩滅している。転用硯である。土師器無台坏は、ロクロ整形で、口径12～13cm、底径が5cm前後、器高は4.5cm前後である。底部は回転糸切りで、体部が外傾して開く。黒色土器有台坏は、高台が低く、体部は外傾する。

ＳＤ355出土遺物（第52図）

須恵器無台坏・有台坏・壺、土師器鉢・甕、黒色土器坏類が出土した。須恵器無台坏は、口径14cm前後、底径5.5～6cm、器高3.5～4.5cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りと糸切りがあるが、両者の器形は類似する。須恵器有台坏は、寸法は無台坏と類似し、体部がやや内湾して立ち上がり、口縁部がつまみ出される特徴を有す。須恵器壺は、ツマミが扁平なリング状となる。土師器甕（148－11）は、頸部が短く外傾し、体部下半にケズリが施される。土師器鉢148－10は、器形・寸法が、底部木葉痕のある139－7と類似するが底部に網代痕がある。底部の木葉痕と網代痕は互換性が認められる。黒色土器坏類は破片資料であるが、低い高台、外傾する体部などが解る。「福」4点、「川？」1点、合計5点の墨書土器が出土した。

ＳＥ503出土遺物（第51図）

Ａ．Ｄ．９１５

遺物は、「A.D.915年に十和田カルデラより噴出したＴｏ－ａ」（3層）の下位人為的埋土層からの出土である。須恵器無台坏・壺、土師器無台坏・甕・小型土器、黒色土器有台坏、砥石が出土した。須恵器無台坏は、1点のみで破片資料である。底部切り離しは回転糸切りで、底径6cmを測る。須恵器壺は、焼成があまく灰白色で軟質の仕上がりである。土師器無台坏は、底部切り離しは回転糸切りで、口径13～14cm、底径6cm前後、器高は5cm前後を測る。黒色土器有台坏は、口径15cm前後、底径6cm、器高6cmと大型である。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、底部切り離しは回転糸切りである。146－3・11体部に墨書「川」、146－1底部に墨書「一」？、146－13底部に墨書「□」がある。146－7は、口縁部に打ち欠きの痕跡がある。これらの土器は、小型土器、砥石中砥と共に一括廃棄されたと考えられる。

ＳＥ344出土遺物（第48図）

遺物は、人為的埋土層下位層からの出土である。須恵器無台坏・壺、土師器無台坏・有台坏、黒色土器有台坏などが出土した。須恵器無台坏は、底部切り離しは回転糸切りで、底径6cmを測る。土師器無台坏は、底部切り離しは回転糸切りで、口径12～14cm、底径4.5～6cm前後、器高は4～5cm前後を測る。143－9は「㊥」、143－3は体部に墨書「□」がある。土師器有台坏は、口径15.5cm、底径7.5cm前後、器高は6cm前後を測る。底部は菊花状の工具痕が残る。黒色土器有台坏は、共伴する土師有台坏に器形は類似するが、寸法が一回り小型である。

ＳＫ293出土遺物（第47図）

土師器無台坏が出土した。器形・寸法ともにＳＥ344出土の土師器無台坏に類似する。

②墨書土器（第164・165・168図）

墨書土器は23点出土した。器種と墨書部位の内訳は、須恵器無台坏底部8点、須恵器無台坏体部1点、須恵器有台坏底部6点、須恵器有台坏体部1点、須恵器壺外面1点、土師器無台坏底部1点、土師器無台坏体部3点、土師器有台坏底部1点、土師器有台坏体部1点である。文字種は「福」「川」「成」「成□」「今世」「吉」「新」「田」「川」などがある。「福」が11点以上と最も多い。148－1、149－5、150－2・3は、同筆と考えられる。底部切り離しがヘラ切りである139－8・147－9は、底部左寄りに墨書される。土器の時期的な変遷から整理すると、墨書土器は文字や墨書部位に、須恵器底部左寄り小文字傾向→須恵器底部中央文字大型化→土師器体部の変遷をたどるとみられる。

「福」

墨書土器は、溝・井戸・土坑・河川からの出土である。特にＳＤ355周辺、ＳＥ503、ＳＫ344周辺に集中する。墨書土器の集中する地点は、遺物がまとまって出土する地点でもある。「福」はＳＤ355周辺、「川」はＳＥ503からの出土に限定される。

(2)　木　製　品

箆状の不明品2点（144－4・5）、柱材がある。ＳＫ337から出土した144－4・5は、軸部が厚く、未成品の可能性が高い。柱材は、Ａ地区10・11－33～35GおよびＢ地区29・30－45～48Gの柱穴から出土した。柱材は垂直に遺存しており、掘え付けられた状態で腐食したと考えられる。

(3)　石　製　品

砥石・不明品がある。147－4は中砥で、4面の使用がある。144－3は、約1/2部分が被熱した痕跡を示す。使用痕跡は無く用途は不明である。

3　中　　世

中世の遺物は、輸入磁器・国産陶器・木製品・金属製品・石製品がある。

(1)　輸入磁器（第153図）

輸入磁器は、青磁・白磁・青花がある。器種は、青磁碗・後花皿、白磁皿、青花碗・皿であ

龍泉窯系・景徳鎮窯系・瀞州窯系

る。青磁は龍泉窯系、同安窯系、青花は、景徳鎮、瀞州窯系の製品とみられる。輸入磁器は、全体的に磨滅が著しい。

（2） 陶　器（第153図）

陶器は、瀬戸美濃・須恵器系陶器・瓷器系陶器がある。瀬戸美濃は、卸皿・内禿皿・折縁皿・緑釉小皿・端反皿・碗・瓶類、志野丸皿・菊花皿などがある。須恵器系陶器は甕・壺・擂鉢・瓷器系陶器は甕・擂鉢がある。須恵器系陶器破片数が壺・甕と擂鉢両方で、瓷器系陶器を凌ぐ。

（3） 木 製 品（第151・152図）

木製品は、笹塔婆5点、板状木製品1点がある。いずれもＳＥ110Ｆ6からの出土である。

笹塔婆

笹塔婆は、上端五輪塔形を呈し、下端は151－1以外破損している。151－1は、釘孔状の3つの孔がある。152－1～4は「[illegible]（空風火水地）南無阿弥陀仏」が、151－1は、梵字と蓮の絵が墨で書かれている。

（4） そ の 他（第160図）

石製品・土製品がある。石製品には、石鉢・砥石・サイコロ形石製品・円盤状石製品がある。土製品は、穿孔のある球形土製品がある。出土遺構に時間幅があり、時期の特定はできない。近世以降の可能性も考えられる。

4 近　世

近世の遺物は、陶器・磁器・金属製品がある。溝からの出土がほとんどである。

（1） 陶　器（第155～159図　表9）

陶器には、肥前系・瀬戸美濃・大堀相馬・不明がある。肥前系は、碗・皿・鉢・甕・擂鉢など、瀬戸美濃は擂鉢、大堀相馬は土瓶、不明は擂鉢・鉢・土瓶・火鉢などの器種がある。擂鉢の胎土は黄褐色土を基調とするもＡ、灰色砂質土を基調とするものＢ、明赤灰色土を基調とするものＣ、黄灰色土を基調とするものＤ、Ａに白色粒土が混入するものＥ、その他に分けられる。

（2）磁　器（表9）

陶器には、肥前系・瀬戸美濃・不明がある。肥前系は、碗・皿・水滴・仏飯器・香炉・徳利等、瀬戸美濃は碗・皿、不明は碗・皿の器種がある。

（3）金 属 製 品（第160図）

金属製品は、煙管160－3～5・切羽160－7・古銭寛永通宝160－8などがある。

Ⅴ ま と め

1 各時代の様相と年代観

今回の調査では、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の遺構と遺物が検出された。

弥生時代

土器・石器が出土したが、遺構は検出されていない。遺物は河川からの出土であり、流れ込

みと判断される。土器は、2条1描を基本とする平行沈線文が施されるもの、縄文が施されるものがある。これらの土器は、境田Ｄ遺跡に類例を求めることができる。東北地方南半で、弥生時代中期末葉にあたる桜井式土器に併行すると考えられる。

桜井式

古墳時代

南から北に緩やかに蛇行して流れる河川が、190mに亘り検出された。河川には1ｍ前後の厚さで砂層が堆積し、その下位層から土師器・木製品が多量に出土した。遺物は砂層にパックされた状態で、遺存状態が良い。土師器と木製品は、人為的な投げ込みか、災害的な要因かは判然としない。災害的な要因を示唆するものとして、木製品に建築部材が含まれる点や被熱したものが多い点などが挙げられる。一方、弓とヒョウタンが隣接して出土した点や、曲柄又鍬が2枚重なって出土した点、土器の遺存状態が極めて良好な点など、人為的な投棄が指摘できる状況もある。河川に土師器と木製品が多量にあり、その河川岡岸が安定した微高地であるにもかかわらず、微高地には居住空間・生産空間は営まれていない。居住空間・生産空間は、調査区外に存在したことが想定できる。

遺物は、河川覆土Ｆ4を錐層としてその上下層で取り上げているが、層位間の接合が多い。また、遺物の分布は、5地点にその集中があるが、遺物相に大きな違いを見出すことはできない。遺物は、河川出土遺物一括として扱い分類した。

土器は、器台・高坏・壺・甕・小型土器がある。各器種は形態的特徴を中心に分類を行った（第161・162図）。遺跡の南方0.5㎞にある今塚遺跡ＳＴ702出土土器に当遺跡の土器と共通性が見出せる。今塚遺跡ＳＴ702出土土器は、古墳時前期後半の基準資料と理解され、辻編年Ⅲ－2～3と（山形埋文1994）、漆町編年9罪に対応する（阿部他2004）との考え方が示されている。今塚遺跡ＳＴ702からは、当遺跡の分類に沿えば次の遺物が出土している。脚が八の字に開き貫通孔を持たない器台Ａ2類、中実棒状の脚を持ち坏部が屈曲する高坏Ｃ2類、高坏Ｃ2類と同様の脚で坏部が屈曲しない高坏Ｃ3類、括れが器高の中心にありミガキが丁寧に施される小型丸底鉢Ａ2類、口縁部下端に括れを持つ鉢Ｃ1類、口縁部下端に括れを持たない鉢Ｂ1類、底部穿孔のある鉢Ｆ1類、壺Ａ1・Ｇ2類、甕Ｇ2・Ｃ・Ｅ類、小型土器がある。また、当遺跡に無いものは、八の字形に開いた脚部に屈曲のある坏部が付く高坏（今塚高坏Ａ1ａ類）、体部が球形となり頸部が長く有段口縁となる壺（今塚堆Ｅ2類）である。今塚高坏Ａ1ａ類は、坏部に比べ脚部が長く、全体に対する脚部の割合が高い。脚上部が一部中実状になる。今塚遺跡ＳＴ702では、今塚高坏Ａ1ａ類が中実棒状脚と共伴関係にある。当遺跡に今塚高坏Ａ1ａ類が確認できないことは、時期差を示すのか、組成として欠落して良い遺物であることを語るのか、検討できる資料の増加を待ちたい。なお、今塚遺跡ＳＴ7では、柱状中空高坏脚部が屈曲した高坏坏部とくの字口縁甕と共伴関係にある。今塚堆Ｅ2類は祭祀性の強い特殊な土器であるが、当遺跡では出土していない。

今塚遺跡ＳＴ702出土土器

当遺跡は、器台・高坏・鉢・壺・甕・小型土器の各器種で、今塚遺跡ＳＴ702出土遺物と共通性が見出せる。その反面、明らかに後続するとみられる資料がある。器台Ｂは、貫通孔・透孔共に無く、脚上部が柱状になる。鉢Ａ3は、ミガキが省略され丸底風に底部が削り出される。甕Ｆ1は丸底、甕Ｆ2は厚底で、頸部は短く外反し長胴形になる。

以上の点から、当遺跡は、今塚遺跡ＳＴ702と併行する時期から後続する時期と判断され、河

川資料にも関わらず時間幅はある程度限られることが解る。甕F類には中期の様相が読み取れるが、大半は古墳時代前期後半の資料と考えられる。

古墳時代前期後半

これらの土器と共伴して出土した多量の木製品は、古墳時代前期後半の所産と理解する。山形県内で古墳時代の木製品がまとまって出土した例としては、これまで国指定史跡山形市嶋遺跡・天童市西沼田遺跡が知られていたが、両遺跡共に古墳時代後期の資料である。古墳時代前期の木製品は、近年、当遺跡のほか、天童市板橋1遺跡、同高擶1遺跡、山形市馬洗場B遺跡などで出土しており、資料が急増している。木製品の器種は多用であり、生活関連品から生産関連品、祭祀関連品に及ぶ。土器が容器類に限定されるのに対し、木製品の持つ情報は多い。

木製品320点

今回の調査では、320点の木製品が出土した。その内訳は、農具42点、工具4点、紡織具12点、容器15点、家具2点、作業用具2点、武器具19点、祭祀具6点、楽器1点、建築部材17点、杭材6点、不明品194点である。

奈良・平安時代

標高96.6m以上の微高地に建物のまとまりがある。建物は、A地区南中央（建物群1）、A地区西側（建物群2）、B地区中央（建物群3）、B地区南地区（建物群4）の4ヶ所に集中する。建物群1と2の間は400m、建物群2と3の間および建物群3と4の間は600mを測る。各々の建物が1単位になっていたものと考えられる。A地区の掘立柱建物の南北軸はA（N－2°－E～N－4°－W）B（N－14°－W）・C（N－8°－E）群、B・C地区の掘立柱建物の南北軸は、a（N－2～3°－E）・b（N－5～6°－E）・c（N－10°－E）群が認められる。建物の直接の重複関係からa→c→bの建物の変遷が考えられる。その他の関係は、重複関係がなく判然としない。

建物群1は、東西40mを測る溝の区画施設を持つ。区画施設のおおよそ1/2が調査されている。区画施設の主体となるのは、南北軸B群のSB540・541・542である。母屋となるSB540とSB541は重複関係にあり、両建物の北側にSA166が塀の機能を果たす。建物群4は、そのほぼ全容が調査され、掘立柱建物・井戸・土坑・溝から構成されることが解る。建物群4は、40m四方の1600㎡の敷地に展開する。建物はSB248とSB368→SB237とSB287→SB286の3時期がみられる。建物群4は浅いSG213が北西を取り囲み、建物の南東面に井戸が構築される。建物東側の浅い溝SD355周辺から、「福」の墨書土器がまとまって出土している。建物群5ヶ所

建物群4の北方約400mにC地区SE503がある。SE503を南限の井戸として、北方に建物群5が展開するものと予想される。建物群2・3は、未調査の高速道路ジャンクション緑地帯部分に伸びると予想される。未確定部分は多く、建物群2・3が連結する可能性も残される。

遺物は、河川・井戸・土坑から出土した。遺物のまとまりが認められるのは、SG106北側・SG106南側・SD355・SE503・SK344・SK293である。須恵器・土師器の坏類の出土資料に恵まれており、その比較により変遷を追うことができる。底部ヘラ切りの資料は、SG106北側およびSD355から出土している。SG106北側の出土資料は、SD355出土資料と比較すると、底径口径共に大きく箱形となる。SG106北側→SD355の変遷がたどれる。SD355は、底部回転糸切りの須恵器坏類が主体で須恵器壺・土師器甕類が共伴する。SK293出土資料は、土師器無台坏の良好なセットである。口径・器高はSD355に類似するが、底径の小型化が進み、体部は外反し扁平な形態である。SD355→SK293の変遷をたどる。SE503の坏類は、土師器が主体となり黒色土器の割合が増す。無台坏は、SD355出土資料に比べ、口径・底径は小さく器高が高くなる。SD355→SE503の変遷がたどれる。SK344の坏類は、SE503に比べ底部がさらに小型化し、体部が外反する。底部に菊花状のナデツケのある土師器有台坏が共伴する。

出土遺物の相対的な関係は、SG106北側→SD355→SK293→SE503→SK344と考えられる。SD355の坏類・壺の形態は、寒河江市平野山窯跡群第12地点遺跡第2次調査SQ33窯跡出土資料（山形堀文1998）に類似し、9世紀中葉の年代観が考えられる。SG106北側はそれに先行し9世紀前半とみる。SE503の遺物は、「A.D.915年に十和田カルデラより噴出したTo－a」（3層）に覆われた人為埋土層から出土している。SE503出土遺物は、3層の堆積時期より時期的に下がることは無い。SK344出土資料は、天童市中袋遺跡SK1出土資料、境田C'遺跡SX534出土資料にその類例が認められ、10世紀初頭の時期が考えられる。SK344に先行するSK293・SE503出土資料は、9世紀後半代の資料といえる。

平野山窯跡群第12地点SQ33

今回の調査では、9世紀前半～10世紀初頭の中で営まれた、微高地上に点在する集落の様子が明らかになった。一辺40m、約1600㎡の敷地を1単位とした建物群が5ヶ所以上あることが想定される。各々の建物群では、母屋的な建物、付属屋的な建物があり、2回以上の立て替えが行われている。

一辺40m約1600㎡の敷地

中　世

A地区に、東西幅36mを測る溝の区画施設がある。区画施設内部には、井戸と柱列が検出され、井戸からは笹塔婆が5点出土した。B地区では中世の遺物が比較的まとまって出土する溝が検出されているが時期は特定できない。建物は検出されていない。

幅36mの区画

遺物は、輸入磁器、国産陶器が出土した（表8）。153－2は同安窯系青磁椀Ⅰ－1類（太宰府市教委2000）、153－5は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1a類、153－6は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－3a類で、12世紀後半の時期と考えられる。153－4は龍泉窯系青磁椀上田E類（上田1982）、153－7は龍泉窯系青磁椀Ⅳ類（太宰府市教委2000）で、14世紀～15世紀前半の時期が考えられる。この他に、美濃・瀬戸大窯1段階（藤澤2002）の153－21・23、同4段階の153－17・27～30が出土している。前者に伴うものとして青花皿小野皿B1群（小野1982）153－10がある。後者に伴うものとして青花皿小野皿E群（小野1982）153－8・12・13・15がある。遺物の年代は大きく12世紀後半、14世紀後半～15世紀前半、15世紀後半～16世紀前半、16世紀後半～17世紀のまとまりが認められる。13世紀代の遺物が欠落している。

近　世

当期の遺物は溝や落ち込みからまとまって出土するが、古代～近現代の遺物が共伴し（表7）、遺構が構築された時期は特定できない。遺物は、肥前系磁器椀・皿、唐津椀・皿などのほか、在地産とみられる陶器が多数出土している（表9）。擂鉢が多数出土しており、近隣に生活の場があったことが解る。

多数の擂鉢

2　遺跡の変遷と地域の中での位置づけ

太平洋側と日本海側の交差点

近年の発掘調査により、山形盆地の古墳時代集落の様相が明らかになってきている（第175図）。北から倉津川・押切川流域にまとまる一群、立谷川北岸にまとまる一群、馬見ケ崎川と立

谷川間にまとまる一群、馬見ヶ崎川と須川間にまとまる一群、盆地南側須川西岸にまとまる一群がある。各々の集落群は、各河川と深く関わり成立・展開したものと考えられる。これらを基盤とする古墳が、古墳前期には東西の丘陵部に、中期以降はより集落に近い位置に造営されている。当遺跡の約4km離れた南西側丘陵には、4世紀後半の所産とする山辺町大塚天神古墳がある。大塚天神古墳は、直径約51mの2段地築成の円墳で、埴輪を有する日本海側最北限の古墳と位置付けられる（山辺町教委2003）。大塚天神古墳の後方には、大塚天神古墳に先行する方墳の可能性がある要害古墳がある。これら山辺町域に展開する古墳群は、当遺跡を含む馬見ヶ崎川西岸の集落群との関わりがあるものと考えられる。以上、山形盆地における各集落群の消長や古墳との関わりはこれからの大きな課題である。

大塚天神古墳

当遺跡周辺は、縄文時代晩期には人々の動きが認められ、弥生時代には重要な遺跡が点在する地域でもある。この地域が、早くから遷地され、開拓されるには多くの理由があると思われる。その一つは、須川と馬見ヶ崎川（白川）水系の合流地点に位置することが挙げられる。馬見ヶ崎川扇状地外縁帯の肥沃な地であると同時に、馬見ヶ崎川上流は、太平洋側に抜けるルートでもある。一方須川は、置賜盆地（さらに南方も含む）と日本海につながる最上川と、1.5km北方で合流する。太平洋側と日本海側の人・物・情報の交差点であったと思われる。

調査で出土した古墳時代の土師器に、他地域との関係が認められる資料がある。器台A1類、高坏A1類、甕A類は、東海地方に、甕B類は、北陸地方に系譜を求められる。器台A1類は、口縁部が直線的で、脚部が大きく外反する。高坏A1類は、脚部が大きく外反し、坏部が椀形となる。甕A類は台付甕で、台部接合後、接合面内外に粘土補充が行われている。粘土には多量の砂粒を混合させる。これらの特徴は、廻間式土器S字甕の台部成形に普遍的にみられる（注8）。この他、器台A1類・高坏A1類・甕A類は各々、廻間式土器編年廻間Ⅲ式3・4（愛知埋文1990）に、類似した資料がある。甕B類は、口唇部先端をつまみ上げ、狭い口縁帯を持つ。能登形甕（石川埋文1986）に類似する。ただし、畿内系の土器にも類似しており注意が必要である。櫛描波状文が肩部に施され、薄い作りの甕Ⅰは、搬入品の可能性が考えられる（注9）。

S字甕

木製品では、「東海系曲柄二又鍬」（樋上1993）と呼ばれる曲柄又鍬が出土した（注10）。東海系曲柄鍬は、各地域の首長層が、沖積低地の再開発を意図した際に、伊勢湾地方で発達した土木技術を必要とし、その技術を受容した証として、各地で出土する遺物と考えられている。仙台市中在家南遺跡、千葉県茂原市国府関遺跡に出土例がある。東海系曲柄鍬は、南関東との人的つながりがのなかで伊勢湾地方から東北南部に伝播したとみられている（樋上2000）。当遺跡の曲柄又鍬は、廻間Ⅲ～松河戸Ⅱ式併行期東海系曲柄二又鍬Ⅱ類で、洗練された形状である。東海系曲柄鍬の出土は、東海系の土器の存在とも一致する。これらの遺物は、当遺跡周辺が、早い時期から開発が計画され、技術の導入が要求されたことを物語る資料である。

東海系曲柄二又鍬

これらのやりとりの中で、在地化したもの、また当地域から発信したものもある。土器では、くの字状口縁甕の多様化や、今塚遺跡で出土した今塚高坏A1a類と当遺跡の高坏との関係などがその例となる可能性がある。それらの分析は、当地域の土器編年を組む上で欠かせない作業となろう。一括性の高い資料が増加しており、その中で当遺跡の分類も含め、再度評価が必要である。

開発

今塚遺跡周辺の遺跡

古墳時代中期以降断絶した当地域は、9世紀に入り集落が営まれる。当遺跡の中心部分の調査が行われていないという前提に立つが、南北に長い微高地上に、掘立柱建物主体の集落が展開する遺跡であることが解った。古墳時代同様に、今塚遺跡と密接な関係にあったものと考えられる。それは、存続時期をほぼ同じとする今塚遺跡の周辺の遺跡としての性格と考えられる。

埋没している方形館

明治21年の字切図（第173図）および昭和36年耕地整理以前の字切図（第174図）には、古代～近現代の遺物がまとまって出土したSD2・SD285が溝として、SD212は道路として記されている。これらの遺構は、どこまで遡れるかは不明であるが、近世から明治、耕地整理以前まで引き継がれてきた遺構であることは明らかである。SD2・212と平安時代の建物の軸線（A・B群）が一致するものがあり、古代の計画地割りが引き継がれていることも考えられる。また、第173図では、字藤治屋敷・字服部・字馬洗場・字高田の地割りが、東西南北に整然とした計画地割りであることが解る。その地割りが大きくなる部分が、高速道路ジャンクション緑地帯にある。今回の調査の対象外となった地区に、南辺50m、北辺30mの台形に濠が畑地を取り囲む部分がある。方形館としての平面形態をとり注目される。藤治屋敷は、炭焼藤太が炭を背負って宝沢から月山方面に商いにいく途中一休みした屋敷があり、藤太屋敷が藤治屋敷に変わったといわれる（大郷郷土研究会1988）。どこまで遡れるかは不明であるが、藤治屋敷の字名の由来になった屋敷の可能性が高い。服部は、「服部千軒」ともいわれ、布を生産する集落があったとの伝承が残る（大郷郷土研究会1988）。遺跡周辺には、念仏壇・馬洗場・的場・八幡前など中野城との関連が考えられる字名が残り、中野城が整備される段階にも何らかの手が加えられていることが解る。中世から近世の遺物は、これらと関連する考古学的な資料である。

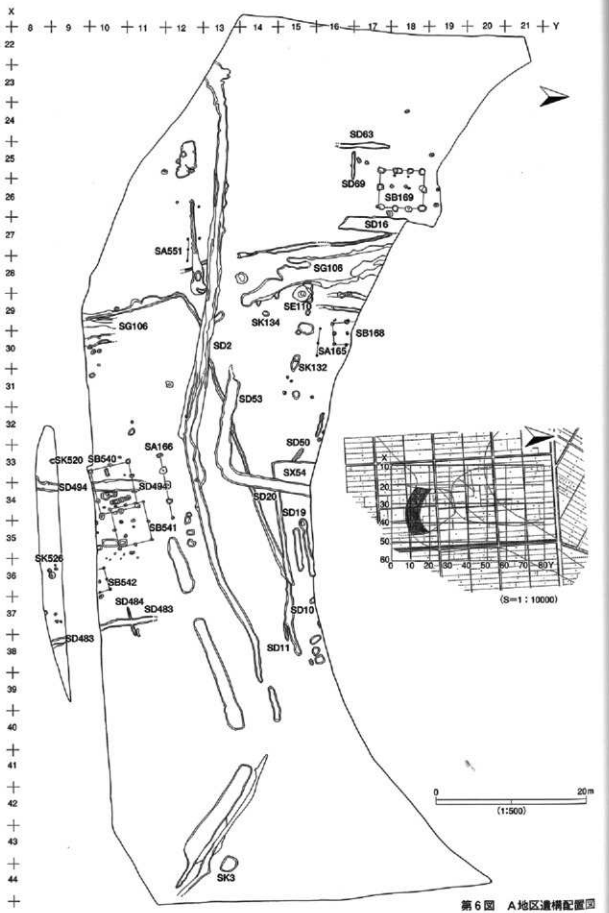
中野城

註

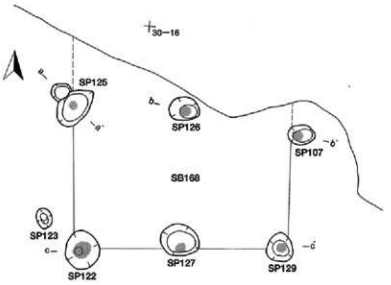
1）赤塚次郎氏のご教示による。
2）分類に際し、荒井格氏・竹田純子氏にご教示いただいた。
3）山田昌久氏のご教示による。
4）山田昌久氏のご教示による。
5）荒井格氏にご教示いただいた。
6）荒井格氏・山田昌久氏より鈴鳧の可能性をご教示いただいた。
7）山田昌久氏のご教示による。
8）赤塚次郎氏のご教示による。
9）川崎志乃氏に山陰の影響の可能性をご教示いただいた。
10）樋上昇氏の教示による。

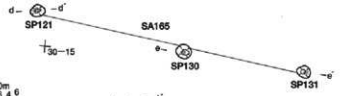
引用文献

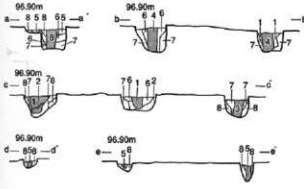
阿部明彦・水戸弘美　1999　「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』城柵官衙遺跡検討会
阿部明彦・吉田江美子　「出羽の土師器とその編年」と題し近刊予定
荒井格　1992　「東北地方の木製農耕具」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
石川県立埋蔵文化財センター　1986　『漆町遺跡Ⅰ』
上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
植松暁彦　2003　「今塚遺跡の再検討とその性格」『研究紀要』創刊号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
押切智紀　多田和弘　西田明日香　2003　「洪江遺跡検出の墓域について－主に近代墓に関する報告－」『研究紀要』創刊号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
大郷郷土研究会　1988　『大郷の地名をたずねて』
小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
柏倉亮吉他　1968　『嶋遺跡』『山形市史』別巻Ⅰ　山形市教育委員会
柏倉亮吉　1982　『第七章第三節　出羽国府の整備と郡郷制』『山形県史』第1巻　山形県
加藤稔　1996　「出羽南半の古代」『図説　山形県の歴史』河出書房新社
小林圭一　2001　「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』　第7巻第1号通巻31号　山形考古学会
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990　『堀間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1997　『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
財団法人長生郡市文化財センター　1993　『千葉県茂原市国府関遺跡群』(財)長生郡市文化財センター調査報告第15集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1994　『今塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1998　『平野山窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1999　『東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書（2）』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第68集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2001　『長衣遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第87集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2002　『洪江遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2002　『向河原遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第107集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2003　『向河原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第111集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2003　『向河原遺跡第5次調査説明資料』
仙台市教育委員会　2000　『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集
高桑弘美　2000　「服部遺跡・藤治屋敷遺跡調査報告－古墳時代の木製品を中心に－」『山形考古学会第54回研究大会資料』山形考古学会
高橋敏　2003　「最北の破鏡－鏡編分布から見た古墳出現期の動態（予察）－」『研究紀要』創刊号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
竹田純子　2002　「古墳時代における山形盆地の木製鍬について」『山形考古』　第7巻第2号通巻32号　山形考古学会
太宰府市教育委員会　2000　『大宰府条坊跡Ⅴ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集
辻秀人　1994　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その1　会津盆地－」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第26号　東北学院大学学術研究会
1995　「東北南部における古墳出現期の土器編年　その2」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第27号　東北学院大学学術研究会
奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始篇』
樋上昇　1993　「木製農耕具の一視点ナスビ形農耕具の出現から消滅まで」『考古学フォーラム』3
樋上昇　2000　「3～5世紀の地域間交流－東海系曲柄鍬の波及と展開」『日本考古学』第10号
藤澤良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
誉田慶信　1998　「中野城」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第2集（村山地域）　山形県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター　2000　『一般国道23号中勢道路（8Ⅰ区）建設工事に伴う六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)』三重県埋蔵文化財調査報告115－17
森田勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山形県教育委員会　1974　『埋蔵文化財包蔵地調査カード　山形市』
山形県教育委員会　1984　『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第76集
山形県教育委員会　1988　『鶴岡西部地区遺跡群　矢馳A遺跡　矢馳B遺跡　清水新田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第127集
山形県教育委員会　1991　『分布調査報告書（18）』山形県埋蔵文化財調査報告書第163集
山形県教育委員会　2000　『分布調査報告書（26）』山形県埋蔵文化財調査報告書第200集
山形県教育委員会　2001　『山形市埋蔵文化財調査年報平成5～11年度』
山辺町教育委員会　2003　『大塚天神古墳第4次調査概報』山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第12集



第6図　A地区遺構配置図

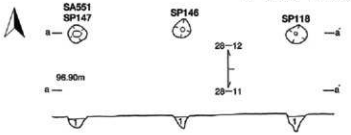






SB168土層注記

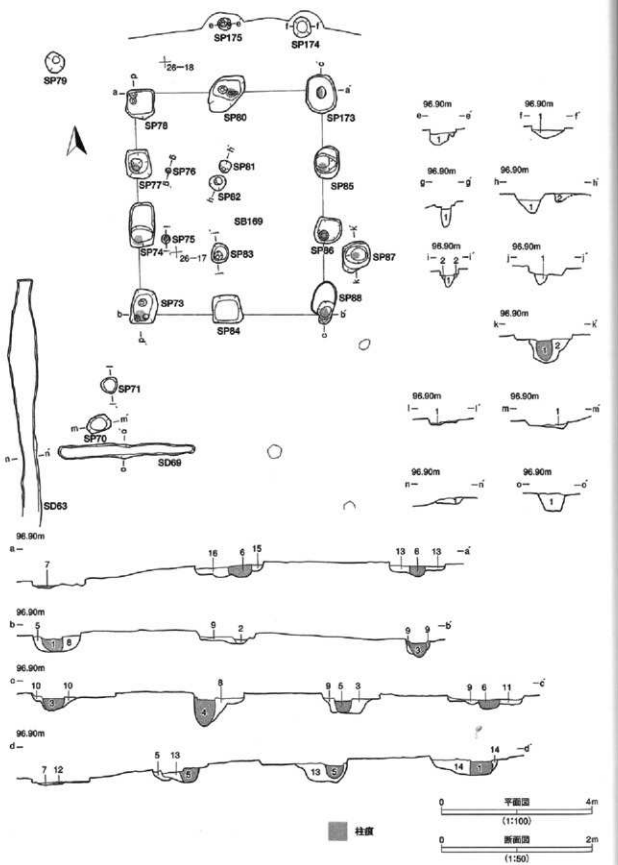
1	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	10YR5/2灰黄褐色を5%、酸化鉄を7%、10YR2/1黒色シルトを20%まだらに混入。
2	10YR2/1	黒色粘性シルト	10YR5/3にぶい黄褐色を筋状に10%含む。
3	10YR3/2	黒褐色粘性シルト	10YR5/3にぶい黄褐色を10%、10YR2/1黒色シルトをまだらに5%含む。
4	10YR2/1	黒色シルト	10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを斑降り状に40%含む。
5	10YR2/1	黒色シルト	10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに20%含む。
6	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに10%含む。
7	10YR4/2	灰黄褐色シルト	酸化鉄を5%、10YR2/1黒色シルトを5%まだらに含む。
8	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	



SA551土層注記　1　10YR2/3　黒褐色粘土　10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト点状に10%混入。

0　2m
(1:50)

第7図　遺構実測図　—SB168、SA551—



第8図　遺構実測図　—SB169—

SB169 (a—a′・b—b′・c—c′・d—d′) 土層注記

1	10YR3/2	黒褐色粘質シルト	10YR3/3暗褐色シルトをブロック状に約30%混入。
2	10YR2/2	黒褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に混入。
3	10YR2/1	黒色粘質シルト	10YR4/2灰黄褐色シルト粘質土をブロック状に約50%含む。
4	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土をブロック状・帯状に約10%、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトを帯状・点状に約15%含み、やわらかい。
5	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトを約45%、10YR2/1黒色粘土を約15%、7.5YR4/4褐色砂を粒状に少量含む。
6	10YR3/1	黒褐色シルト	10YR3/3暗褐色砂質シルトを斑状に細かく全体に混入。
7	10YR3/1	黒褐色粘土	やわらかい。
8	10YR3/4	暗褐色シルト	10YR3/2黒褐色粘土を約35%混入。
9	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に約50%混入。
10	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色粘土を帯状に約20%混入。
11	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色・5YR4/6赤褐色の縦縞の粘土を細い帯状に約20%、10YR2/1黒色粘土を15%含む。
12	10YR1.7/1	黒色粘土	やわらかい。
13	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR3/3暗褐色粘質シルトを約30%混入。
14	10YR1.7/1	黒色シルト	10YR3/2黒褐色シルトをブロック状・帯状に約30%、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に約15%混入。固くしまる。
15	10YR3/3	暗褐色シルト	10YR1.7/1黒色粘土を約15%混入、やわらかい。
16	10YR3/3	暗褐色砂	

SP70 (m—m′) 土層注記

1	10YR2/2	黒褐色シルト

SP71 (l—l′) 土層注記

1	10YR2/3	黒褐色砂質シルト

SP75 (i—i′) 土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土　やわらかい。
2	10YR3/2	黒褐色シルト

SP76 (g—g′) 土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土　やわらかい。

SP81.82 (h—k′) 土層注記

1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR3/1黒褐色粘土をブロック状に約10%含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト質砂	

SP83 (j—j′) 土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土　10YR3/2黒褐色粘土を点状に小量含む。

SP87 (k—k′) 土層注記

1	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR4/1褐灰色シルト質粘土をブロック状に約7%混入、やわらかい。
2	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	

SP174 (f—f′) 土層注記

1	10YR2/1	黒色シルト　固くしまる。

SP175 (e—e′) 土層注記

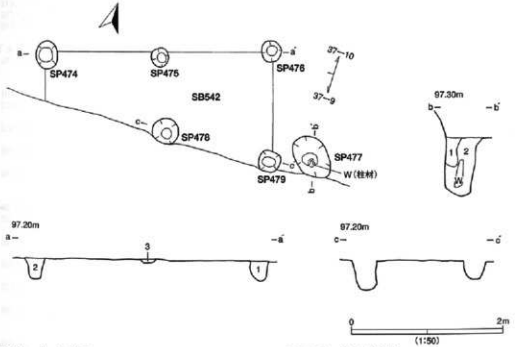
1	10YR3/1	黒褐色シルト　固くしまる。

SD63 (n—n′) 土層注記

1	10YR2/1	黒色シルト質粘土	10YR3/3暗褐色シルトをところどころに約15%含む。

SD69 (o—o′) 土層注記

1	10YR3/3	暗褐色粘質シルト



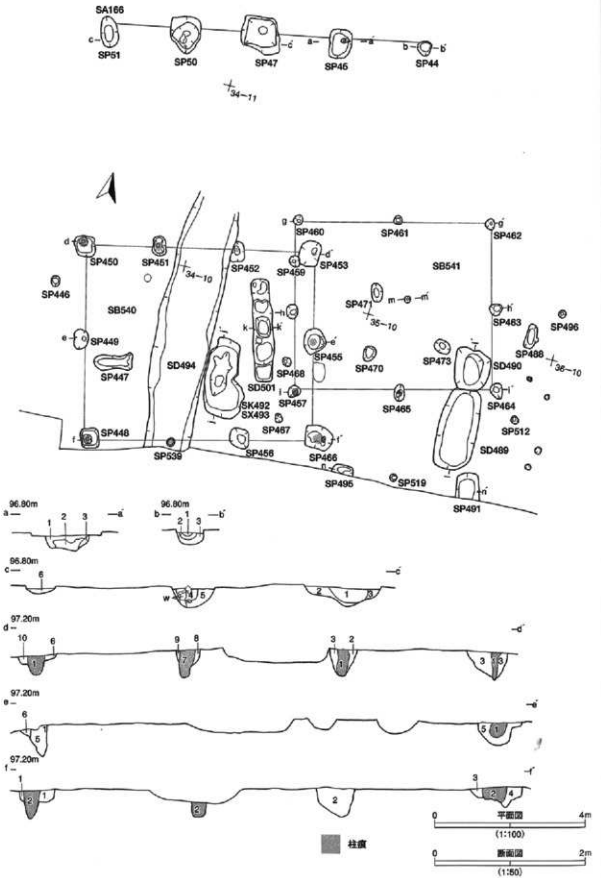
SB542 (a—a′) 土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/4暗褐色シルト質粘土を細かい点状に約1%含む。
2	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR2/2黒褐色粘土を点状・径約1～3cmのブロック状に約7%含む。
3	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR3/1黒褐色粘土を点状に約1%含む。

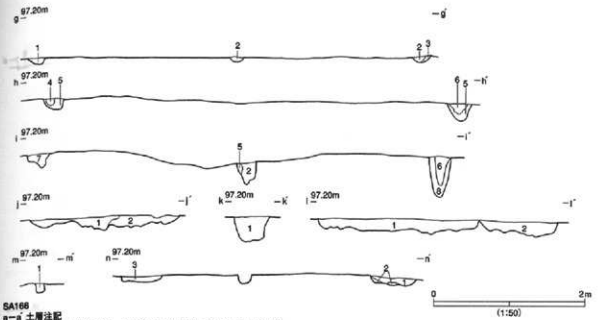
SP477 (b—b′) 土層注記

1	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土を径約3～5cmのブロック状に約45%含む。
2	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR3/1黒褐色シルト質粘土を径約1～5cmのブロック状に約20%含む。

第9図　遺構実測図　—SB169・542—



第10図　遺構実測図　—SA166、SB540・541—



SA166

a—a′ 土層注記

1	10YR3/1	黒褐色粘土	5YR2/4極暗赤褐色の未分解有機物を含む土が点状に約５％混入。
2	10YR2/1	黒色粘土	2.5YR3/6暗赤褐色の未分解有機物を含む土が点状・縦縞状に約10％混入。
3	7.5YR3/1	黒褐色粘土	7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を約１％含む。

b—b′ 土層注記

1	2.5Y3/1	黒褐色シルト質粘土	5YR3/6暗赤褐色の未分解有機物を含む土が5粒状に約５％混入、少ししまる。
2	10YR3/1	黒褐色粘土と10YR2/1黒色との中間色の粘土	5YR3/6暗赤褐色の未分解有機物を含む土が点状・縦縞状に約５％混入。
3	10YR3/1	黒褐色粘土と10YR2/1黒色との中間色の粘土	5YR3/6暗赤褐色の未分解有機物を含む土が点状・縦縞状に約10％混入。

c—c′ 土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色粘土を大ブロック状に約30％混入、2.5YR3/6暗赤褐色の未分解有機物を小さな点状に混入。
2	10YR3/1	黒褐色粘土	7.5YR5/6明褐色粘土を約10％混入。
3	7.5YR3/1	黒褐色粘土	7.5YR4/4褐色粘土を細い縦縞状に約５％混入、やわらかい。
4	2.5YR2/1	赤黒色粘土	10YR2/2黒褐色粘土を点状に約３％含み、やわらかい。
5	10YR1.7/1	黒色粘土	2.5Y3/1黒褐色粘土をブロック状・横帯状に約50％混入。
6	10YR2/1	黒色シルト質粘土	10YR3/3暗褐色シルト質粘土を斑状に約５％含み、やわらかい。

SB540（d—d′・e—e′・f—f′）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトを点状・横帯状に約２％含む。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色粘土を径約１～５cmのブロック状に約20％含む。
3	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色粘土を径約１～５cmのブロック状に約５％含む。
4	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/3暗褐色粘土を径約１～５cmのブロック状に約15％含む。
5	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルトを径約１～６cmのブロック状に約20％、7.5Y4/6褐色粘土を細かい縦縞状に約１％含む。
6	10YR4/2	灰黄褐色超質シルト	10YR2/1黒色粘土を径約１～４cmのブロック状に約25％含む。
7	10YR3/2	黒褐色粘土	7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を点状に約２％含む。
8	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR2/1黒色粘土を径約１～２cmのブロック状に約５％含む。
9	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を径約５cmのブロック状に約40％含む。
10	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土を約40％含む。

SB541（g—g′・h—h′・i—i′・m—m′）土層注記

1	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土を約40％含む。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土を約30％含む。
3	10YR2/2	黒褐色シルト質粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を約40％含む。
4	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色シルト質粘土を約20％含む。
5	10YR4/3	にぶい黄褐色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を縦・横帯状・ブロック状に約15％含む。
6	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR2/1黒色粘土を径約２～３cmのブロック状・横帯状に約20％、5YR3/6暗褐色シルトを縦縞状に約0.5％含む。
7	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色粘土を点状・ブロック状に約10％、7.5YR3/4褐色シルト質粘土を点状・縦縞状に約２％含む。
8	10YR4/2	灰黄褐色超質シルト	10YR1.7/1黒色粘土を径約１～２cmのブロック状に約２％、10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を約５％、5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を縦縞状に約0.5％含む。
9	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土を点状・斑状に２％混入。

j—j′ 土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR4/4褐色シルト質粘土を径約１～６cmのブロック状に含む。
2	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR2/2黒褐色粘土を約30％、10YR4/4褐色シルト質粘土を径約0.5～５cmの点状・ブロック状に約15％含む。

k—k′ 土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	5YR3/4暗赤褐色粘土を点状に約２％含む。

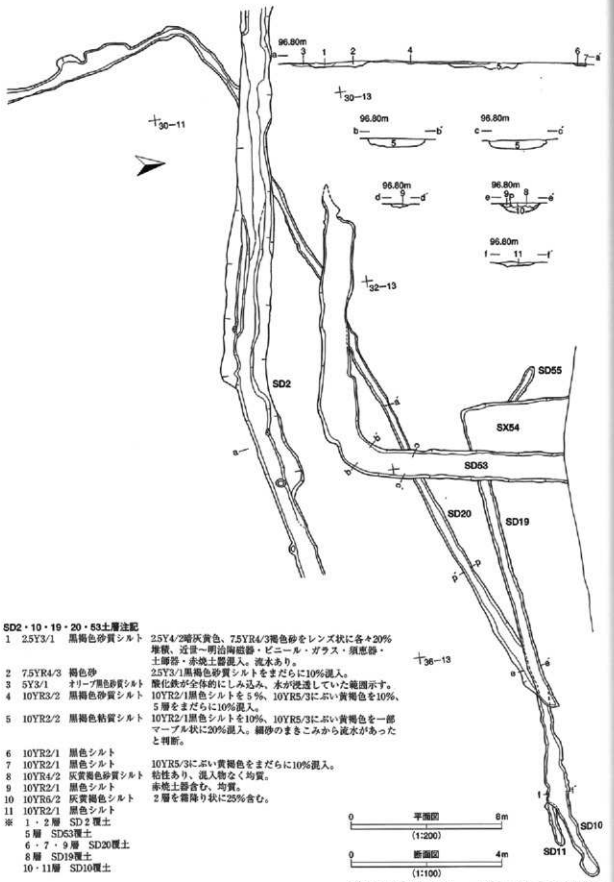
l—l′土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/4褐色シルト質粘土を点状に約0.5％、7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を縦縞状に約0.5％含む。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色粘土を径約１～10cmのブロック状に約５％、10YR5/4にぶい黄橙色シルト質粘土を約15％含む。

n—n′ 土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色シルトを径約0.5～２cmのブロック状に約２％、7.5YR4/6褐色粘土を縦縞状に約１％含む。
2	10YR4/3	にぶい褐色シルト質粘土	5YR3/6暗赤褐色粘土を縦縞状に約２％含む。
3	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色粘土を径約１～３cmのブロック状に５％含む。

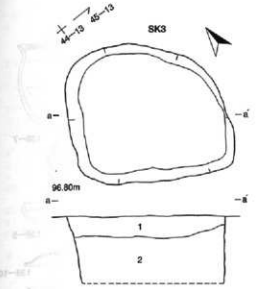
第11図　遺構実測図　—SA166、SB540・541—



SD2・10・19・20・53土層注記

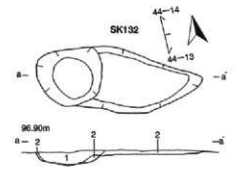
1	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色、7.5YR4/3褐色砂をレンズ状に各々20%堆積、近世～明治陶磁器・ビニール・ガラス・煉瓦器・土師器・赤焼土器混入。流水あり。
2	7.5YR4/3	褐色砂	2.5Y3/1黒褐色砂質シルトをまだらに10%混入。
3	5Y3/1	オリーブ黒色砂質シルト	酸化鉄が全体的にしみ込み、水が浸透していた範囲示す。
4	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルトを5%、10YR5/3にぶい黄褐色を10%、5層をまだらに10%混入。
5	10YR2/2	黒褐色粘質シルト	10YR2/1黒色シルトを10%、10YR5/3にぶい黄褐色を一部マーブル状に20%混入。細砂のまきこみから流水があったと判断。
6	10YR2/1	黒色シルト	
7	10YR2/1	黒色シルト	10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに10%混入。
8	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト	粘性あり、混入物なく均質。
9	10YR2/1	黒色シルト	赤焼土器含む、均質。
10	10YR5/2	灰黄褐色シルト	2層を階層状に25%含む。
11	10YR2/1	黒色シルト	
※	1・2層	SD2覆土	
	5層	SD53覆土	
	6・7・9層	SD20覆土	
	8層	SD19覆土	
	10・11層	SD10覆土	

第12図　遺構実測図　—SD2・10・19・20・53—



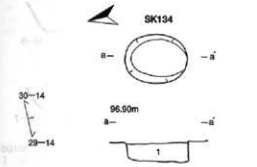
SK3土層注記

1	10YR3/2	黒褐色粘質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに含む。
2	10YR3/1	黒褐色粘質シルト	均質。



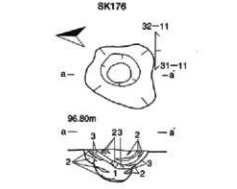
SK132土層注記

1	10YR2/1	黒色砂質シルト	10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに20%含む。
2	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに5%含む。



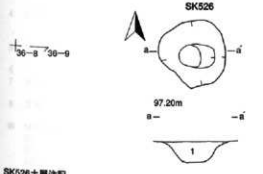
SK134土層注記

1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルトを40%、10YR5/2灰黄褐色砂質シルトをまだらに10%混入、粘性あり。人為的埋土。



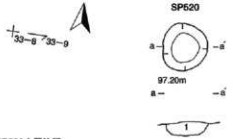
SK176土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘性シルト	砂の層が放射線状に混入。
2	10YR4/1	褐灰色砂	
3	10YR3/1	黒褐色シルト	
※	3層から上の層には酸化鉄5%の浸透がみられる。		



SK526土層注記

1	10YR3/1	黒褐色粘土	10YR2/1黒色粘土を径約1～8cmのブロック状に約7%、10YR4/6褐色砂質シルトを点状・ブロック状に約3%、10YR4/2灰黄褐色粘土を径約3cmにブロック状に約2%含む。

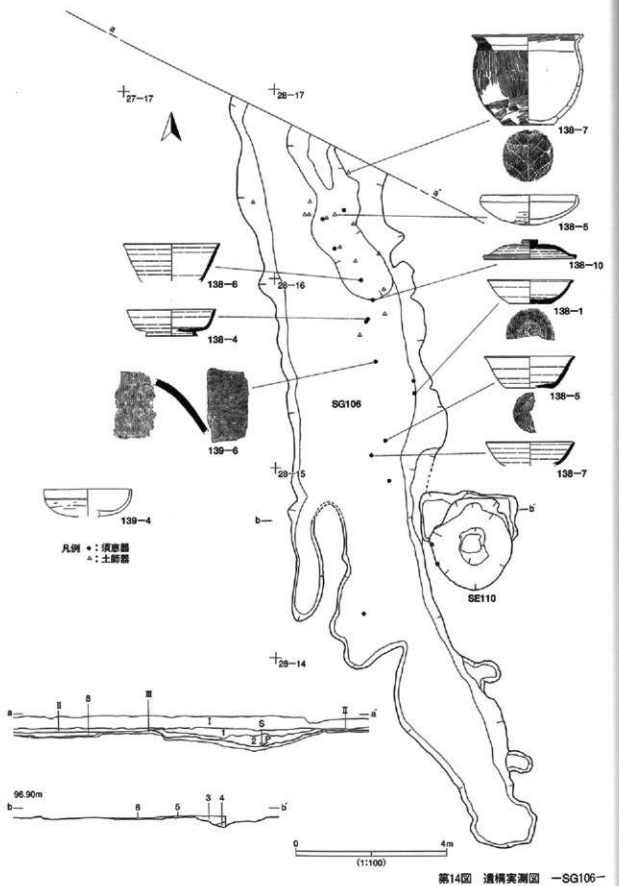


SP520土層注記

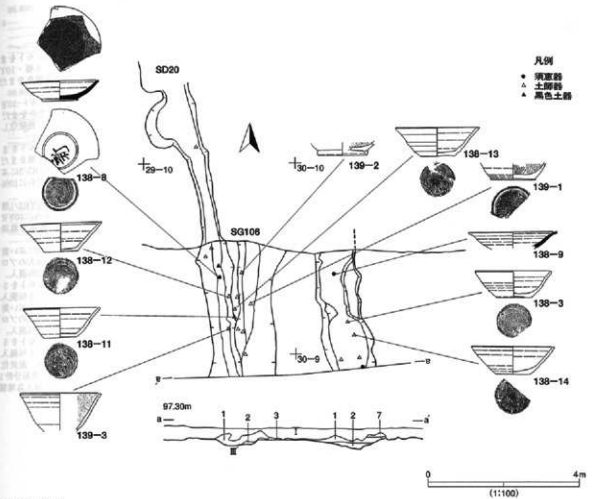
1	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土を点状・斑状・径約1～7cmのブロック状に約40%含む。

0 2m (1:80)

第13図　遺構実測図　—SK3・132・134・176・526、SP520—



第14図　遺構実測図　—SG106—

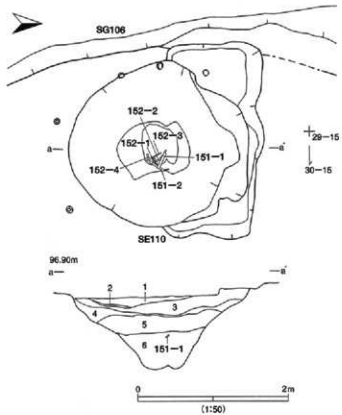


SG106土層注記

Ⅰ	10YR2/2	黒褐色シルト	耕作土。
Ⅱ	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	サラサラしている。
Ⅲ	10YR3/4	暗褐色砂質シルト	サラサラしている。
Ⅲ'	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	
1	7.5YR2/2	黒褐色シルト	
2	10YR1.7/1	黒色粘土	黒みがつよく、やわらかい。
3	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに5%、4層をまだらに20%、10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに10%混入。
4	10YR2/2	黒褐色細砂	3層を10%、10YR2/1黒色シルトを3%、10YR5/3にぶい黄褐色を霜降り状に10%混入。
5	10YR4/4	褐色粘土質シルト	6層をまだらに30%混入。人為的埋土。
6			2層に類似。
7	10YR2/1	黒色粘土質シルト	1層をまだらに10%混入、土器片を含む。
8	Ⅱ層にⅢ層をまきこむように20%混入。		

※ SG106覆土：1・2・6層
SD 20覆土：7層
SD 16覆土：8層
SE110覆土：3～5層

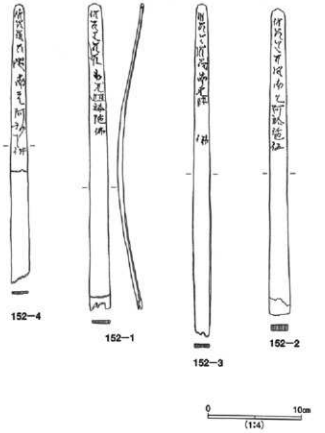
第15図　遺構実測図　—SG106—



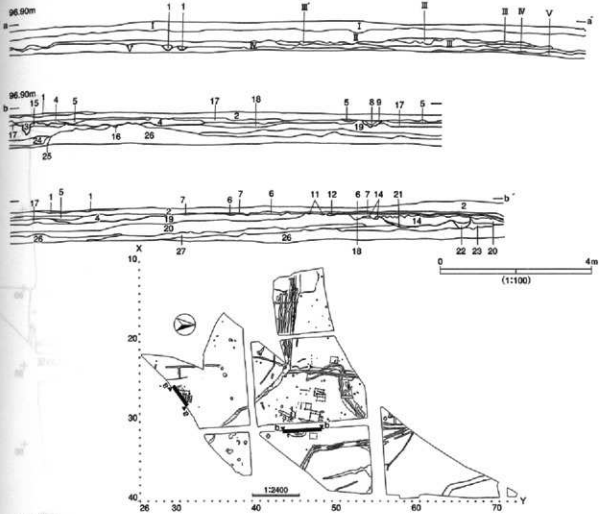
SE110土層注記

1	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに10%、4層・10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに5%混入。
2	10YR2/1	黒色粘土質シルト	10YR2/1黒色シルト・10YR1.7/1黒色粘土ををまだらに30%混入。混練化している。
3	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色シルトをまだらに5%、4層をまだらに20%、10YR5/3にぶい黄褐色をまだらに10%混入。
4	10YR2/2	黒褐色細砂	3層を10%、10YR2/1黒色シルトを3%、10YR5/3にぶい黄褐色を斑駁り状に10%混入。
5	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	4層・10YR5/3にぶい黄褐色を5～10cm大のブロック状に各々10%混入。10YR2/1黒色シルトを5㎜大の粒子状に5%混入。
6	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	4層・10YR5/3にぶい黄褐色を5～10cm大のブロック状に各々10%混入。10YR2/1黒色シルトを5㎜大の粒子状に5%混入。植物繊維を含み、混状化が激しい部分。花粉分析1

※ 1～3層自然堆積、4層洪水堆積、5～6層人為堆積



第16図 遺構実測図 —SE110—



a—a' 土層注記

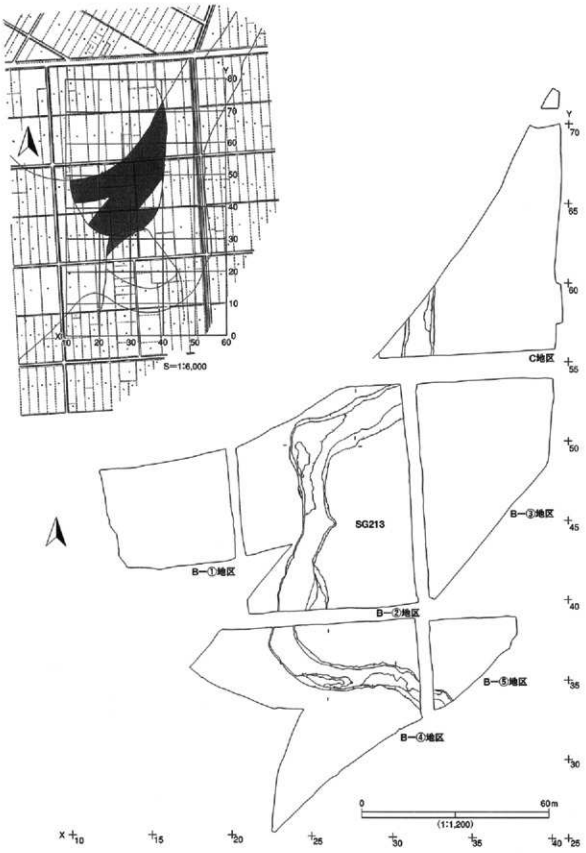
I	10YR3/3	暗褐色シルト	耕作土。
II	10YR3/3	暗褐色シルト	耕作土。Iより暗褐色度が少し強い。
III	10YR2/2	黒褐色粘土	
III'	10YR4/4	褐色粘土	7.5YR4/6褐色粘土と7.5YR5/6明褐色粘土を点状、斑状に含む。
IV	10YR3/3	暗褐色粘土	5YR4/4褐色粘土と7.5YR4/6褐色粘土を点状、斑状に含む。
V	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	5YR4/4にぶい赤褐色粘土と7.5YR5/4～6にぶい褐色や明褐色粘土を縞状に含む。(地山)
1	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色粘土を含む。また、7.5YR4/4褐色粘土を縞状に含む。

b—b' 土層注記

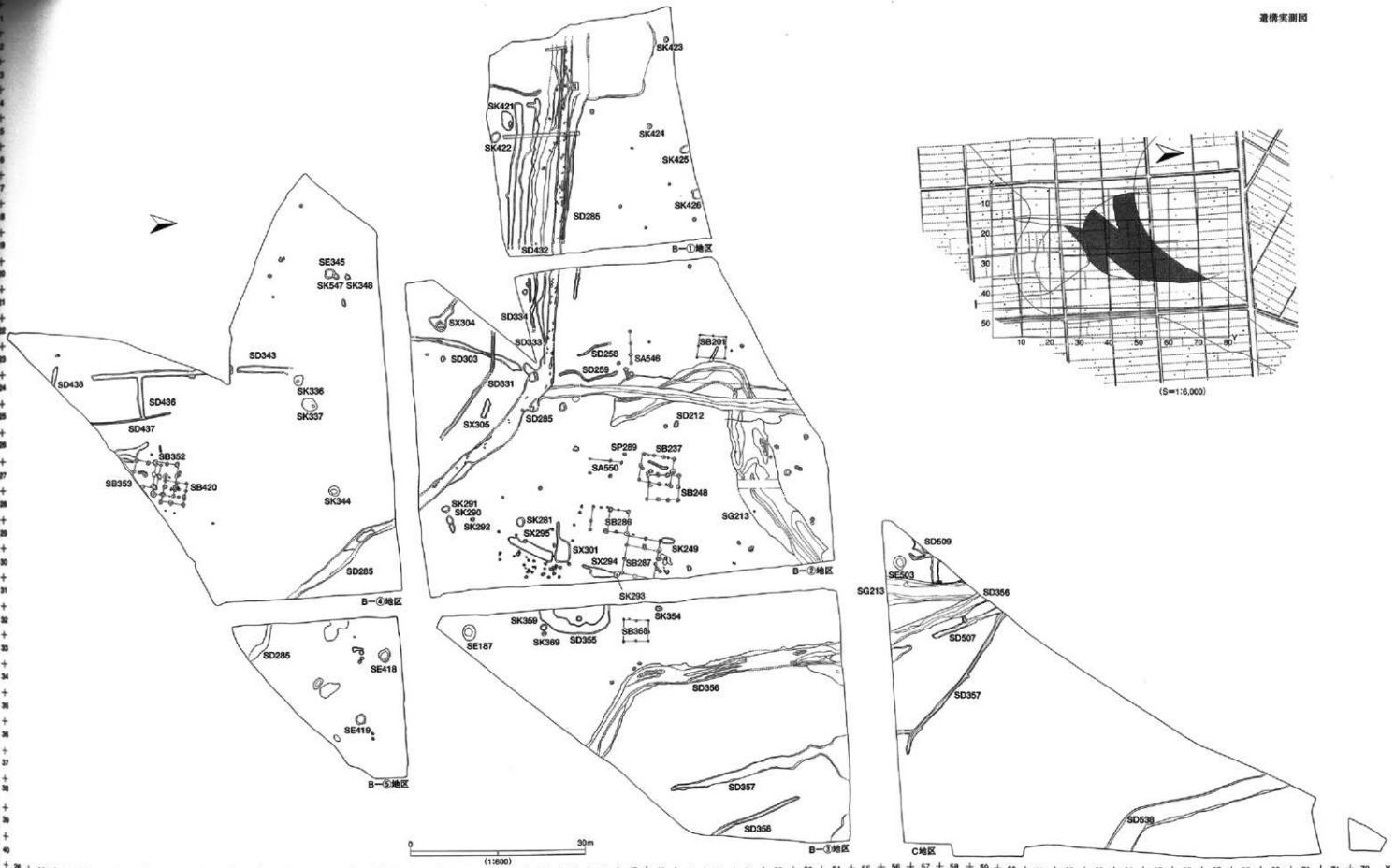
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐砂シルト	10YR3/1黒褐色粘土を斑塊状、ブロック状に含む。
2	10YR3/2	黒褐色粘土	7.5YR3/4暗褐色粘土を細かい点状、および斑状に含む。(静作土)
3	10YR2/1	黒色粘土	N1.5/0黒色炭化物をブロック状に約1%、10YR3/2黒褐色粘土を斑塊状、ブロック状に約3%、7.5YR3/3暗褐色粘土を約0.5%点状に含む。粒穴
4	7.5YR3/1	黒褐色粘土	7.5YR3/4暗褐色粘土が点状に約2%含まれる。
5	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/4褐色粘土を点状、斑状、縞塊状に約30%含む。
6	10YR3/2	黒褐色粘土	7.5YR4/4褐色粘土を点状、斑状に約7%含む。
7	7.5YR4/3	褐色粘土	10YR3/2黒褐色粘土が約30%含まれる。細かく混じり合っている。
8	10YR3/1	黒褐色シルト	上方にN2/0黒色炭化物を斑状に約2%、10YR4/2灰黄褐色の砂を約20%、10YR3/4暗褐色粘土を点状に約1%含む。粒穴
9	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	2.5YR3/2黒褐色砂を約20%、10YR2/1黒色粘土を斑状、ブロック状に約5%、N2/0黒色炭化物を斑状に約1%、7.5YR4/4褐色粘質シルトを点状、斑状、縞縞状に約2%含む。粒穴
11	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR3/3暗褐色粘土が約15%含まれる。
12	7.5YR2/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色の砂質シルトを約20%、7.5YR4/4褐色粘土を約2%含む。
14	10YR2/L5	黒褐色粘土	7.5YR4/4褐色粘土が点状、斑状に約10%含まれる。
15	10YR3/2	黒褐色粘土	7.5YR4/4褐色粘土を細かい点状に約20%含む。
16	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトを約20%、5Y3/8暗赤褐色粘土を点状に約2%含む。
17	10YR2/L5	黒褐色粘土	10YR4/4褐色粘土が点状、斑状に約10%含まれる。
18	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を点状、斑状に約20%含む。
19	10YR3/2	黒褐色シルト	7.5YR4/4褐色粘土を点状、斑状に約7%含む。
20	10YR3/2	黒褐色粘土	5YR4/6赤褐色粘土を斑状、縞縞状に約10%含む。
21	10YR3/1	黒褐色粘土	
22	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR2/1黒色粘土が径約3cmのブロック状に1個、7.5YR3/4暗褐色粘土を点状、縞縞状に約2%含む。
23	7.5YR3/1	黒褐色粘土	10YR4/2灰黄褐色粘土をブロックおよび太い横要状に、また、7.5YR3/4暗褐色粘土を縞縞状に約20%含む。
24	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR2/4暗褐色粘土を斑状、ブロック状に約5%含む。
25	10YR4/1	黒灰色シルト質粘土	10YR3/4暗褐色粘土を斑状、縞縞状に約2%含む。
26	10YR4/1	褐灰色粘土	やわらかい。
27	10YR4/2	灰黄色シルト質粘土	10YR4/4褐色粘土を斑状、ブロック状に約5%含む。

※ a—a' 断面との対応関係は次のとおりである。
1：I　2：II　5～7：IV　15・17～20・24～27：V　3・8・9・11・12・14・16・21・22：遺構　4：SD355覆土

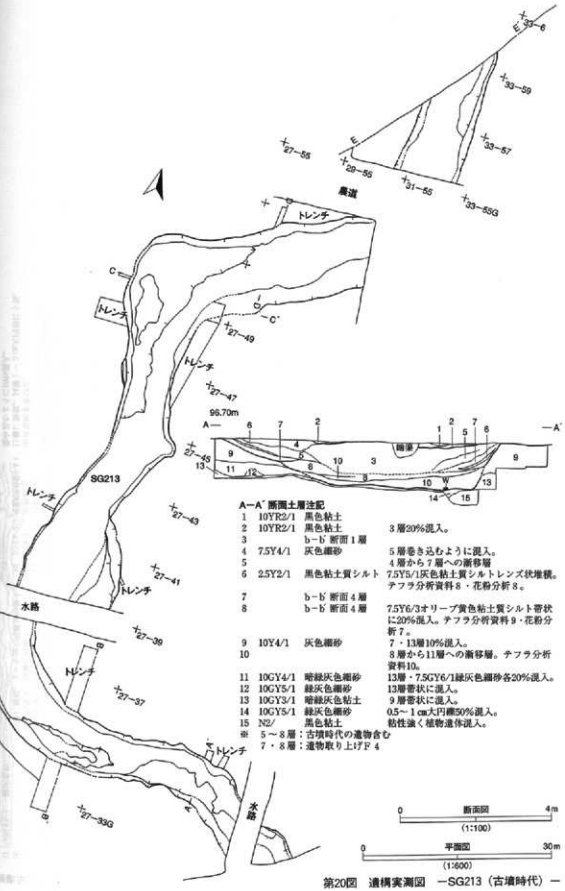
第17図 B地区基本層序



第18図　B・C地区遺構配置図　—古墳時代—



第19図　B・C地区遺構配置図　—奈良・平安時代以降—

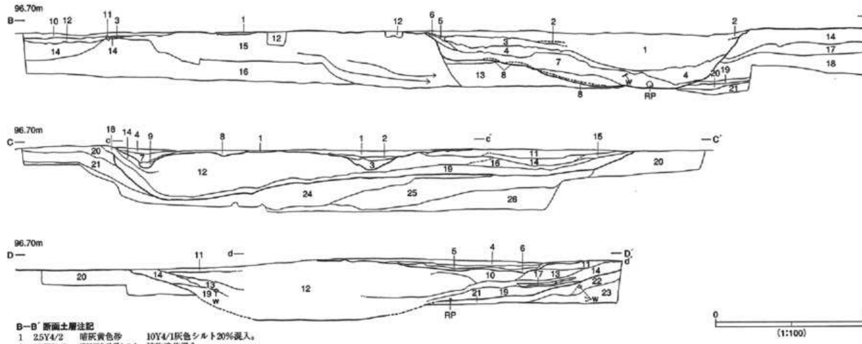


A-A' 断面土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	
2	10YR2/1	黒色粘土	3層20%混入。
3		b-b' 断面1層	
4	7.5Y4/1	灰色細砂	5層巻き込むように混入。
5			4層から7層への漸移層
6	2.5Y2/1	黒色粘土質シルト	7.5Y5/1灰色粘土質シルトレンズ状堆積。テフラ分析資料8・花粉分析8。
7		b-b' 断面4層	
8		b-b' 断面4層	7.5Y6/3オリーブ黄色粘土質シルト帯状に20%混入。テフラ分析資料9・花粉分析7。
9	10Y4/1	灰色細砂	7・13層10%混入。
10			8層から11層への漸移層。テフラ分析資料10。
11	10GY4/1	暗緑灰色細砂	13層・7.5GY6/1緑灰色細砂各20%混入。
12	10GY5/1	緑灰色細砂	13層帯状に混入。
13	10GY3/1	暗緑灰色粘土	9層帯状に混入。
14	10GY5/1	緑灰色細砂	0.5～1cm大円礫50%混入。
15	N2/	黒色粘土	粘性強く植物遺体混入。

※ 5～8層：古墳時代の遺物含む
7・8層：遺物取り上げF4

第20図 遺構実測図 —SG213（古墳時代）—



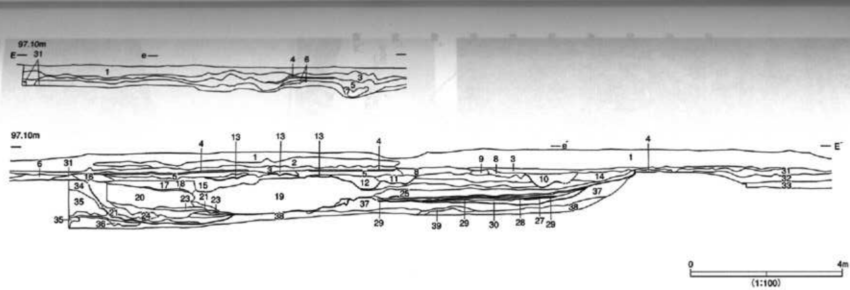
B—B′ 断面土層注記

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂	10Y4/1灰色シルト20%混入。
2	10GY4/1	暗緑灰色砂質シルト	植物遺体混入。
3	2.5Y4/4	オリーブ褐色砂	I層に類似。遺物取り上げ3層。
4	2.5Y2/1	黒色粘土質シルト	植物遺体多く混入。2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト下位に堆積。遺物混入。遺物取り上げF4。
5	2.5Y6/3	にぶい黄色シルト	1・2層斑に各5%混入。遺物混入。
6	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	粘性あり。遺物混入9。
7	2.5Y2/1	黒色粘土質シルト	5Y4/2灰オリーブ色細砂・10GY4/1暗緑灰色砂40%混入。遺物多量混入。
8		泥炭	
9	5Y4/2	灰オリーブ色細砂	10GY4/1暗緑灰色砂50%混入。
10	5Y3/1	オリーブ黒色砂質シルト	
11	10YR1.7/1	黒色粘土	
12		暗渠	
13	5Y4/2	灰オリーブ色砂	1～5cm大円礫50%混入。
14	7.5GY4/1	暗緑灰色細砂	植物遺体混入。硬くしまる。
15	10Y5/1	灰色細砂	10GY5/1緑灰色砂・5Y4/1灰色粘土が河川中央に向い傾斜しながら帯状に各30%混入。18層に対応？
16			13層に類似。3～5cm大円礫10%混入。
17	10GY5/1	緑灰色砂	
18			15層に類似。水平堆積。
19	10YR1.7/1	黒色粘土	花粉分析4。
20	2.5Y3/1	黒褐色粘土	
21	2.5Y2/1	黒色砂	同色粘土20%混入。

C—C′・D—D′ 断面土層注記

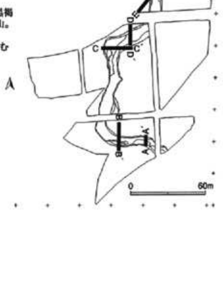
1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR3/1黒褐色粘土質シルト10%斑に混入。粘性あり硬くしまる。
2	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	1層世砂質感強く、粘性あり硬くしまる。
3	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	B－1地区土坑覆土に類似。粘性あり硬くしまる。
4	10YR2/1	黒色粘土質シルト	0.5cm大円礫5%、5層10%斑に混入。平安時代遺物混入。
5	10YR4/2	灰黄褐色粘土	硬くしまる。
6	10YR4/2	灰黄褐色シルト質粘土	硬くしまる。
7	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	4層・12層各10%混入。
8	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	4層5%・12層10%混入。
9	2.5Y3/1	黒褐色粘土質シルト	8層より粘性強い。
10			12層に0.5～2cm大円礫。
11	2.5Y4/2	暗黄灰色砂質シルト	細砂混入。粘性あり硬くしまる。
12	10YR5/6	黄褐色粗砂	細砂帯状に混入。古墳時代遺物混入。
13	2.5Y4/1	灰黄色砂	
14	5Y4/1	灰色粘土	中央黒味を帯びる。
15	2.5Y4/2	暗黄灰色砂質シルト	11層に類似。14層1～3cm大円形に5%、染み込むように10%混入。
16	2.5Y5/2	暗灰黄色粘土	
17		白色粘土	
18	2.5Y2/1	黒色粘土	植物遺体・古墳時代遺物混入。
19	10YR4/2	灰黄褐色粘土質シルト	同色砂・11層混入。
20	2.5Y4/2	黄褐色シルト	
21	2.5Y2/1	黒色粘土質シルト	植物遺体混入。10GY3/1暗緑灰色細砂帯状40%混入。
22	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂	植物遺体・木片混入。
23	10YR4/6	褐色砂	
24			砂と粘土交互に堆積。
25	2.5Y3/2	黒褐色細砂	一部シルト化。18層帯状・レンズ状に10%混入。
26	2.5Y3/2	黒褐色細砂	円礫混入。
※	1～3層	SD212覆土	
	4～9層	SG213平安時代覆土	
	10～19層	SG213古墳時代覆土	
	20層	基盤層	

第21図　遺構実測図　—SG213（古墳時代）—

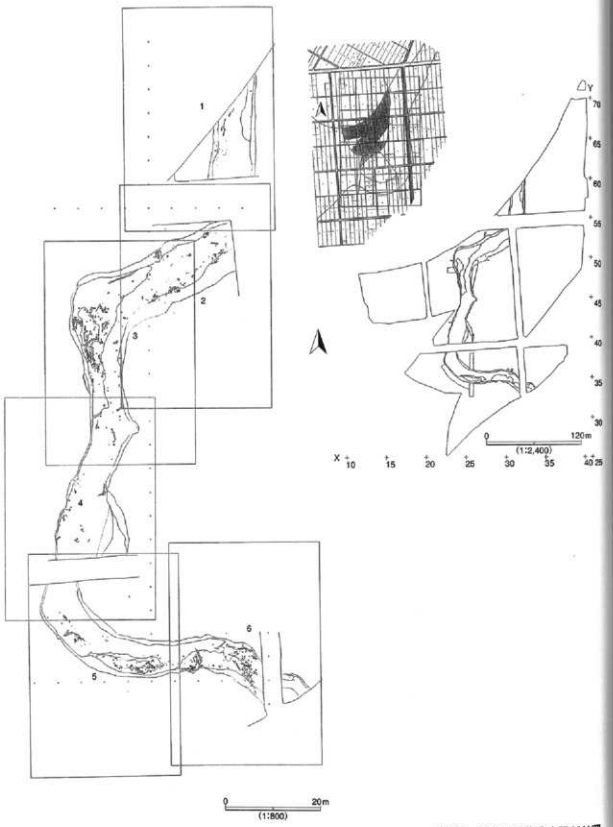


E—E′ 断面（C調査区北西壁面）土層注記

1	10YR4/2	灰黄褐色	10YR4/1褐灰色シルト20%、0.1～0.3cm大小礫3%混入。酸化鉄染み込む。
2	1層に2.5Y5/3	黄褐色粘土質シルト	5～10cm大斑点状に40%混入。
3	10YR4/1	褐灰色シルト	1層20%0.1～0.3cm大小礫3%混入。酸化鉄染み込み硬くしまる。
4	7.5YR4/4	褐色砂質シルト	3層と5層の分層間に酸化鉄付着。
5	7.5YR4/2	灰褐色シルト	3層10%・31層5%混入。1・3層に比べ酸化鉄の染み込みが少ない。硬くしまる。
6	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	5層が霜降り状に20%混入。
7	7.5Y2/1	黒色粘土質シルト	
8			5層に10層30%・11層10%混入。
9	2.5Y6/4	にぶい黄色砂質シルト	地山ブロック
10	10YR2/1	黒色粘土質シルト	14層5%混入。SD覆土。
11	5Y4/1	灰色粘土質シルト	2.5Y4/4オリーブ褐色～2.5Y5/2暗黄灰色砂30%斑に混入。
12	5Y2/1	黒色粘土質シルト	2.5Y4/4オリーブ褐色～2.5Y5/2暗黄灰色砂30%斑に混入。
13	10YR2/1	黒色粘土質シルト	奈良・平安時代SG213覆土。
14		黄褐色シルト質砂	
15			シルト・細砂縞状堆積。
16			シルト・細砂縞状堆積。粘性が強い。
17		砂混入シルト	
18		黄褐色シルト	
19		粗砂	
20	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	
21		黒色泥炭	砂混入。層上位に炭化物まとまって堆積する。
22		黒色泥炭	
23		砂	
24	10YR5/2	灰黄褐色粘土質シルト	
25	10YR4/1	褐灰色粘土質シルト	
26	10YR5/1	褐灰色シルト	
27	10YR3/1	黒褐色泥炭	
28	10YR1.7/1	黒色泥炭	
29		灰白色粘土質シルト	テフラ分析資料11。
30	10YR3/1	黒褐色泥炭	砂混入。
31	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗黄灰色シルト・2.5Y3/2黒褐色シルト各10%斑点状に混入。地山。
32	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	やわらかくしまりがない。
33	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト巻き込むように20%混入。
34		砂混入粘土	
35		細砂～砂	
36		泥炭	
37		砂	黒色砂混入。
38		青砂	黒粘土10%混入。
39		青砂	黒粘土50%混入。
※	1～9層	耕作土	
	14～30層	古墳時代SG213覆土	



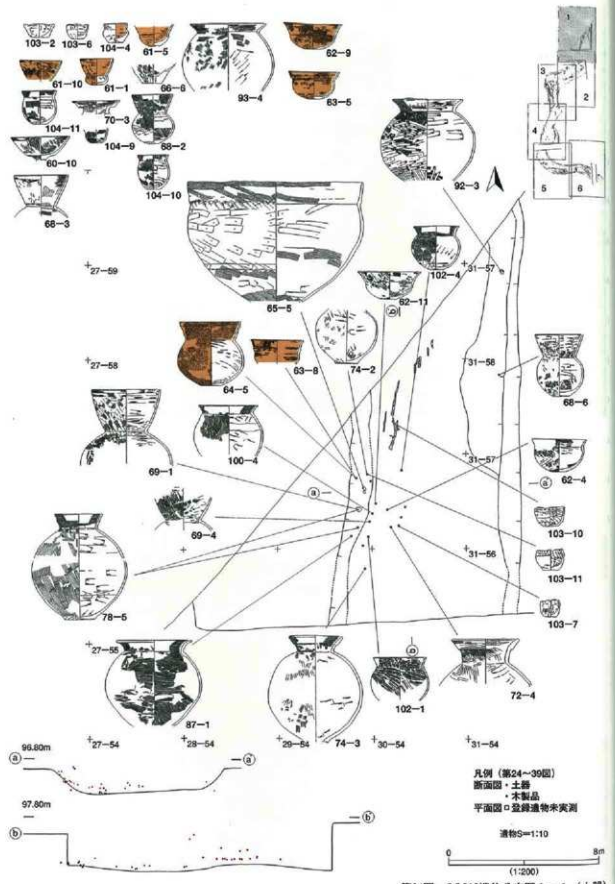
第22図　遺構実測図　—SG213（古墳時代）—



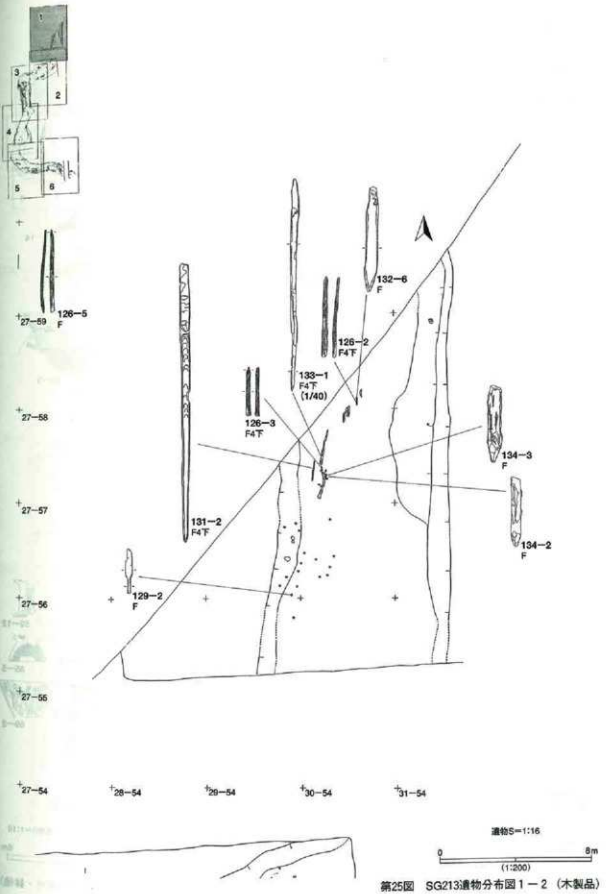
第23図　SG213遺物分布図割付図

SG213完掘状況（西から）

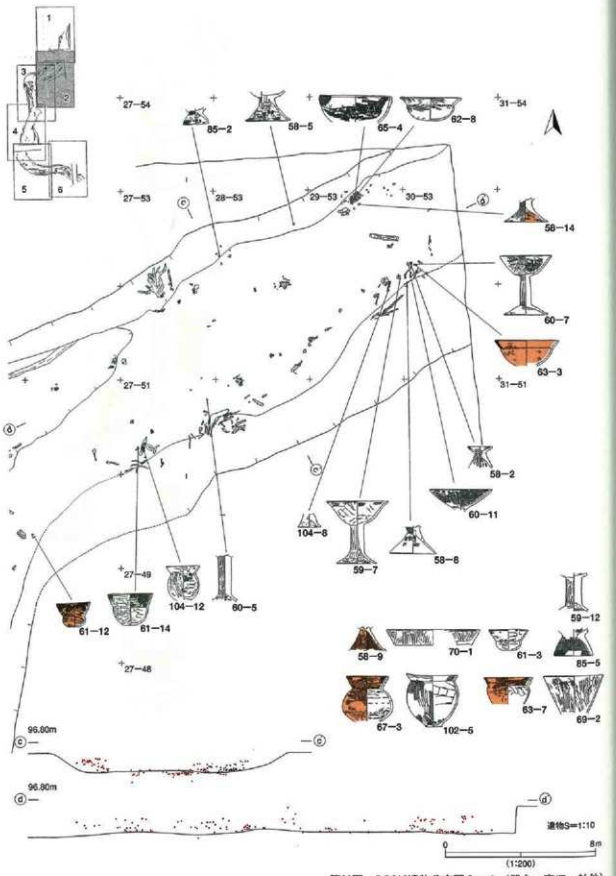
SG213完掘状況（東から）



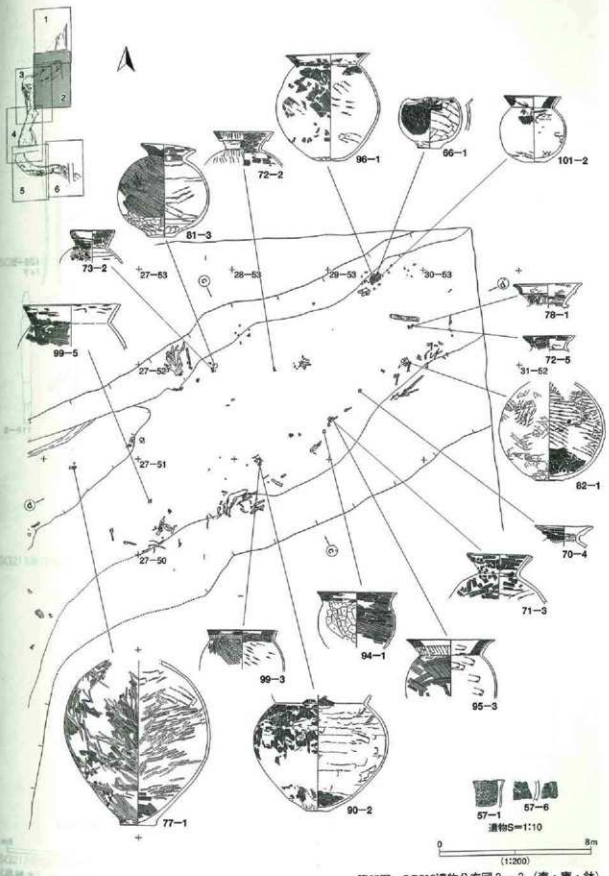
第24図　SG213遺物分布図１－１（土器）



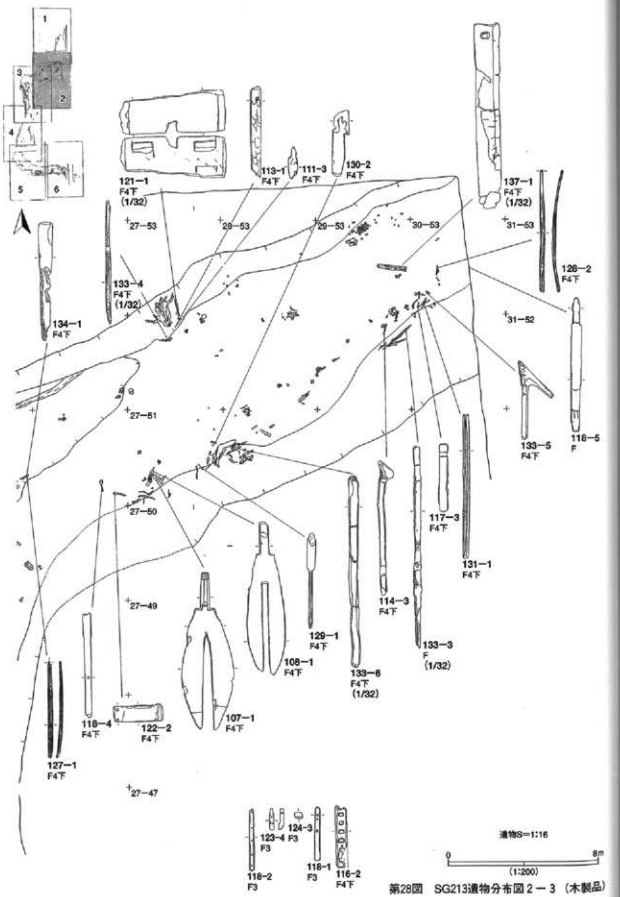
第25図　SG213遺物分布図１－２（木製品）



第26図　SG213遺物分布図２－１（器台・高坏・鉢他）



第27図　SG213遺物分布図２－２（壺・甕・鉢）

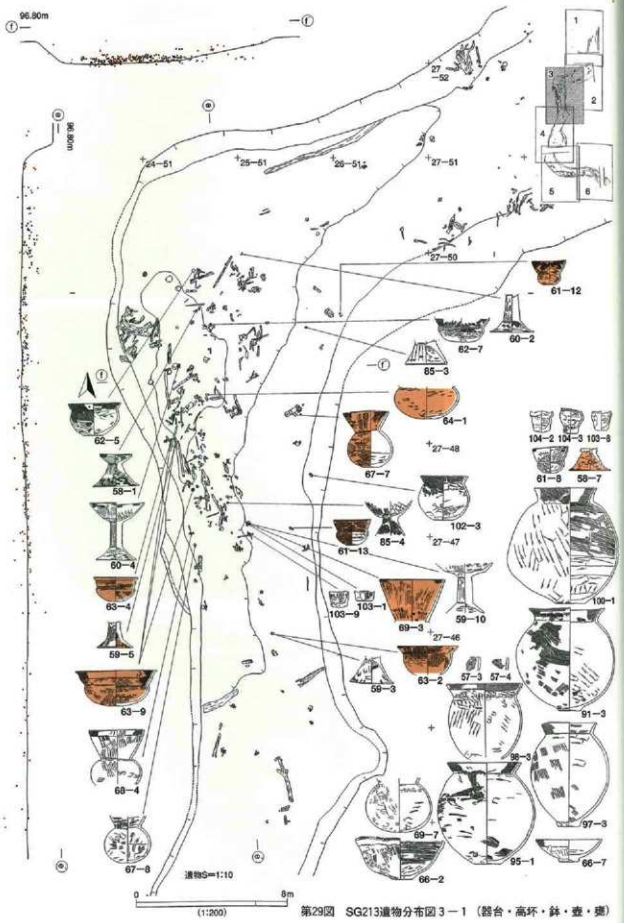


第28図　SG213遺物分布図２－３（木製品）

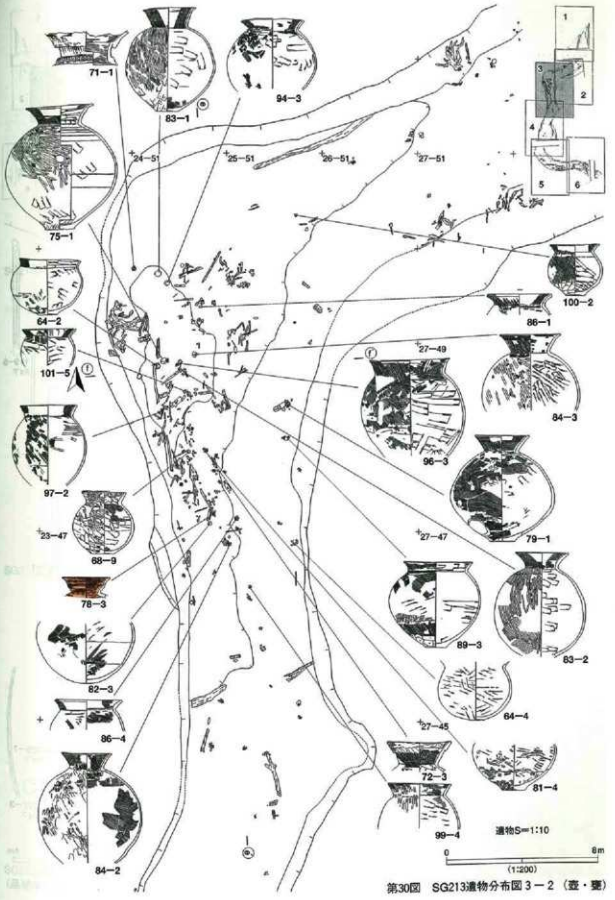
SG213調査状況（北東から）

SG213遺物出土状況（北東から）

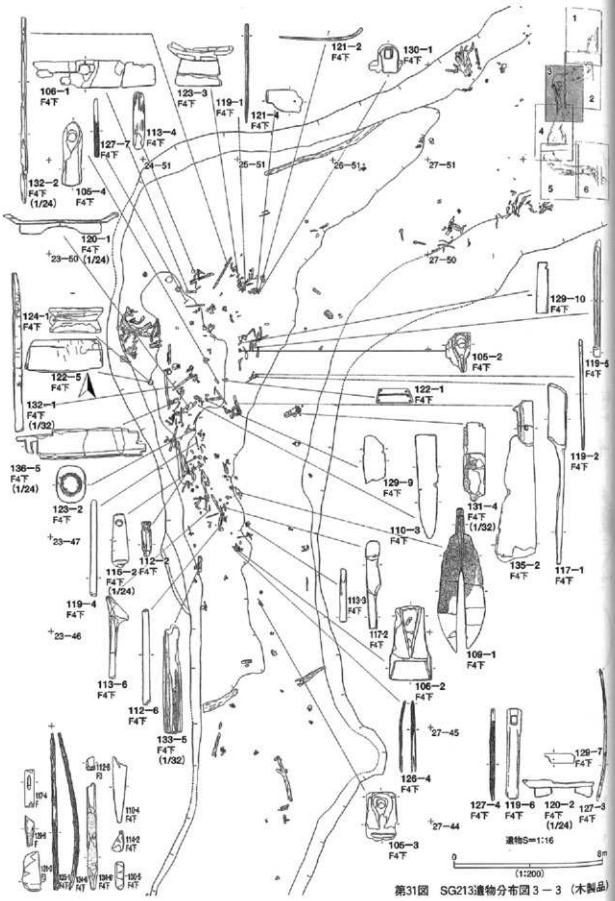
SG213完掘状況（北東から）



第29図　SG213遺物分布図３－１（器台・高坏・鉢・壺・甕）



第30図　SG213遺物分布図３－２（壺・甕）

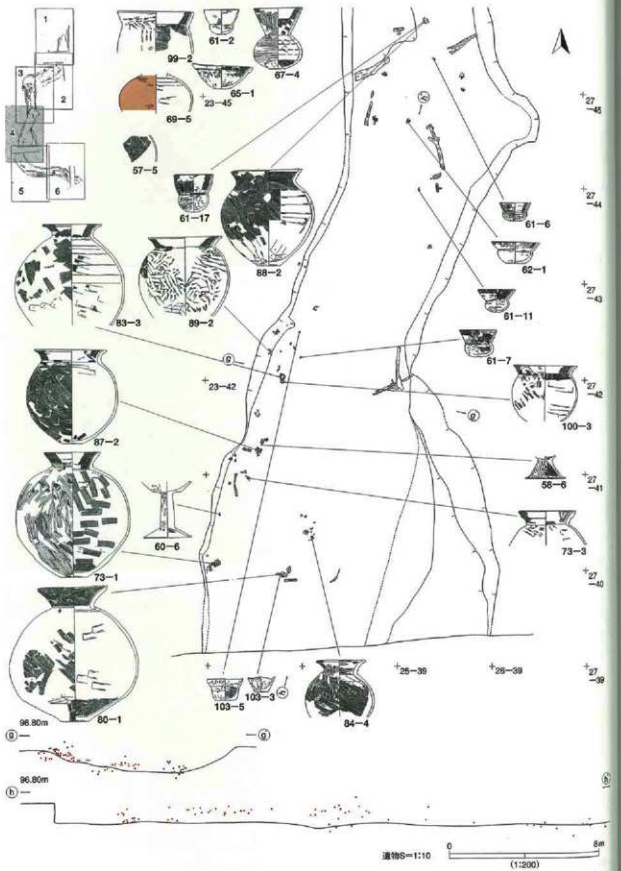


第31図　SG213遺物分布図３－３（木製品）

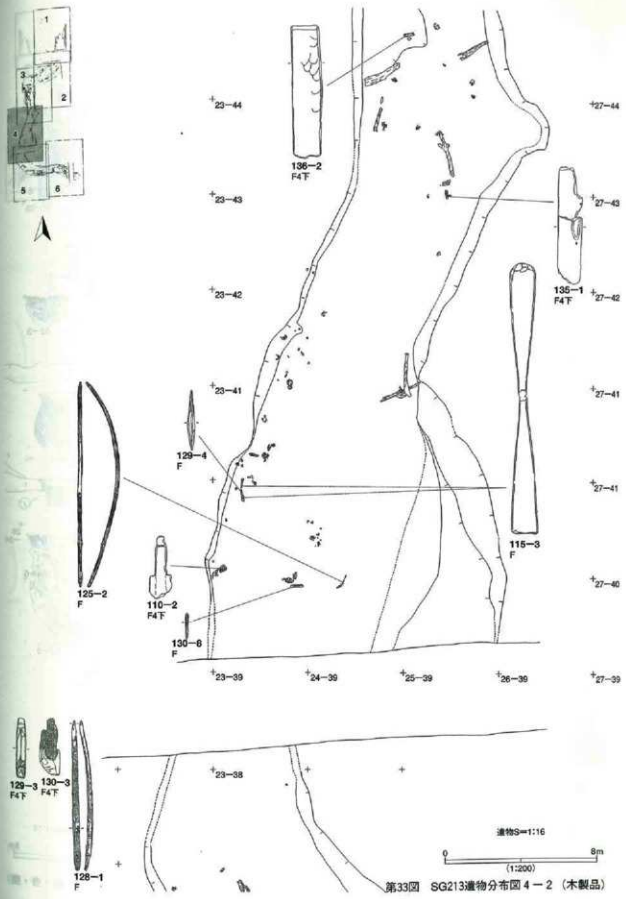
SG213調査状況（南から）

SG213調査状況（北西から）

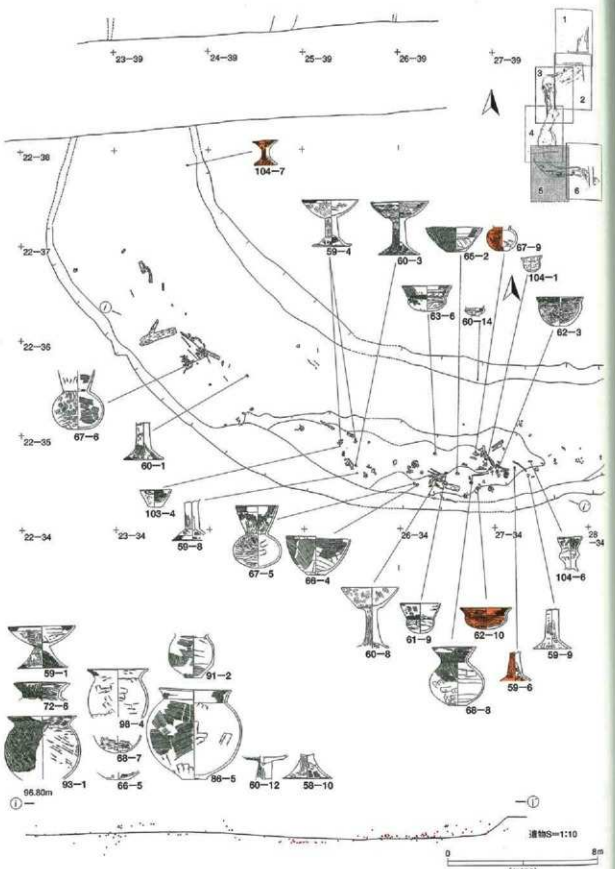
SG213調査状況（北から）



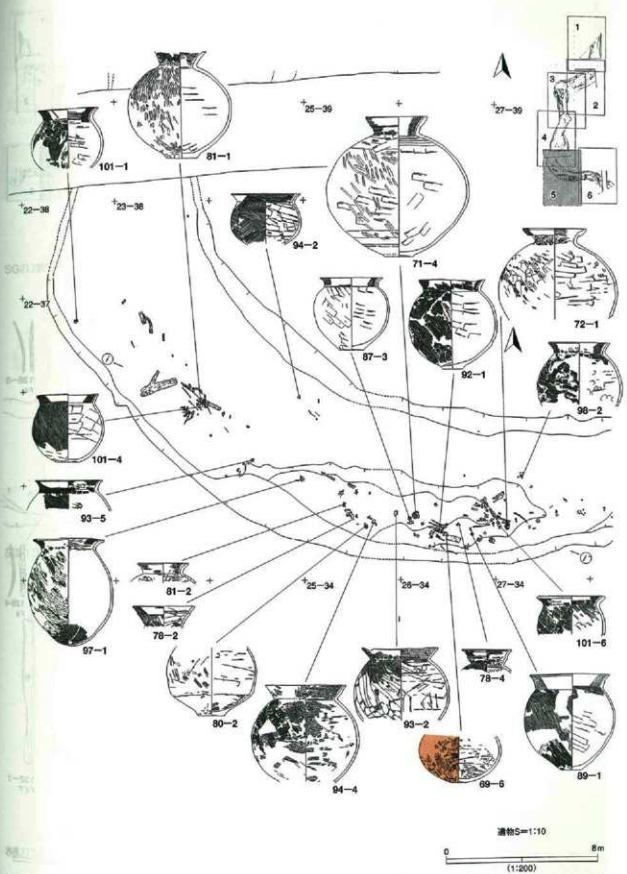
第32図　SG213遺物分布図４－１（土器）



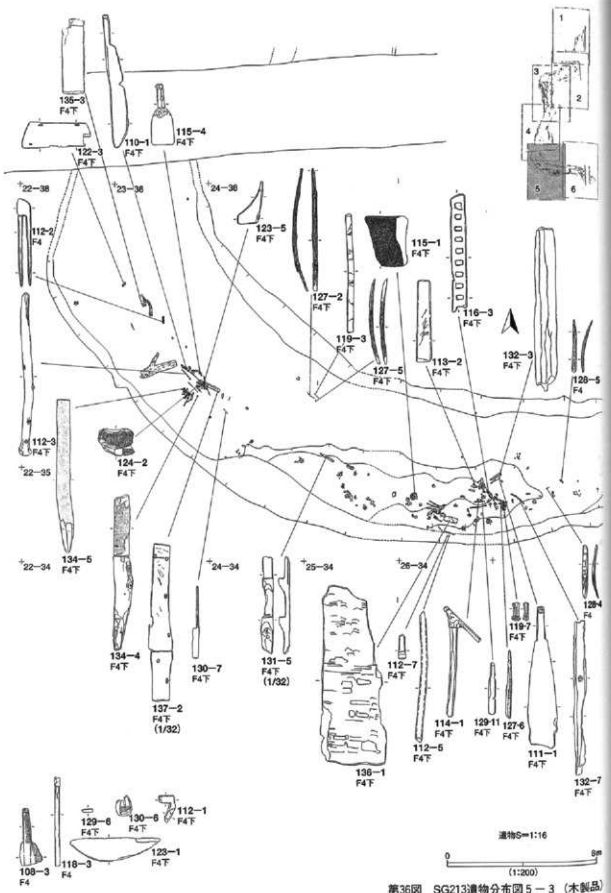
第33図　SG213遺物分布図４－２（木製品）



第34図　SG213遺物分布図５－１（器台・高坏・鉢・壺・甕）



第35図　SG213遺物分布図５－２（壺・甕）

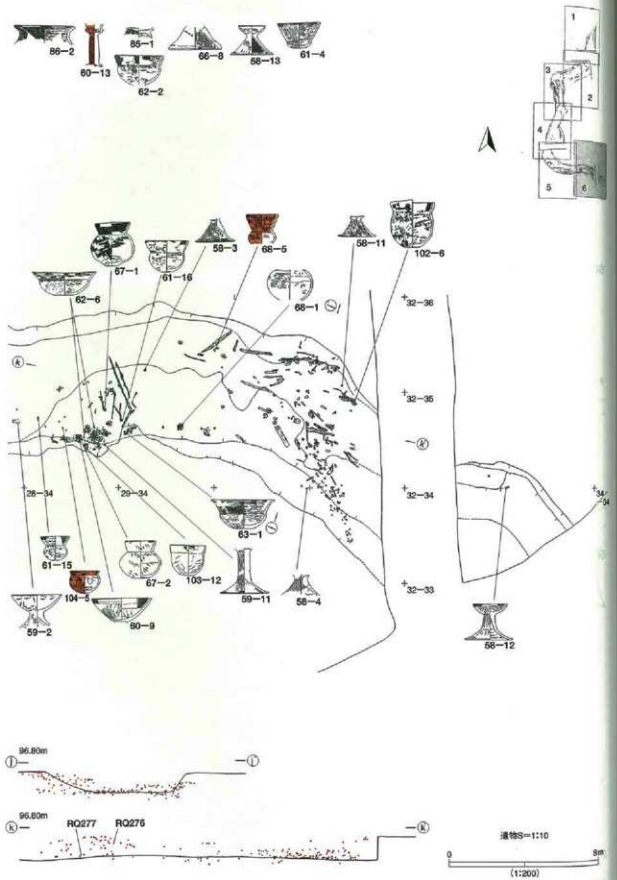


第36図　SG213遺物分布図5－3（木製品）

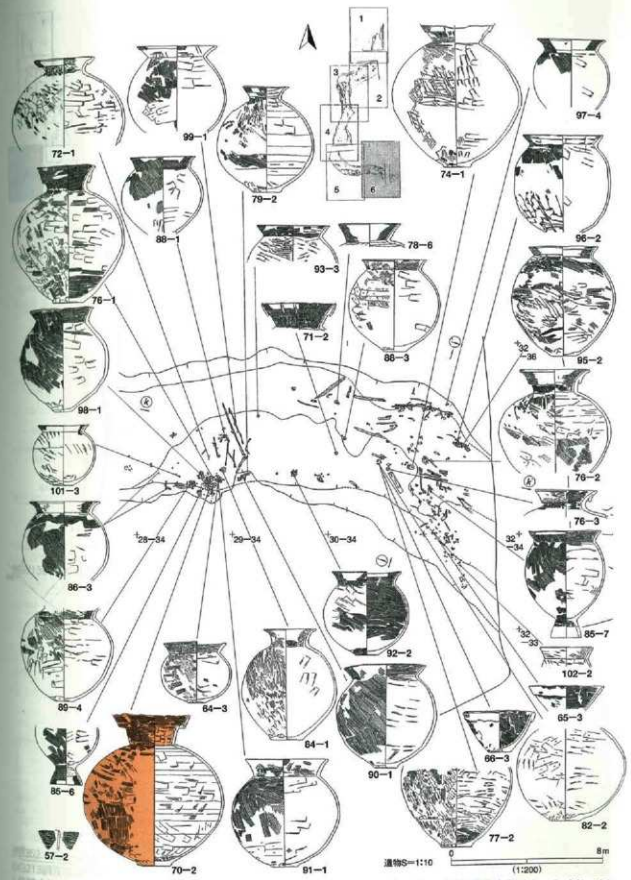
SG213調査状況（南西から）

SG213川底検出状況
（東から）

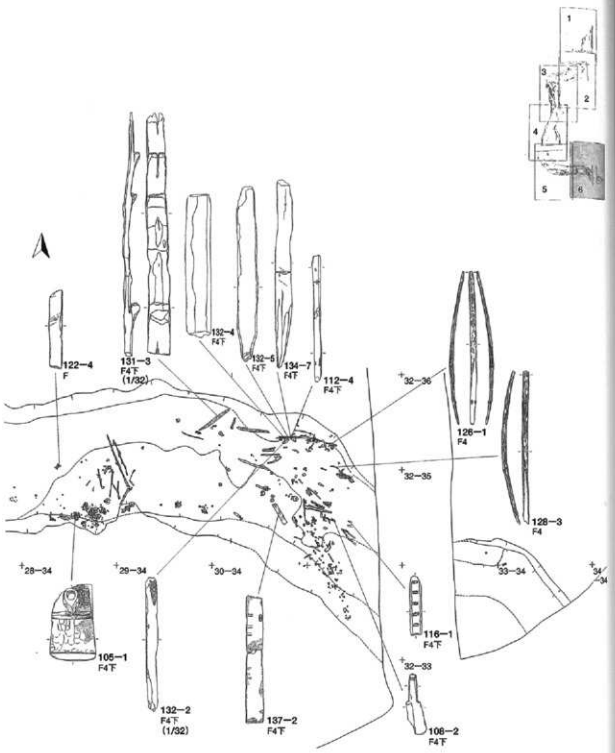
SG213トレンチ調査状況
（西から）



第37図　SG213遺物分布図６－１（器台・高坏・鉢・壺・甕）



第38図　SG213遺物分布図６－２（壺・甕）

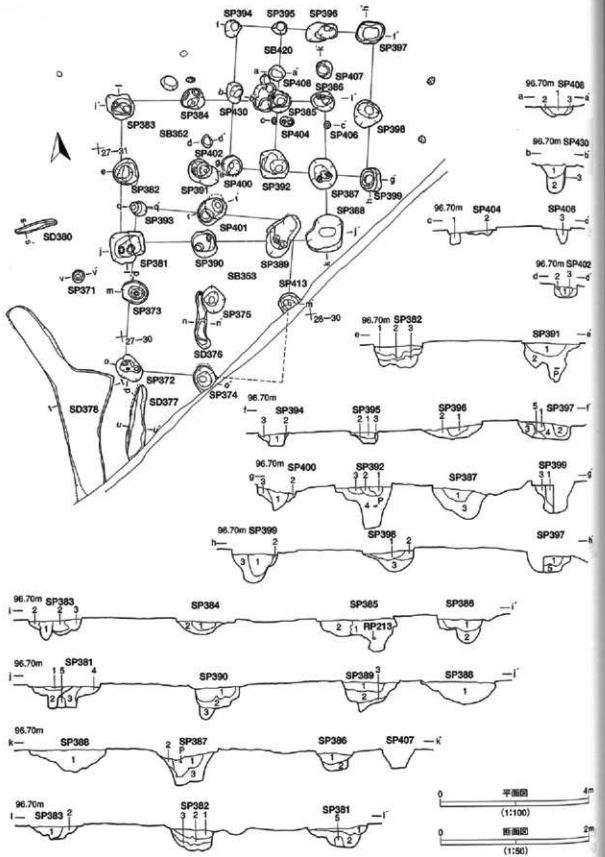


第39図　SG213遺物分布図6－3（木製品）

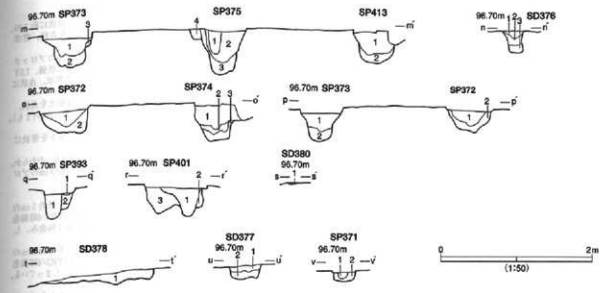
SG213（28—34G）調査状況
（北西から）

SG213調査状況（北東から）

SB352・353・430
SG213調査状況（西から）



第40図　遺構実測図　—SB352・353・420—



SP408（a—a'）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約3％、10YR5/2灰黄褐色シルトを斑状に約15%含む。
2	10YR3/1	黒褐色シルト質粘土	10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土を径約1～3cmのブロック状に約20%含む。
3	10YR4/1	褐灰色シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルトをブロック、斑状に約15%、7.5YR5/6明褐色シルト質粘土を点状、斑状に約3%含む。

SP430（b—b'）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトを径約1～3cmのブロック状に約25%含む。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR2/2黒褐色粘土を約40%、10YR4/2灰黄褐色砂質シルトを径約3cmのブロック状に約10%含む。
3	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	

SP440・406（c—c'）土層注記

1	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土	10YR2/2黒褐色シルト質粘土を約30%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に約10%、10YR4/4褐色シルトを斑状に約5％含む。
2	10YR2/3	黒褐色シルト質粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状、斑状に約15%、10YR4/4褐色シルトを斑状に約3％含む。
3	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/3暗褐色シルト質粘土を小ブロック、斑状に約15%含む。

SP402（d—d'）土層注記

1	10YR2/3	黒褐色粘質シルト	7.5YR4/4褐色砂質シルトを斑状に約7%混入。
2	10YR2/3	黒褐色粘質シルト	7.5YR4/4褐色砂質シルトを約20%混入。
3	10YR3/2	黒褐色粘質シルト	7.5YR4/4褐色シルト質粘土を斑状、点状に約10%含む。

SP382（e—e'・i—i'）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色シルト	10YR1.7/1黒色粘土を斑状に約2%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトを斑状に約7％、10YR4/3にぶい黄褐色シルトを斑状、点状に約5％含む。
2	SP383の2層と同じ。		
3	SP383の3層と同じ。		

SP391（e—e'）土層注記

1	7.5YR2/2	黒褐色シルト	
2	10YR2/1	黒色シルト質粘土	10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土をブロック状を含め約15%、10YR1.7/1黒色粘土を径約2～5cmのブロック状に約15%、7.5YR4/4褐色シルトを点状に約1％含む。

SP394（f—f'）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質シルト	10YR2/1黒色粘土を径約1.5～2cmのブロック状に約5％、7.5YR4/4褐色粘質シルトを点状に約1％含む。

SP395（f—f'）土層注記

1	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトを縦縞状に2本、10YR5/2灰黄褐色シルトを約10%含む。
2	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色シルトを約10%含み、7.5YR4/4褐色粘質シルトを点状に約1％含む。
3	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/4褐色粘質シルトを約40%含み、7.5YR4/4褐色粘質シルトを点状に約2％含む。

SP396（f—f'）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR5/2灰黄褐色粘土を下方中心に約25%含む。
2	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR2/1黒色粘土を径約0.5～2cmの斑点状に約5％、7.5YR4/6褐色粘土を点状に約1％含む。

SP397（f—f'・h—h'）土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトを点状に約10%含む。
2	10YR2/3	黒褐色粘土	7.5YR3/4暗褐色シルトを細かい点状に約2％含む。
3	10YR3/3	暗褐色粘質シルト	10YR2/1黒色シルト質粘土を約25%、10YR2/2黒褐色粘土を約7％含む。
4	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR4/4褐色粘質シルトをブロック状に約10%含む。
5	10YR4/2	灰黄褐色シルト質粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約3％、10YR3/2黒褐色砂質シルトを約10%、10YR4/6褐色粘土を縦縞状、点状に約2％含む。

SP387（g—g'・k—k'）土層注記

1	10YR3/2	黒褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色シルトを径1～2cmのブロック状に約20%、7.5YR4/4褐色シルトを縦縞状、点状に約3％混入。
2	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色粘土を約35%、5YR3/4暗赤褐色粘土を縦縞状、点状に約2％含む。

SP362（g—g'）土層注記

1	10YR2/3	黒褐色粘土
2	7.5YR2/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を径約3cmのブロック状に約10%含む。
3	7.5YR2/1	黒色粘土	10YR5/3暗褐色粘質シルトをブロック状、点状に約5％含む。
4	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	10YR3/2黒褐色シルト質粘土を径約1～3cmのブロック状に含み、5YR3/4暗赤褐色粘土を斑状、縦帯状に約1％含む。

SP369（g—g'・h—h'）土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトをたいへんかさい点状～径約3cmのブロック状に至るまで約5％、7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を縦帯状に約2％含む。
2	10YR3/1	黒褐色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約15%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトを点状に約1％、7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を点状に約1％含む。
3	10YR3/1	黒褐色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約30%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトをたいへん小さい点状～径約2cmのブロック状に至るまで約5％、7.5YR3/4暗褐色シルト質粘土を点状、縦縞状に約2％含む。

SP400（g—g'）土層注記

1	7.5YR2/1	黒色粘土質粘土	10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土をブロック状に約5％、10YR2/1黒色粘土を1～5cmのブロック状に約5％、10YR3/3暗褐色粘土を点状、斑状に約5％含む。
2	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約30%含む。
3	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR2/1黒色粘土を径約1～2cmのブロック状、斑状に約5％、10YR4/2灰黄褐色シルトを径約1～2cmのブロック状に含む。

第41図　遺構実測図　—SB352・353・420—

SP396（h－h′）土層注記

1	10YR3/2	黒褐色シルト	10YR2/1黒色粘土を約30%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状、点状に約10%含む。
2	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色シルトを約20%、10YR5/3にぶい黄褐色シルトを径約2～3cmのブロック状に約15%含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色粘質シルト	10YR1.7/1黒色粘土を径約1～3cmのブロック状に約2%、10YR5/2灰黄褐色粘土を約20%、7.5YR4/4褐色粘土を点状、縞状に約3%含む。

SP383（i－i′・I－I′）土層注記

1	10YR3/1	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状、斑状に約10%、10YR1.7/1黒色粘土を約30%含む。
2	10YR2/2	黒褐色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を約15%含む。
3	10YR3/3	暗褐色シルト	10YR2/1黒色粘土を約10%、10YR3/1黒褐色粘質シルトを約20%、10YR5/3にぶい黄褐色シルトを約5%、7.5YR4/3褐色シルトを点状に少量含む。

SP384（i－i′）土層注記

1	10YR3/1	黒褐色シルト質粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約20%、10YR4/2灰黄褐色シルトをブロック状、斑状に約10%、5YR3/3暗赤褐色粘土を横縞状に約3%混入。
2	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトを約15%、10YR4/4褐色粘質シルトを約2%混入。

SP385（i－i′）土層注記

1	10YR2/1	黒色シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルトを径約12～2cmのブロック状に約20%、10YR1.7/1黒色粘土を約5%、7.5YR4/4褐色シルト質粘土を縦縞状、点状に約2%混入。
2	10YR3/2	黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土を径約7～2cmのブロック状に約35%、10YR2/1黒色粘土をブロック状、横帯状に約3%混入。

SP386（i－i′・k－k′）土層注記

1	10YR2/1	黒色シルト質粘土	10YR1.7/1黒色シルト質粘土をブロック状に約10%、10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状、点状に約40%含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	10YR3/2黒褐色シルト質粘土を約15%、10YR2/1黒色シルト質粘土を縦縞状に約2%、5YR4/6赤褐色粘土を縦縞状に約1%含む。
3	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトを約15%、10YR1.7/1黒色粘土を径約2～3cmのブロック状に約3%、7.5YR4/4褐色シルトを縦縞状、点状に約1%混入。

SP381（j－j′・I－I′）土層注記

1	10YR3/2	黒褐色シルト	15YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を帯状に約5%混入。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に約7%、10YR1.7/1黒色粘土を下方中心に約10%、5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を帯状に約5%含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色シルト質粘土	10YR1.7/1黒色粘土を径約3cmのブロック状に約7%、7.5YR4/4褐色シルト質粘土を帯状に約5%含む。
4	3		黒色粘土径約1.5cmを2%含む。
5	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	3層、10%混入。

SP388（j－j′・k－k′）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色シルトを約7%、7.5YR3/4暗褐色シルトを縦縞状に約3%含む。

SP389（j－j′）土層注記

1	10YR2/2	黒褐色シルト質粘土	5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を帯状、点状に約7%、10YR5/3にぶい黄褐色シルトをブロック状、点状に約3%含む。
2	10YR2/1	黒色粘土	10YR1.7/1黒色粘土を約20%、10YR3/2黒褐色シルトをブロック状、点状に約7%、5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を帯状、点状に約3%含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色粘土	10YR3/4黒褐色粘土を約40%、7.5YR5/6明褐色シルト質粘土を点状に約5%含み、やわらかめ。

SP390（j－j′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/2黒褐色シルトを斑状に約7%、5YR3/4暗赤褐色シルトを点状、帯状に約5%含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト質粘土	10YR2/1黒色粘土を径2cmのブロック状に1個、径5cmの点状に数個、7.5YR4/4褐色シルト質粘土を帯状、点状に約5%含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルト質粘土を点状、縦縞状に約5%含み、やわらかめ（2.5）。

SP373（m－m′・p－p′）土層注記

1	10YR3/1	黒褐色シルト質粘土	5YR3/6暗赤褐色砂質シルトを帯状に微量混入。
2	10YR3/1	黒褐色粘土	10YR4/1褐灰色粘土を少量含み、やわらか。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	10YR2/2黒褐色粘土を径約3cmのブロック状に約50%含む。

SP375（m－m′）土層注記

1	10YR3/1	黒褐色シルト	10YR5/2灰黄褐色シルトを径約5cmのブロック状に約20%、7.5YR3/4暗褐色シルトを斑状、帯状に約3%含み、しまっている。
2	10YR3/1	黒褐色シルト	10YR4/2灰黄褐色シルトを径約3cmのブロック状に約7%、7.5YR3/4暗褐色シルトを帯状に約5%含み、しまっている。
3	10YR2/1	黒色粘土	やわらかい。
4	10YR2/1	黒色粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に約50%、7.5YR4/4褐色シルトを斑状、帯状に約5%含む。

SP413（m－m′）土層注記

1	10YR1.7/1	黒色シルト質粘土	やわらかめ。
2	10YR3/1	黒褐色粘土	やわらかい。

SP376（n－n′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に約50%、7.5YR4/4褐色シルトを斑状、帯状に約5%含む。
2	10YR4/2	灰黄褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルト質粘土を約15%混入、7.5YR4/4褐色シルトを点状に微量含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色粘土	7.5YR4/4褐色シルトを帯状に微量含む。

SP372（o－o′・p－p′）土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	
2	10YR3/2	黒褐色粘土	やわらかい。

SP374（o－o′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	やわらかめ。
2	10YR3/2	黒褐色シルト質粘土	やわらかい。
3	2.5Y2/1	黒色粘土	やわらかい。

SP393（q－q′）土層注記

1	10YR1.7/1	黒色粘土	10YR4/2灰黄褐色シルトを約10%、7.5YR3/4暗褐色粘質シルトを約1%含む。
2	10YR3/1	黒褐色粘質シルト	10YR1.7/1黒色粘土を径約7cmのブロック状に約30%、7.5YR3/4暗褐色粘質シルトを縦縞状、点状に約3%含む。

SP401（r－r′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	10YR3/1黒褐色シルト質粘土をブロック状、斑状に約3%、5YR3/3暗赤褐色粘土を縦帯状に約2%含む。
2	7.5YR3/2	黒褐色粘土	10YR3/3黒褐色シルトを約40%含む。
3	10YR3/2	黒褐色シルト	10YR1.7/1黒色粘土を約40%、5YR3/3暗赤褐色粘土を縦帯状に約2%含む。

SD380（s－s′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	5YR4/8赤褐色粘土を斑状に約2%混入。

SD378（t－t′）土層注記

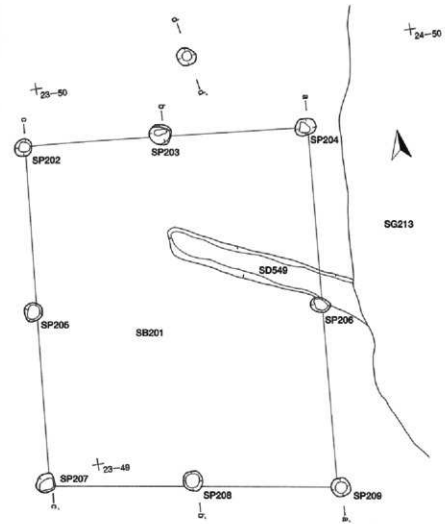
1	10YR3/2	黒褐色粘土	10YR5/3にぶい黄褐色粘土を約15%、5YR3/6暗赤褐色シルト質粘土を縦縞状に約1%含み、10YR4/4褐色シルトを約7%含む。

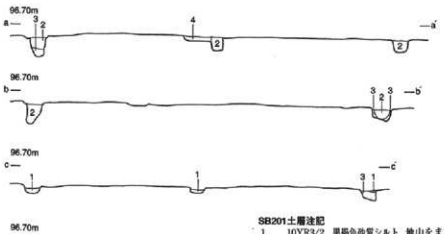
SD377（u－u′）土層注記

1	10YR6/2	灰黄褐色粘土	10YR4/1褐灰色粘土をブロック状、縦縞状、点状に約15%、10YR5/6黄褐色シルト質粘土を7%、2.5YR4/6赤褐色粘土を縦縞状に約3%含む。
2	10YR3/2	黒褐色粘土	25YR4/6赤褐色粘土を縦縞状に約3%含む。

SP371（v－v′）土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土	5YR4/4にぶい赤褐色粘土を帯状に約15%、10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に約10%含む。
2	10YR3/1	黒褐色シルト	5YR4/4にぶい赤褐色粘土を帯状、点状に少量（微量）含む。

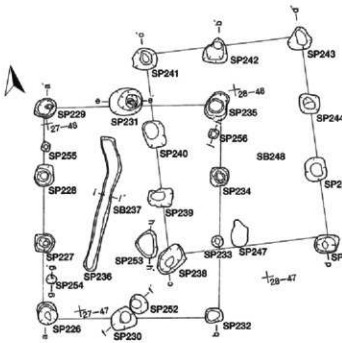


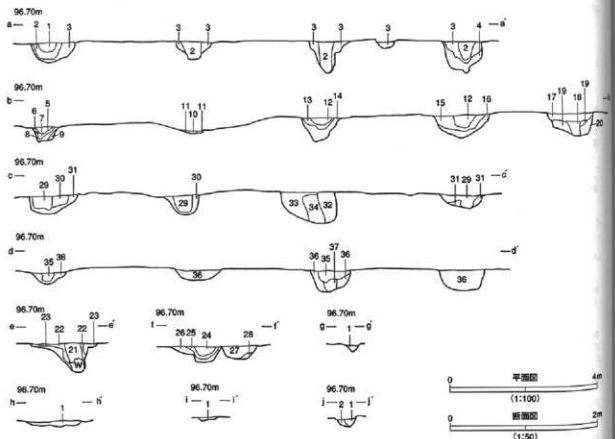


SB201土層注記

	1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト　地山をまだらに40%混入。
	2	10YR2/2	黒褐色シルト　地山をまだらに30%混入。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR2/2黒褐色粘性シルトを1～3cmの斑状、ブロック状に15%混入。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト　1層5%、2層10%混入。
地山		10YR4/3	にぶい黄褐色粘土質シルト　10YR4/1褐灰色粘性シルトを30%、10YR5/6黄褐色粘性シルトをまだらに30%含む。

第42図　遺構実測図　—SB201—





第43図　遺構実測図　—SB237・248—

SB237・248土層注記

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	2層をまだらに10%、28層をまだらに5%混入。
2	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	1層を5%、28層をまだらに3%混入。
3	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	2層をまだらに10%、28層を5%混入。
4	2.5Y4/2	暗黄灰色砂質シルト	2層をまだらに3%、29層を1%混入。
5	10YR2/1	黒色砂質シルト	8層粒0.1～0.5cm大5%、10YR1.7/1黒色砂質シルト粒0.1～0.3cm大3%混入。
6	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	5層をまだらに10%、10YR1.7/1黒色砂質シルトをまだらに3%、5Y4/1灰色砂質シルトをまだらに5%混入。
7	10YR2/1	黒色砂質シルト	8層をまだらに10%、10YR1.7/1黒色砂質シルトをまだらに3%混入。
8	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	5層をまだらに5%、10YR1.7/1黒色砂質シルト粒0.1～0.3cm大1%、5Y4/1灰色砂質シルトをまだらに5%混入。
9	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	5層をまだらに5%、10YR1.7/1黒色砂質シルト粒0.1～0.3cm大1%、5Y4/1灰色砂質シルトをまだらに10%混入。
10	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘土質シルト	2.5Y4/1黄灰色砂質シルトをまだらに5%、10YR1.7/1黒色砂質シルトをまだらに3%混入。
11	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘土質シルト	2.5Y4/1黄灰色砂質シルトをまだらに3%、10YR1.7/1黒色砂質シルトをまだらに1%混入。
12	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	5層粒0.1～0.5cm大5%、6層粒0.1～1cm大5%混入。
13	10YR2/1	黒色砂質シルト	12層、5層、6層を帯状に5%堆積。
14	10YR3/3	暗褐色粘土質シルト	5層をまだらに5%、6層をまだらに10%、12層をまだらに3%混入。
15	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	12層をまだらに20%、5層をまだらに10%混入。
16	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	12層をまだらに5%、5層をまだらに3%混入。
17	10YR2/1	黒色砂質シルト	12層をまだらに10%、5層をまだらに3%、6層をまだらに5%混入。
18	10YR2/1	黒色砂質シルト	12層をまだらに5%、5層をまだらに3%、6層をまだらに1%混入。
19	10YR2/1	黒色砂質シルト	12層をまだらに3%、5層をまだらに3%、6層を3～5cm大のブロック状に20%混入。
20	10YR2/1	黒色砂質シルト	12層粒0.3cm大5%、6層粒0.3cm大5%混入。
21	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	地山をまだらに5%混入、砂質が強く、木材残る。
22	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	地山をまだらに20%、21層をまだらに5%混入。
23	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	地山をまだらに50%、21層をまだらに3%混入。
24	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	地山をまだらに10%、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトをまだらに5%混入。
25	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	地山をまだらに30%、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトをまだらに3%混入。
26	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	24層をまだらに5%、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトをまだらに3%混入。
27	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	地山28層をまだらに20%混入。
28	2.5Y4/1	黄灰色砂質シルト	24層をまだらに3%、2.5Y3/1黒褐色砂質シルトをまだらに3%混入。
29	10YR2/1	黒色砂質シルト	地山を1～5cm大のブロック状に5%、30層をまだらに5%、地山をまだらに3%混入。
30	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	地山を1～5cm大のブロック状に5%、29層粒0.5cm大5%混入。
31	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	29層をまだらに5%混入。
32	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR3/1黒褐色砂質シルトをまだらに5%混入、しまっている。
33	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	32層をまだらに10%、29層をまだらに5%、10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトを5cm大のブロック状に10%混入。
34	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	29層を5cm大のブロック状に5%、32層をまだらに10%混入。
35	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに5%混入。
36	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを35層にまだらに10%混入、酸化鉄を全体に5%付着。
37	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトをまだらに5%、35層粒子5mm大状に3%混入。
地山	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	

SP254土層注記

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR3/1黒褐色砂質シルトをまだらに10%、10YR2/1黒色砂質シルトをまだらに5%混入。

SP253土層注記

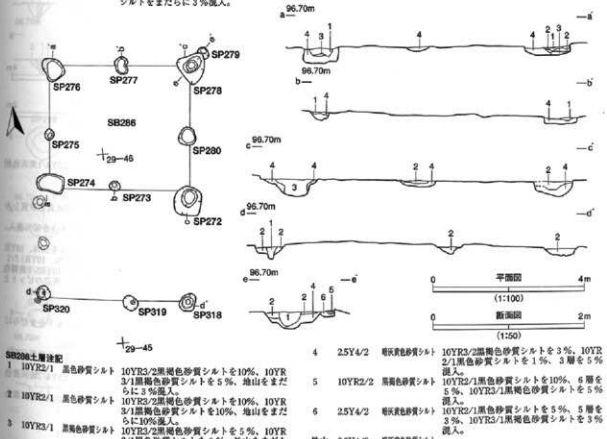
1	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト、2.5Y4/1黄灰色砂質シルトをまだらに20%混入。

SP256土層注記

1	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトをまだらに10%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを5%混入、粘性あり。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトをまだらに5%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを3%混入、粘性あり。

SD236土層注記

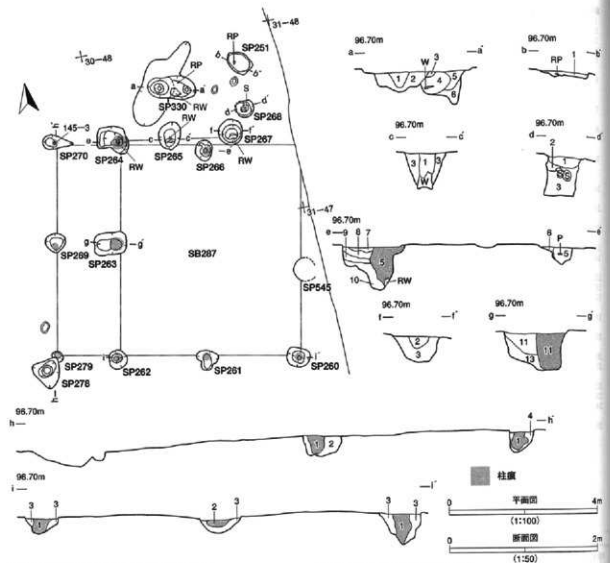
1	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに30%混入。



SB286土層注記

1	10YR2/1	黒色砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを10%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを5%、地山をまだらに3%混入。
2	10YR2/1	黒色砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを10%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを10%、地山をまだらに10%混入。
3	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを5%、10YR2/1黒色砂質シルトを3%、地山をまだらに20%混入。
4	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを3%、10YR2/1黒色砂質シルトを1%、3層を5%混入。
5	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを10%、6層を5%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを5%混入。
6	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを5%、5層を3%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを3%混入。
地山	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	

第44図　遺構実測図　—SB237・248・286—



SB287土層注記（a–a'・b–b'・c–c'・d–d'）

1	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを10%、3層を5%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを5%混入。
2	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	3層を20%、10YR2/1黒色砂質シルトを5%混入。
3	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを5%、1層を3%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを3%混入。
4	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	1層を5%、10YR3/1黒褐色砂質シルトを10%混入。
5	10YR2/1	黒色砂質シルト	6層を10%、地山を5%混入。
6	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを5%、地山を20%、遺物混入。
7	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを10%、地山を10%、5層を5%、まだらに混入。
8	10YR3/2	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを5%、地山を20%、5層を5%、まだらに混入。
9	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを3%。
10			
11	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR3/1黒褐色砂質シルトを0.1～0.5cm大の粒子状に5%、10YR2/1黒色砂質シルトを0.1～0.5cm大の粒子状に5%混入。
12	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	10YR2/2黒褐色砂質シルトを0.5～1cm大の粒子状に5%、地山をまだらに5%、10YR2/1黒色砂質シルトを0.5～1cm大の粒子状に10%混入。
13	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを各々地山に、まだらに10%混入。
地山	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	

SP265・267土層注記（e–e'・s–g'）

1	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	2層を5%混入。
2	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	
3	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	1層をまだらに10%、2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトを20%混入。

SP268土層注記（g–g'）

1	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	2層を5%混入、粘性あり。
2	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	1層を10%、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%混入。
3	10YR2/3	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを50%混入。

SP251土層注記（h–h'）

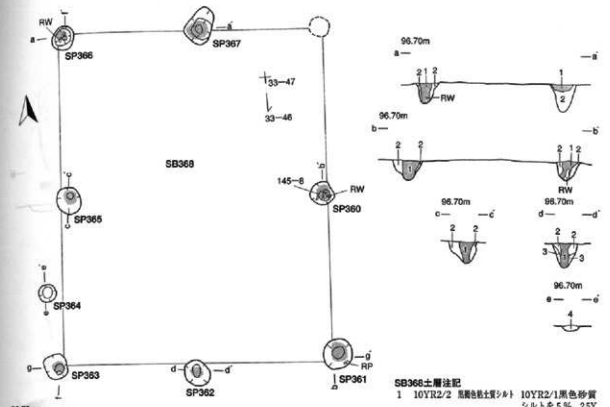
1	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y3/2黒褐色砂質シルトを10%、10YR2/1黒色砂質シルトを5%、10YR1.7/1黒色砂質シルトを5%、10YR5/6黄褐色砂質シルトを3%混入。周辺のピットと異質、人為的埋土。

SP250・330土層注記（i–i'）

1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	
2	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに40%混入。
3	2層に同じ		堆積のまとまりで分層可。
4	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	同色粘土、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%、まだらに含む。
5	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	4層同色粘土を5%、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%混入。
6	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	4層同色粘土を5%、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを20%混入。

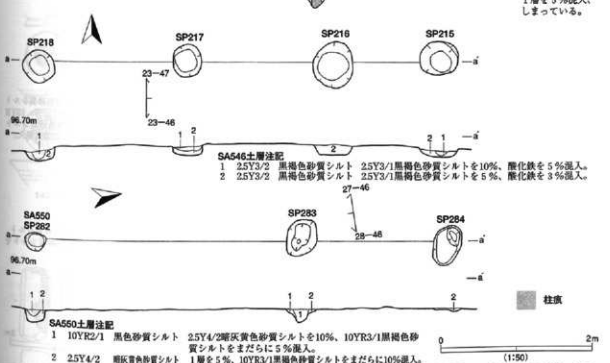
※ 4層・5層抜きとり痕か？

第45図 遺構実測図 —SB287—



SB368土層注記

1	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトを5%、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを3%混入。しまりがない。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	1層をまだらに10%混入。
3	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	1層をまだらに10%混入。
4	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%、1層を5%混入、しまっている。



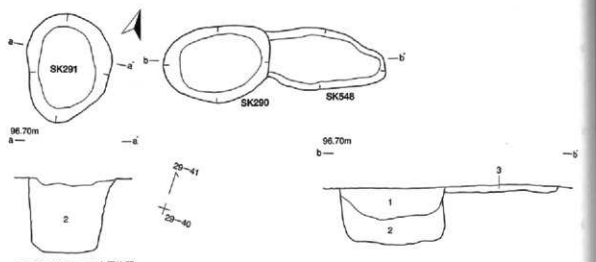
SA546土層注記

1	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	2.5Y3/1黒褐色砂質シルトを10%、酸化鉄を5%混入。
2	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	2.5Y3/1黒褐色砂質シルトを5%、酸化鉄を3%混入。

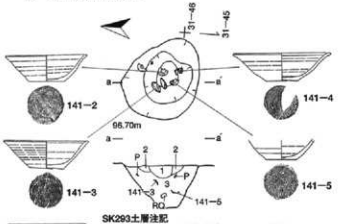
SA550土層注記

1	10YR2/1	黒色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%、10YR3/1黒褐色砂質シルトをまだらに5%混入。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	1層を5%、10YR3/1黒褐色砂質シルトをまだらに10%混入。

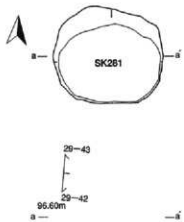
第46図 遺構実測図 —SB368、SA546・550—



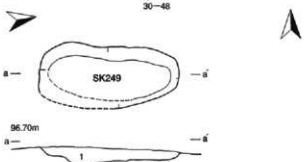
SK290・291・548土層注記
1　7.5Y4/1　灰色砂質シルト　7.5Y2/1黒色砂質シルトを30%、10Y2/1黒色粘土をまだらに20%混入。
2　10Y2/1　黒色粘土　7.5Y2/1黒色砂質シルトを30%、3層をまだらに5%混入。
3　7.5Y4/1　灰色砂質シルト　7.5Y2/1黒色砂質シルトを10%、10Y2/1黒色粘土をまだらに5%混入。
※　1層・2層人為的埋土



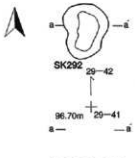
SK293土層注記
1　10YR1.7/1　黒色砂質シルト　粘性あり。
2　10YR2/2　黒褐色砂質シルト
3　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　地山を全体的に10%混入。花粉分析3。
地山　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト
※　1・2層自然堆積、3層人為的埋土



SK281土層注記
1　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　10YR2/1黒色砂質シルトをしま状に10%、10YR4/2灰黄褐色砂質シルトをまだらに20%混入。自然堆積。

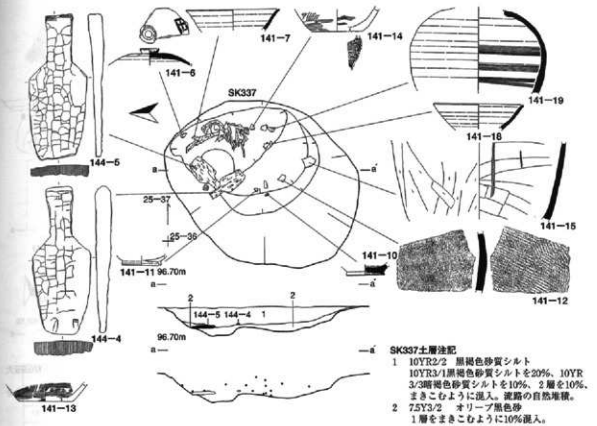


SK249土層注記
1　10YR2/1　黒色砂質シルト　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに10%、10YR2/2黒褐色砂質シルトをまだらに5%混入。

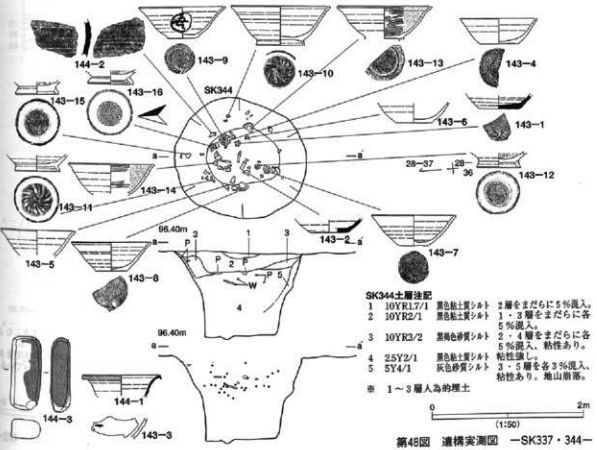


SK292土層注記
1　2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを10%混入。

第47図　遺構実測図　—SK249・281・290〜293・548—

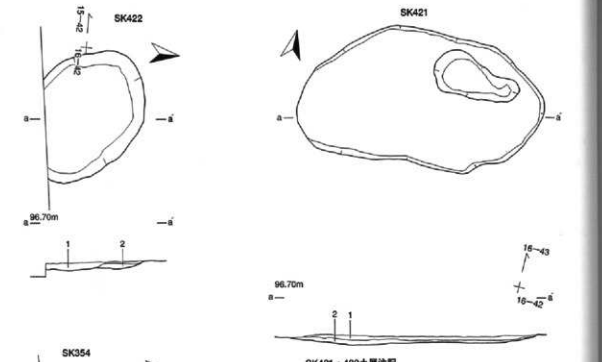


SK337土層注記
1　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　10YR3/1黒褐色砂質シルトを20%、10YR3/3暗褐色砂質シルトを10%、2層を10%、まきこむように混入。流路の自然堆積。
2　7.5Y3/2　オリーブ黒色砂　1層をまきこむように10%混入。



SK344土層注記
1　10YR1.7/1　黒色粘土質シルト　2層をまだらに5%混入。
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト　1・3層をまだらに各5%混入。
3　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　2・4層をまだらに各5%混入。粘性あり。
4　2.5Y2/1　黒色粘土質シルト　粘性強し。
5　5Y4/1　灰色砂質シルト　3・5層を各3%混入。粘性あり。地山崩落。
※　1〜3層人為的埋土

第48図　遺構実測図　—SK337・344—



SK421・422土層注記

1	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルト粒0.5cm大を5%混入。
2	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを30%混入。

SK336土層注記

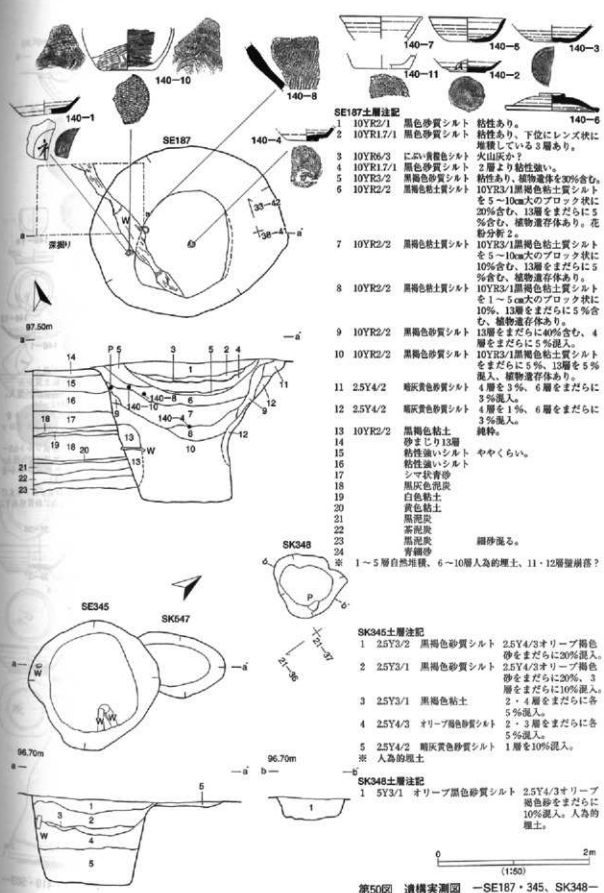
1	10YR2/1	黒色砂質シルト	10YR1.7/1黒色シルトをまきこむように10%混入、しまっている。
2	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまきこむように5%混入、しまっている。

SK359・369土層注記

1	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに5%混入、粘性あり。
2	2.5Y3/1	黒褐色粘土	細砂を5%混入。
3	2.5Y3/1	黒褐色粘土	細砂を10%、2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを20%混入。
4	10Y4/1	灰色砂質シルト	3層をまだらに10%混入。

0 2m (1:50)

第49図　遺構実測図　—SK336・354・359・369・421・422—



SE187土層注記

1	10YR2/1	黒色砂質シルト	粘性あり。
2	10YR1.7/1	黒色砂質シルト	粘性あり、下位にレンズ状に堆積している3層あり。
3	10YR6/3	にぶい黄橙色シルト	火山灰か？
4	10YR1.7/1	黒色砂質シルト	2層より粘性強い。
5	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	粘性あり、植物遺体を30%含む。
6	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1黒褐色粘土質シルトを5～10cm大のブロック状に30%含む、13層をまだらに5%含む、植物遺存体あり。花粉分析2。
7	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1黒褐色粘土質シルトを5～10cm大のブロック状に10%含む、13層をまだらに5%含む、植物遺存体あり。
8	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	10YR3/1黒褐色粘土質シルトを1～5cm大のブロック状に10%、13層をまだらに5%含む、植物遺存体あり。
9	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	13層をまだらに40%含む、4層をまだらに5%混入。
10	10YR2/2	黒褐色砂質シルト	10YR3/1黒褐色粘土質シルトをまだらに5%、13層を5%混入、植物遺存体あり。
11	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	4層を3%、6層をまだらに3%混入。
12	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	4層を1%、6層をまだらに3%混入。
13	10YR2/2	黒褐色粘土	純粋。
14		砂まじり13層	
15		粘性強いシルト	ややくらい。
16		粘性強いシルト	
17		シマ状青砂	
18		黒灰色泥炭	
19		白色粘土	
20		黄色粘土	
21		黒泥炭	
22		茶泥炭	
23		黒泥炭	細砂混る。
24		青磁砂	
※			1～5層自然堆積、6～10層人為的埋土、11・12層壁崩落？

SK345土層注記

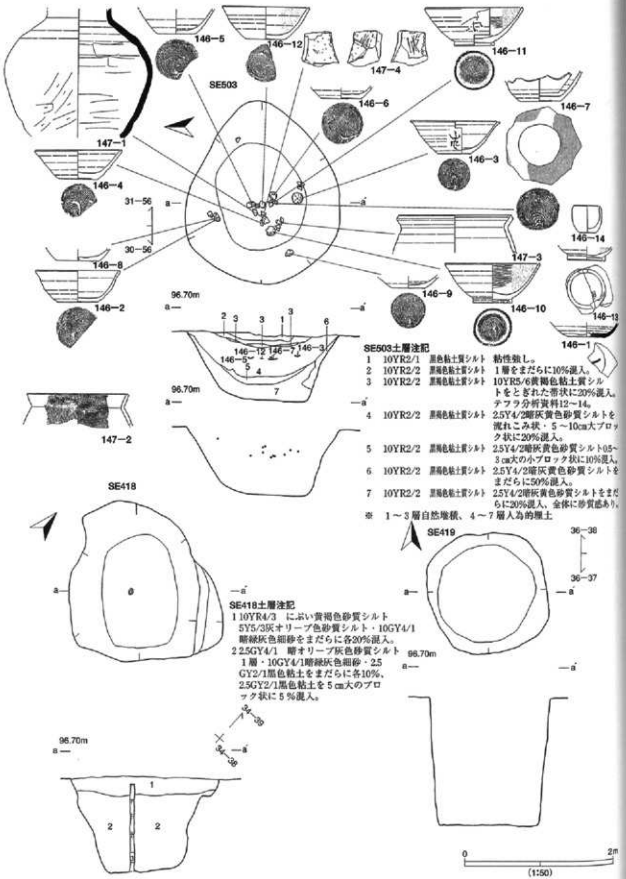
1	2.5Y3/2	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂をまだらに20%混入。
2	2.5Y3/1	黒褐色砂質シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂をまだらに20%、3層をまだらに10%混入。
3	2.5Y3/1	黒褐色粘土	2・4層をまだらに各5%混入。
4	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質シルト	2・3層をまだらに各5%混入。
5	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質シルト	1層を10%混入。
※		人為的埋土	

SK348土層注記

1	5Y3/1	オリーブ黒色砂質シルト	2.5Y4/3オリーブ褐色砂をまだらに10%混入。人為的埋土。

0 2m (1:50)

第50図　遺構実測図　—SE187・345、SK348—



SE503土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土質シルト	粘性強し。
2	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	1層をまだらに10%混入。
3	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	10YR5/6黄褐色粘土質シルトをとぎれた帯状に20%混入。テフラ分析資料12～14。
4	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトを流れこみ状・5～10cm大ブロック状に20%混入。
5	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト05～3cm大の小ブロック状に10%混入。
6	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに50%混入。
7	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトをまだらに20%混入。全体に砂質感あり。

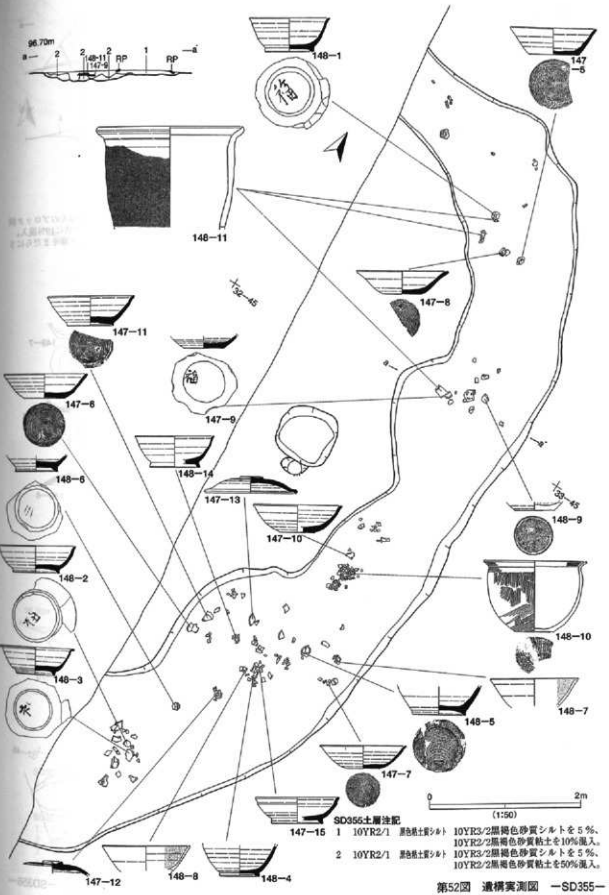
※ 1～3層自然堆積、4～7層人為的埋土

SE418土層注記

1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 5Y5/3灰オリーブ色砂質シルト・10GY4/1暗緑灰色細砂をまだらに各20%混入。

2 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂質シルト 1層・10GY4/1暗緑灰色細砂・2.5GY2/1黒色粘土をまだらに各10%、2.5GY2/1黒色粘土を5cm大のブロック状に5%混入。

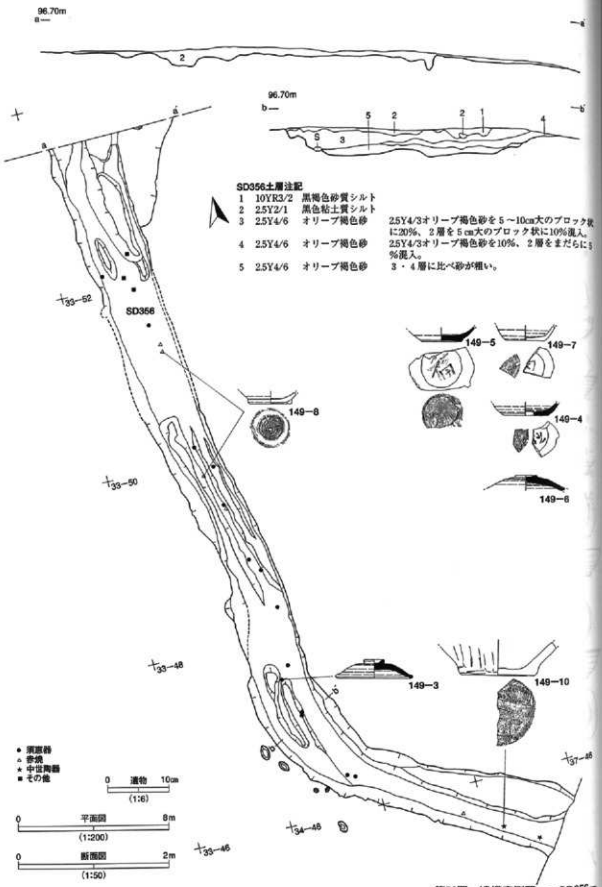
第51図 遺構実測図 —SE418・419・503—



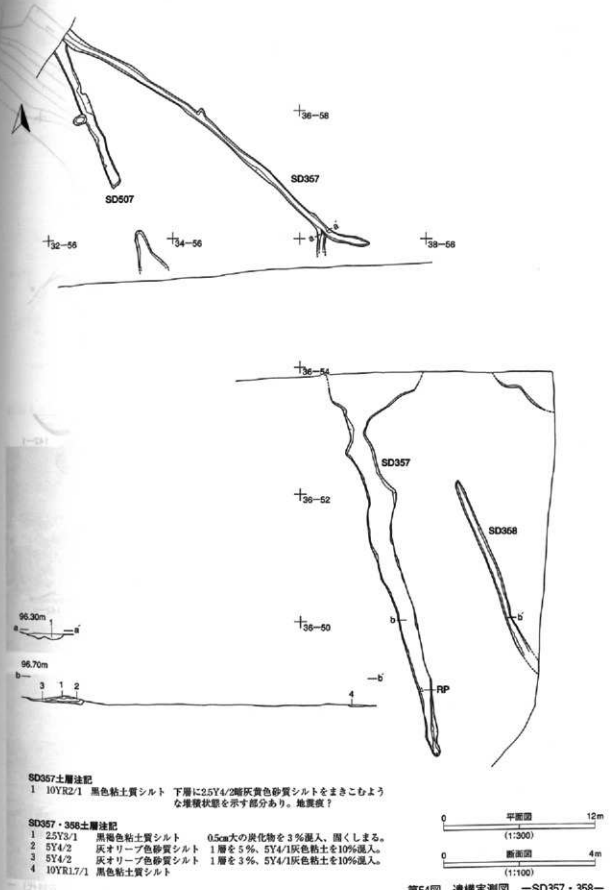
SD355土層注記

1	10YR2/1	黒色粘土質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを5%、10YR2/2黒褐色砂質粘土を10%混入。
2	10YR2/1	黒色粘土質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトを5%、10YR2/2黒褐色砂質粘土を50%混入。

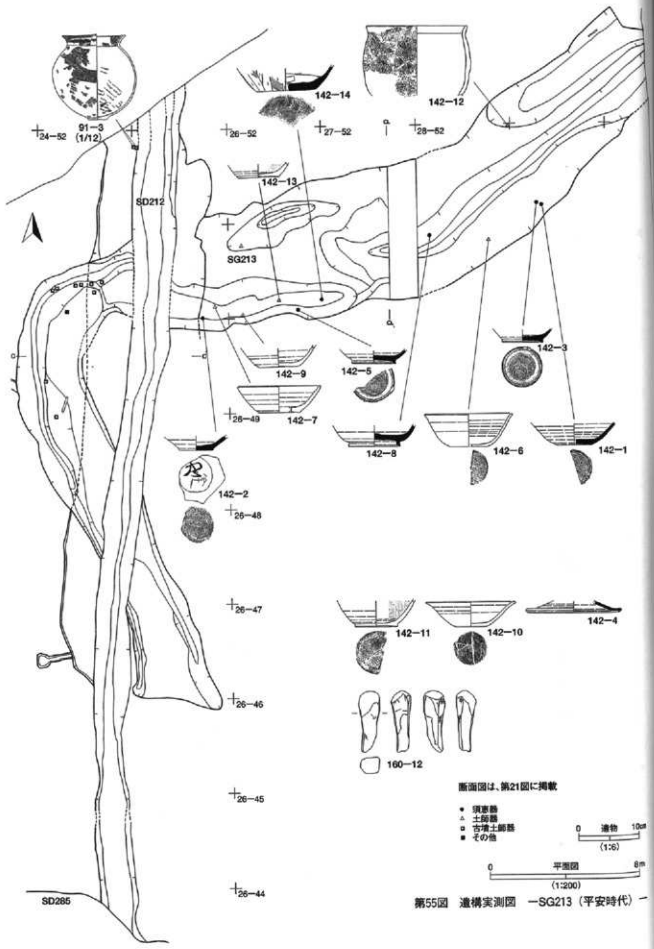
第52図 遺構実測図 —SD355—



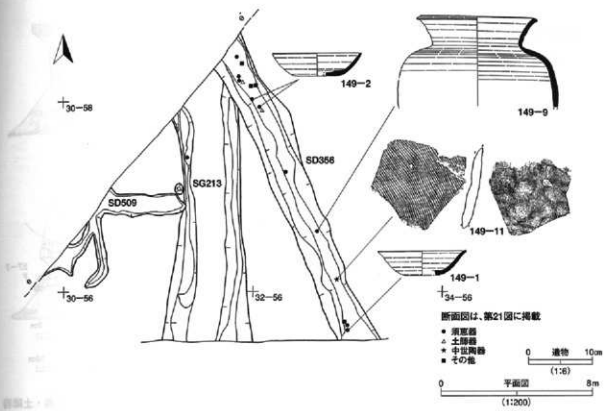
第53図 遺構実測図 —SD356—



第54図 遺構実測図 —SD357・358—



第55図　遺構実測図　−SG213（平安時代）−



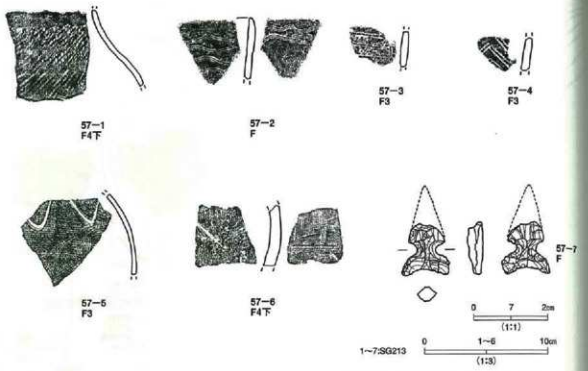
第56図　遺構実測図　−SG213（平安時代）、SD356・509−

鍬入れ式

B地区トレンチ調査状況

A地区表土除去・面整理状況（南西から）

SK337記録作業状況（西から）



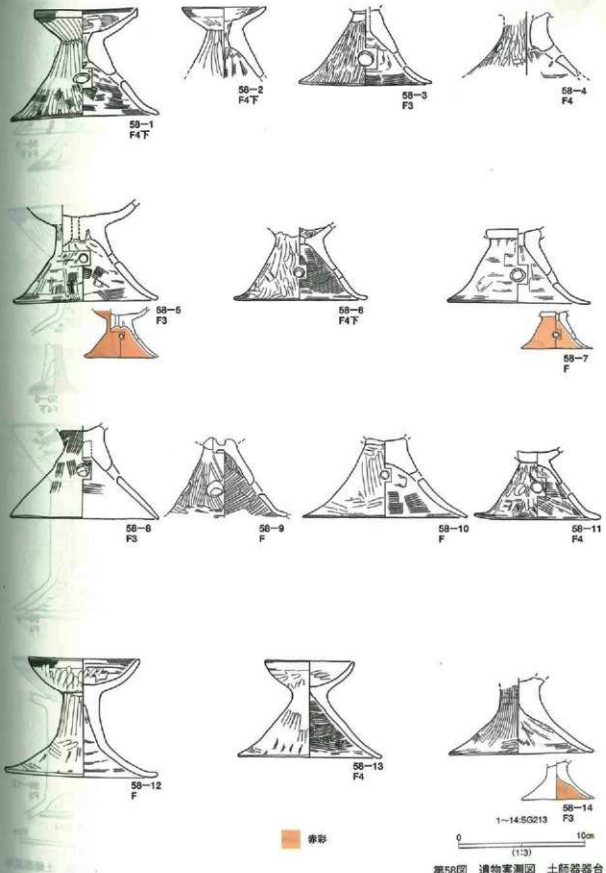
第57図　遺物実測図　弥生土器・石器・土師器

調査説明会

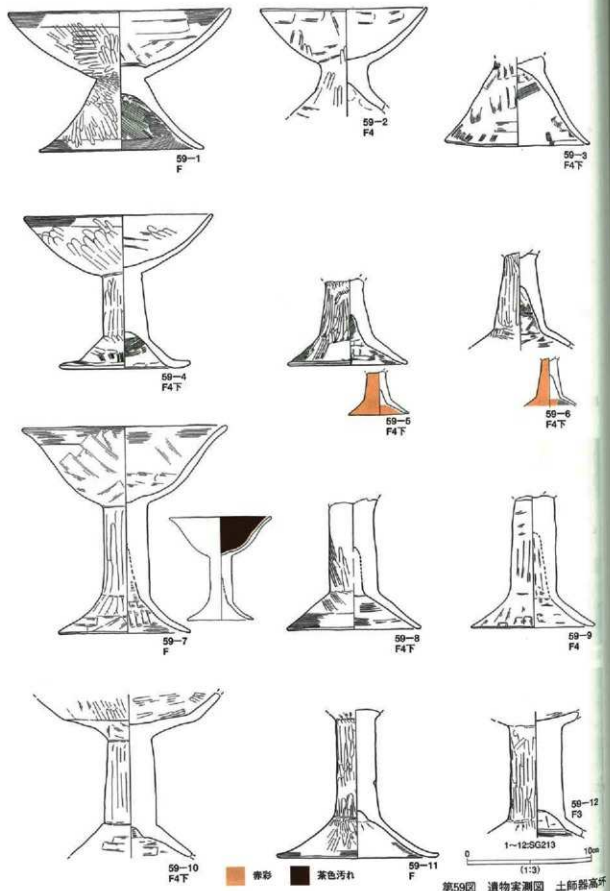
調査説明会

調査説明会（山形大学阿子島功教授）

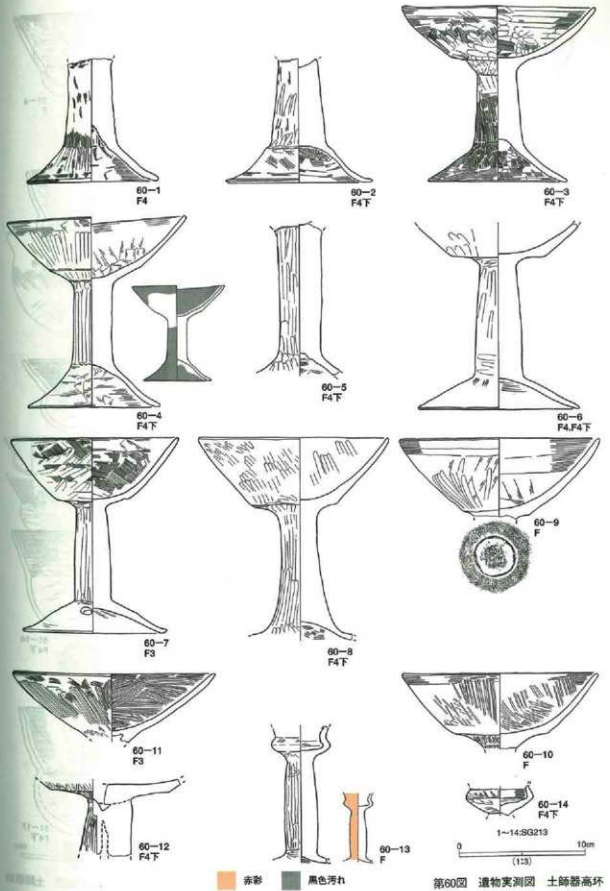
木製品調査指導（仙台市教育委員会荒井格氏）



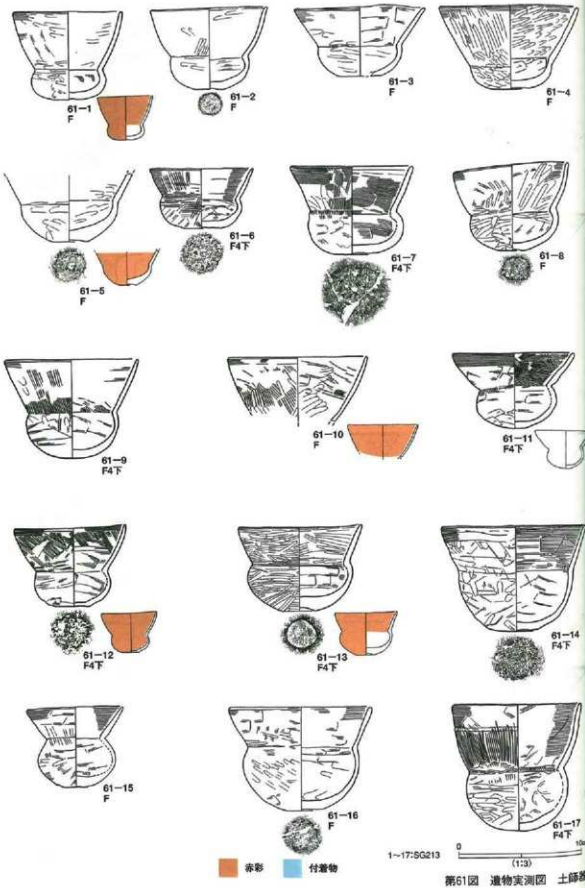
第58図　遺物実測図　土師器器台



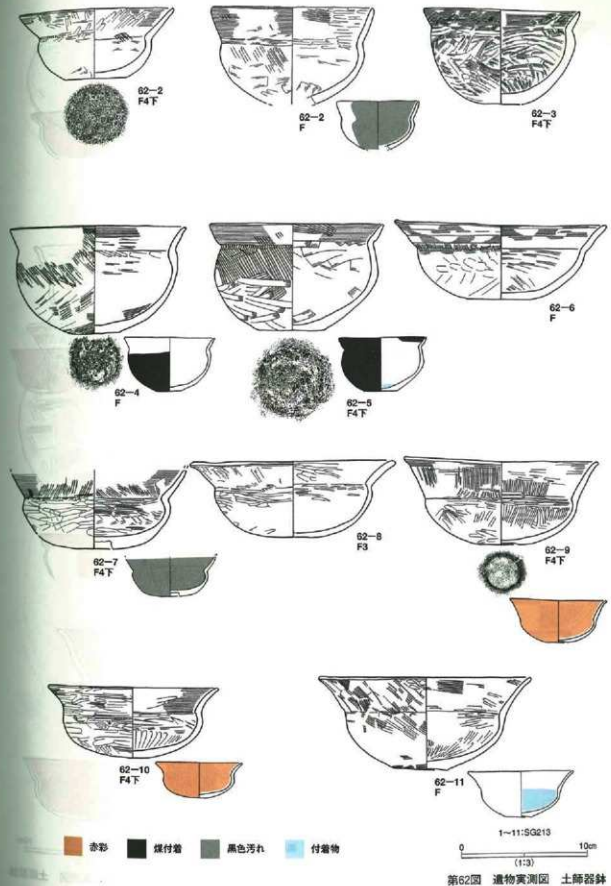
第59図　遺物実測図　土師器高坏



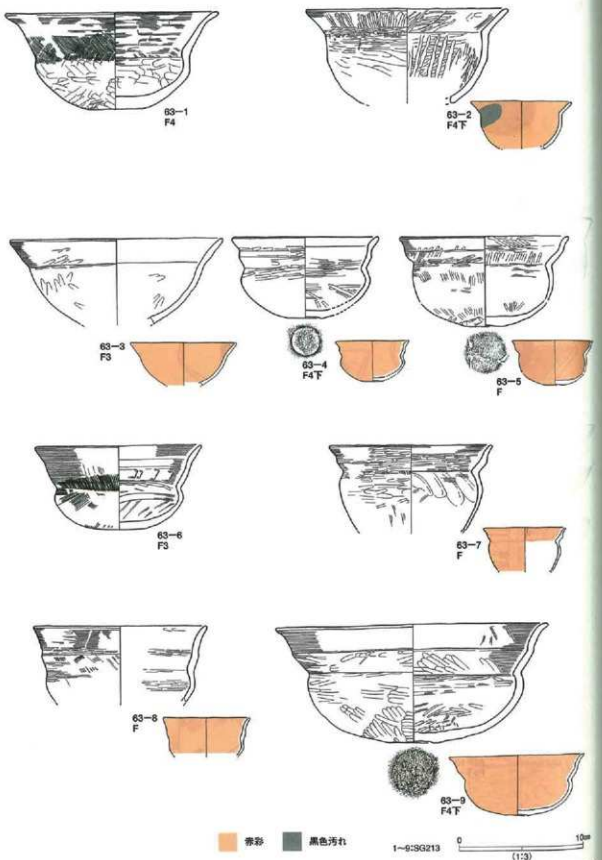
第60図　遺物実測図　土師器高坏



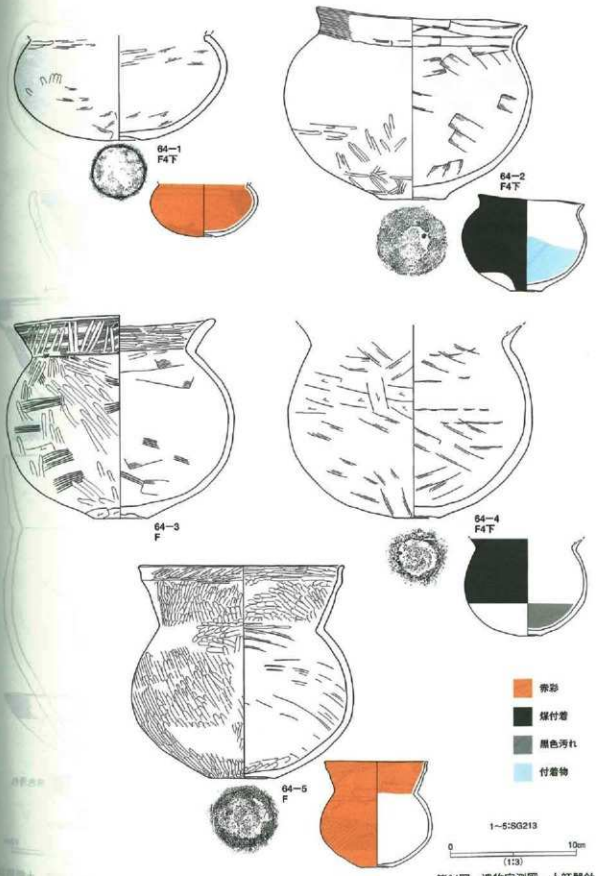
第61図　遺物実測図　土師器鉢



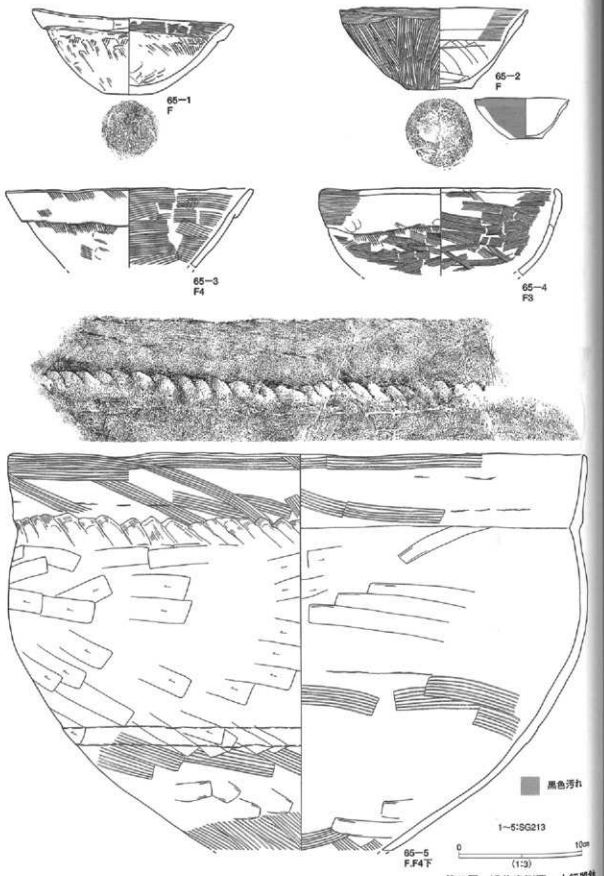
第62図　遺物実測図　土師器鉢



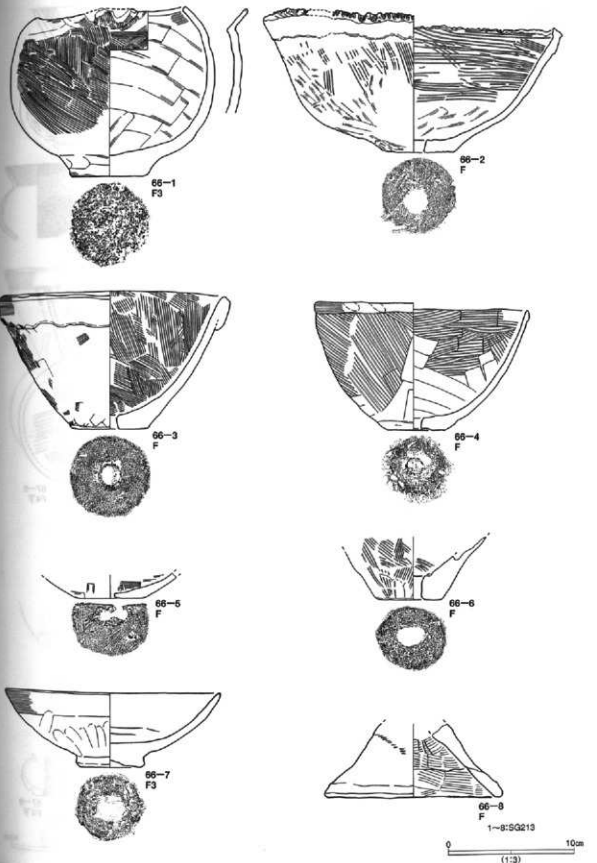
第63図　遺物実測図　土師器鉢



第64図　遺物実測図　土師器鉢

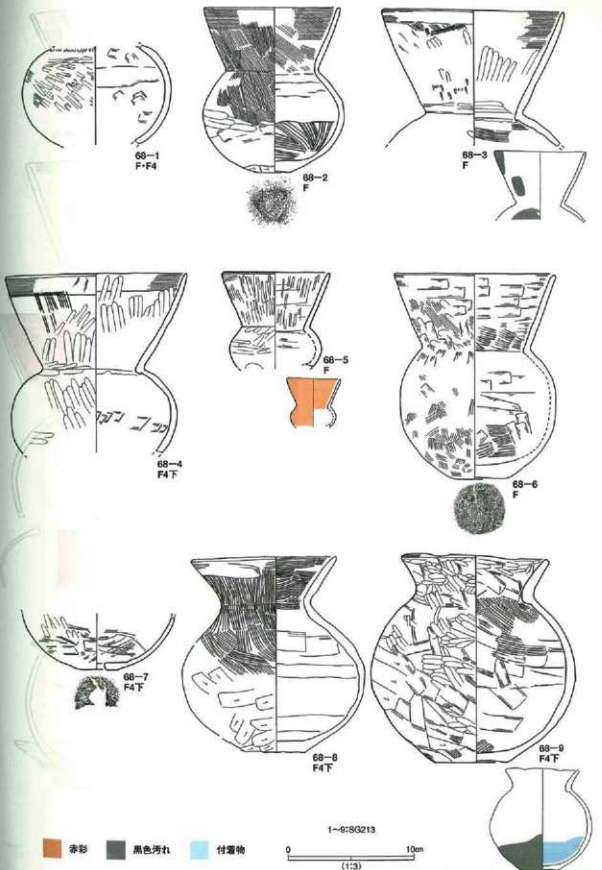


第65図　遺物実測図　土師器鉢

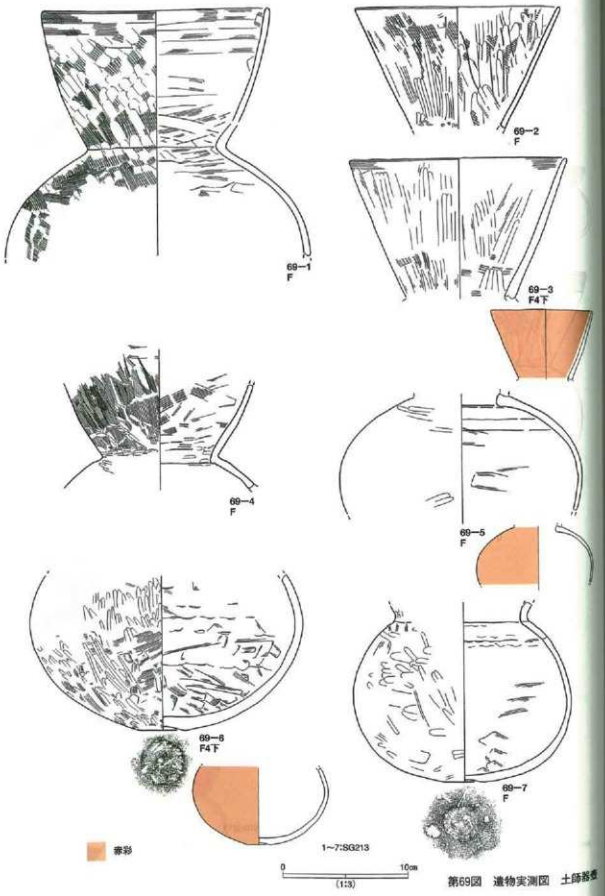


第66図　遺物実測図　土師器鉢・椀形土器・不明品

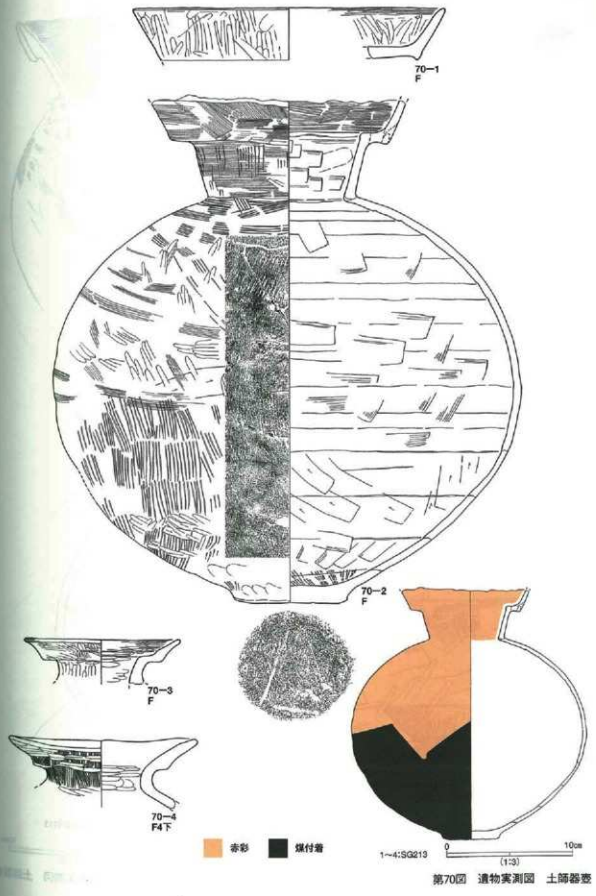
第67図　遺物実測図　土師器壺



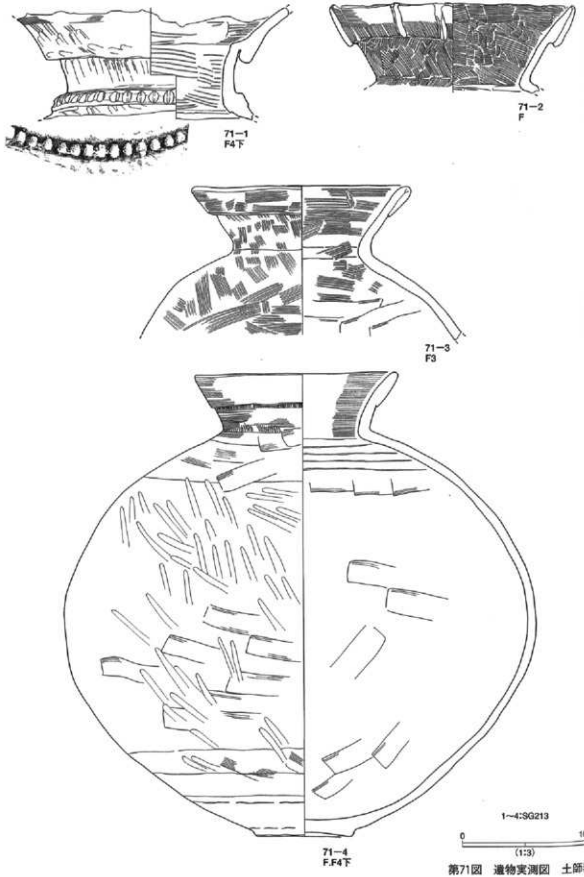
第68図　遺物実測図　土師器壺



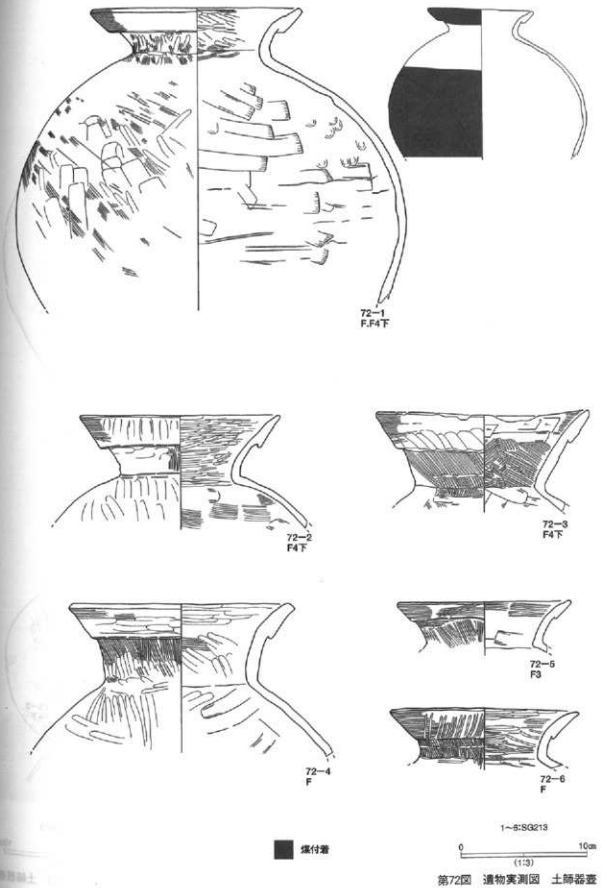
第69図　遺物実測図　土師器壺



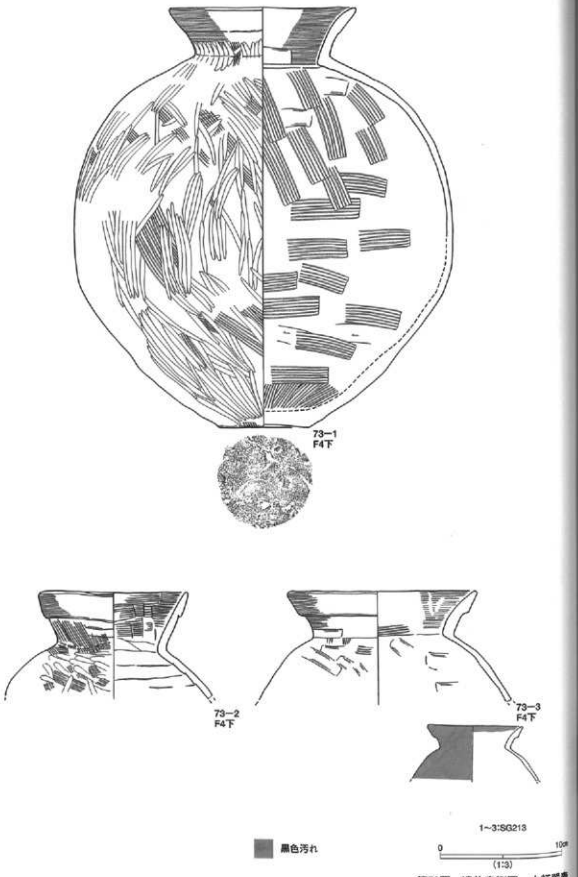
第70図　遺物実測図　土師器甕



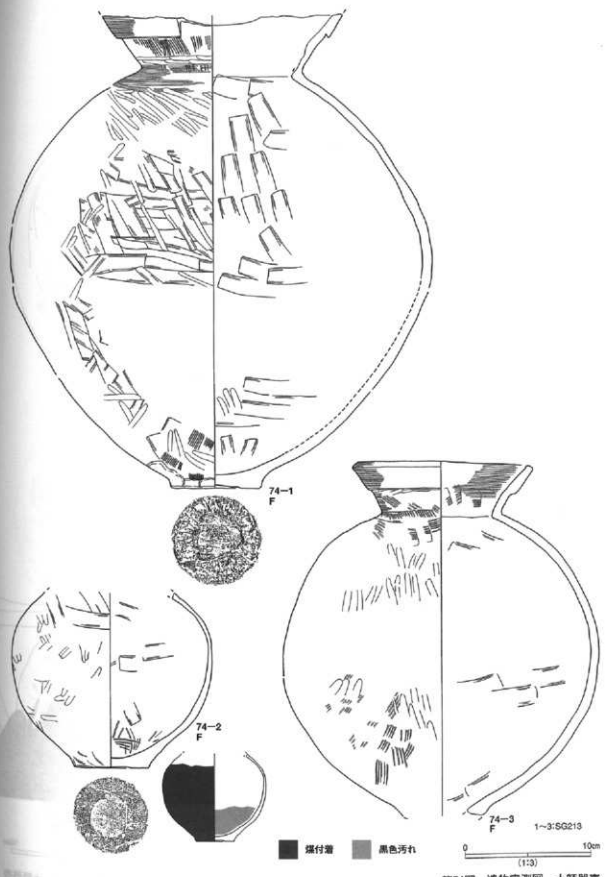
第71図　遺物実測図　土師器壺



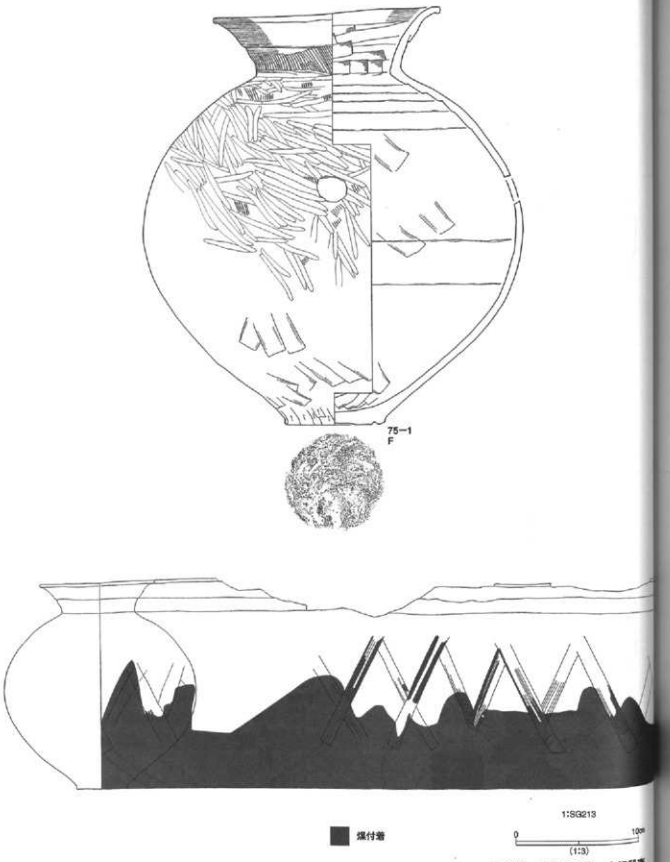
第72図　遺物実測図　土師器壺



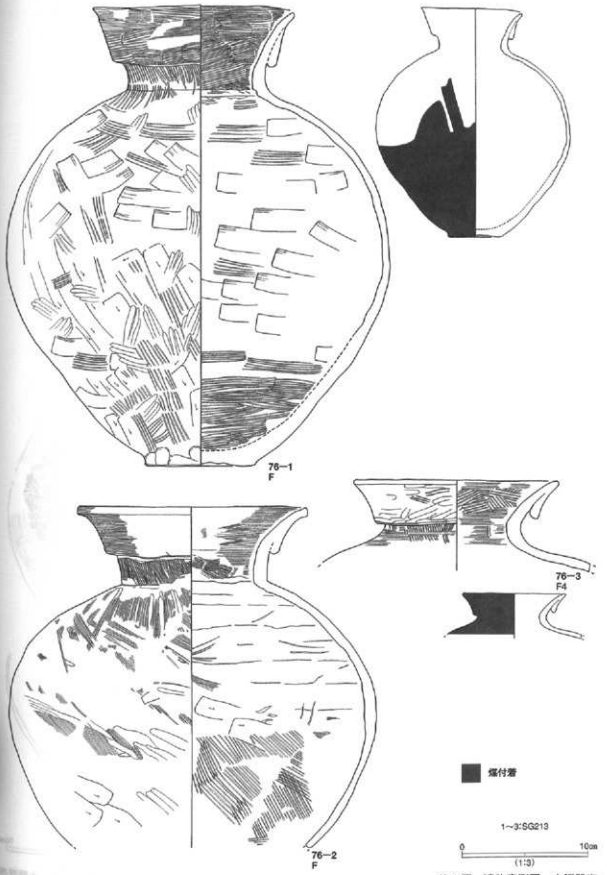
第73図　遺物実測図　土師器壺



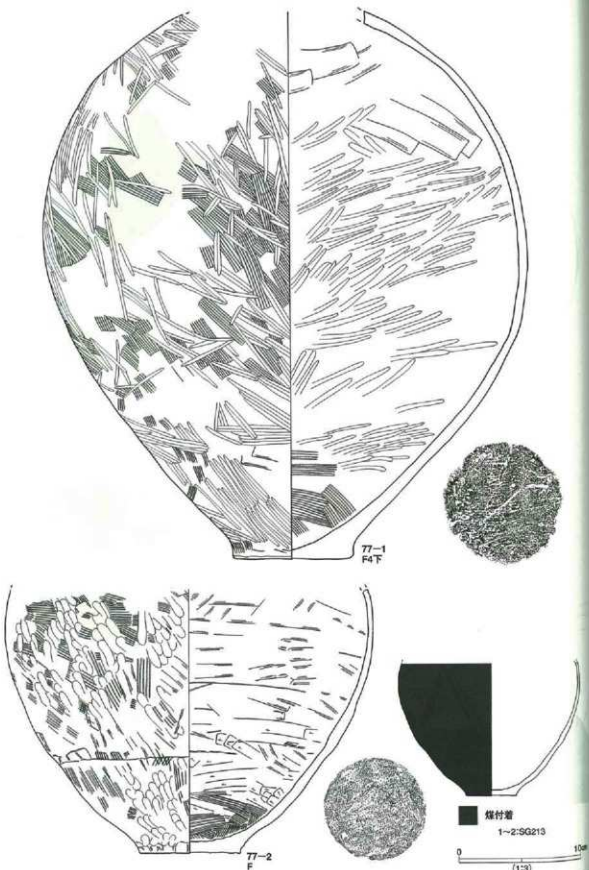
第74図　遺物実測図　土師器壺



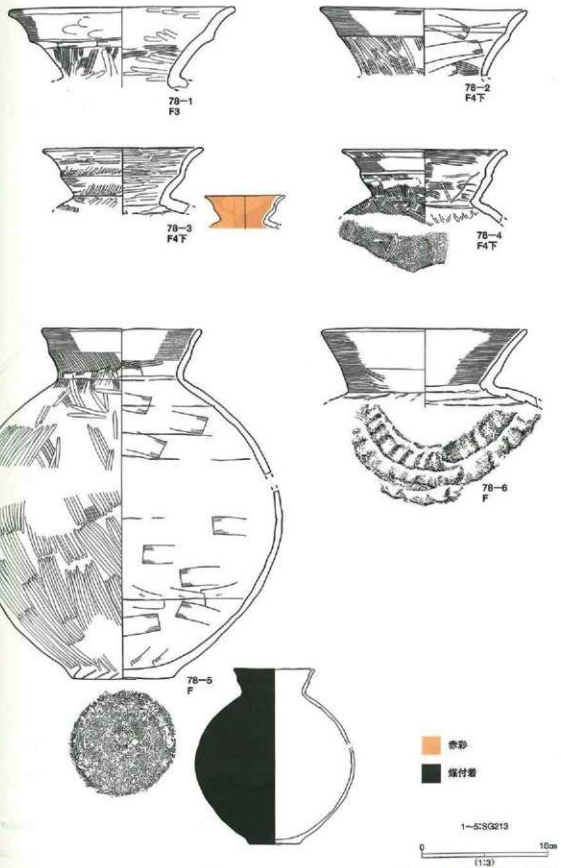
第75図　遺物実測図　土師器甕



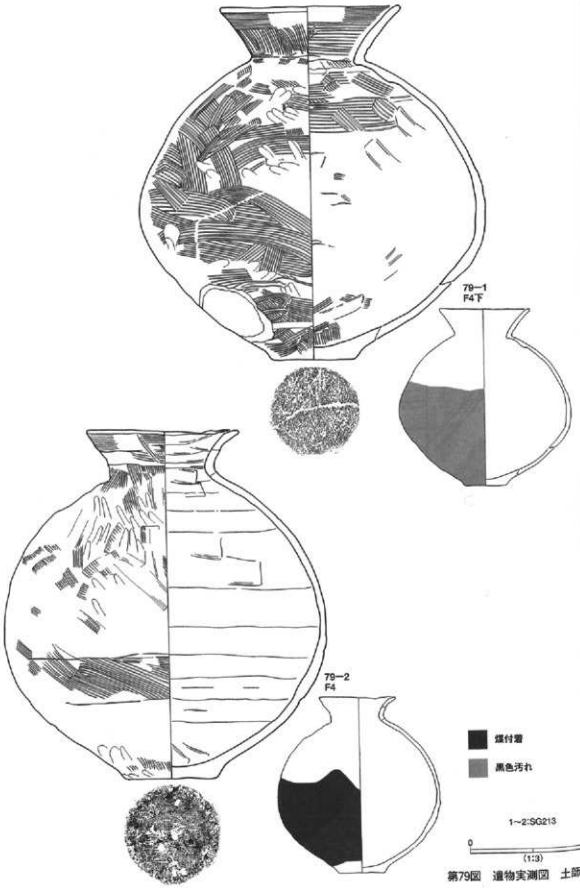
第76図　遺物実測図　土師器甕



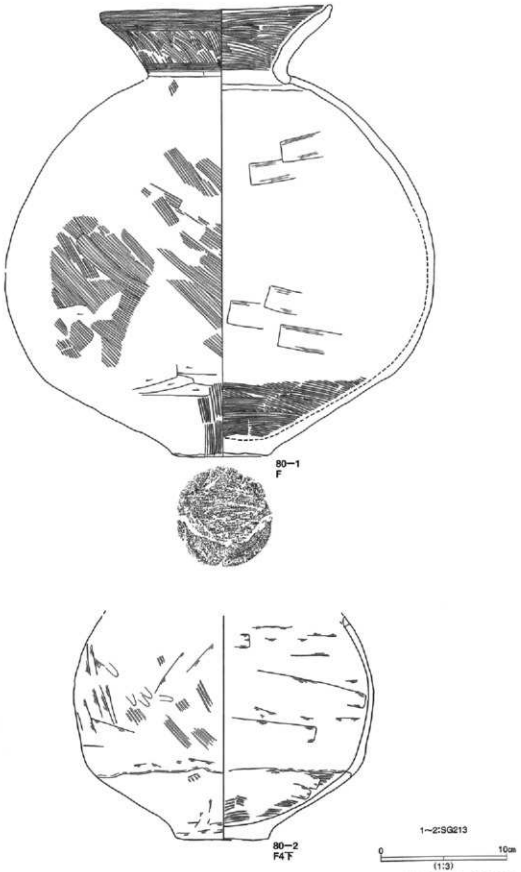
第77図　遺物実測図　土師器壺



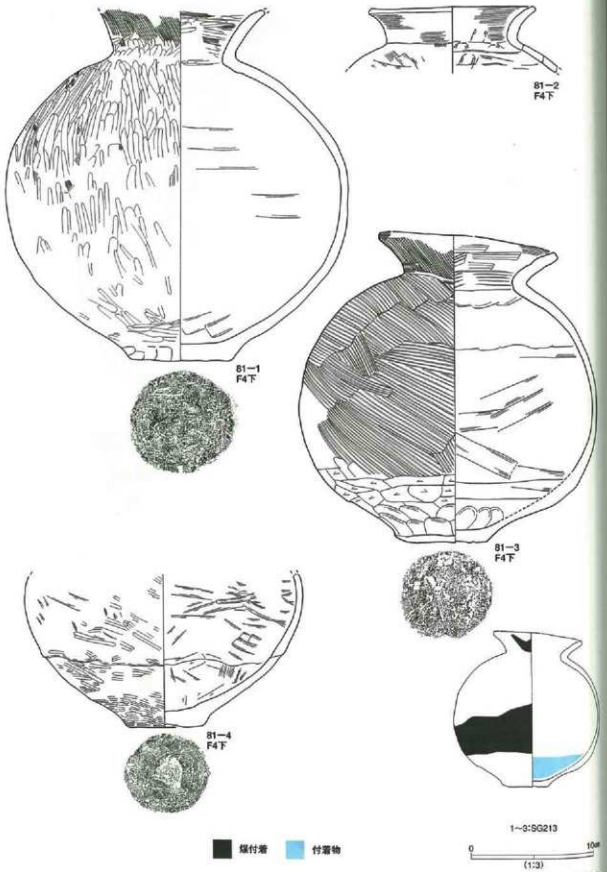
第78図　遺物実測図　土師器壺



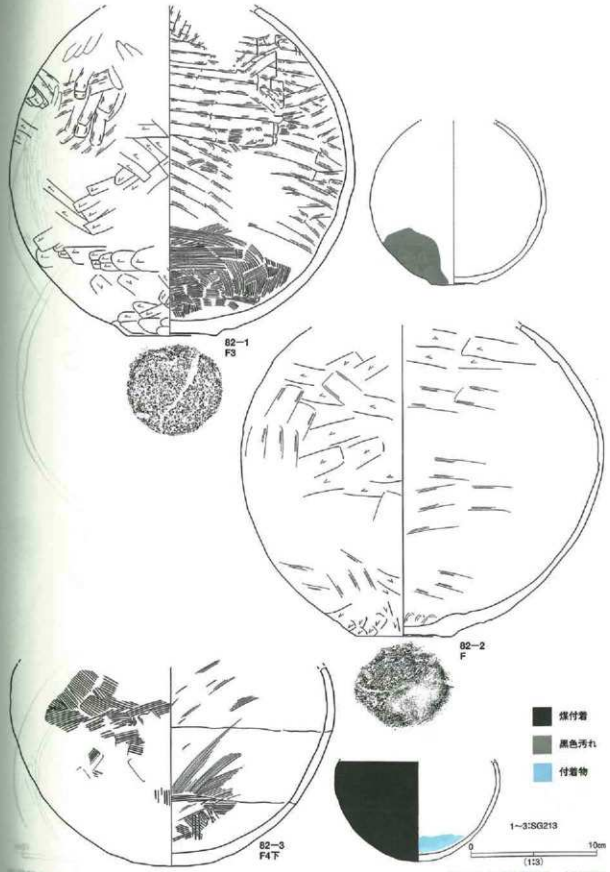
第79図　遺物実測図　土師器壺



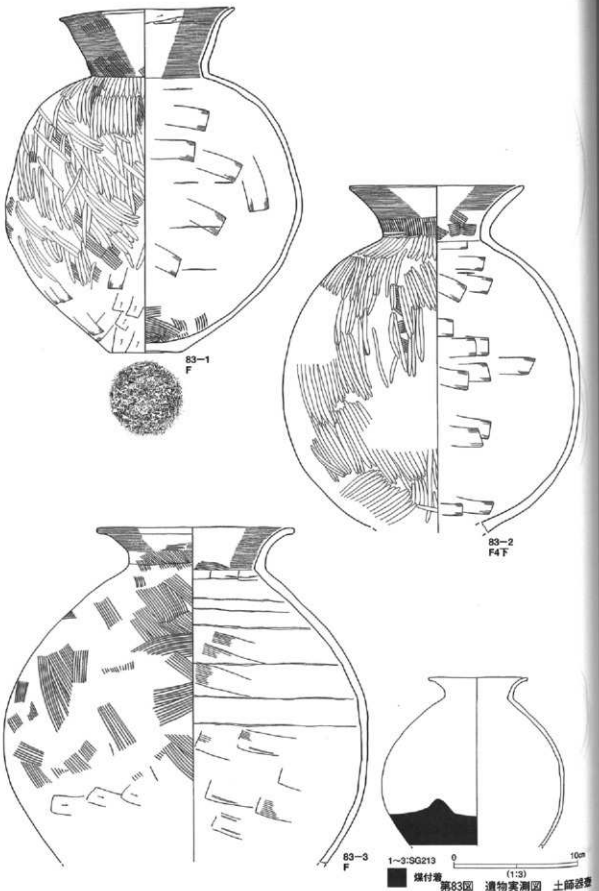
第80図　遺物実測図　土師器壺



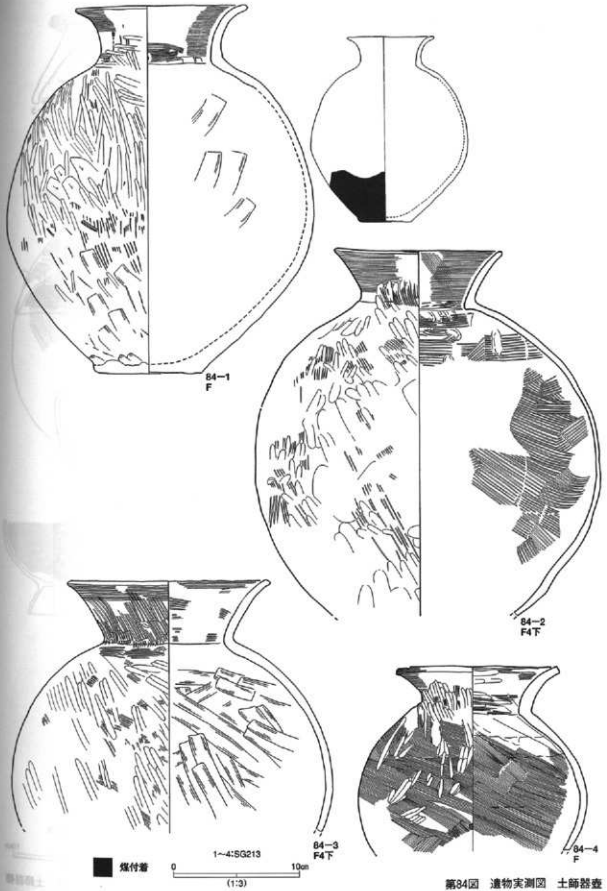
第81図　遺物実測図　土師器甕



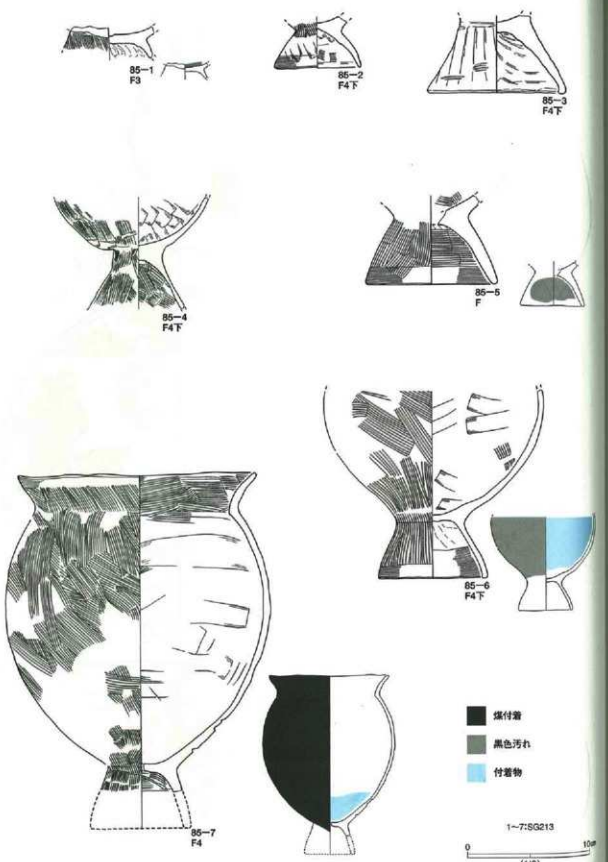
第82図　遺物実測図　土師器甕



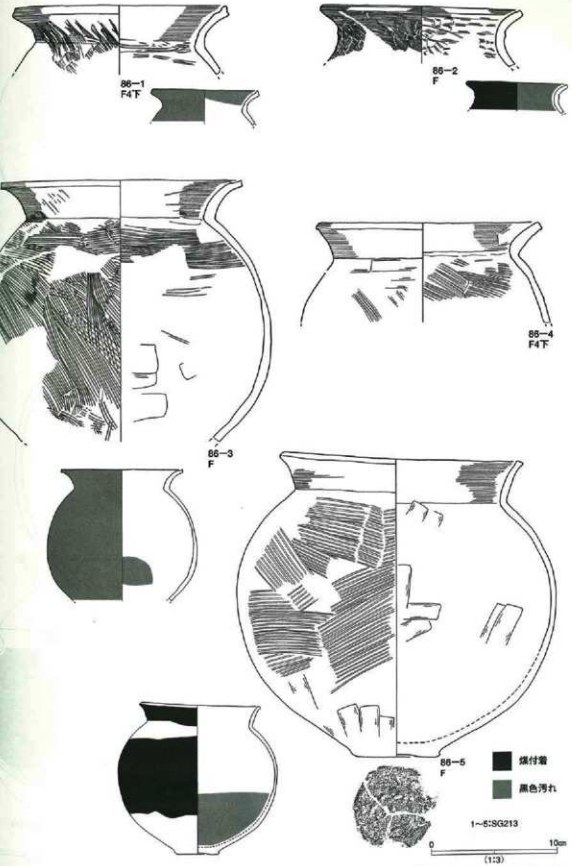
第83図　遺物実測図　土師器壺



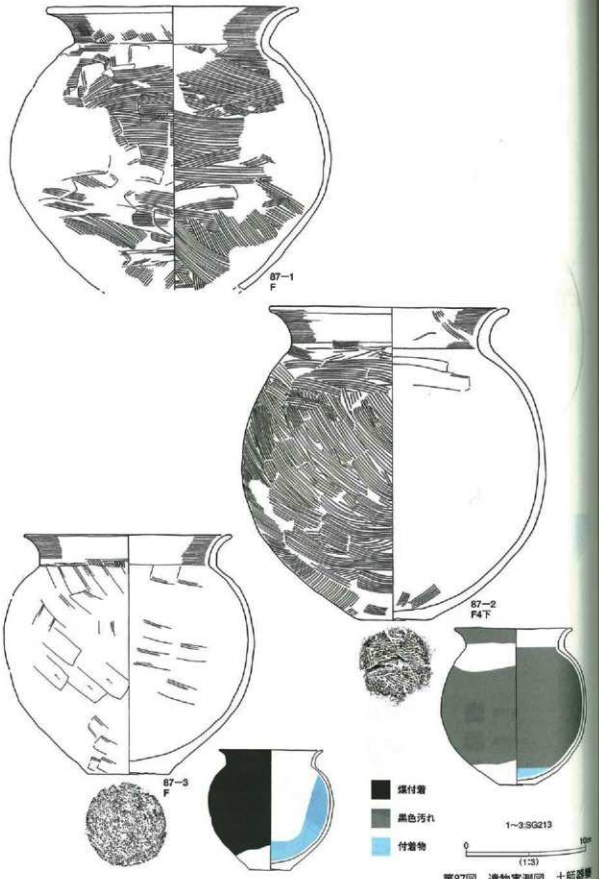
第84図　遺物実測図　土師器壺



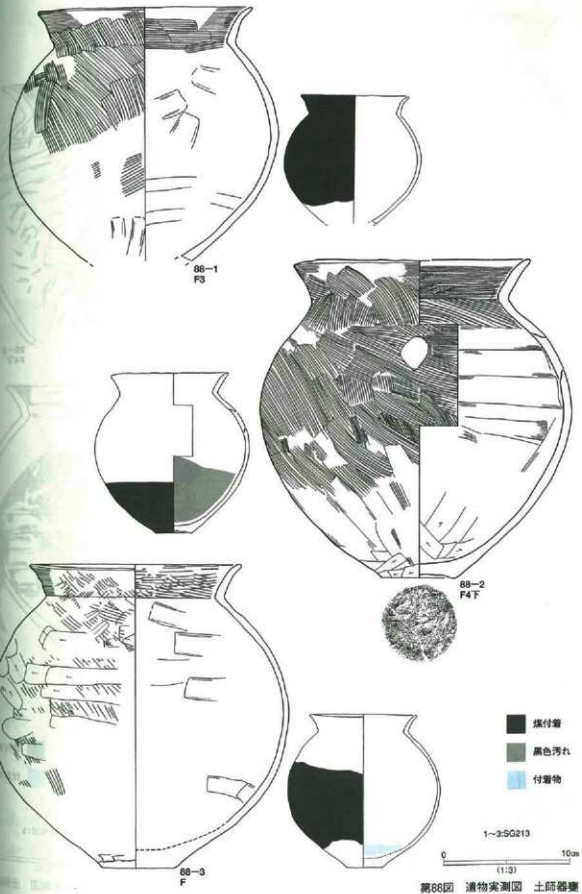
第85図　遺物実測図　土師器甕



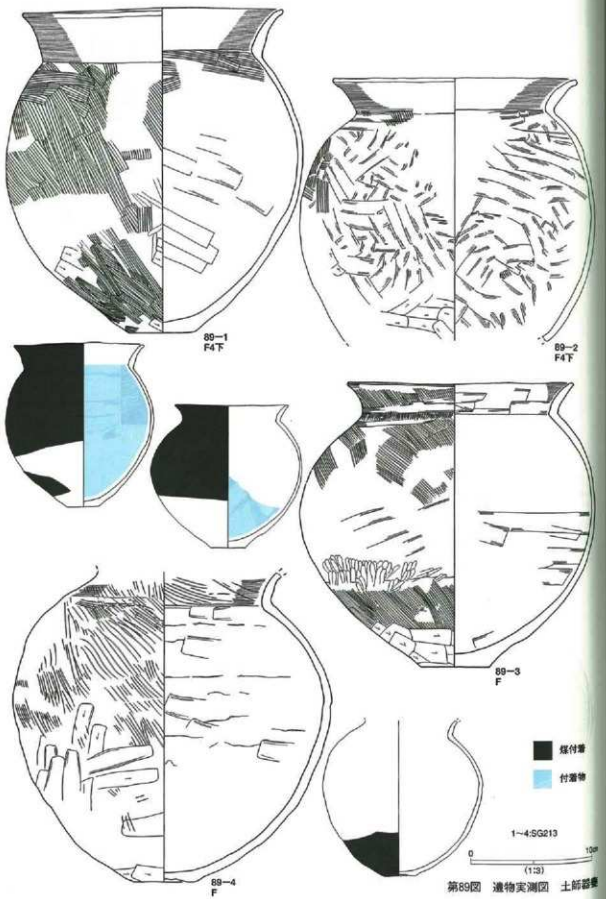
第86図　遺物実測図　土師器甕



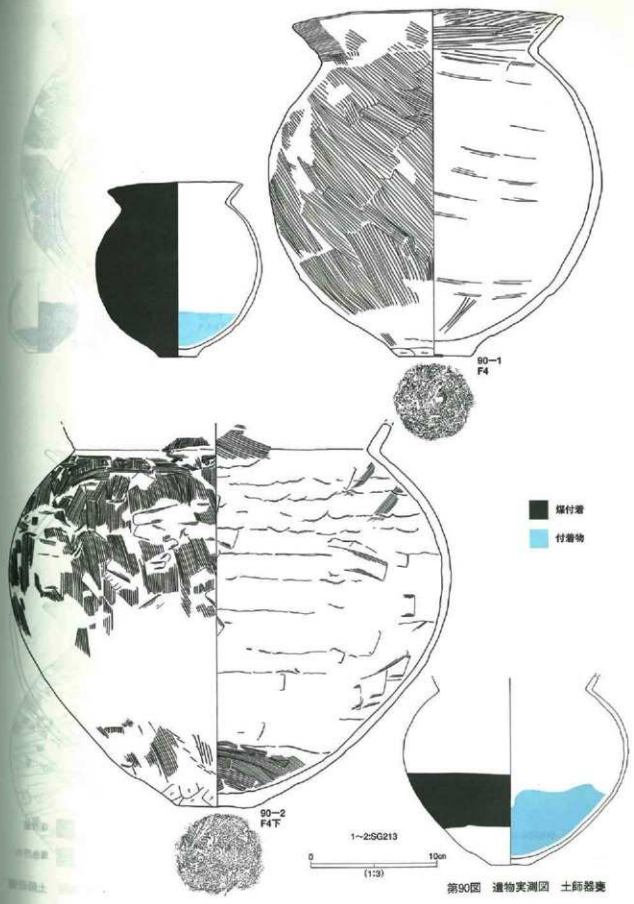
第87図　遺物実測図　土師器甕



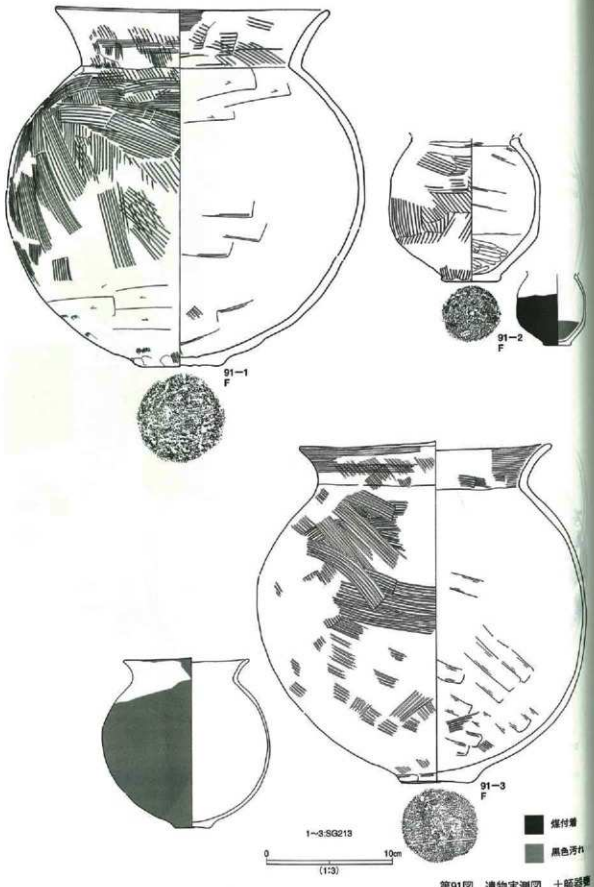
第88図　遺物実測図　土師器甕



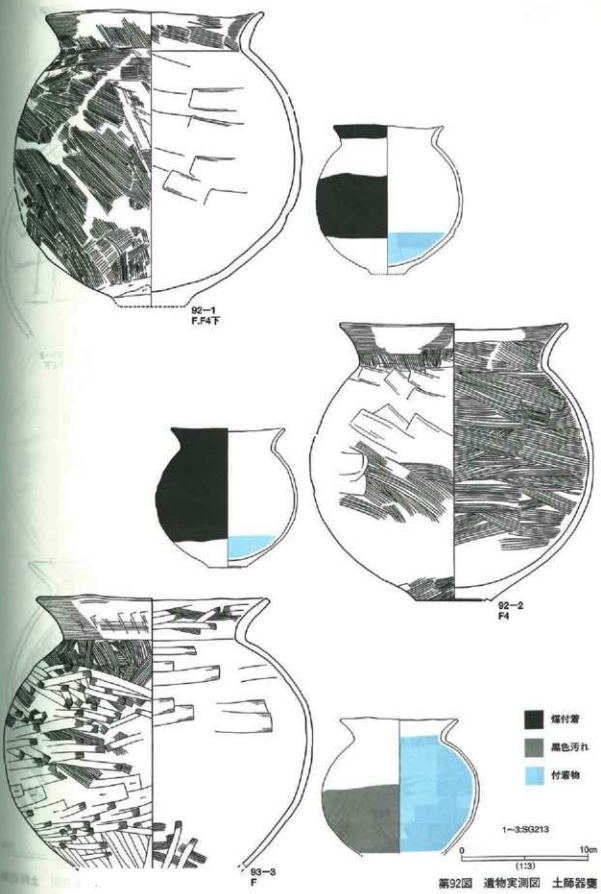
第89図　遺物実測図　土師器甕



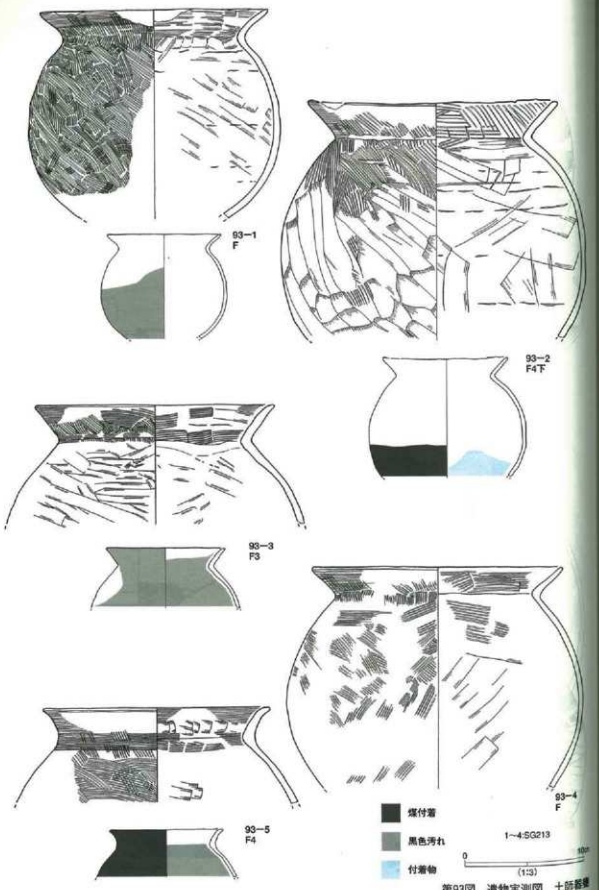
第90図　遺物実測図　土師器甕



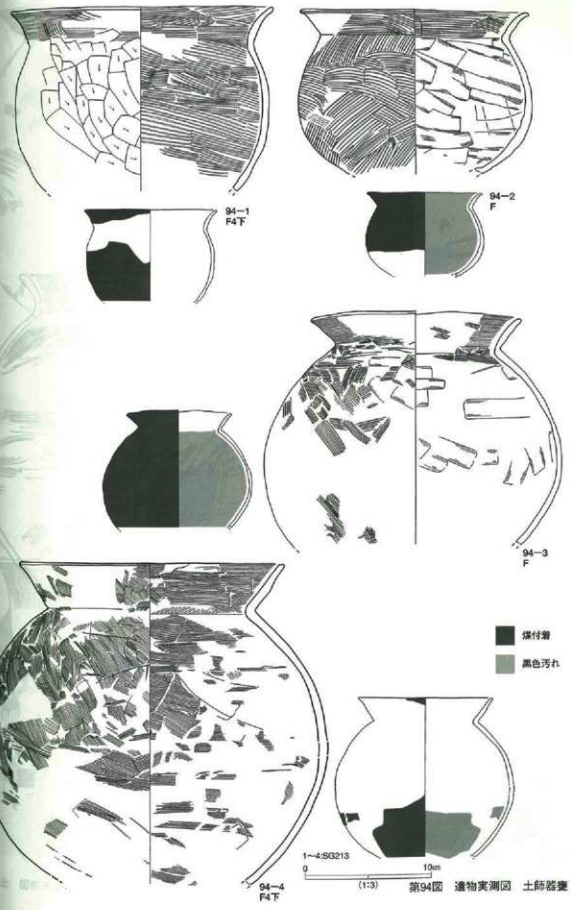
第91図　遺物実測図　土師器甕



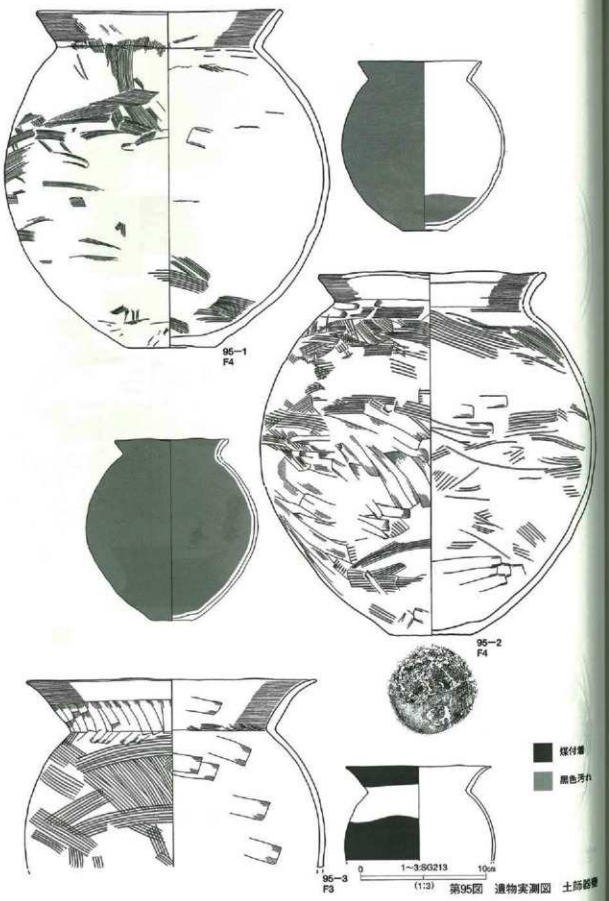
第92図　遺物実測図　土師器甕



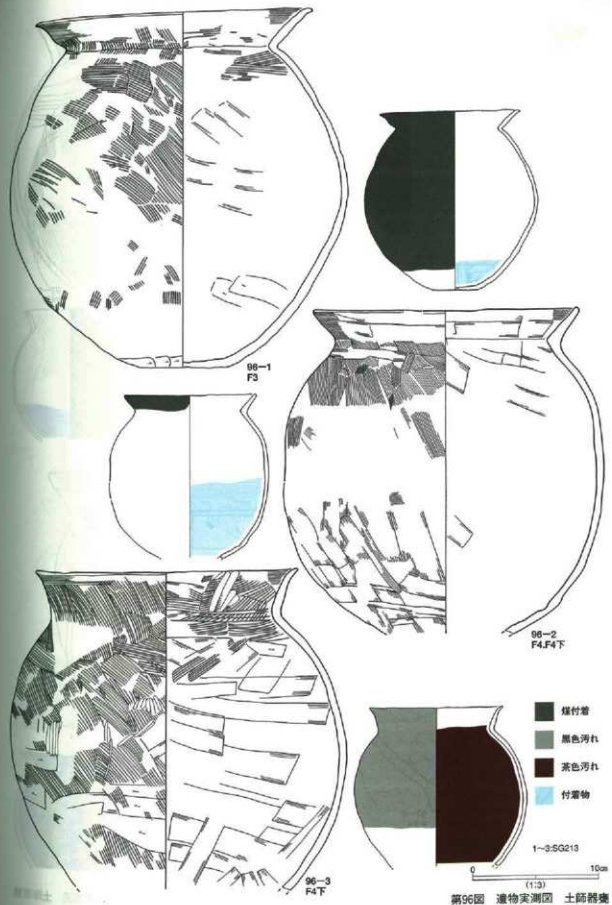
第93図　遺物実測図　土師器甕



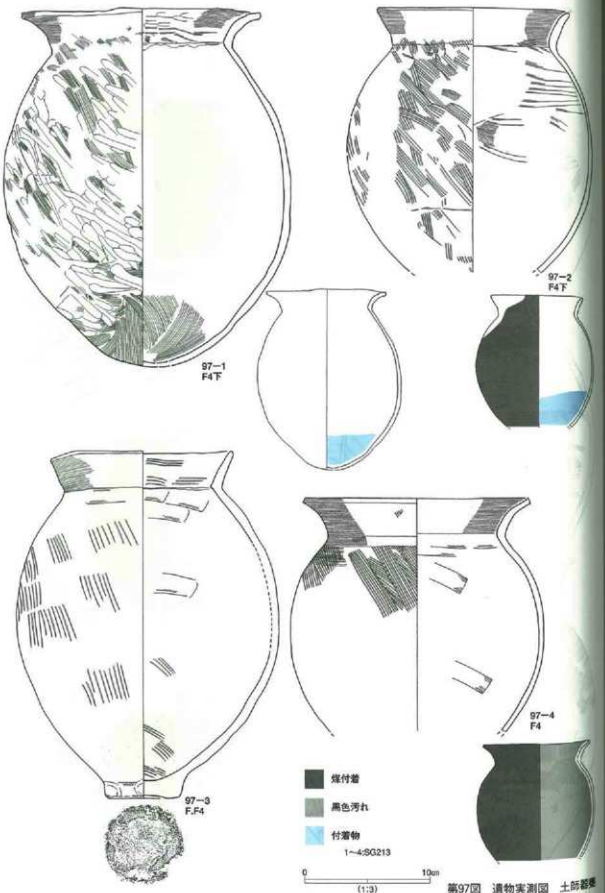
第94図　遺物実測図　土師器甕



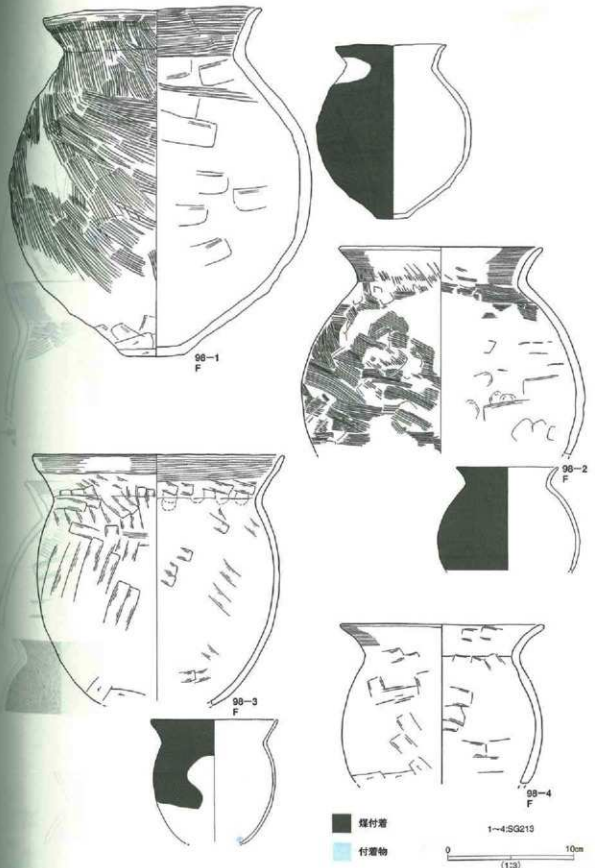
第95図　遺物実測図　土師器甕



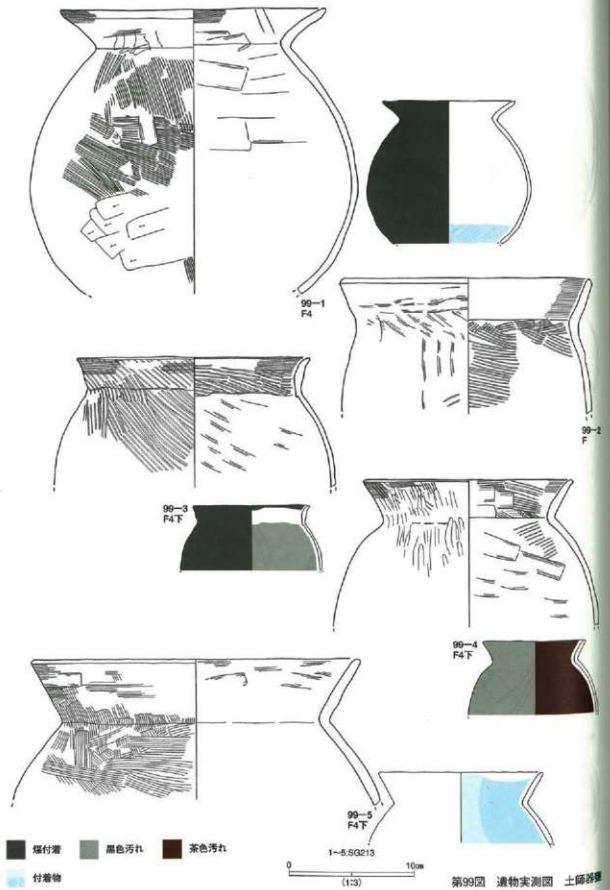
第96図　遺物実測図　土師器甕



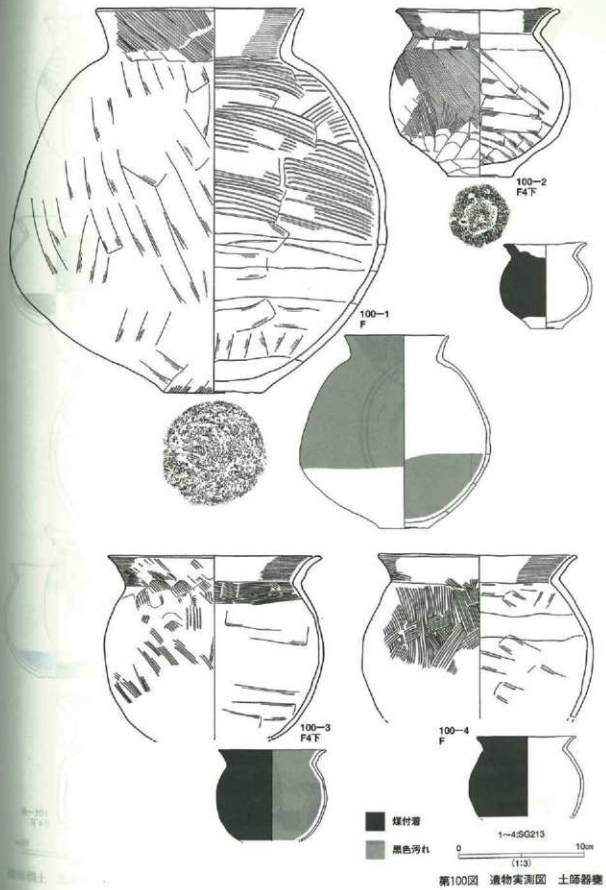
第97図　遺物実測図　土師器甕



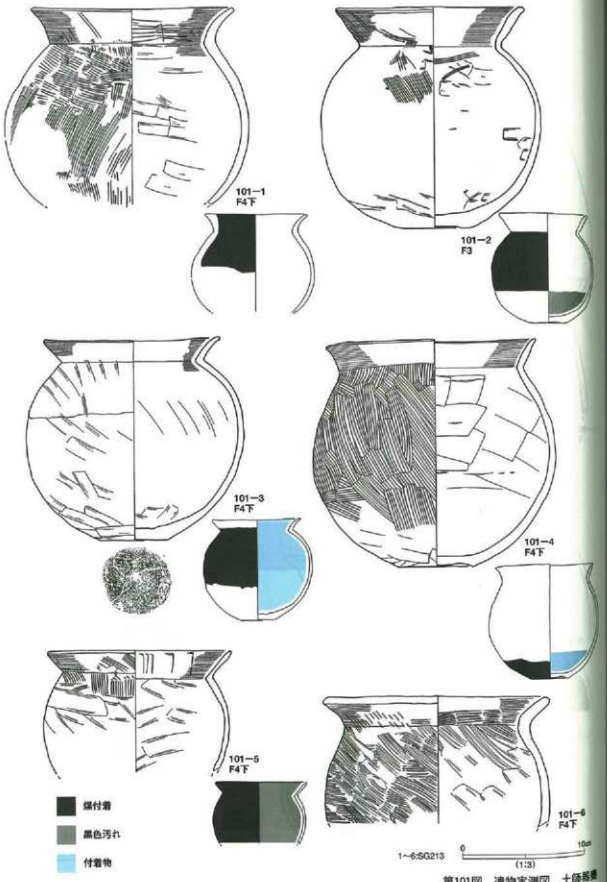
第98図　遺物実測図　土師器甕



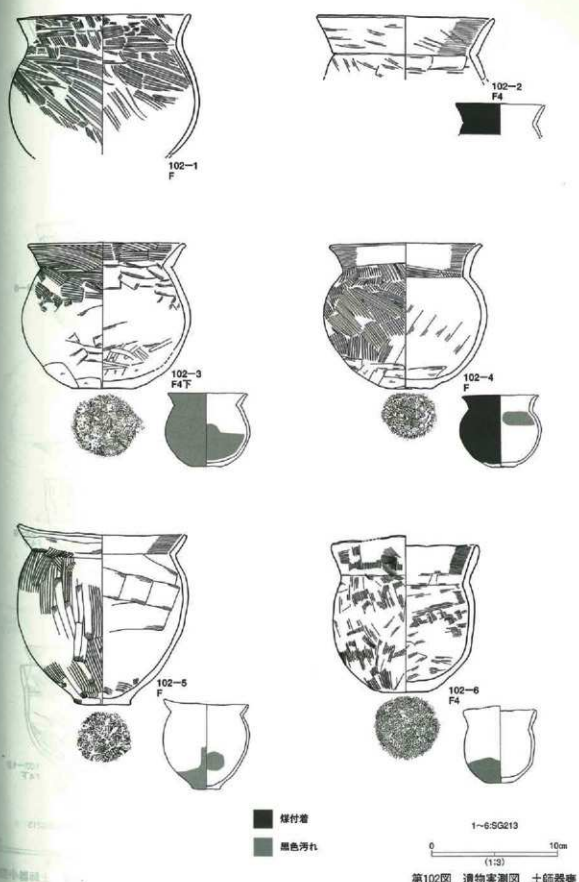
第99図　遺物実測図　土師器甕



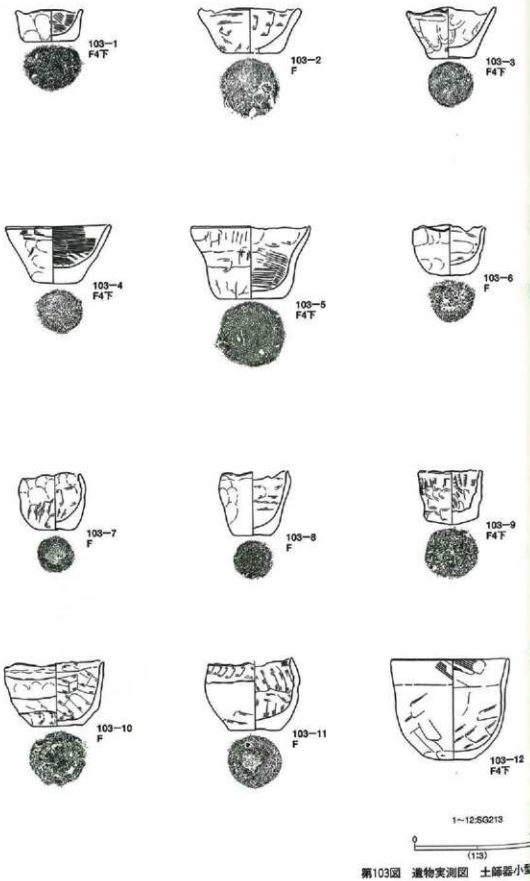
第100図　遺物実測図　土師器甕



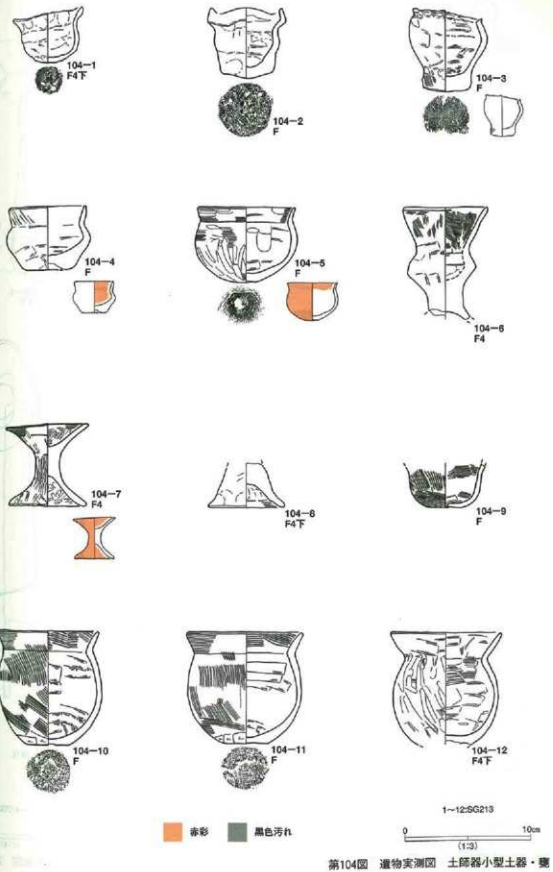
第101図　遺物実測図　土師器甕



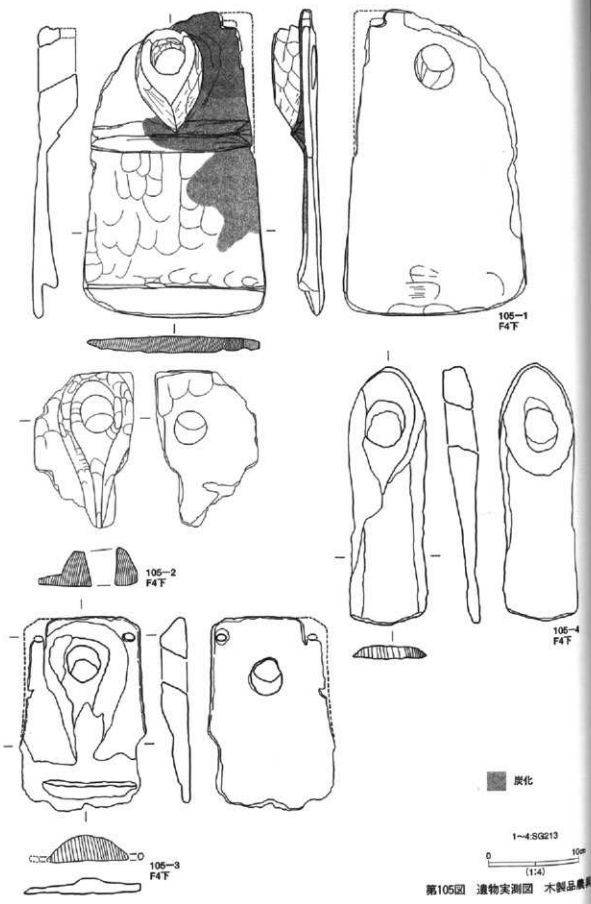
第102図　遺物実測図　土師器甕



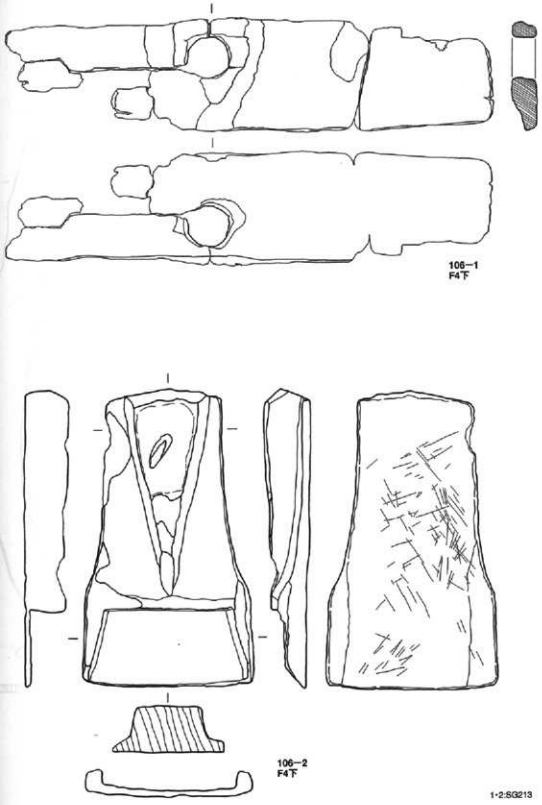
第103図　遺物実測図　土師器小型土器



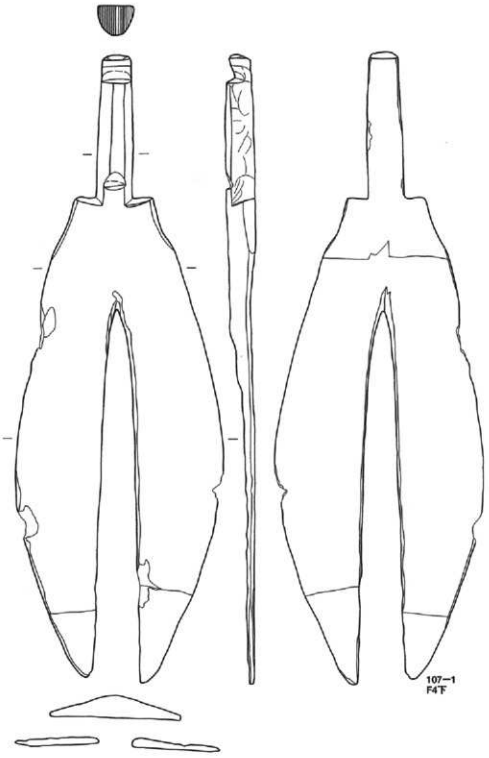
第104図　遺物実測図　土師器小型土器・甕



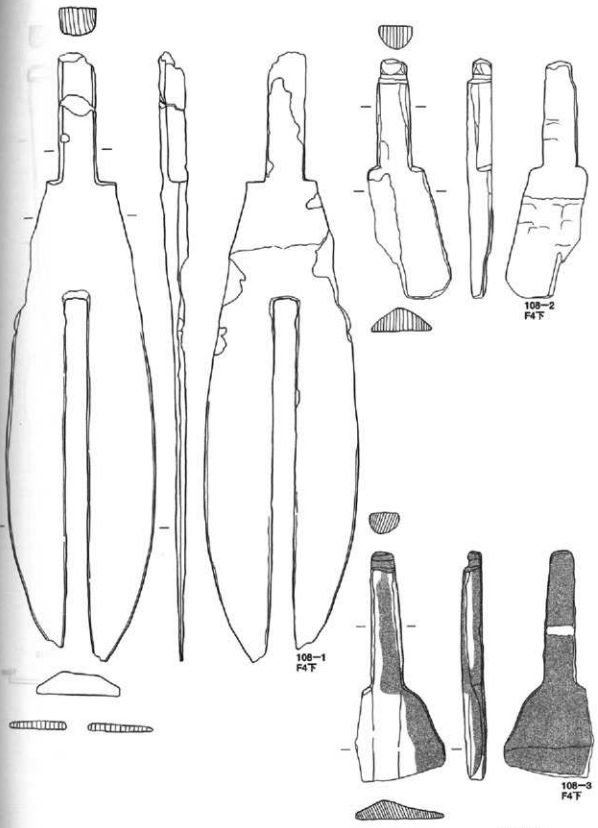
第105図　遺物実測図　木製品農具



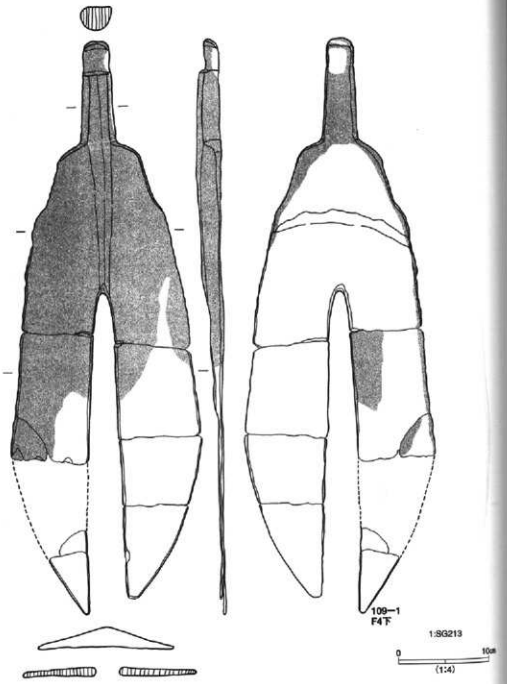
第106図　遺物実測図　木製品農具



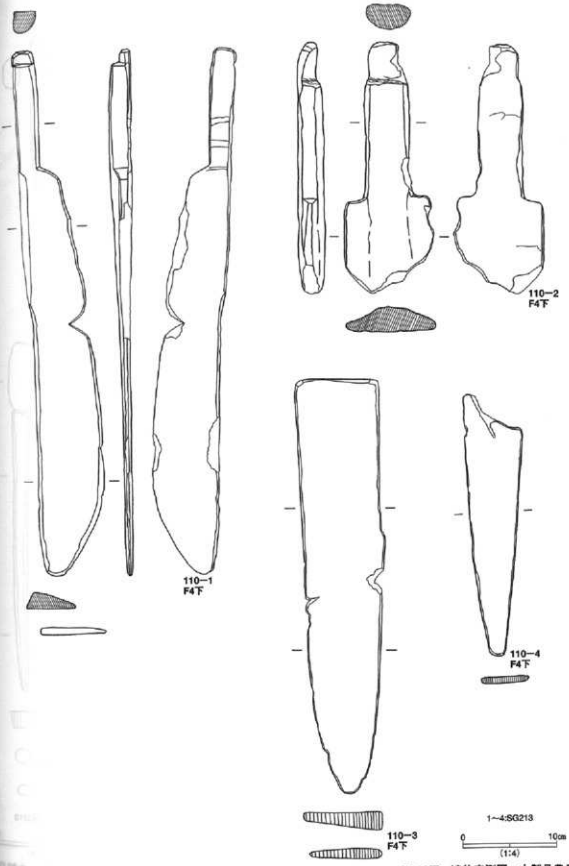
第107図　遺物実測図　木製品農具



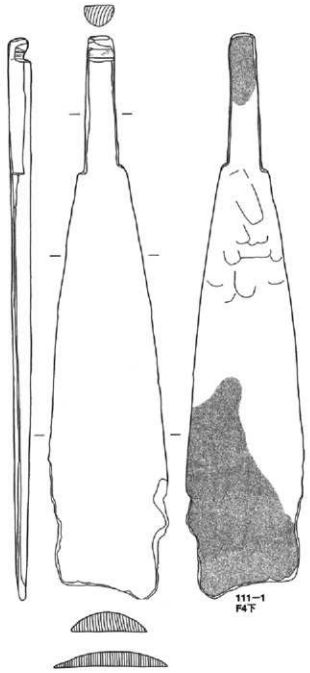
第108図　遺物実測図　木製品農具

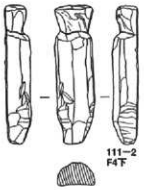


第109図　遺物実測図　木製品農具



第110図　遺物実測図　木製品農具



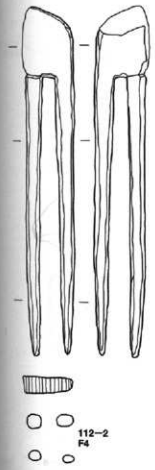


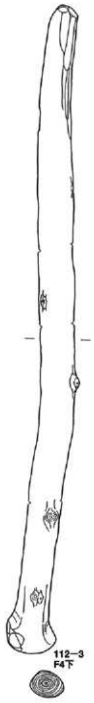
炭化

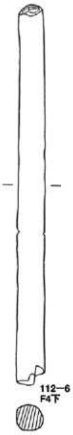
1〜3:SG213

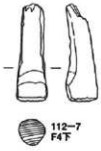
0 10cm
(1:4)

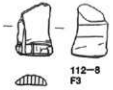
第111図　遺物実測図　木製品農具







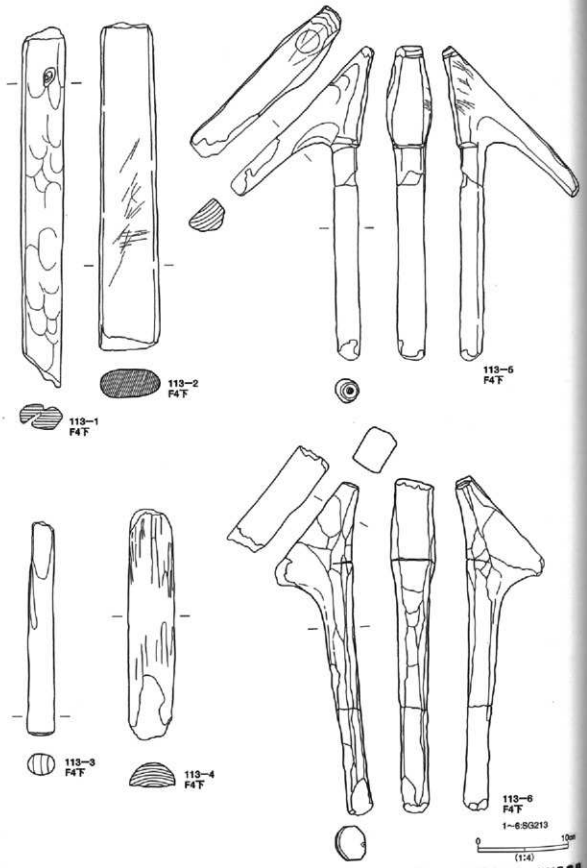




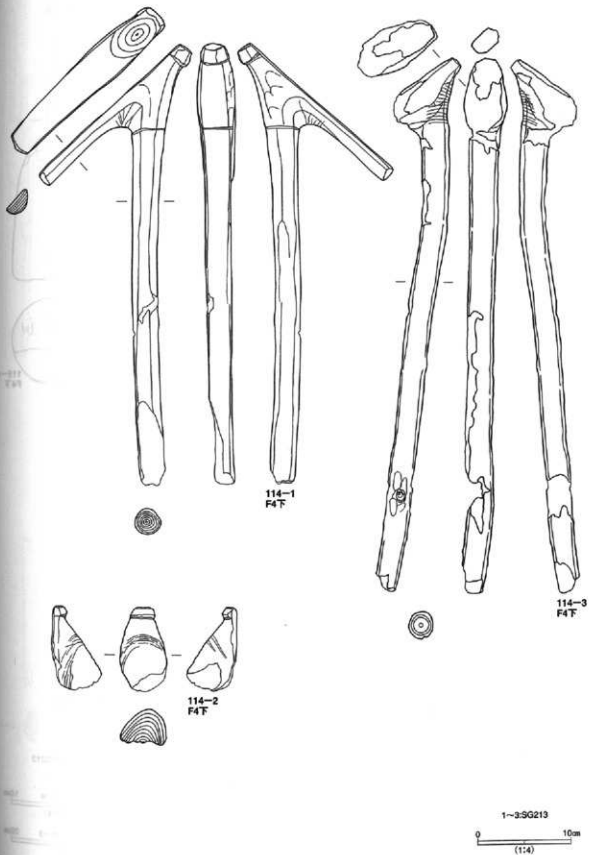
1〜8:SG213

0 10cm
(1:4)

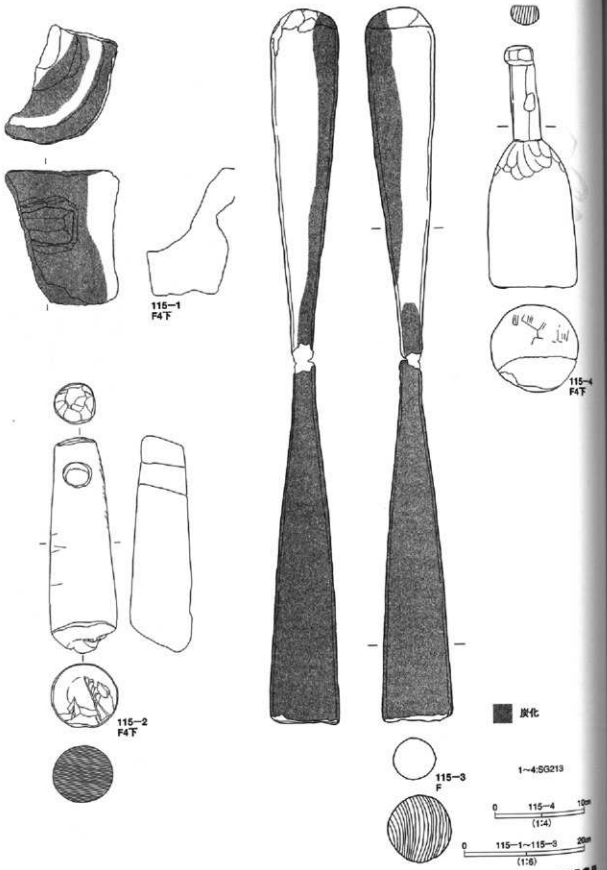
第112図　遺物実測図　木製品農具



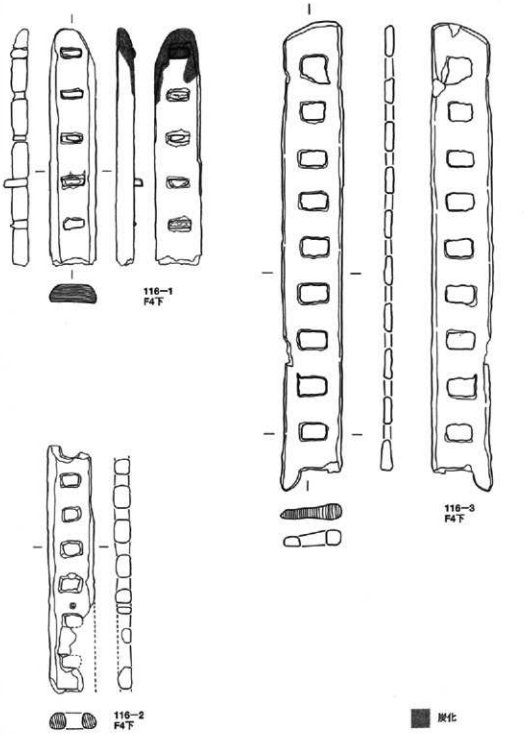
第113図　遺物実測図　木製品農具



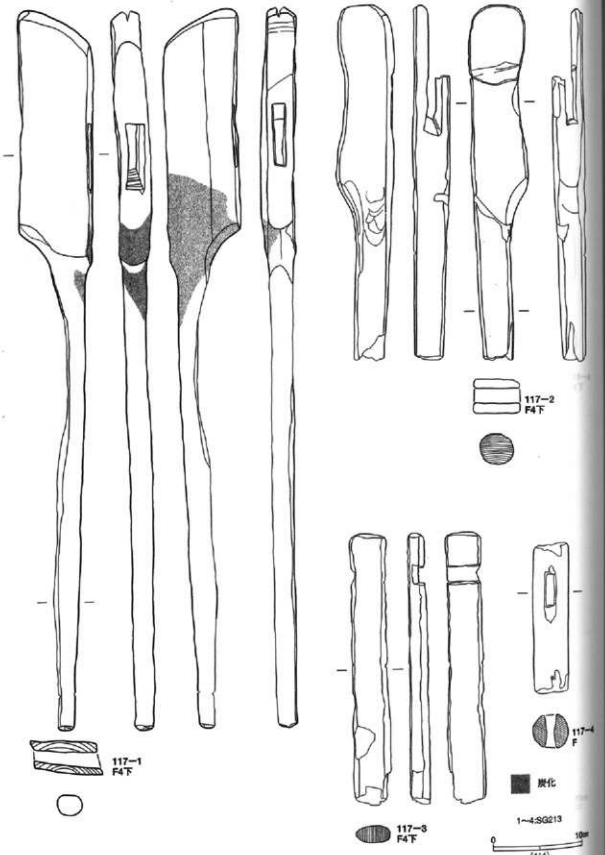
第114図　遺物実測図　木製品農具



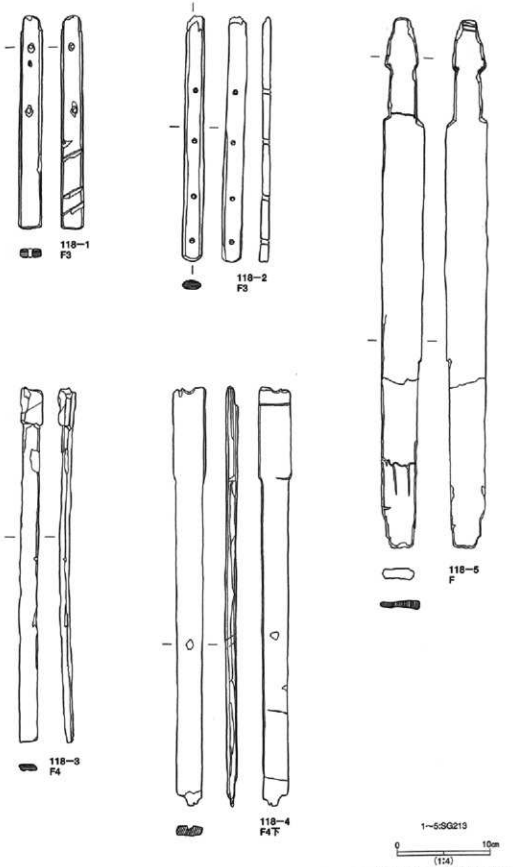
第115図　遺物実測図　木製品農具



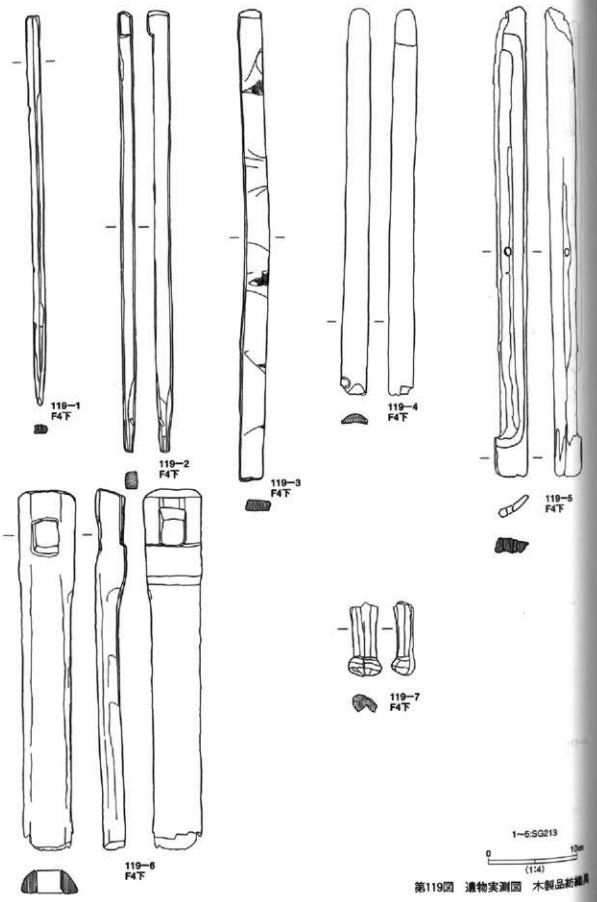
第116図　遺物実測図　木製品農具



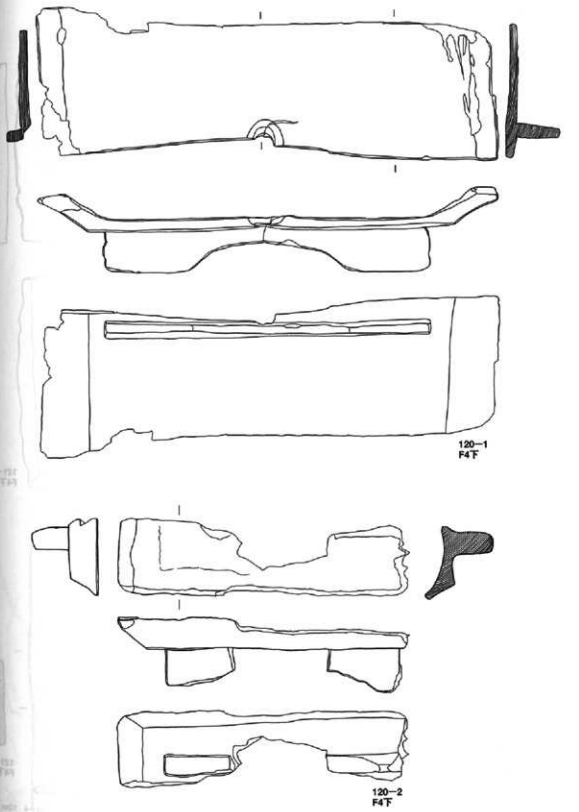
第117図　遺物実測図　木製品工具



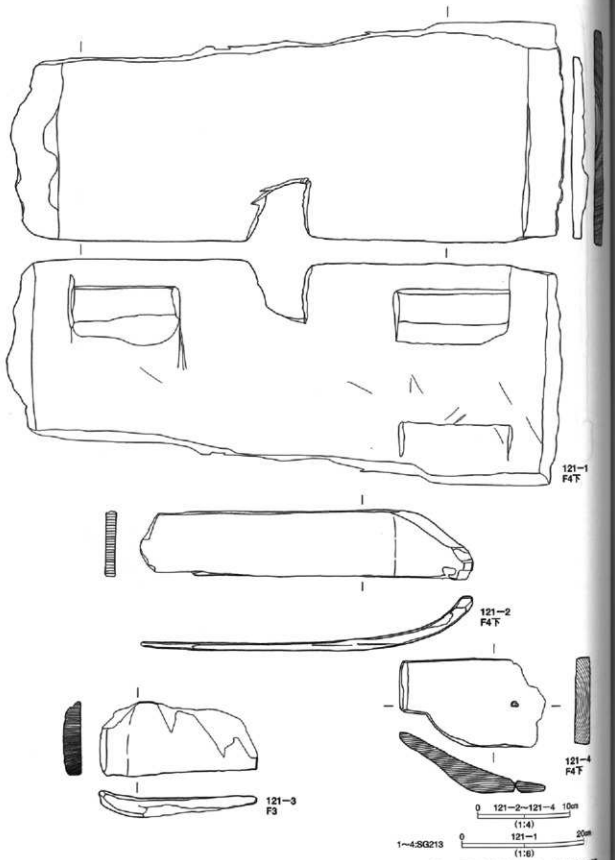
第118図　遺物実測図　木製品紡織具



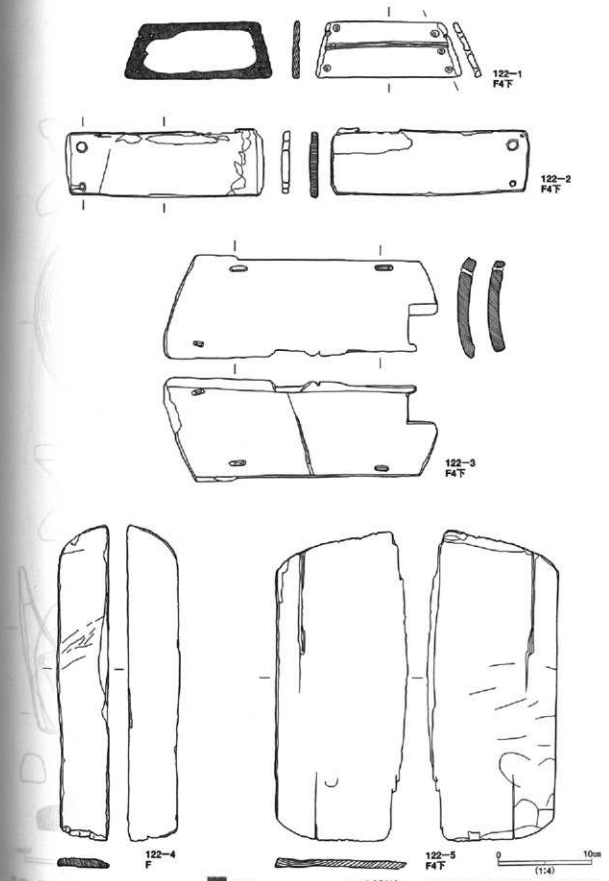
第119図　遺物実測図　木製品紡織具



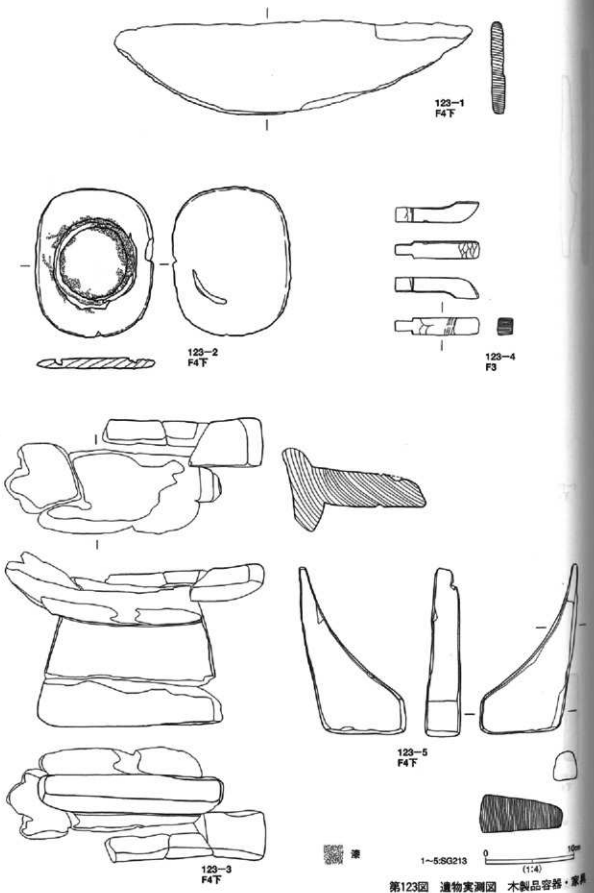
第120図　遺物実測図　木製品容器



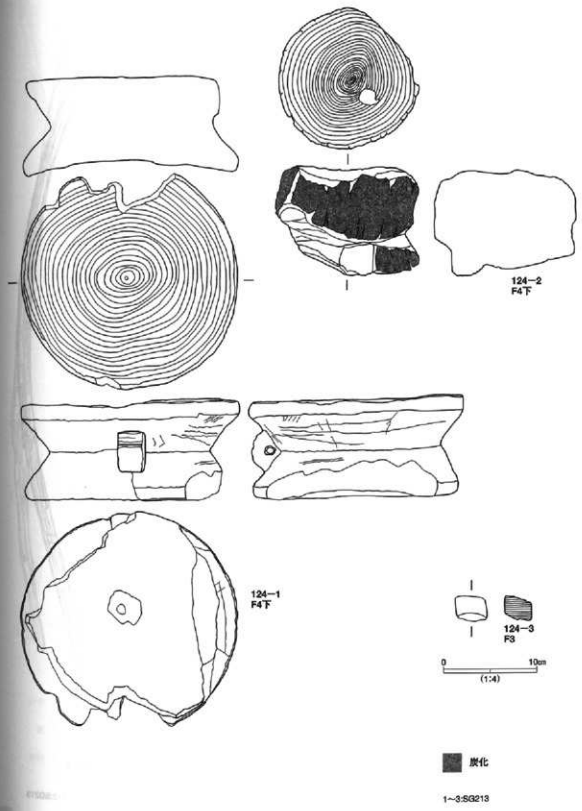
第121図　遺物実測図　木製品容器



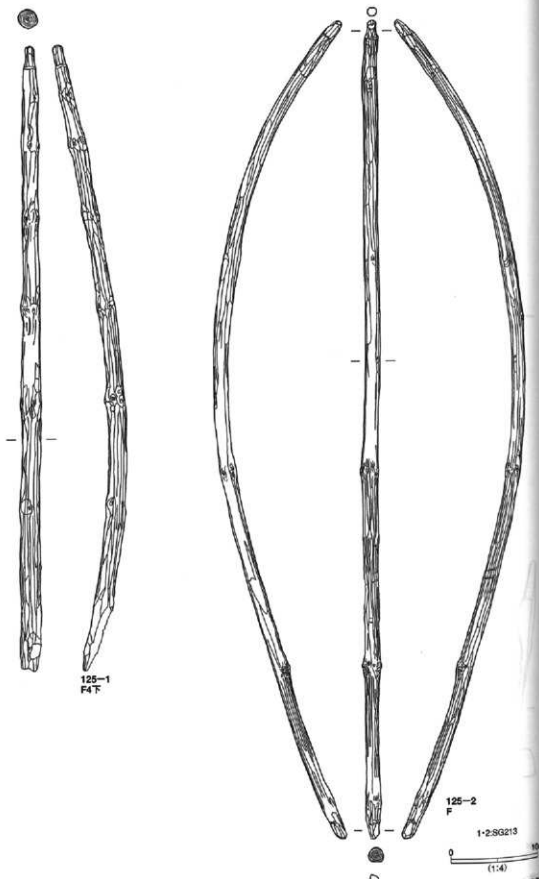
第122図　遺物実測図　木製品容器



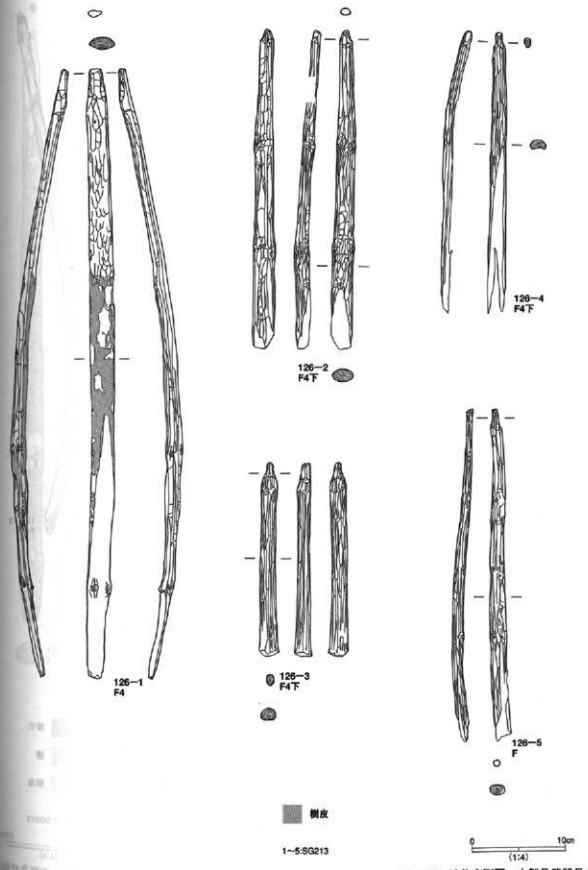
第123図　遺物実測図　木製品容器・家具



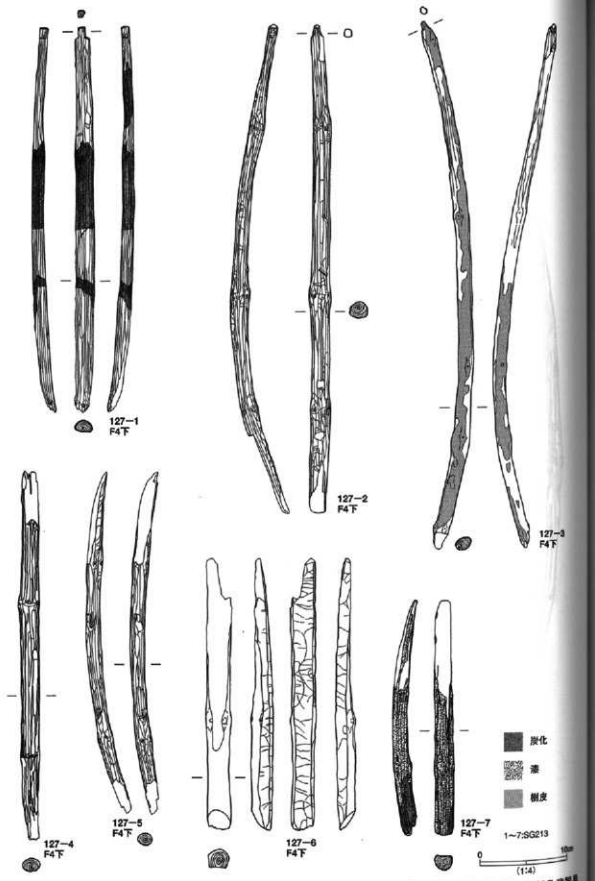
第124図　遺物実測図　木製品容器・作業用具



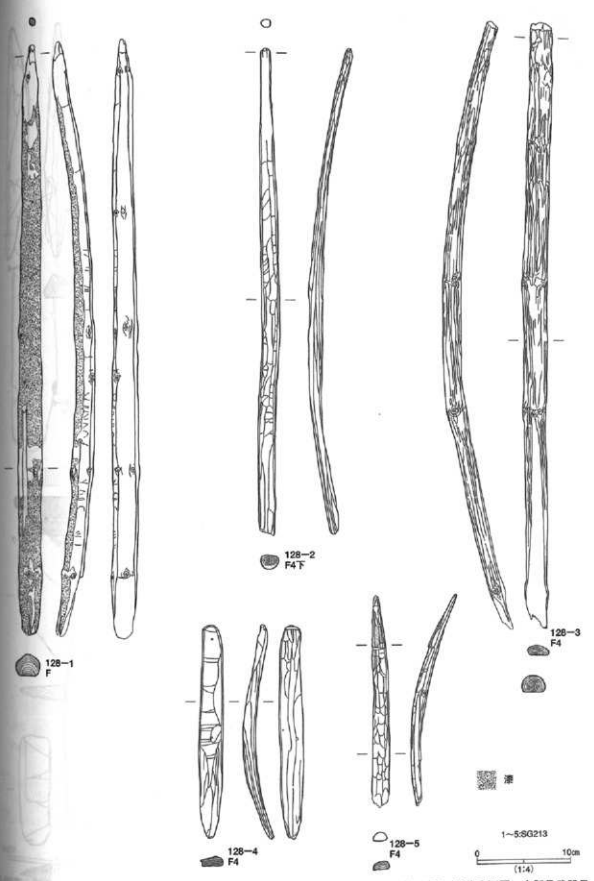
第125図　遺物実測図　木製品武器具



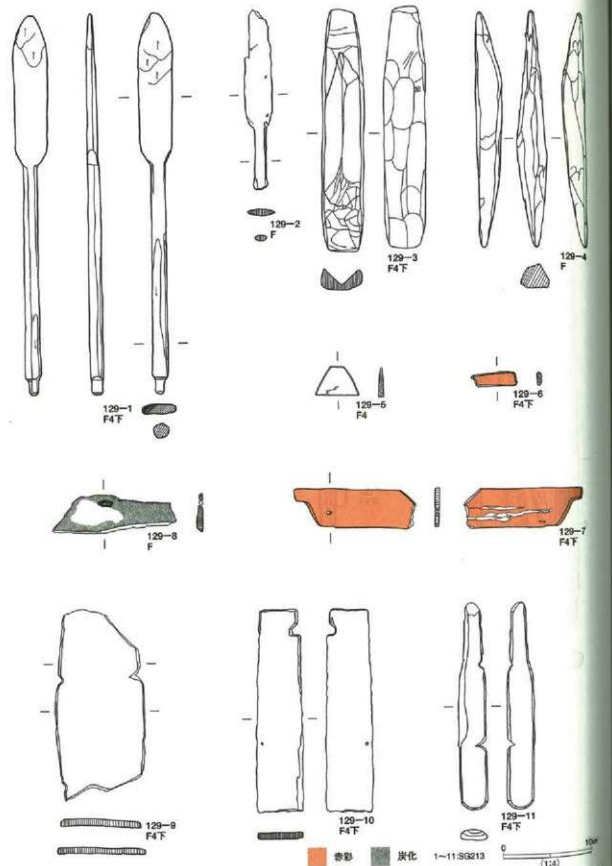
第126図　遺物実測図　木製品武器具



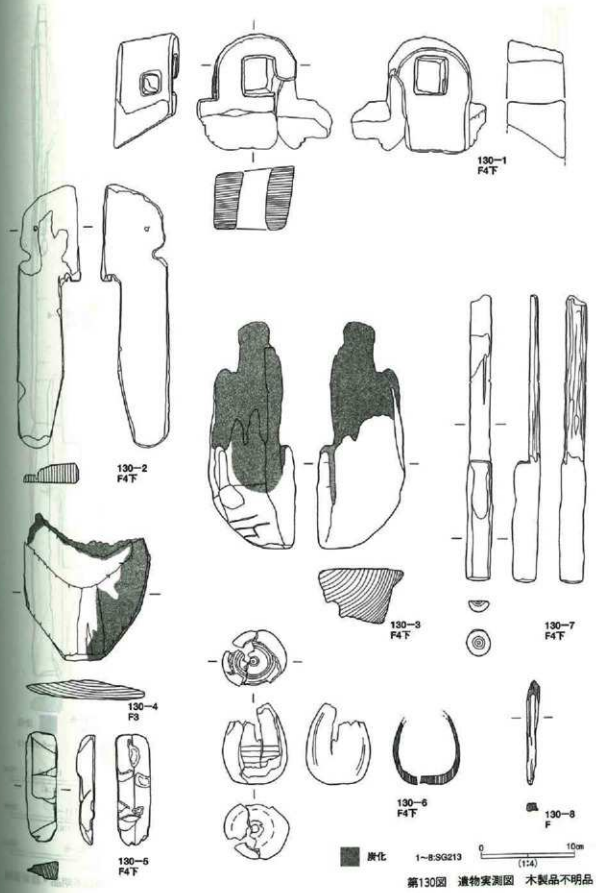
第127図　遺物実測図　木製品武器具



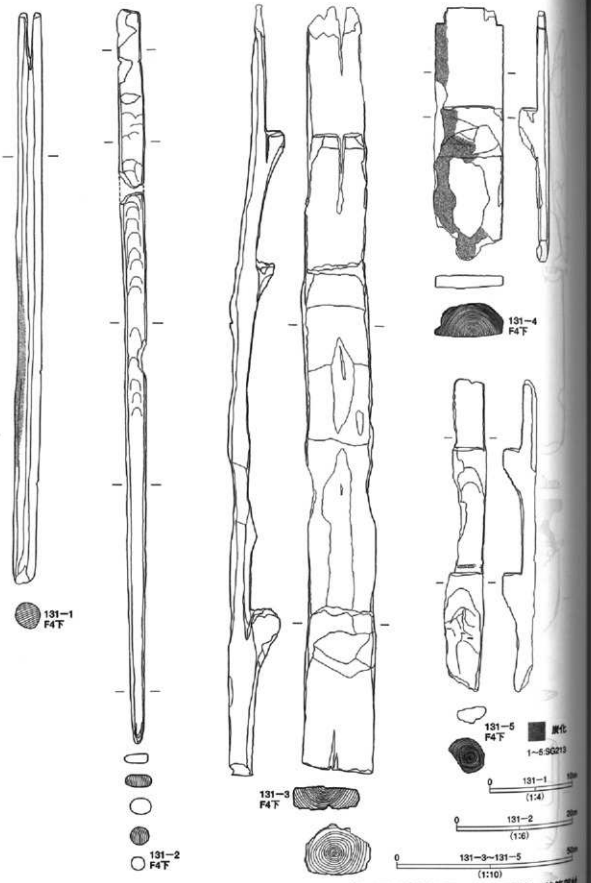
第128図　遺物実測図　木製品武器具



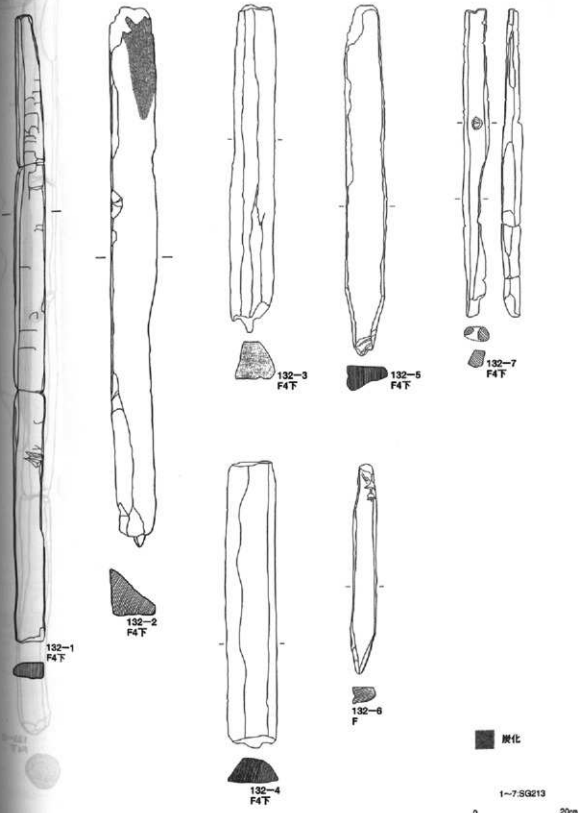
第129図　遺物実測図　木製品祭祀具・楽器・不明品



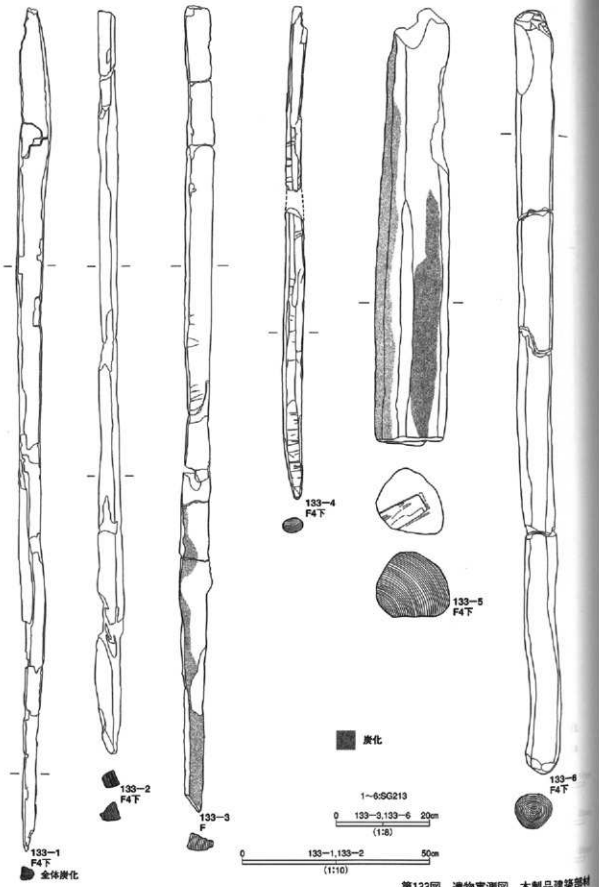
第130図　遺物実測図　木製品不明品



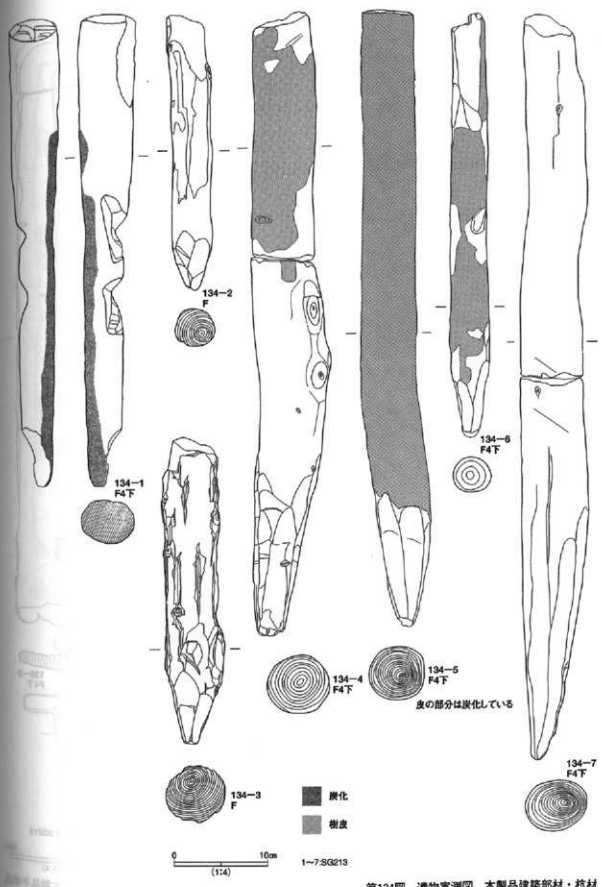
第131図　遺物実測図　木製品不明品・建築部材



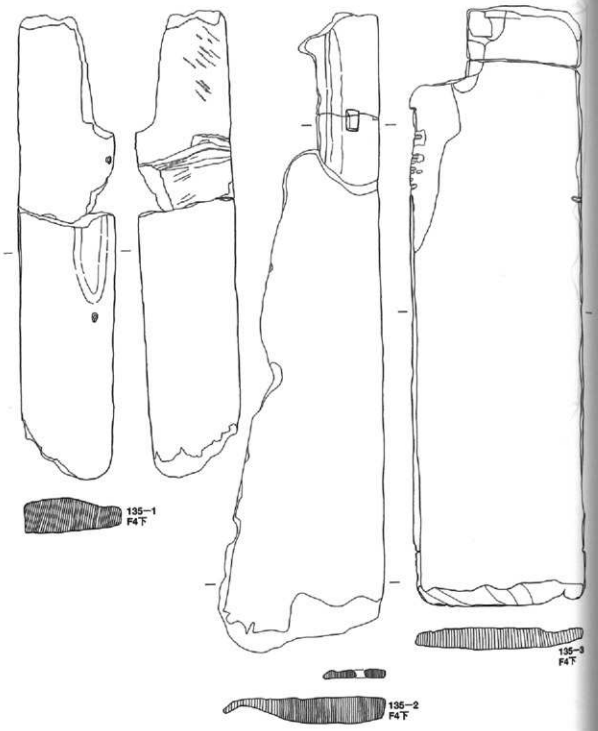
第132図　遺物実測図　木製品建築部材



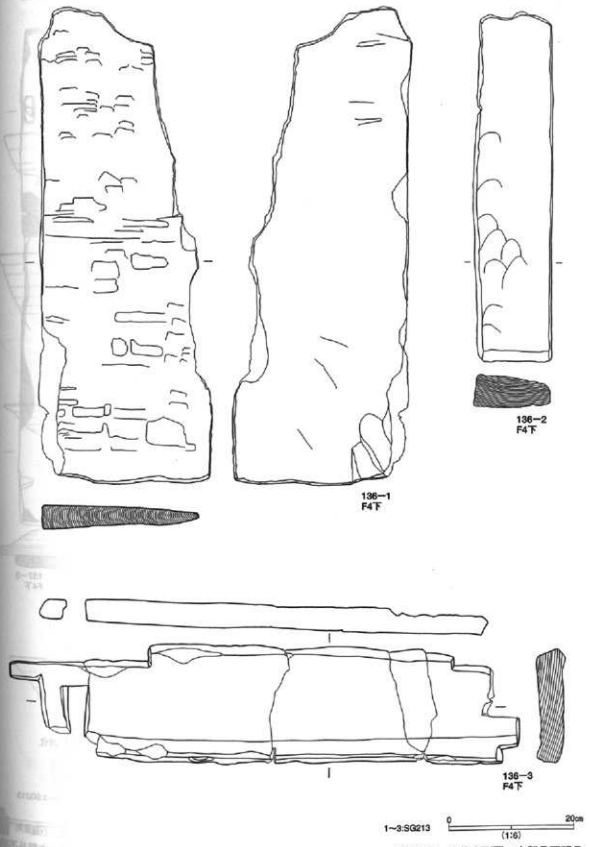
第133図　遺物実測図　木製品建築部材



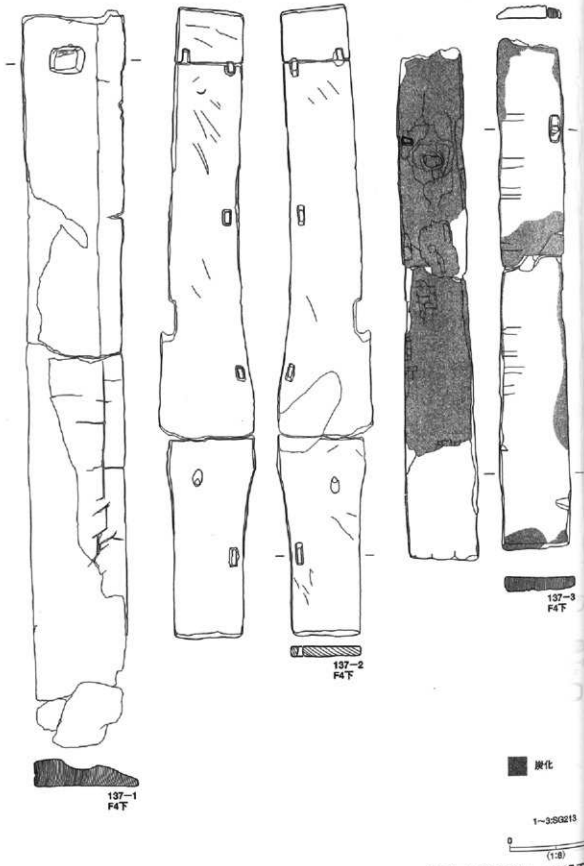
第134図　遺物実測図　木製品建築部材・杭材



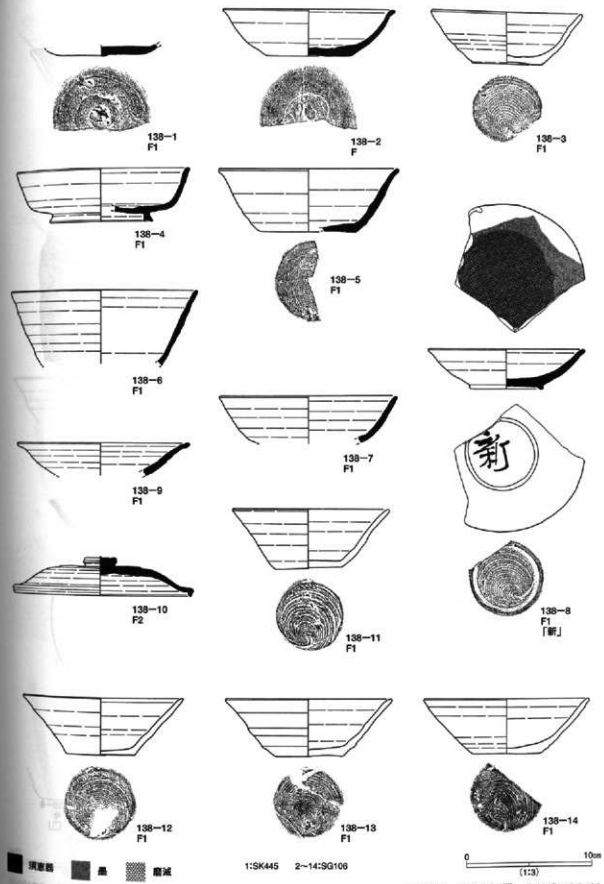
第135図　遺物実測図　木製品不明品



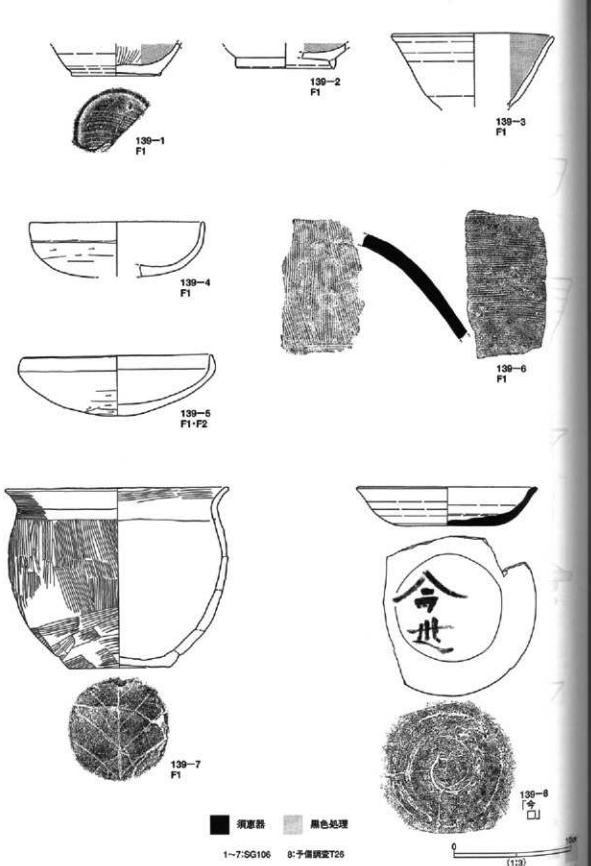
第136図　遺物実測図　木製品不明品



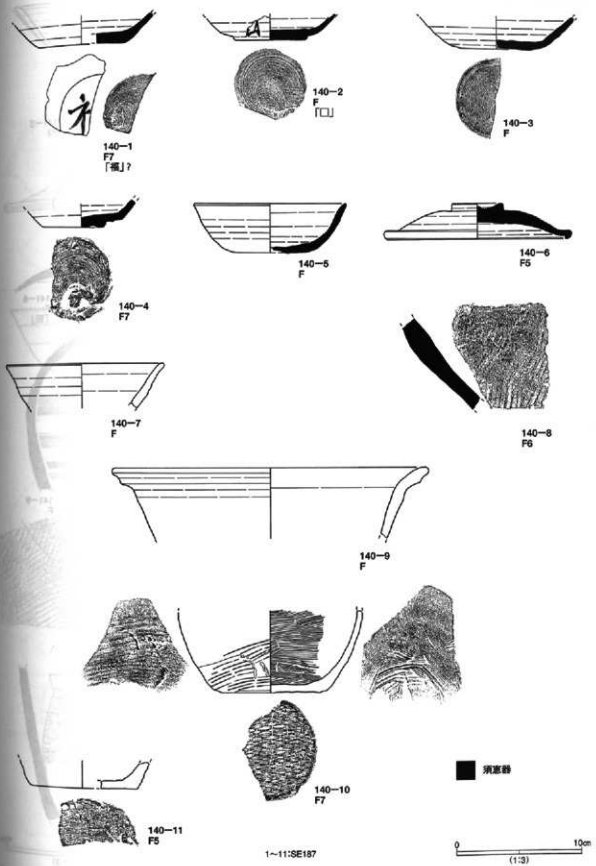
第137図　遺物実測図　木製品不明品



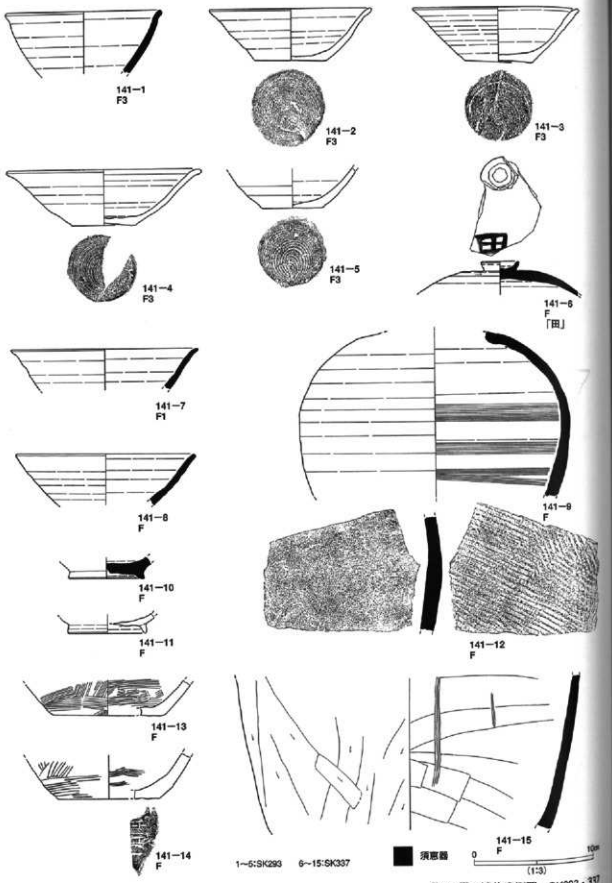
第138図　遺物実測図　SK445・SG106



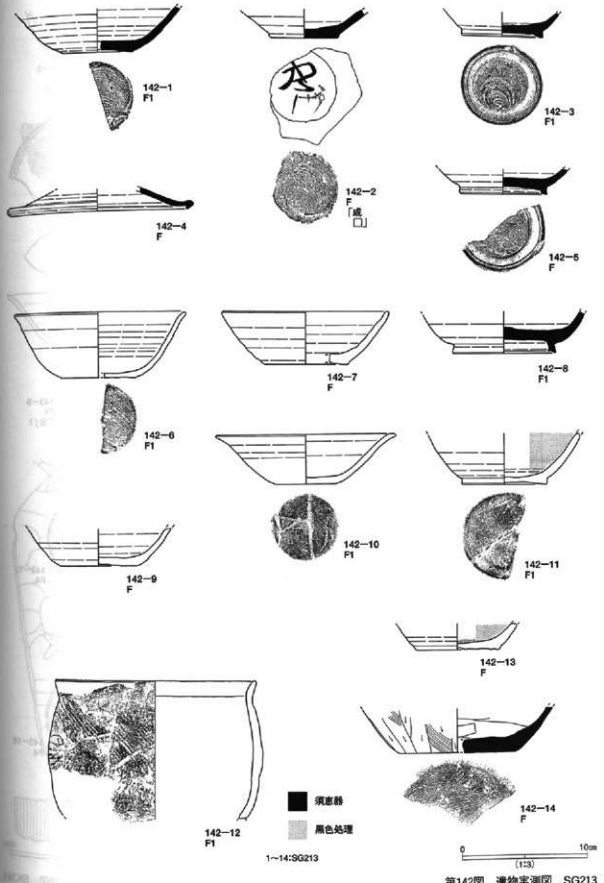
第139図　遺物実測図　SG106他



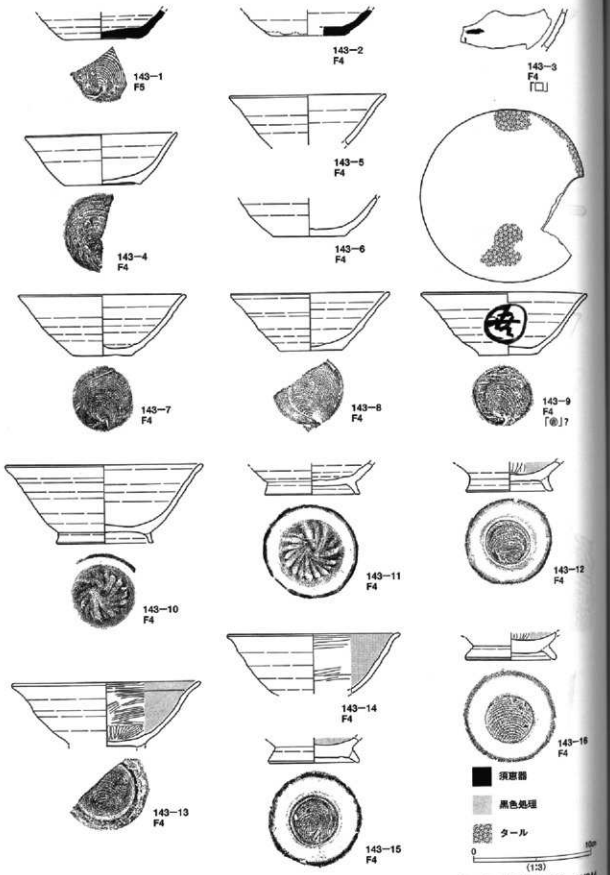
第140図　遺物実測図　SE187



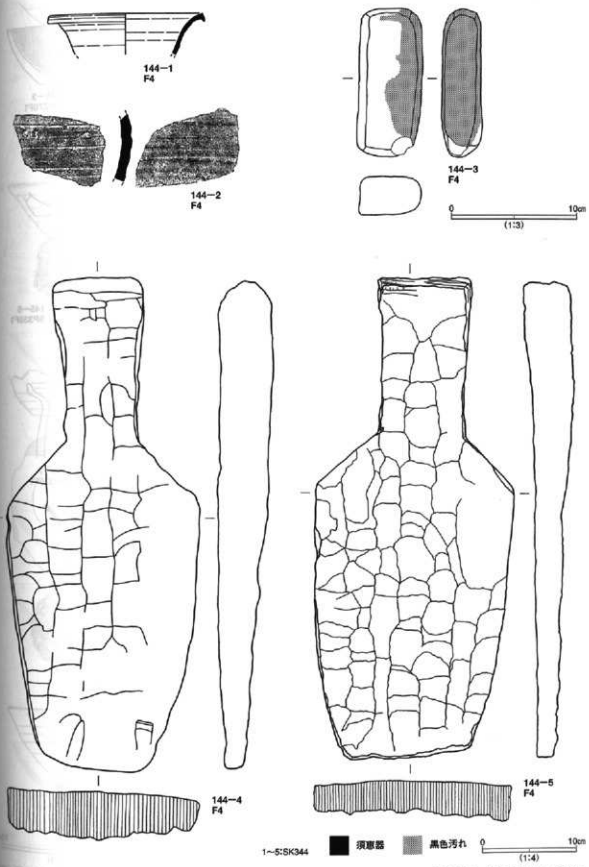
第141図 遺物実測図 SK293・337



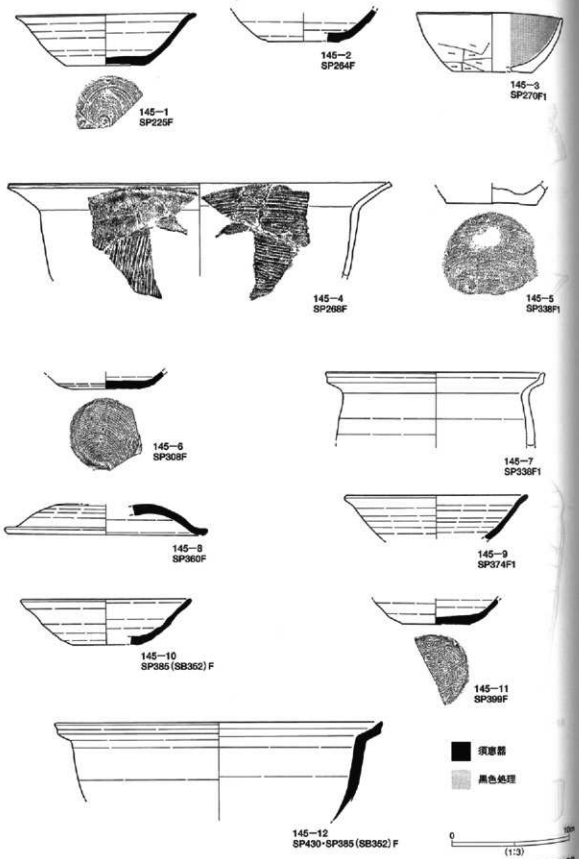
第142図 遺物実測図 SG213



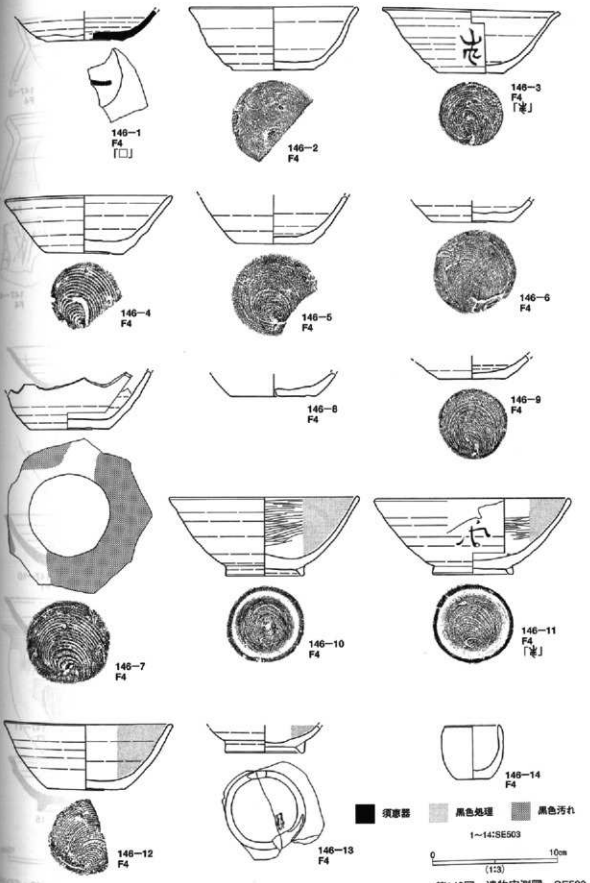
第143図　遺物実測図　SK344



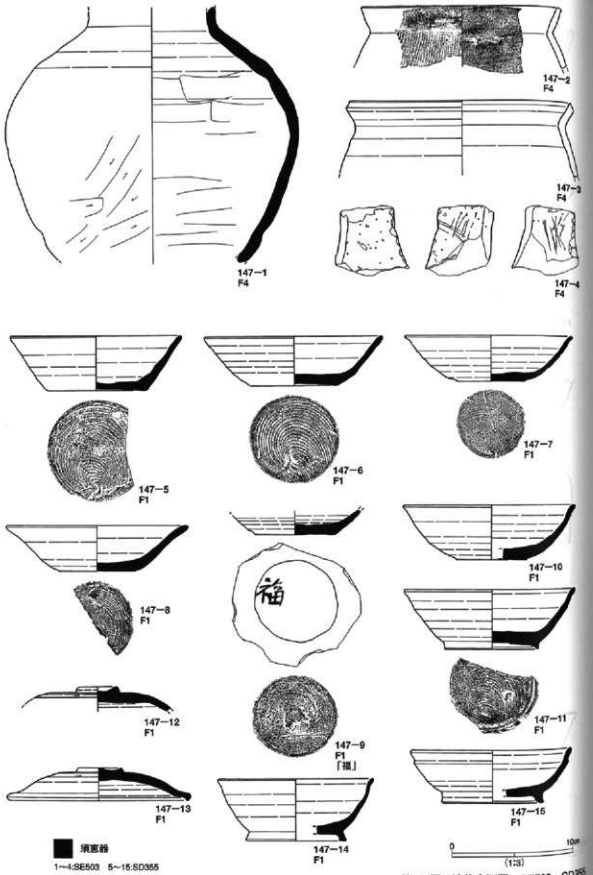
第144図　遺物実測図　SK344



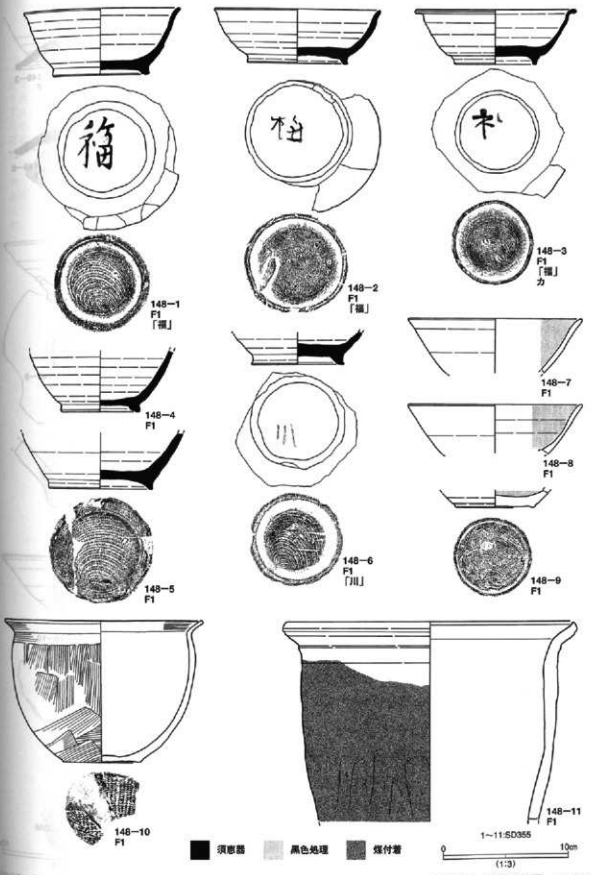
第145図　遺物実測図　SP



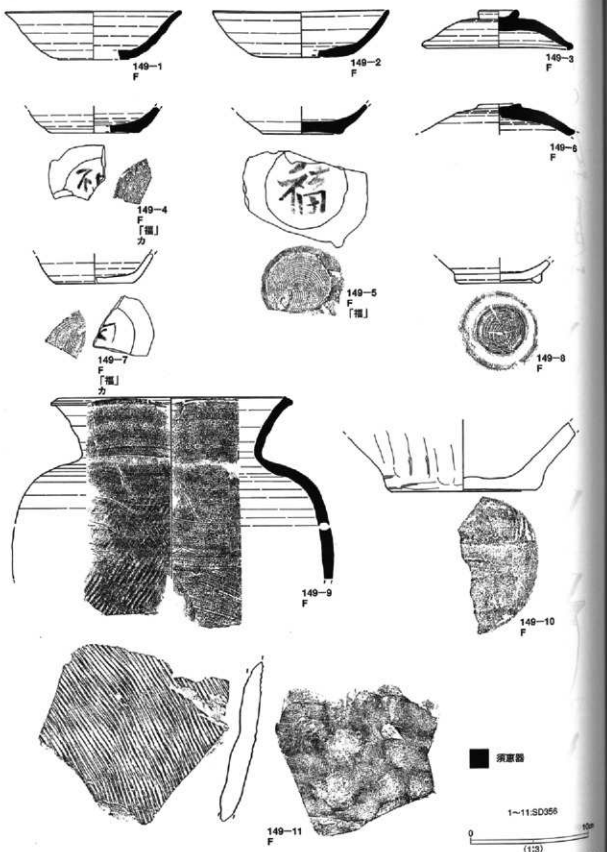
第146図　遺物実測図　SE503



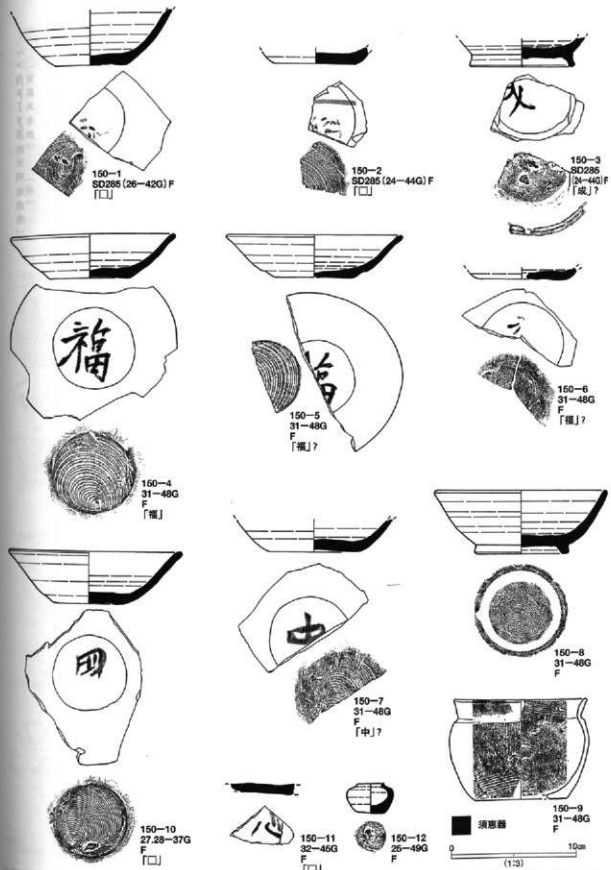
第147図　遺物実測図　SE503・SD355



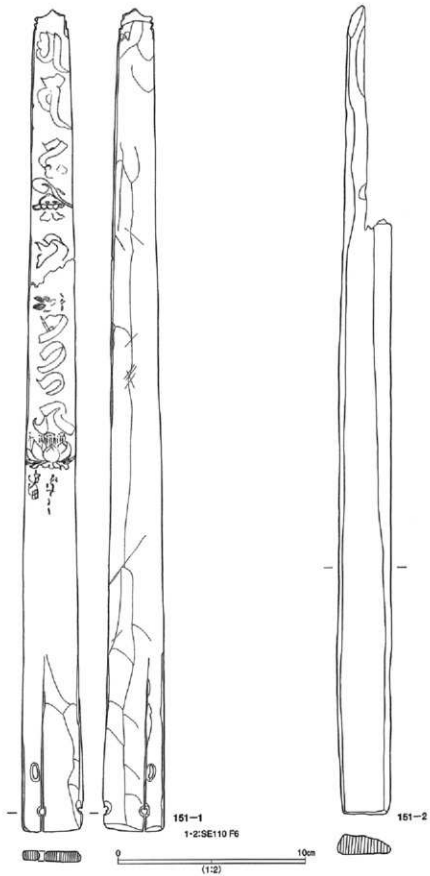
第148図　遺物実測図　SD355



第149図　遺物実測図　SD356



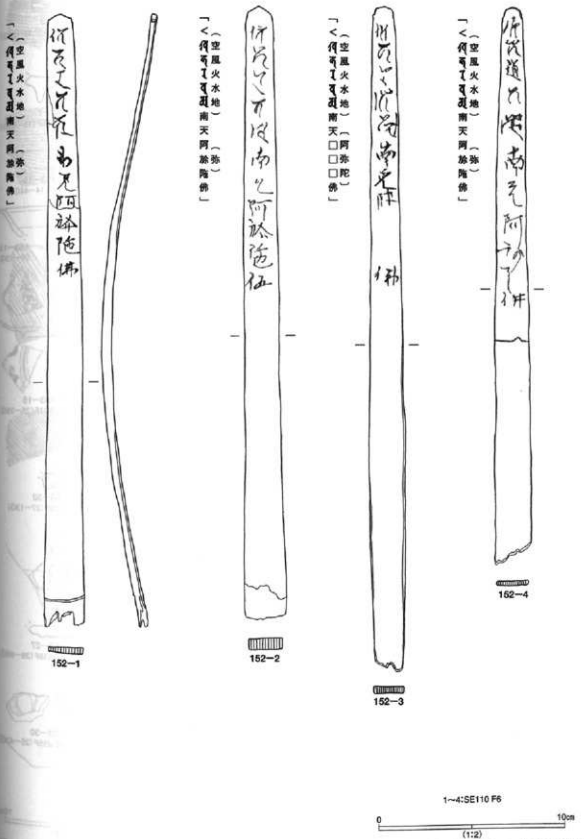
第150図　遺物実測図　SD285・グリッド



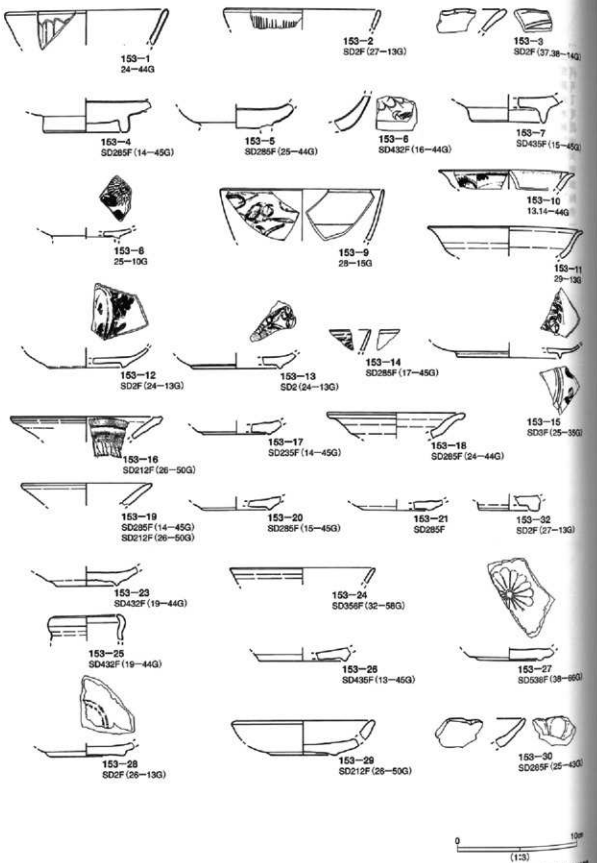
梵字

「□□□（絵）□（絵）□□（絵）」

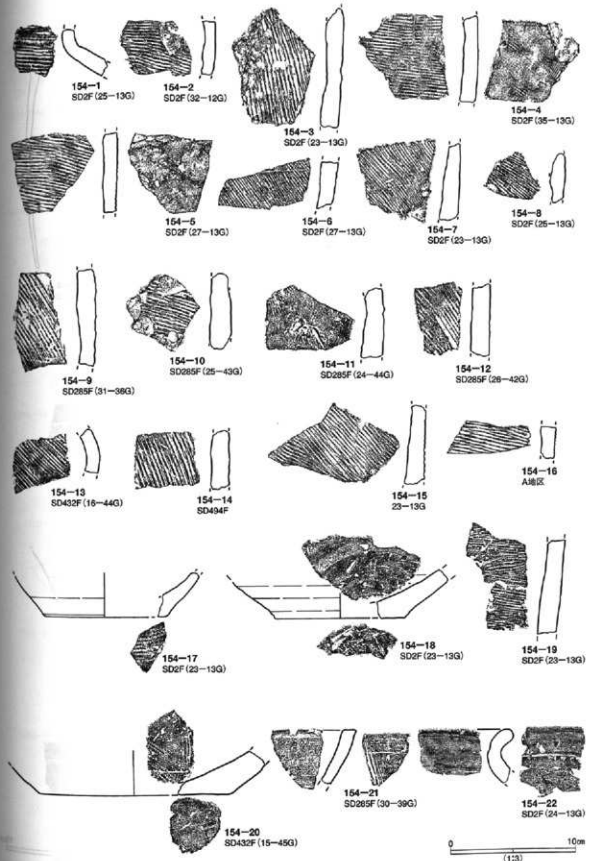
第151図　遺物実測図　木製品笹塔婆・不明品



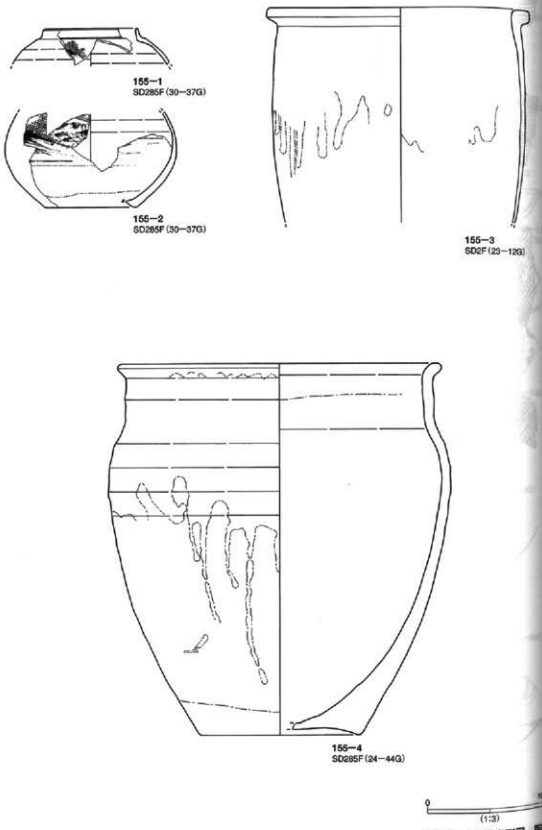
第152図　遺物実測図　木製品笹塔婆



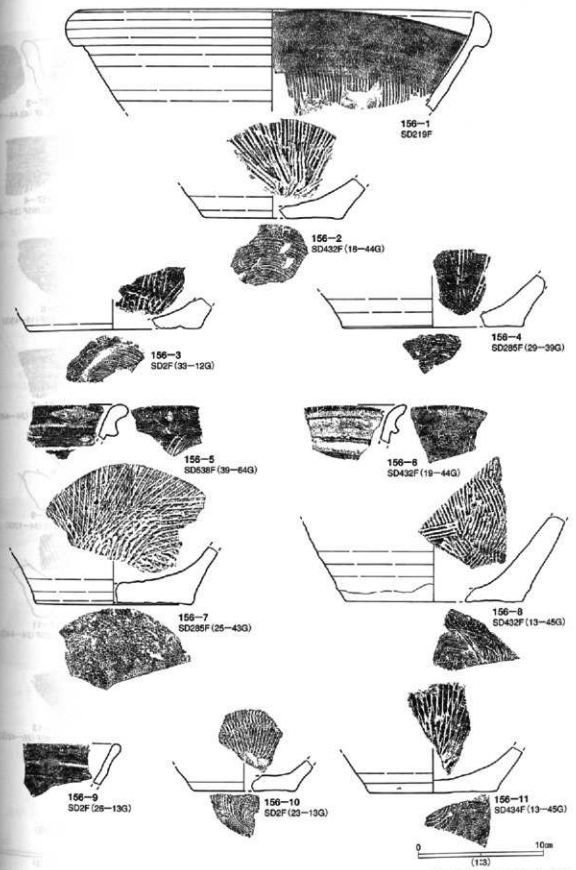
第153図　遺物実測図　陶器・



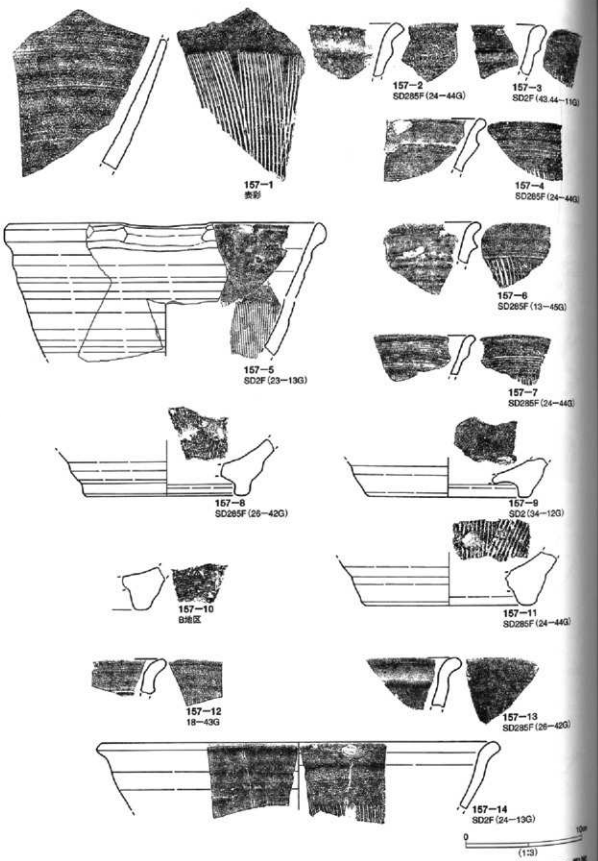
第154図　遺物実測図　陶器



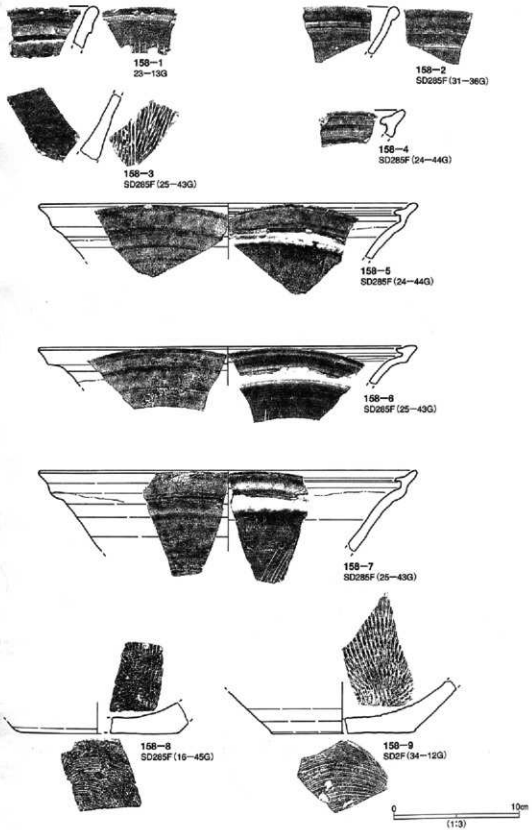
第155図　遺物実測図　陶器



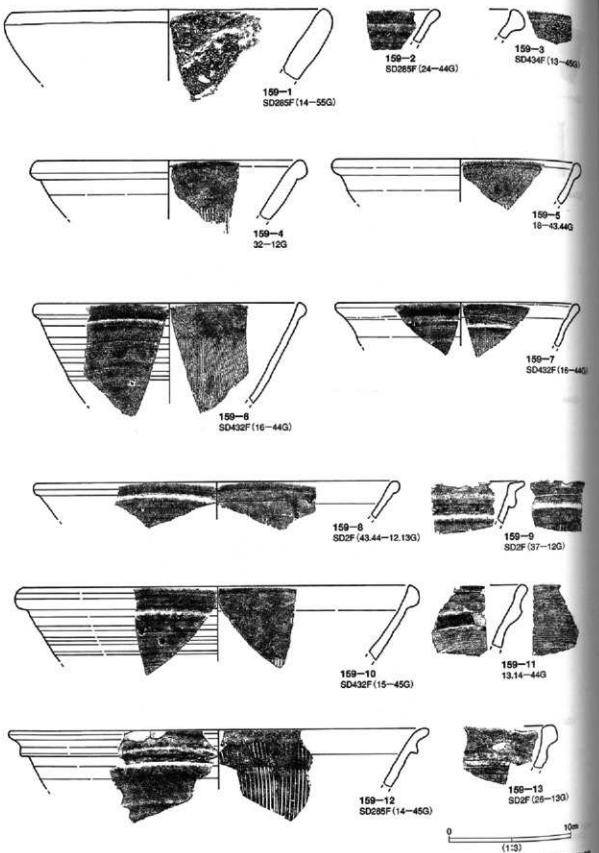
第156図　遺物実測図　陶器



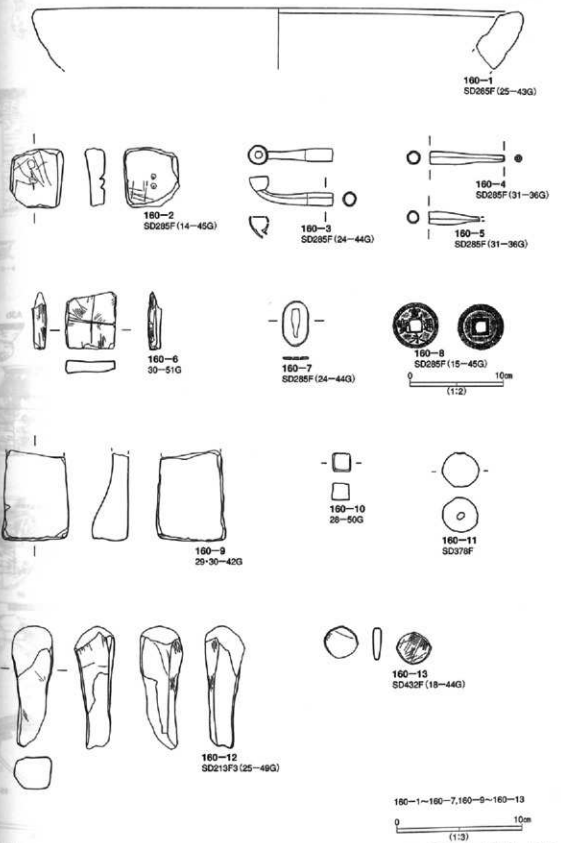
第157図　遺物実測図　陶器



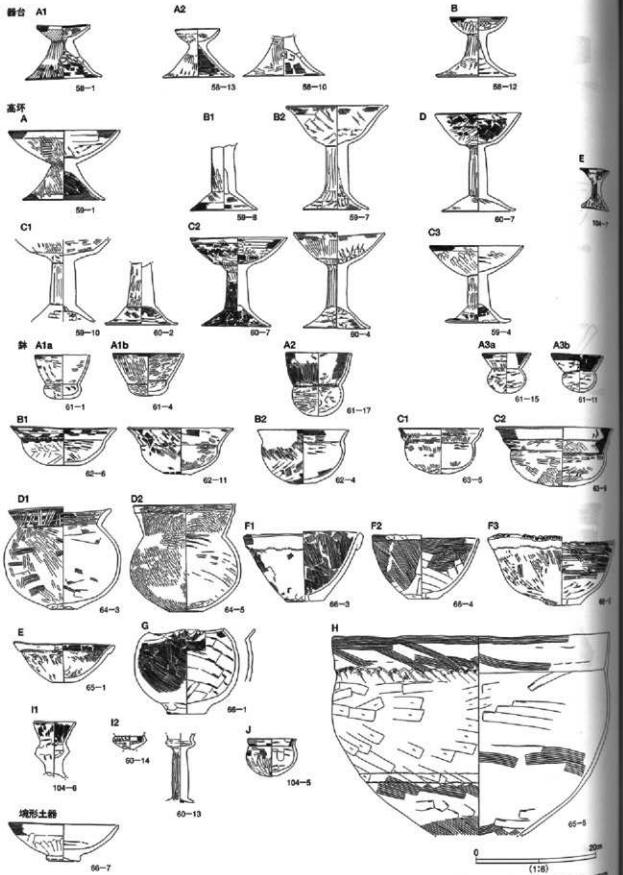
第158図　遺物実測図　陶器



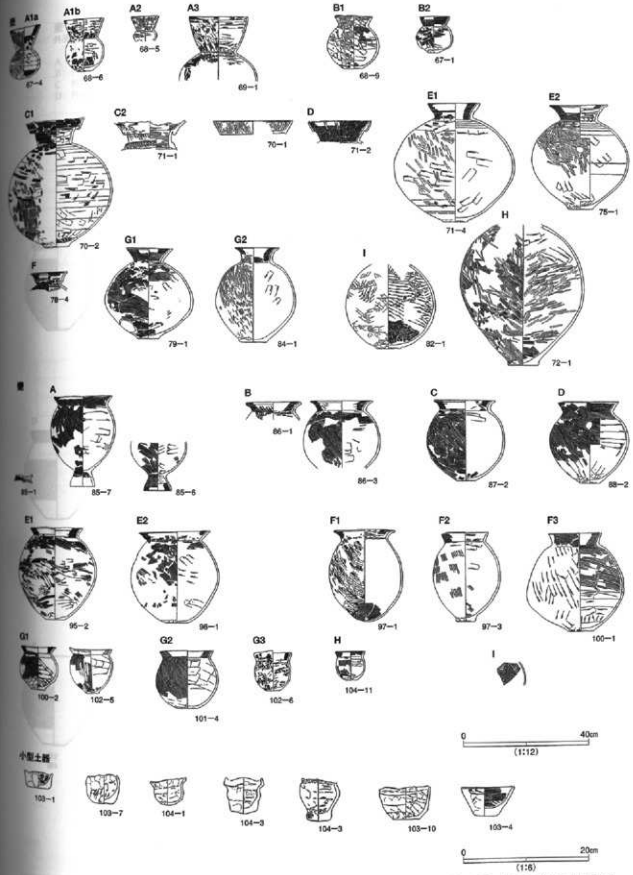
第159図　遺物実測図　陶器



第160図　遺物実測図　金属製品・石製品・土製品

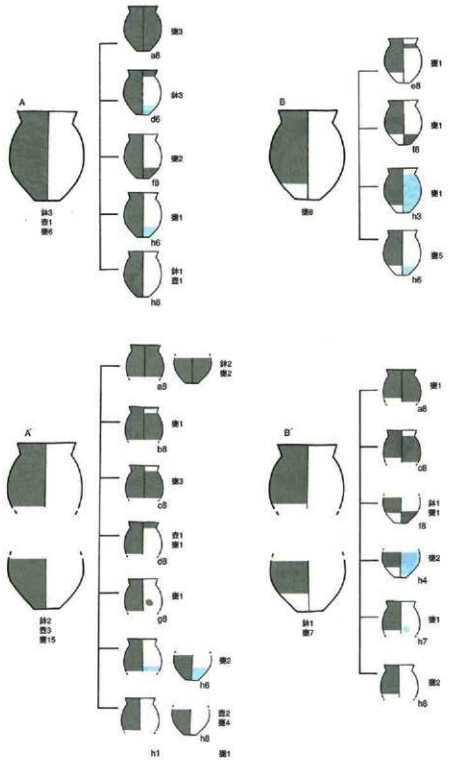


第161図　古墳時代土師器分類図



第162図　古墳時代土師器分類図

煤・黒色汚れ
付着物など
数字 点数

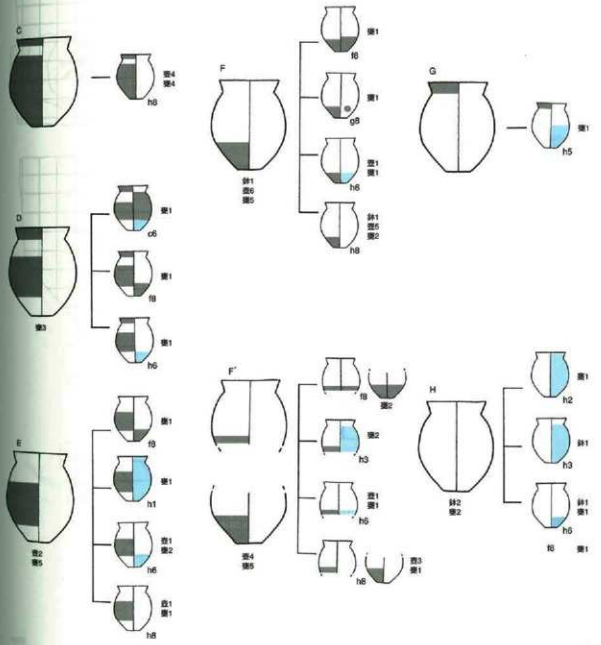


壺・甕類使用痕分類

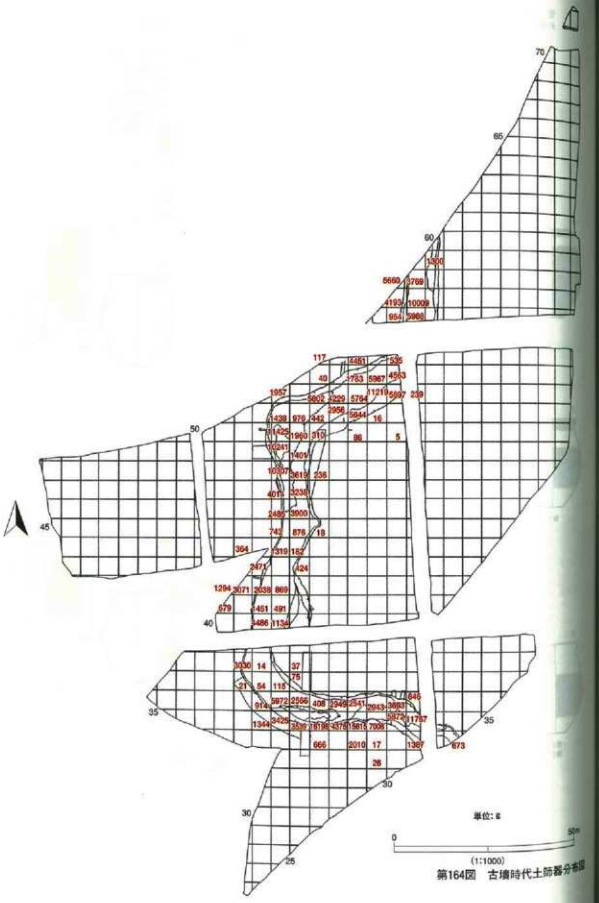
外面の煤・黒色汚れ
A～Hに分類
A 外面全面
B 外面口縁部～体部上2/3
C 外面口縁部・体部～底部
D 外面口縁部・体部中
E 外面体部中
F 外面体部下～底部
G 外面口縁部
H 外面なし

内面 煤・黒色汚れ
a～hに分類
a 内面全面
b 内面口縁部・体部～底部
c 内面体部～底部
d 内面口縁部
e 内面頸部
f 内面体部下1/3～底部
g 内面一部
h 内面なし

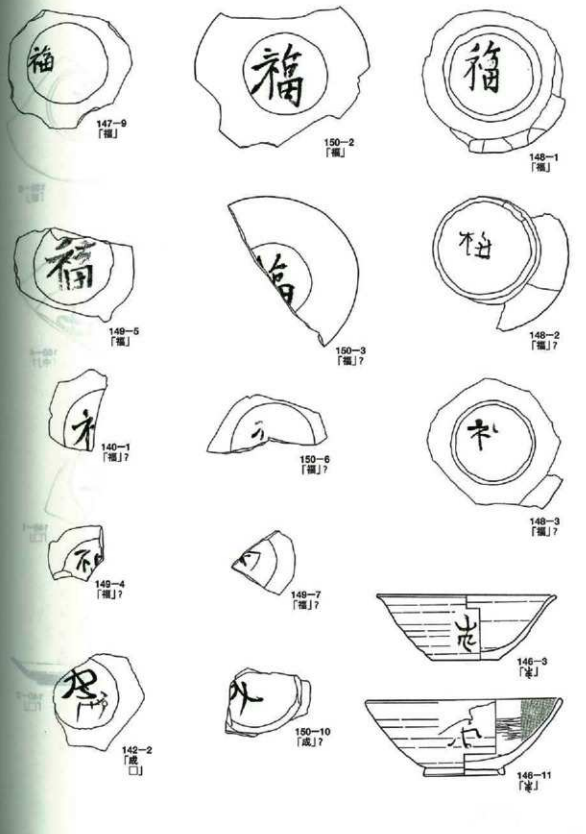
付着物
1～8に分類
1 内面全面
2 内面頸部～底部
3 内面体部～底部
4 内面体部
5 内面体部下半
6 内面体部下1/3～底部
7 内面一部
8 内面なし



第163図 古墳時代壺・甕類使用痕分類図



第164図　古墳時代土師器分布図



第165図　墨書集成図（1）

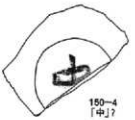
138−6
「令
□」

143−9
「⊕」

138−8
「新」

141−6
「田」

150−1
「□」


150−4
「中」?

150−5
「□」

150−7
「□」

148−1
「□」

148−6
「川」

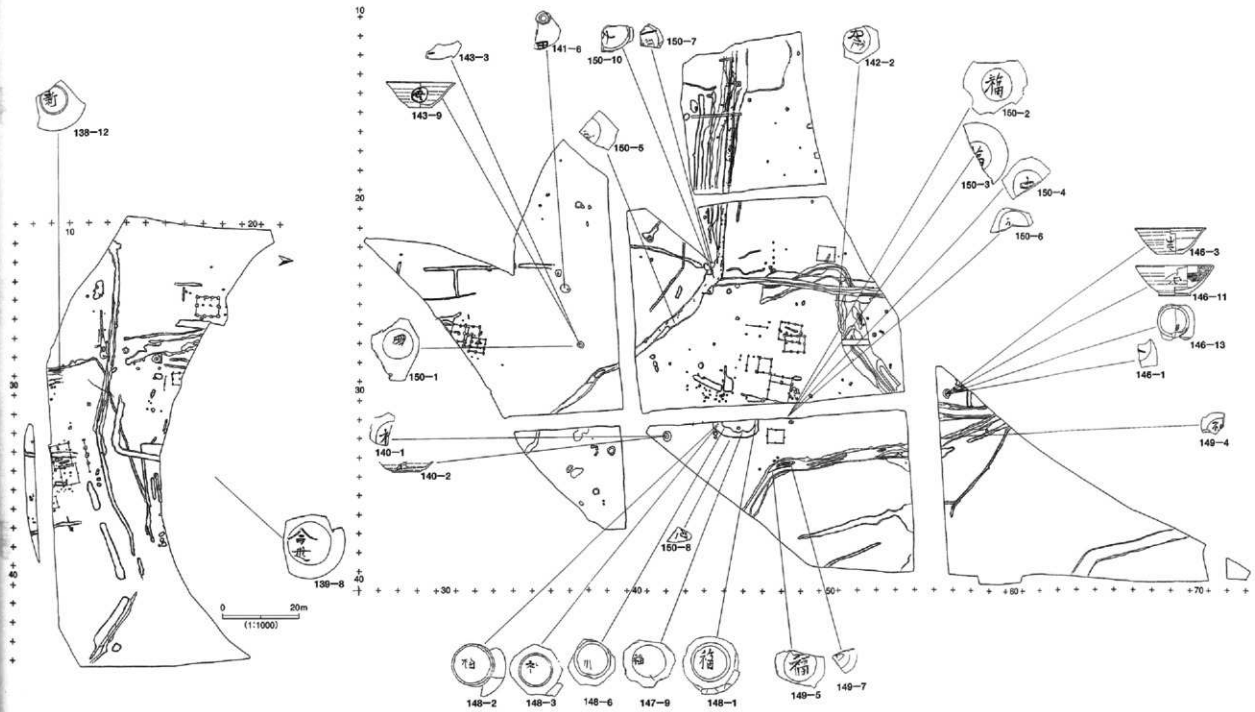
146−13
「□」

140−2
「□」

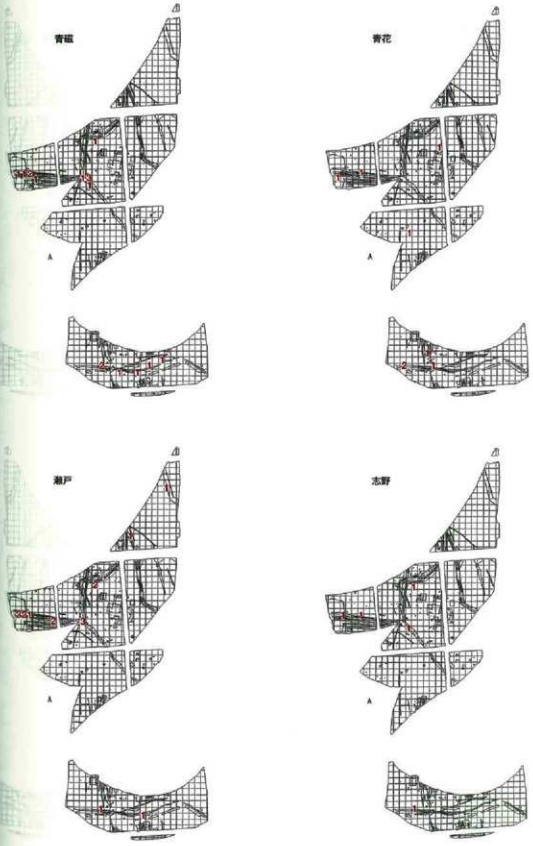
150−8
「□」

143−3
「□」

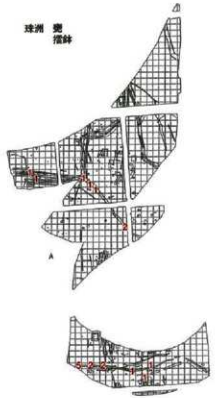
第166図　墨書集成図（2）

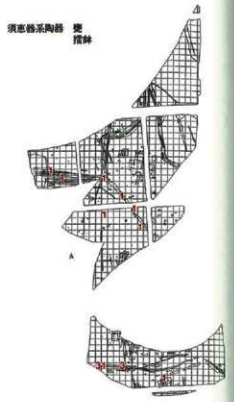


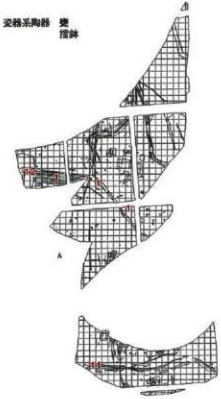
第167図　墨書土器分布図

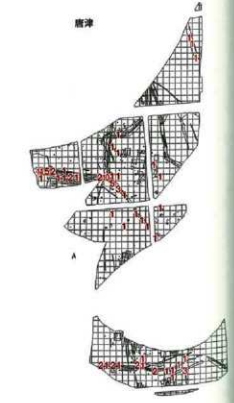


第168図　陶器・磁器分布図（中世）

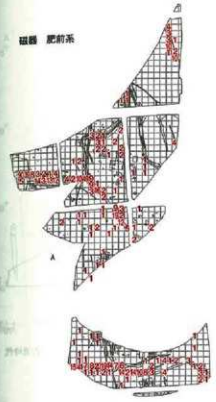


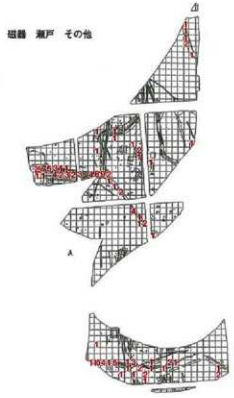


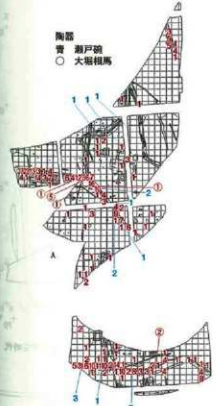


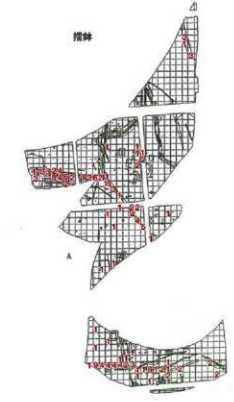


第169図　陶器分布図（中世・近世）

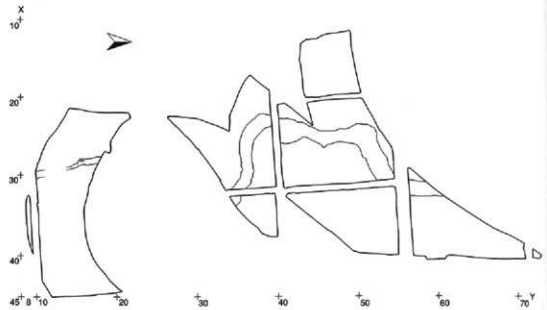


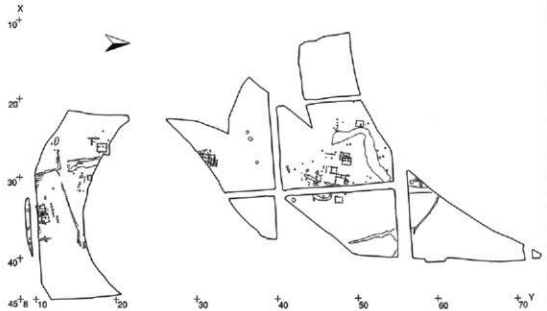




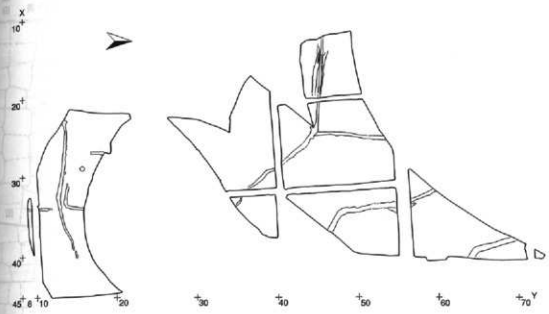


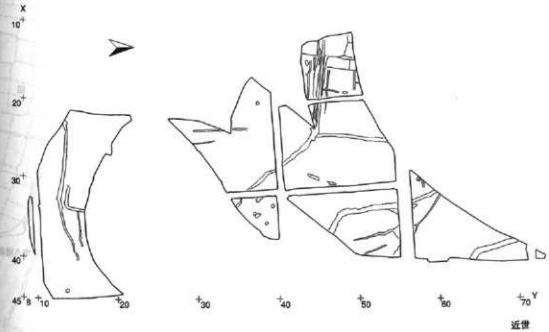
第170図　陶器・磁器分布図（近世）



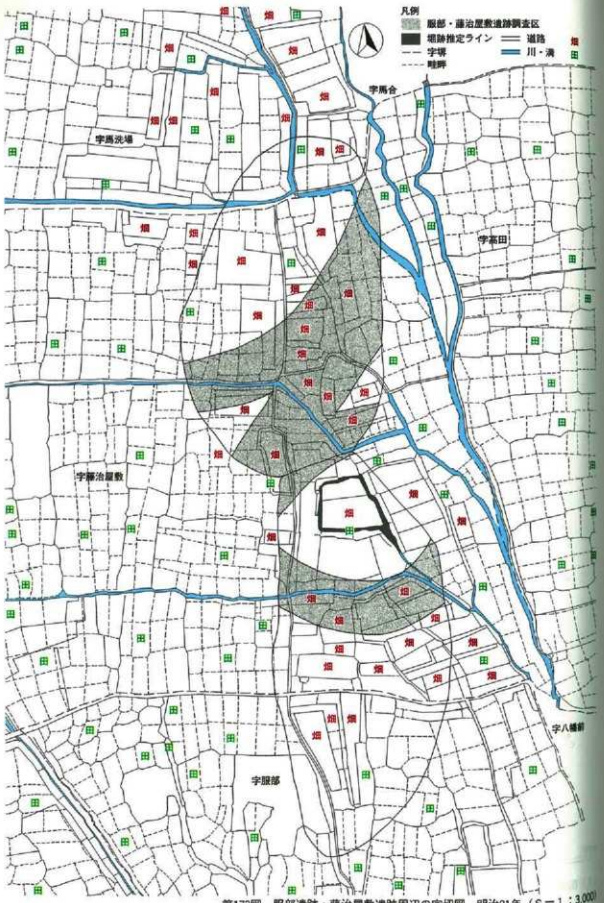


第171図　遺構変遷図（1）



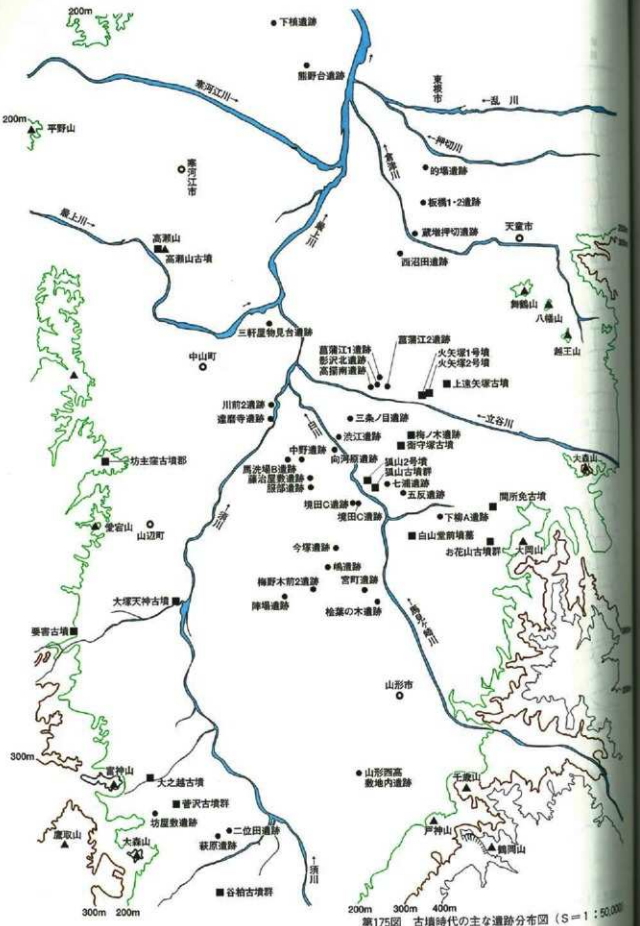


第172図　遺構変遷図（2）



第173図　服部遺跡・藤治屋敷遺跡周辺の字切図　明治21年（S＝1：3,000）

第174図　服部・藤治屋敷周辺の字切図　昭和36年耕地整理以前



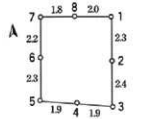
第175図　古墳時代の主な遺跡分布図（S＝1：50,000）

表1　掘立柱建物観察表

項目		略図　S＝1：200　柱間寸法　m	柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
遺構番号	SB169		1	SP173	楕円	○	102	75	19	
位置	A区25・26－17・18		2	SP85	楕円	○	83	64	27	
長軸方向	N－2°－E		3	SP86	楕円	○	81	59	45	
検出番号	8・9		4	SP88	不整	○	111	51	23	
図版番号	15		5	SP84	方	×	96	74	18	
			6	SP73	楕円	○	100	62	28	
			7	SP74	楕円	○	115	64	31	
			8	SP77	方	○	75	63	22	
			9	SP78	方	×	79	69	9	
			10	SP80	楕円	○	121	62	18	
遺構番号	SB168		1	SP107	楕円	○	37	26	28	
位置	29・30－16		2	SP129	楕円	○	37	29	29	
長軸方向	A区N－4°－W		3	SP127	楕円	○	53	37	21	
検出番号	7		4	SP122	楕円	○	51	46	32	
図版番号	15		5	SP125	楕円	○	60	35	30	SP124→SP125
遺構番号	SA165		6	SP121	楕円	○	20	15	14	
位置	A区29・30－15・16		7	SP130	楕円	○	20	18	13	
長軸方向	N－90°－E		8	SP131	楕円	○	18	10	26	
検出番号	7									
図版番号										
遺構番号	SB540		1	SP453	方	○	69	52	37	
位置	A区33・34－9・10・11		2	SP455	不整	○	68	52	30	
長軸方向	N－14°－W		3	SP466	不整	○	73	52	28	
検出番号	10・11		4	SP456	方	×	62	48	38	
図版番号	16		5	SP539	楕円	○	22	21	20	
			6	SP448	方	○	52	47	38	
			7	SP449	楕円	×	50	36	40	
			8	SP450	不整	○	65	58	25	
			9	SP451	楕円	○	50	32	37	
			10	SP452	不整	○	52	28	35	
遺構番号	SB541		1	SP462	楕円	×	29	20	8	
位置	A区34・35－10・11		2	SP463	楕円	×	33	26	25	
長軸方向	N－14°－W		3	SP464	楕円	×	42	28	54	
検出番号	10・11		4	SP465	楕円	×	44	27	28	
図版番号	16		5	SP457	楕円	×	35	27	19	
			6	SP458	楕円	×	37	24	14	
			7	SP460	楕円	×	27	25	9	
			8	SP461	円	×	径22		7	
遺構番号	SB542		1	SP476	楕円	×	29	24	27	
位置	A区36－10		2	SP479	楕円	×	31	26	24	
長軸方向	N－33°－W		3	SP474	楕円	×	36	28	28	
検出番号	9		4	SP475	楕円	×	26	22	5	
図版番号	16									
遺構番号	SA166		1	SP51	楕円	×	80	45	8	
位置	A区33・34－12		2	SP50	不整	○	95	85	25	柱材
長軸方向	N－70°－E		3	SP47	隅丸方	×	100	100	23	
検出番号	10		4	SP45	隅丸方	×	75	60	20	
図版番号	16		5	SP44	楕円	×	40	35	16	

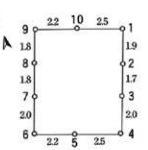
項目	
遺構番号	SB201
位置	B区22・23－49・50
長軸方向	N－4°－E
挿図番号	42
図版番号	25

略図 S＝1：200 柱間寸法 m



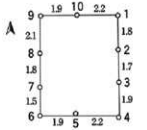
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP204	楕円	×	28	22	28	
SP206	楕円	×	27	20	19	SD213→SP206
SP209	円	×	径25		18	
SP208	楕円	×	27	25	18	
SP207	楕円	×	27	25	15	
SP205	楕円	×	27	26	8	
SP202	楕円	×	25	22	11	
SP203	楕円	×	30	26	30	

遺構番号	SB237
位置	B区26・27－46・47・48
長軸方向	N－11°－E
挿図番号	43・44
図版番号	26・27



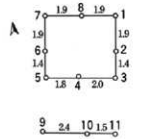
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP235	楕円	×	76	48	30	
SP234	方	×	52	47	31	
SP233	円	×	径31		3	
SP232	方	×	45	37	20	
SP230	楕円	×	67	55	21	
SP226	楕円	×	58	50	26	
SP227	楕円	×	53	47	23	
SP228	楕円	×	55	49	41	
SP229	楕円	×	62	50	41	
SP231	楕円	×	88	70	38	RW94

遺構番号	SB248
位置	B区27・28－47・48
長軸方向	N－3°－E
挿図番号	43・44
図版番号	26・27



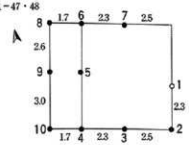
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP243	不整	×	63	54	27	
SP244	方	×	63	57	28	
SP245	方	×	62	53	12	
SP246	楕円	×	65	45	14	
SP247	不整	×	71	43	3	
SP238	楕円	×	88	56	23	
SP239	楕円	×	65	44	25	
SP240	楕円	×	72	51	41	
SP241	楕円	×	67	63	18	
SP242	不整	×	66	51	30	

遺構番号	SB286
位置	B区28・29－45・46
長軸方向	N－7°－E
挿図番号	44
図版番号	26



柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP278	不整	×	75	60	20	SP279→SP278
SP280	楕円	×	47	40	8	
SP272	楕円	×	82	72	23	
SP273	円	×	径27		11	
SP274	楕円	×	77	47	22	
SP275	方	×	30	26	5	
SP276	不整	×	66	37	16	
SP277	不整	×	44	26	9	
SP320	楕円	×	39	35	19	柱穴列？
SP319	楕円	×	41	35	13	柱穴列？
SP318	楕円	×	49	40	13	柱穴列？

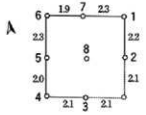
遺構番号	SB287
位置	B区29・30・31－47・48
長軸方向	N－13°－E
挿図番号	45
図版番号	26・27



柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP545	円	×	径60			プランのみ検出
SP260	楕円	○	61	50	40	
SP261	不整	○	56	30	19	
SP262	楕円	○	50	47	22	
SP263	楕円	○	84	57	53	
SP264	不整	○	77	55	59	RW137
SP266	楕円	○	54	43	22	
SP270	楕円	○	80	26	29	
SP269	楕円	○	53	50	27	
SP279	楕円	○	33	26	11	SP279→SP278

項目	
遺構番号	SB353
位置	B区27－30・31
長軸方向	N－10°－E
挿図番号	46
図版番号	24

略図 S＝1：200 柱間寸法 m

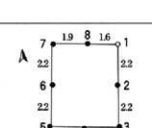


柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP389	不整	×	126	68	42	
SP413	楕円	×		56	43	
SP374	楕円	×		58	52	
SP372	楕円	×	73	59	37	
SP373	楕円	×	71	60	46	
SP393	楕円	×	48	38	39	
SP401	楕円	×	83	62	42	
SP375	楕円	×	74	60	60	

遺構番号	SB352
位置	B区27・28－31・32
長軸方向	N－5°－W
挿図番号	40・41
図版番号	24

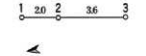
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP386	楕円	×	66	54	34	
SP387	楕円	×	84	72	49	
SP388	不整	×	112	94	30	
SP389	不整	×	126	68	42	
SP390	楕円	×	70	63	46	
SP381	不整	×	104	80	34	
SP382	楕円	×	70	67	30	
SP383	不整	×	83	64	29	
SP384	楕円	×	63	60	22	
SP385	楕円	×	82	59	25	
SP392	楕円	×	90	80	60	
SP391	楕円	×	89	56	54	

遺構番号	SB368
位置	B区32・33－47・48
長軸方向	N－4°－E
挿図番号	46
図版番号	25



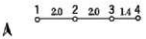
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP360	楕円	○	31	28	25	RP224・RW225
SP361	楕円	○	42	39	26	RP223
SP362	楕円	○	37	30	32	
SP363	方	○	33	30	20	
SP365	楕円	○	36	32	28	
SP366	楕円	○	33	28	26	RW226
SP367	楕円	○	47	30	36	

遺構番号	SA550
位置	B区27－46・47
長軸方向	N－9°－E
挿図番号	46
図版番号	26



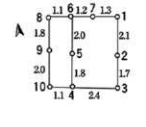
柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP284	楕円	×	55	31	4	
SP283	楕円	×	54	41	18	
SP282	楕円	×	31	25	16	

遺構番号	SA546
位置	B区22・23－47
長軸方向	N－90°－W
挿図番号	46
図版番号	



柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP218	円	×	径43		14	
SP217	楕円	×	45	38	15	
SP216	楕円	×	61	52	14	
SP215	楕円	×	51	44	11	

遺構番号	SB420
位置	B区27・28－30・31
長軸方向	N－9°－E
挿図番号	40
図版番号	24



柱穴番号	平面形	柱痕	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
SP397	楕円	×	82	62	23	
SP398	不整	×	72	70	32	
SP399	楕円	×	69	62	43	
SP392	不整	×	90	80	60	
SP385	楕円	×	63	60	48	
SP395	楕円	×	42	34	18	
SP396	不整	×	88	50	10	
SP394	楕円	×	46	40	18	
SP430	楕円	×	56	40	37	
SP400	円	×	径56		30	

表2　井戸・土坑観察表

登録種別	登録番号	図版	写真図版	地区	位置	平面形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	時期	備考 主な遺物など
SK	3	6・13		A	43・44－13	不整	248	115	89	中世以降	
SE	110	6・16	18	A	28・29－15	楕円	240	218	96	中世	笹塔婆（151－1・2、152－1～4）
SK	132	6・13		A	30・31－15	楕円	220	73	20	奈良～平安	
SK	134	6・13		A	29－14	楕円	82	61	27	奈良～平安	
SK	176	6・13		A	31－12	不整	101	60	42	奈良～平安	
SE	187	19・50	28	B	32・33－40・41	楕円	262	223	216	奈良～平安	須恵器・土師器（146－1～11）原定自然木を組み抜いて構築
SK	249	19・47		B	29－48・49	楕円	200	68	26	奈良～平安	
SK	281	19・47		B	28・29－43	楕円	146	115	13	奈良～平安	
SK	290	19・47		B	28・29－41	楕円	141	101	73	奈良～平安	SK548→SK290
SK	291	19・47		B	28－41	楕円	143	105	98	奈良～平安	
SK	292	19・47		B	28・29－42	楕円	74	46	12	奈良～平安	
SK	293	19・47	30	B	30－46・47	楕円	115	70	59	奈良～平安	須恵器・土師器（144－1～5）
SK	336	19・49		B	24－36	楕円	189	141	28	奈良～平安	
SK	337	19・48	30	B	24・25－36・37	楕円	267	182	36	奈良～平安	須恵器・土師器・木製品（98－4、141－6～12、144－4・5）墨書土器
SK	344	19・48	29	B	27・28－36	楕円	175	152	114	奈良～平安	須恵器・土師器（143－1～16・144－1～3）墨書土器
SE	345	19・50		B	20－37	楕円	172	137	113	近世以降	SK547→SE345　竹筒
SK	348	19・50		B	20－37	楕円	90	87	26	近世以降	
SK	354	19・49	29	B	31・32－48	楕円	118	60	23	奈良～平安	土師器・須恵器
SK	359	19・49	28	B	32－44	楕円	117	97	146	奈良～平安	土師器・須恵器
SK	369	19・49	27	B	32－44	楕円	77	71	80	奈良～平安	
SE	418	19・51	28	B	34－39	楕円	214	128	101	近世以降	竹筒
SE	419	19・51	28	B	36－38	楕円	173	163	170	近世以降	
SK	421	19・49	32	B	15－43	楕円	324	121	13	中世以降	
SK	422	19・49	32	B	16－42・43	楕円	191	115	11	中世以降	
SK	489	6・10		A	35－10	楕円	218	120	18	奈良～平安	SD登録
SK	490	6・10		A	35－10	楕円	110	90	20	奈良～平安	
SK	492	6・10		A	34－10	楕円	210	110	14	奈良～平安	
SE	503	19・51	29	C	29－57	楕円	241	157	87	平安	火山灰分析　須恵器・土師器（146－1～14・147－1～4）墨書土器
SP	520	6・13		A	33－8・9	楕円	62	58	18	奈良～平安	
SK	526	6・13		A	36－9・8	不整	88	63	28	奈良～平安	
SK	548	19・47		B	28・29－41	楕円	150	70	9	奈良～平安	SK548→SK290

表3　溝観察表

登録種別	登録番号	図版	写真図版	地区	位置	平面形	検出長 m	最大幅 cm	深さ cm	時期	備考 重複（旧→新）など
SD	2	6・12	14・16	A	22～44・11～14	緩やかに蛇行	108	2.4	15	奈良～現代	SD20→SD2
SD	10	6・12	14	A	37～39－14・15	緩やかに蛇行	9.9	220	12	奈良～平安	SD11→SD10・20→SD19→SD63
SD	11	6・12	14	A	37・38－14・15	緩やかに蛇行	2.3	40	10	奈良～平安	SD11→SD10・20→SD19→SD63
SD	19	6・12	14	A	34～36－14・15	直線	12.5	60	12	中世以降	SD10・20→SD19→SD83
SD	20	6・12	14・17	A	27～37・9～15	L字型	59.1	120	10	奈良～平安	SG106→SD20→SD2・19→SD63
SD	53	6・12	14・17	A	31～34－5～12	L字型	25.8	200	20	中世以降	SD65→SX54→SD63
SD	55	6・12		A	33－14	直線	2.1	50	10	奈良～平安	SD65→SX54→SD63
SD	63	6・8	14	A	25－16・17	直線	71.2	69	40	奈良～平安	SB169関連
SD	67	6・8	14	A	25・26－16	直線	3.1	36	23	奈良～平安	SB179関連
SD	212	19・55	32	B	24・25－44～53	直線	45.5	205	55	中世以降	SG213（奈良～平安）→SD212→SD285
SD	236	19・43	23・27	B	27－48	緩やかに蛇行	3.5	40	5	奈良～平安	SB237関連
SD	355	19・52	30	B	32－44～46	半円型	12.5	240	14	平安	
SD	356	19・53・56	32	B・C	32～37－45～59	L字型	73.8	480	38	中世	
SD	357	19・54	31	B・C	32～38－48～60	緩やかに蛇行	42.5	750	18	奈良～平安	
SD	358	19・54	31	B	38・39－50～53	直線	16	28	5	奈良～平安	
SD	377	19・40	24	B	27－30	直線	1.8	50	18	奈良～平安	SB353関連？
SD	378	19・40	24	B	26－30	不整形	5.3	180	12	奈良～平安	SB354関連？
SD	380	19・40	24	B	26－31	直線	1.2	20	15	奈良～平安	
SD	494	6・10	16	A	33・34－8～11	直線	13.8	152	18	中世？	SB540→SD494
SD	501	6・10	16	A	34－10	直線	2.8	58	33	奈良～平安	底面方形の凸凹　SB540関連
SD	507	19・54	32	C	32・33－57～60	直線	12.5	80	33	奈良～平安	SD507→SD357
SD	509	19・56	31	C	29～31・57	不整形	12.8	120	10	中世以降	SG213（奈良～平安）→SD509
SD	549	19・42	25	B	23－50	直線	2.8	38	6	奈良～平安	SG213（奈良～平安）→SD549→SB201

表4　古墳時代木製品分類一覧

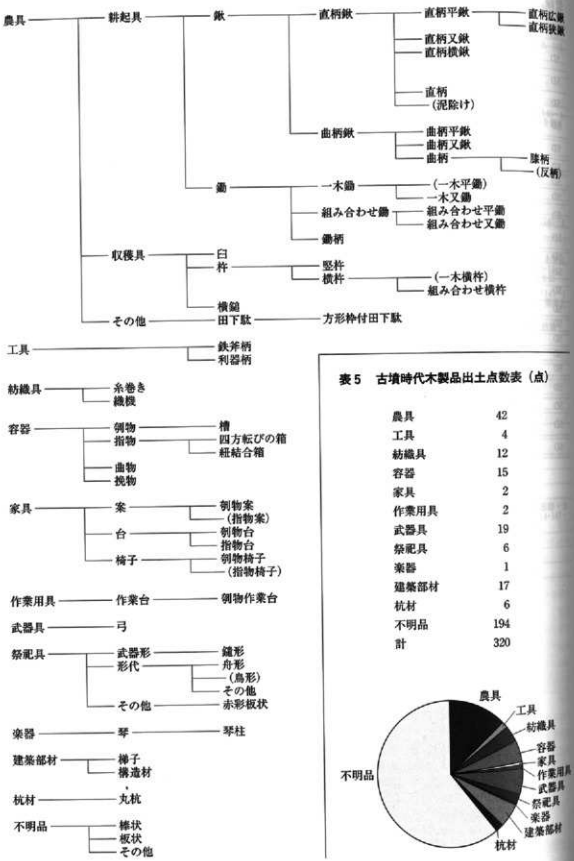


表5　古墳時代木製品出土点数表（点）

農具	42
工具	4
紡織具	12
容器	15
家具	2
作業用具	2
武器具	19
祭祀具	6
楽器	1
建築部材	17
杭材	6
不明品	194
計	320

表6　木製品観察表

出土層位のFは覆土を示す。
全長・最大幅・最大厚の[　]は現存値、（　）は図上復元値を示す。単位はcmである。
備考の先頭は、遺物の時代を示す。※はシーラパックで保管していることを示す。

図版	遺物番号	写真図版	器種	種	分類	登録RW	出土遺構 出土地点 層位	全長 最大幅 最大厚	樹種	木取り等	備考
105	1	76	農具	耕起具	直柄平鍬	直柄広鍬	812	SG213 25－35 F4下	32.4 19.4 4.1	クヌギ節	柾目	古墳	一部炭化
105	2	77	農具	耕起具	直柄平鍬	直柄広鍬	697	SG213 25－48 F4下	[16.7] [10.7] 4	クヌギ節	柾目	古墳	一部炭化
105	3	77	農具	耕起具	直柄平鍬	直柄広鍬	646	SG213 25－47 F4下	[20.5] [13.4] 3	クヌギ節	柾目	古墳	泥除装着孔
105	4	77	農具	耕起具	直柄平鍬	直柄狭鍬	692	SG213 24－48 F4下	27.2 8.3 1.4	コナラ節	柾目	古墳	
106	1	77	農具	耕起具	直柄横鍬	横鍬	838－1	SG213 24－50 F4下	[12.2] [.52] 2.6	コナラ節	柾目（横木取り）	古墳	
106	2	77	農具	耕起具	直柄平鍬	未成品	649	SG213 25－47 F4下	31.4 18.1 5	コナラ節	柾目	古墳	裏面使用（刃当たり）痕 作業台（組板？）転用
107	1	79	農具	耕起具	曲柄又鍬		527	SG213 27－51 F4下	66.2 22 3.2	コナラ節	柾目	古墳	軸部加工痕
108	1	78	農具	耕起具	曲柄又鍬		557	SG213 27－51 F4下	[64.4] 16.3 2.75	クヌギ節	板目	古墳	
108	2	79	農具	耕起具	曲柄又鍬		701	SG213 31－35 F4下	[25.3] [8.75] 2.4	アサダ	柾目	古墳	
108	3	79	農具	耕起具	曲柄又鍬		1067	SG213 23－35 F4	[24.2] [6.2] 2.2	コナラ節	柾目	古墳	一部炭化
109	1	78	農具	耕起具	曲柄又鍬		660	SG213 24－48 F4下	(60.7) 22.3 2.5	コナラ節	柾目	古墳	一部炭化
110	1	78	農具	耕起具	曲柄又鍬		459	SG213 23－37 F4下	55.9 [7.1] 2.3	コナラ節	柾目	古墳	
110	2	79	農具	耕起具	曲柄鍬		1035	SG213 23－41 F4下	[26.5] [9.6] 2.7	クヌギ節	柾目	古墳	
110	3	80	農具	耕起具	曲柄又鍬		681	SG213 24－48 F4下	[43.8] [8.9] 2.3	クヌギ節	柾目	古墳	
110	4	80	農具	耕起具	曲柄又鍬		1045	SG213 24－50 F4下	[27.6] [6.1] 0.7	アサダ	柾目	古墳	
111	1	80	農具	耕起具	曲柄広鍬		554	SG213 27－35 F4下	[59.8] [12.4] 2.4	コナラ節	柾目	古墳	一部炭化
111	2	80	農具	耕起具	曲柄鍬？		666－1	SG213 24－47 F4下	14.7 3.9 2.3	コナラ節	柾目	古墳	鍬類軸部再加工？
111	3	81	不明品	その他			1009	SG213 27－52 F4下	[13.5] [3.9] 2.1	コナラ節	分割	古墳	曲柄鍬？
112	1	81	農具	耕起具	鍬柄		1122	SG213 26－35 F4下	[11.5] [7.1] 2.1	クヌギ節	柾目	古墳	把手部
112	2	80	農具	耕起具	又鍬		430	SG213 22－37 F4	[36.8] [4.4] 1.8	コナラ節	柾目	古墳	一木または組み合わせ
112	3	81	農具	耕起具	柄		460	SG213 23－36 F4下	68.8 3.6 2.8	コクサギ	芯持ち	古墳	
112	4	81	農具	耕起具	柄		805	SG213 30－36 F4下	[53.2] 2.9 3	モクレン属	丸太材	古墳	握り棒状木製品
112	5	81	農具	耕起具	柄		588	SG213 26－35 F4下	[54.7] 2.9 2.5	ヤマグワ	分割	古墳	※

図版	遺物番号	写真図版	器種	分類	登録RW	出土遺構 出土地点 層位	全長 最大幅 最大厚	樹種	木取り等	備考
112	6	81	農具	耕起具 柄	655	SG213 25－47 F4下	SG213 25－47 F4下	カエデ属	分割	古墳 ※
112	7	81	農具	耕起具 柄？	1066	SG213 26－35 F4下	SG213 26－35 F4下	ヤマグワ	分割	古墳
112	8	81	農具	耕起具 柄	1125	SG213 24－50 F3	SG213 24－50 F3	クリ	分割	古墳 緊縛痕
113	1	81	農具	耕起具 柄	1007	SG213 27－52 F4下	SG213 27－52 F4下	コナラ節	分割	古墳 ※
113	2	81	農具	耕起具 柄？	552	SG213 26－35 F4下	SG213 26－35 F4下	コナラ節	板目	古墳 ※ 精良な表面調整
113	3	81	農具	耕起具 柄	654	SG213 25－47 F4下	SG213 25－47 F4下	コナラ節	分割	古墳 ※
113	4	81	農具	耕起具 柄	838－2	SG213 24－50 F4下	SG213 24－50 F4下	カエデ属	分割	古墳 ※
113	5	81	農具	耕起具 曲柄 膝柄	576	SG213 30－52 F4下	SG213 30－32 F4下	クリ	芯持ち割り出し	古墳 緊縛痕
113	6	82	農具	耕起具 曲柄 膝柄	656	SG213 24－48 F4下	SG213 24－48 F4下	エゴノキ属	芯持ち割り出し	古墳
114	1	82	農具	耕起具 曲柄 膝柄	553	SG213 26－35 F4下	SG213 26－35 F4下	クリ	芯持ち割り出し	古墳
114	2	82	農具	耕起具 曲柄 膝柄	1042	SG213 24－50 F4下	SG213 24－50 F4下	エゴノキ属	芯持ち割り出し	古墳 緊縛痕
114	3	82	農具	耕起具 曲柄 膝柄	569	SG213 29－52 F4下	SG213 26－52 F4下	ハリギリ	芯持ち割り出し	古墳 緊縛痕
115	1	83	農具	収穫具 臼	842	SG213 26－35 F4下	SG213 26－35 F4下	ハンノキ属	整木取り	古墳 一部炭化 把手凹
115	2	83	農具	収穫具 横杵	663	SG213 25－49 F4下	SG213 25－49 F4下	コナラ節	分割	古墳
115	3	86	農具	収穫具 竪杵	637	SG213 24－40 F	SG213 24－40 F	コナラ節	分割	古墳 端き部一端平坦一端凸状 一部炭化
115	4	84	農具	収穫具 横槌	458	SG213 23－36 F4下	SG213 23－36 F4下	コナラ節	分割	古墳
116	1	84	農具	その他 田下駄	方形枠付目下駄 702	SG213 31－35 F4下	SG213 31－35 F4下	スギ	板目	古墳 横木 一部炭化 枠木
116	2	83	農具	その他 田下駄	方形枠付目下駄 1062	SG213 30－53 F4下	SG213 30－53 F4下	トネリコ属	柾目	古墳 枠木
116	3	84	農具	その他 田下駄	方形枠付目下駄 477	SG213 26－35 F4下	SG213 26－35 F4下	ニレ属	柾目	古墳 枠木 建築（転）部材？
117	1	86	工具	鉄斧柄	板状鉄斧柄 694	SG213 24－48 F4下	SG213 24－48 F4下	カエデ属	板目	古墳 一部炭化
117	2	85	工具	鉄斧柄	板状鉄斧柄 722	SG213 24－48 F4下	SG213 24－48 F4下	カエデ属	分割	古墳
117	3	85	工具	利器柄？	571	SG213 30－52 F4下	SG213 30－52 F4下	クヌギ節	分割 板目	古墳
117	4	85	工具	利器柄？	1020	SG213 24－49 F	SG213 24－49 F	スギ	分割	古墳
118	1	85	紡織具	糸巻	経かけ（支え木） 1065	SG213 26－51 F3	SG213 26－51 F3	スギ	板目	古墳 穿孔3 刃物痕

図版	遺物番号	写真図版	器種	分類	登録RW	出土遺構 出土地点 層位	全長 最大幅 最大厚	樹種	木取り等	備考
118	2	85	紡織具 糸巻	経かけ（支え木）	1002	SG213 30－53 F3	[25.9] 2.1 1	スギ	板目	古墳 穿孔4
118	3	87	紡織具 糸巻	経かけ（支え木）	1032	SG213 24－37 F4	37.5 2.5 0.5	スギ	板目	古墳
118	4	85	紡織具 糸巻	経かけ（支え木）	530	SG213 28－51 F4下	[44.1] 3.4 1	スギ	柾目	古墳 穿孔1
118	5	87	紡織具 機機	経（巻）巻具	1136	SG213 31－64 F	[56.3] 4.4 9.9	スギ	柾目	古墳 中筒
119	1	87	紡織具 糸巻？		822	SG213 25－50 F4下	41.7 1.4 0.9	スギ	分割	古墳 先端加工
119	2	87	紡織具 糸巻？		695	SG213 24－48 F4下	46.8 0.9 1.3	スギ	分割	古墳 先端加工
119	3	87	紡織具 糸巻？		400－2	SG213 24－36 F4下	49.9 2.8 1.1	スギ	分割	古墳 ※
119	4	87	紡織具 糸巻？		673	SG213 24－47 F4下	[40.8] 2.8 9	スギ	分割	古墳 ※
119	5	87	紡織具 織機？		1046	SG213 24－50 F4下	[49.7] [3.5] 1.5	スギ	分割	古墳 穿孔1
119	6	87	紡織具 織機？	台？	1047	SG213 24－50 F4下	[38.3] 6.1 3	スギ	柾目	古墳 建築部材？ 差し込み孔1 六大A遺跡類例
119	7	87	紡織具 機機		598	SG213 27－35 F4下	[7.6] [3.5] [1.7]	コクサギ	芯持ち割り出し	古墳 糸巻具？
120	1	8 9	容器 刳物	槽	682	SG213 24－48 F4下	[72.8] [23.3] 高11.5	ケヤキ	横木取り	古墳 板目？ 中央に凹あり転用？
120	2	88	容器 刳物	槽	1131	SG213 25－48 F4下	[45.9] [11.9] 高10.7	カツラ	横木取り	古墳 家具案
121	1	88	容器 刳物	槽	526	SG213 27－52 F4下	[87.8] [34.5] 高3.2	スギ	横木取り	古墳 家具案 転用？
121	2	20 88	容器 刳物	槽	824	SG213 25－50 F4下	[35.4] [7.1] 1.1	スギ	横木取り	古墳 鉢？皿？
121	3	89	容器 刳物	槽	1114	SG213 24－47 F3	[16.7] [7.8] 1.85	モクレン属	横木取り	古墳 皿？
121	4	89	容器？ 刳物	槽	821	SG213 25－50 F4下	[15.6] [9.3] 2.7	ケンポナシ属	横木取り	古墳 穿孔1
122	1	8 89	容器 指物	四方転びの箱	691	SG213 24－48 F4下	15.6 6 0.7	スギ	板目	古墳 一部炭化 穿孔6 追柾目の可能性あり
122	2	89	容器？ 指物	組結合箱	529	SG213 28－51 F4下	21 7 0.8	スギ	柾目	古墳 穿孔2 側板
122	3	89	容器？ 指物	組結合箱	464	SG213 22－37 F4下	28.3 10.9 1.2	スギ	追柾目	古墳 側板 武器鍛？ 穿孔3
122	4	89	容器 指物？		274－2	SG213 28－35 F	[33.4] [5.5] 0.9	スギ	板目	古墳 底板
122	5	89	容器 指物？		687－2	SG213 24－48 F4下	32.7 13.8 0.7	スギ	板目	古墳 底板 刃物痕
123	1	89	容器 指物？		1064	SG213 25－36 F4下	[38.3] [9.6] 1.4	スギ	板目	古墳 底板
123	2	8 90	容器 曲物？		841	SG213 24－48 F4下	15.7 12.5 1.1	トチノキ	板目？	古墳 底板 綴付書

図版	遺物番号	写真図版	器		種	分類	登録RW	出土遺構 出土地点 層位	全長 最大幅 最大厚	樹種	木取り等	備考
123	3	90	家具	椅子	刳物椅子		1085	SG213 25−51 F4下	27.5 [12.1] 高18.5	トチノキ	分割	古墳
123	4	90	容器？		把手？		1086	SG213 27−51 F3	8.9 1.8 2.1	スギ	分割	古墳 脚部 差し込み式の容器把手？青銅器模倣？
123	5	90	家具？	台？	指物台？		579	SG213 23−36 F4下	[17.7] 9.2 3.3	トチノキ	柾目	古墳
124	1	8 90	作業用具	作業台	刳物作業台		687−1	SG213 24−48 F4下	径23.6 高10.7	ツバキ属	芯持ち削り出し	古墳 把手に穿孔1
124	2	90	作業用具？	作業台？	未成品		581	SG213 23−36 F4下	径14.9 高15.3	ハンノキ属	芯持ち	古墳 樹皮炭化
124	3	81	容器？		脚？		1113	SG213 30−52 F3	[2.6] 3.2 2.8	コナラ節	分割横木取り	古墳 筒形容器脚？青銅器模倣？ ※
125	1	91	武器	弓			1031	SG213 24−48 F4下	[65.6] 2 2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
125	2	91	武器	弓			636	SG213 24−40 F	85.7 2 2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 漆付着
126	1	8 91	武器	弓			335	SG213 31−36 F4	[64] 2.6 1.2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 樹皮
126	2	91	武器	弓			1019	SG213 31−56 F4下	[33.7] 2.4 1.3	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
126	3	91	武器	弓			1003	SG213 31−58 F4下	[20.4] 2.2 1.2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 漆付着
126	4	91	武器	弓			650	SG213 25−47 F4下	[30] 1.8 1.1	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
126	5	91	武器	弓			802	SG213 31−58 F	[35.3] 1.8 1.1	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
127	1	91	武器	弓			608	SG213 25−51 F4下	[40.9] 1.9 1.2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 一部炭化
127	2	91	武器	弓			400−1	SG213 24−36 F4下	[51.7] 2.3 1.8	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
127	3	91	武器	弓			1018	SG213 25−50 F4下	[55.9] 1.9 1.5	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 樹皮
127	4	92	武器	弓			1059	SG213 24−50 F4下	[39] 2.3 1.5	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
127	5	92	武器	弓			400−3	SG213 24−36 F4下	[36.3] 1.8 1.3	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
127	6	92	武器	弓			597	SG213 27−35 F4下	[28.8] 2.8 1.9	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 再加工 建築部材 桟？
127	7	92	武器	弓			834	SG213 24−50 F4下	[24.8] 2.1 1.6	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 漆付着
128	1	91	武器	弓			1132	SG213 25−45 F	(63.5) 2.9 2.3	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具 漆付着
128	2	92	武器	弓			700	SG213 30−53 F4下	(51.6) 1.9 1.5	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
128	3	19 92	武器	弓			334	SG213 31−36 F4	(64.6) 2.7 2.1	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 祭祀具
128	4	92	武器	弓			381	SG213 27−35 F4	(22.5) 2.5 1	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 弓再加工

図版	遺物番号	写真図版	器		種	分類	登録RW	出土遺構 出土地点 層位	全長 最大幅 最大厚	樹種	木取り等	備考
128	5	92	武器	弓			382	SG213 27−35 F4	(22.4) 1.8 1.2	イヌガヤ	芯持ち削り出し	古墳 弓再加工 一部炭化
129	1	23 92	祭祀具	武器形	鏃形		556	SG213 27−51 F4下	39.2 3.7 4.5	スギ	柾目	古墳
129	2	92	祭祀具	武器形	鏃形		1030	SG213 31−57 F	[19] 2.9 6.7	スギ	柾目	古墳
129	3	92	祭祀具	形代	舟形		1077	SG213 21−41 F4下	25.6 4.3 2.5	スギ	柾目	古墳
129	4	92	祭祀具	形代？			638	SG213 24−40 F	25 3 2.5	スギ	柾目	古墳
129	5	93	楽器？	琴？	琴柱？		1112	SG213 28−36 F4	3 4.5 0.5	スギ	柾目	古墳
129	6		祭祀具	板状			1069	SG213 26−35 F4下	[4.9] 1.4 0.4	スギ	柾目	古墳 赤彩 ※
129	7	93	祭祀具	板状			1084	SG213 25−51 F4下	4.3 [12.9] 0.5	アスナロ	柾目	古墳 矢羽根？赤彩
129	8	93	不明品	板状			1022	SG213 24−48 F	[13.5] [4] 0.6	スギ	板目	古墳 祭祀具形代鳥形？紡織具？ 穿孔1 一部炭化
129	9	93	不明品	板状			680	SG213 24−48 F4下	[19.5] 9.5 0.8	ニレ属	柾目	古墳
129	10	93	不明品	板状			1083	SG213 25−48 F4下	21.4 5 0.7	アスナロ	柾目	古墳
129	11	93	不明品	板状			606	SG213 26−35 F4下	[21.8] 2.9 1	不明	板目	古墳 箆？ ※
130	1	93	不明品	その他			820	SG213 25−50 F4下	[12.3] [14.3] 6.7	ケンポナシ属	横木取り	古墳 釣瓶？
130	2	94	不明品	その他			622	SG213 27−51 F4下	27.7 7.1 1.9	オニグルミ	柾目	古墳 ※
130	3	94	不明品	その他			1108	SG213 25−45 F4下	[23.9] 1 5.8	ヤマグワ	分割	古墳
130	4	94	不明品	その他			1116	SG213 28−36 F3	[15.5] 13.9 2	スギ	板目	古墳
130	5	94	不明品	その他			1048	SG213 24−50 F4下	[11.6] 3.7 1.9	スギ	柾目	古墳
130	6	94	不明品	その他			396	SG213 25−35 F4下	[8.5] 6.8 1	カバノキ属	竪木取り	古墳 容器？鏑（かぶら）？轆轤
130	7	94	不明品	棒状			456	SG213 24−36 F4下	[30.2] 2.6 2.7	ツバキ属	芯持ち削り出し	古墳
130	8	94	不明品	棒状			633	SG213 23−40 F	11.1 1.2 0.8	マツ属複維管束亜属	分割	古墳 一部炭化
131	1	94	不明品	棒状			573	SG213 30−52 F4下	[60.8] 2.5 2.7	スギ	分割	古墳 祭祀具 竿？柄？ 一部炭化
131	2	94	不明品	棒状			706	SG213 31−58 F4下	[115.3] 4.2 2.7	コナラ節	柾目	古墳 建築部材 握り棒状木製品？ 断面楕円〜円
131	3	6 95	建築部材	梯子			811	SG213 30−36 F4下	[201.4] 18.9 13.4	不明	芯持ち削り出し	古墳 足掛け部4段以上（一段欠損）
131	4	6 96	建築部材	梯子			696	SG213 25−48 F4下	[66.3] 18.5 8.7	ケンポナシ属	半截削り出し	古墳 足掛け部1段以上 上部固定加工 一部炭化